
メディトリアの銚

重金やから

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メデイトリアの銚

【Nコード】

N5737W

【作者名】

重金やから

【あらすじ】

『かつてあった、正義の物語』く大人のためのリアルファンタジィ。
とある世界の二つの国で、二人の男を中心に描いた幻想歴史小説です。

我々の住むこの世界とは、異なった歴史を持つ別の世界。

その片隅にデロイ帝国とメデイトリアという二つの国があった。

デロイ帝国は強力な軍事力を頼りに周辺地域を手中に収め、なお膨

張する覇権国家である。

メデイトリアは険難な山脈に囲まれた小国であり、帝国の侵略を辛くも逃れていた。

だが、ある春の雪解けと共に、ついに帝国の軍勢はこの国への侵略を開始した。

それは、後にメデイトリア戦役と呼ばれる戦争の始まりであった。

【序文・登場人物】

この歴史という記録の存在は、我々がただ時間というものを貪るだけの無力な生き物ではないか、という合理的な疑いをしばしば生じさせる。要するにそれは、世の人々を悩ます全ての問題が解決できるものとできないものに分類される以上、そこには時間以外の因子が存在しないという極論への収束である。

だが、私はその考えが正しいのか知ってはいないし、仮に間違っているとしてそれが人間にとって幸福なのかも判らない。時間というものがこの世界にどう関係し、そしてどのような価値を持つのか、おそらく我々はまだよく理解していないのである。（『大ガルバニア史』より）

【登場人物】

イド・ルグス

アルダネス朝メディトリアの師士であり、王家の軍『兵の家』伍番隊の士隊長。

十五歳で兵の家に入門し、その後バルバル族から騎馬術を学ぶ。ボルボアン王の命により王家の騎兵隊が設立される際に、ファースタインの推薦で士隊長に選ばれる。

ウル・メイノスとは無二の親友。

ウル・メイノス

兵の家に所属する。伍番隊の士長を務め、隊士からの人望は厚い。イド・ルグスの親友かつ、隊の副官格。

ファー・スタイン

壱番隊の士隊長であり、兵の家における士隊長筆頭である。腕っ節が強く、従士たちから信頼される叩き上げの壮年男。五人の士隊長の中で、数少ないイド・ルグスの理解者。

シュマロ、オフィル、リユコス

それぞれ、貳番隊、参番隊、四番隊の士隊長。

叩き上げのスタインに比べ、実行力より理屈が先行する性格。三人とも、彼と同世代であり付き合いは長い。

ムー・ボルボアン・アルダネス

メデイトリアの王であったが、すでに亡くなっている。

デロイ帝国との戦いのために様々な事を改革し、臣下と民衆の両者から支持されていた。

ダナ・ブリグンド・アルダネス

メデイトリアの新たな王。

侍従長スタコックの教育を受け、英才を認められている。

父であるボルボアン王が急死したため、幼くして即位した。

王家の属臣『王の輩』との関係はまだ薄い。

サンク・タルム

王家の家宰を務める。

王の輩を取りまとめる立場であり、その権限は強い。

ジジ・スタコック

王の輩の侍従長であり、王の身近に仕える者たちを切り盛りする。王位継承者に対する教育も、その務めの一つである。

ブルー・ダ・プー

ガルバニアのプーレム地方を本拠とする貴族の当主。

デロイ帝国における平民派貴族の実質的リーダーであり、第二軍団の軍団司でもある。

テベス・ラボア

ダ・プーの腹心の部下。第二軍団の騎馬中兵長を務める。

ダンテ・エラニオ

平民派に属する富民の子。ダ・プーの近習として預けられ、第二軍団に所属する。

ゼノフォス・マクニサス

枢軸貴族の一派を率いるマクニサス家の当主。

半ば引退し、貴族院には義理の息子フォスタルを出仕させている。

フォスタル・マクニサス

マクニサス家の一族に属し、当主フォスタルの養子となった。義父に対しては、忠実に従っている。

ルグドネクシス三世

デロイ帝国の若き皇帝。

政治的な力は弱く、帝国の象徴的存在である。

【第一章】 カシアスの戦い

「まるで、蟲の大群だ」「誰かが、そう呟いた。

森の前の小ぶりの丘の上からは、遙か先の平原を進む軍勢がはっきりと俯瞰できた。

視線の彼方で、鋭くそびえ立つ槍が揺れている。半身を覆う甲冑は深く蒼ざめ、硬く焼き入れられた鉄が虹のように輝いていた。肩を並べて方陣を組み、一糸乱れぬ歩を進める兵士たち。その列の一つひとつが、百足のように這っていた。手前には、円盾を持った歩兵の集団がいる。微かにざわめき密集するその姿は、孵化しようとする蟲の卵を思わせた。戦列の両端には、不定形に蠢く蟻が群がる。重装備の騎兵たちだった。

デロイ帝国第一軍団。それが、この群れの名前だった。兵士の総勢は、歩兵が約四万五千、騎兵は約五千五百騎。さらに、数万人の非戦闘員が後方を随行する。

そして、丘の上には赤い軍勢がいた。すでに森を背にした布陣を終えており、楯と鉾を構えて敵を待つ。自らを数で上回るデロイ帝国軍と、その足並みによって侵される故郷を目の当たりにする彼らの眼には、何の動揺も恐れもない。それどころか、彼らの具足と楯を彩る赤と同じく燃えるような好敵心が滲み出ていた。

彼らの総勢は、歩兵が約二万五千、騎兵は約四千二百騎。非戦闘員はいない。いたとしても、すぐに武器を持って戦列に加わるだろう。

メデイトリア。それがこの戦士たちの住む国の名前であった。文字通りの総動員で集められた軍勢を率いるのは、統治者であるアルダネス王朝の師士イド・ルグス。すでに彼の下には王直属の精鋭集団『兵の家』^{つわもの}から選り抜いた騎兵五十騎と伝令たちが、役目を終えて集まっている。自軍の戦列の後方、丘の最も小高い場所に本陣を構える彼らは、イド・ルグスを先頭に馬上から戦場を見守っている。

た。

彼の厳しい眼差しが、敵の戦列に浴びせられる。その背後には副官が控え、さらに方陣の騎兵たちが隊伍を組む。不気味な静寂が、辺りを包んでいた。互いの軍勢はすでに対峙し、敵もその動きを止めていた。あとわずかで正午を迎える戦場に風はなく、馬たちが時折いなく以外なにも聞こえない。

「おい、ルグス！ いよいよ始まるな！」

唐突に、呼びかけられた。声の主が、正面を見ていたイド・ルグスの横に駆け寄ってくる。ふうふうと息を荒げながら、汗だくの男が鞍の上を見上げた。身に帯びる具足は疵だらけの年季物、顔には額から側頭部までの大きな傷跡が刻まれており、左目はその傷の中で完全に塞がっている。

「これは、スタイン殿……！」丘の上の本陣に駆け込んだきたのは、ファー・スタイン。『兵の家』の壱番隊を指揮する士隊長だった。

「まてまて、降りんでいいぞ。ふう」その男は、馬から降りようとするとイド・ルグスの右脚を片手で掴み、その手に体重を預けながらひと息ついた。

「し、士隊長殿！ は……走ってこられたんで？」彼の背後から声をかけたのは、イド・ルグスの副官、ウル・メイノス。

「……ああ、馬に乗れんのだから、……走るしか、ないだろ？」まだ荒い息で答える。下を向いたまま何度も息を吐き、つばを飲み込む音が響くと、ようやく頭が上がった。

「仰って頂ければ、騎兵をお貸し致しましたものを……」

戸惑った表情のイド・ルグスの前で、拳で汗を拭う男の眼光が鋭くなる。

「ふん。部下の前で、女みたいに抱きついて乗れるか。……で、敵の様子はどうか？」

「概ね、予想通りかと。互いの歩兵の戦列の長さも、ほぼ同じです」男は背伸びをしつつ敵陣を窺い、白髪交じりの顎鬚をしごいた。

「ふむ。そついや、領家のお歴々はどこにいるんだ？」そう言つて背後を見回すが、そこにいたウル・メイノスと兵士たちからは気まずい沈黙しか返つてこない。

「お三方とも、カシアスにお戻りになりました」イド・ルグスが答える。

「なに？ 自分たちの兵がこれから戦うのにか？ 昨日はあれほど勇ましい事を言つておられたのに、今日はもうお歸りになられた、つてか！」

大声でそう言い、お手上げだ、とばかりに両手が挙がる。背後の精鋭たちから、どつと笑い声が響いた。ひとりだけ、複雑な表情を浮かべていたイド・ルグスが言う。

「しかし、もし我々に何かあれば、陛下が頼れるのはあの方々だけなのです」

「……どうも、お前は力が入つていていかな。こういう時は笑うんだ。笑え笑え！ 力が抜けるぞ！」屈託の無い笑顔で脚を軽く叩かれ、イド・ルグスの頬もようやく緩む。

「師士殿！ あつしらがいりゃあ、どんな戦だつて負けやしませんぜ！」五十騎隊の従士、ガフが甲高く叫び、さらにその隣のプロコが濁声を張り上げる。「我らには、聖神が味方しておりますぞ！あの程度の敵軍、恐るるに足りません！」

彼らに続き、兵たちが次々と勇ましい口上をわめき、緊迫していた本陣の空気が軽くなる。放たれる言葉を身体と視線で一つひとつ受け止めながら、イド・ルグスは思った。

（スタイン殿、わざわざ来られたのはこのためか。この方は何でも見ておられる……）

今は師士として全軍を指揮する立場のイド・ルグスであったが、彼にとつてこのファー・スタインという男は、過去に自分を伍番隊の士隊長に抜擢し、さらに現在まで協力を惜しまぬ恩人であった。また、従士全員が尊敬し、規範とする士隊長でもある。

「敵が動くぞ！」副官ウル・メイノスの叫びが兵士たちの口上

をかき消した。精銳が素早く反応し、隊伍の構えを整える。その後、彼方の軍勢から号令が微かに聞こえ、動きが慌ただしくなるのが見えた。

「戦列を組み変える気だな。お前の予想通りだ……」手の平のひさを額にあて、残った右眼を細めたスタインが言う。やがて、視線の先の戦列が動きだした。

デロイ軍の歩兵戦列で長槍胄兵の方陣が組みなおされる。縦深が二十列だったものが一五列に。その結果、横幅は広くなり敵を包囲する事になる。だが、同時にメデイトリア軍も動いていた。この動きはすでに指示してあったため、伝令を走らせる必要はなかった。両軍は、ほぼ同時に動きを止める。そして戦列の長さも ほぼ同じであった。戦場に重い沈黙が流れる。

イド・ルグスたちが険しい眼差しで敵陣の一挙手一投足を見守る中、スタインだけがにやついていた。だが、彼方の軍勢は凍てついたように動かず、このまま両軍は永久に対峙するかのように思えた。「ははっ！ 奴ら、困ってやがる。あの位置から、こちらの列の厚みまでは見えまい。さて、どうなるか……？」スタインは期待に弾んだ声でそう言うと、イド・ルグスの鞍を樂しげに叩き、物見遊山の風で敵陣を見やる。だが、イド・ルグスだけが窺えるその隻眼は、全く笑ってはいなかった。

緊迫した空気の中、時間だけが過ぎてゆく。デロイ軍が、何の予兆も無く動いた。長槍胄兵の先頭から五列が上げていた槍をおろす。水平に構えられた槍がしなった。大兵長たちの号令で前進が始まり、同時に投擲徒兵が駆け足でメデイトリア軍に接近する。

「よしッ、来やがった！ おっはじめようぜ！」叫びつつ目の前の鞍を拳でぶつ叩くと、スタインは腰布を捲り上げ、留守にしている自分の隊へ疾風のように走り去ってゆく。敵の軍勢が左右の騎兵を前進させたのを見て、イド・ルグスが片手を挙げた。副官メイノスも素早く短棍を構える。

「左翼の王遼騎兵、右翼のバルバル騎兵、共に前進！」これまでに

感じたことのない興奮が湧き上がり、イド・ルグスの固い拳の中は汗ばんでいた。腕を振り命を下すが、その手先が少し震える。メイノスは鞍に括りつけた鼓を正確に打ちながら、彼の腕が笑っているのを見て、さらに力強く短棍を振るった。

「敵も、おれたちが怖いらしいな」鼓を打ち終えたメイノスが、口角を上げる。「これで、最初っから包囲されちまう形にはならねえ。奴ら、頭数は多いがおつむの方は意外とお粗末なんじゃねえか……？」

だが、そうほくそえむメイノスも緊張の色は隠せない。もし敵がこれ以上戦列を広げるなら、イド・ルグスは自軍の歩兵戦列の両端を斜めにし、前に凸の半月形の布陣へ変更する予定だった。数の上で劣勢となる味方戦列の厚みは限界で、これ以上横に広がることはできない。だが、敵に包囲されるこの布陣を選ぶ必要は、すでに無かった。イド・ルグスたちは帝国軍の定石を念入りに分析しており、これらの幸運は単なる偶然以上のものといえる。また、帝国の常勝軍であるデロイ第一軍団が、その戦術をやや硬直化させているのもそれを助けていた。

「……神々が見ておられる。いざとなれば、あれを使う事も必要だろう」イド・ルグスの視線が本陣の後方に用意された兵器に注がれ、メイノスもまた迷いのない表情で頷く。

その時、メデイトリア軍両翼の騎兵が動き出した。この瞬間、メデイトリア軍とデロイ第一軍団の会戦の火蓋が切られた。

メデイトリア軍の騎兵が飛び出してゆく。右翼はバルバル騎兵。彼らは身軽な装備で投げ槍、短弓を扱う軽装騎兵だ。いかにも蛮族らしい叫びと共に、正面のデロイ軍の騎兵へ向かって徐々に加速してゆく。

戦場の反対側では、デロイ軍右翼のディネリア騎兵が正面の王遼騎兵目かけ、猛然と馬を駆けさせていた。彼らはデロイ帝国のディ

ネリア州から召集された兵士で、主の長老たちに忠誠を誓う歴戦の戦士である。このたびの戦いは彼らに直接関係のあるものではないが、メデイトリアの領土が征服されれば、そのいくらかが治領として彼らにも分配される。デロイ帝国の支配が続く限り、その地域は彼らに富を献上し続ける事となるのだ。戦士たちは肌を黒く塗り、巨大な戦斧と長剣がその頭上で勇ましく踊っていた。

デロイ軍中央の長槍胄兵は陣形を崩さぬよう粛々と歩を進めるが、その前面にいた投擲徒兵たちはすでに敵に接近していた。対するメデイトリア軍の中央で、先頭に散開する狩弓獵兵がわずかに動く。背の矢束から一本引き抜き、弦につがえて引き絞る。弓を引く腕の震えが止まり、完全に静止したその直後、矢が一斉に放たれた。地表を這うように低伸した矢が次の瞬間浮かび上がり、発生した放物線が全力で疾走する徒兵たちに吸い込まれた。矢を足に、肩に、そして顔面に受けた者がもんどりうって転び、戦列から消える。さらに第二射、第三射が浴びせられ、徒兵たちはようやく敵を有効射程の三十メートルに捉えた。投げ槍を盾から外し、投擲の姿勢を取る。

次の瞬間、投擲と射撃が交錯した。放たれた槍が柄を唸らせながら飛来してくる。数では徒兵たちがはるかに上であった。降り注ぐ大量の槍を、獵兵たちは雄叫びを上げつつ後退してかわす。運の悪い者が槍に貫かれた。獵兵たちは立ち止まって振り向き、胸を腕を足を貫かれ、地面に縫い付けられた眼前の犠牲者と負傷者に構わず弓を引く。投擲と射撃が、再び交錯した。

戦場の中央で投擲徒兵と狩弓獵兵の競り合いが始まった頃、メデイトリア軍右翼のバルバル騎兵がデロイ軍の貴臣騎兵に接近しつつあった。貴臣騎兵はデロイ貴族たち各家の眷属から集めた騎馬兵である。彼らの任務は主に斥候や伝令で、体には鎖帷子程度しか着けていないものの、戦場では槍と盾を持って一族の名を汚さぬよう勇

敢に戦った。だが、デロイ帝国の本州ガルバニアの騎馬技術の水準は低く、騎馬民族のバルバル族と戦うのは荷が重いといえた。それを知ってか知らずか、彼らもバルバル騎兵に接近してゆく。

数の上で、貴臣騎兵は明らかに優勢であった。接近する両者が加速し、衝突すると見えた次の瞬間、バルバル騎兵が急角度で戦場の外側へと進路を変える。不意をつかれた貴臣騎兵はその動きに追従できず、敵とすれ違った。両者が交錯するその時、バルバル騎兵が手持ちの投げ槍と短弓を貴臣騎兵に叩き込む。突撃を空振りさせた貴臣騎兵の兵長は、逃げる彼らを見て即座に追撃を命じた。馬群が、敵を追って変針する。だが、バルバル騎兵の槍と矢を食らって馬に跨る屍たちは直進し、戦友に無言の別れを告げた。

「バルバル騎兵、敵の騎兵に追われて南に離脱しました！」右翼の戦いを見守っていた伝令の一騎が戻ってくると、本陣のイド・ルグスの前で声を張り上げた。

「よし！」弾けるようにそう言い、イド・ルグスは彼を下がらせる。

イド・ルグスと副官メイノスは、無言で戦場を見つめていた。まだ中央の戦鋒楯兵は敵と接触していないが、問題は騎兵の動きであった。言葉を交わさずとも、ふたりの考える事は同じだった。右翼のバルバル騎兵は貴臣騎兵を引き連れて戦場を脱し、その任務を果たした。あとは左翼さえ。

ふたりの視線の先で、王遼騎兵とデイネリア騎兵が、互いの距離を縮めていた。数の上で、敵はわずかに優勢であった。イド・ルグスの仕える王家と同格の領地を持ち、王と共にメデイトリアを統治する三つの領家は、その家土や従士の一部を優秀な騎兵として擁している。王遼騎兵として召集された彼らの装備は兵士個々で違うが、その多くは胸甲と鎖帷子を身に付け、盾と槍を持つ重装備であった。盾を胸に構え、鞍に腰をすえ、馬を馳足で駆けさせ前進する。

王遼騎兵たちが、ようやく敵の異様な姿に気づく。彼らが手に持つ戦斧や長剣は巨大で、兜と腰巻と長靴の他は黒塗りの裸体である。だが、怯まなかった。盾を手綱と共に固く握り締め、構えた槍を胸に引き付けて固定させる。

「絶対に後退するな！ 我らの誇りのために！ 我々こそが勝利の鍵なのだ！」

王遼騎兵の統長が叫んだ。彼らの目前に敵が迫っていた。

そして、戦場の中央ではデロイ軍の長槍胄兵たちが前進し、メデイトリア軍の戦鉾楯兵の列に迫っていた。両者の間にいた投擲徒兵は槍を投げ尽くし、ある隊は長槍胄兵の大隊と大隊の間隙を埋め、ある隊は戦列左右の側面を守る集団となった。狩弓獵兵は迫りくる長槍胄兵に対し果敢に矢を放ったが、その重装甲の兵士に何の損害を与えることもできぬと悟ると、二つの集団となって自軍戦列の左右側面についた。

長槍胄兵は味方の骸を跨ぎ、敵の屍を踏んで迫りくる。その前進は決して速いものではなかったが、機械のように正確だった。彼ら長槍胄兵は四メートル近い長槍を持ち、鉄片と鉄板を鋸で繋ぎ合わせた甲胄と兜を身に付けて戦う重装甲の歩兵であった。左肩には顎まで届く肩当があり、手甲を加えて首から手先まで敵の攻撃を防ぐ。さらに左足に胴甲から大きな草摺を下げ、同じく脛当と合わせて足先までの防御を可能としていた。

彼らはその長い槍と装甲で、敵を正面から打ち破るのが役目だった。集団としての圧力を高めるため密集して方陣を構成し、息を合わせてひたすらに槍を突き出す。眼前の敵を圧倒し、どんな攻撃にも耐える彼らはデロイ帝国軍の中核であり、誇りでもあった。

やがて、長槍胄兵の槍の穂先がメデイトリア軍の楯が並ぶ最前列まで迫ると、一斉に引かれる。多数の槍が同時に楯を突き、大きく揺れた。なんとか持ちこたえる。そして二回目。耐えている。そして三回目。

ここで、メデイトリア軍の兵士が動いた。戦鉾楯兵の先頭の兵士が、おもむろに戦鉾を真上に突き上げる。狙うのは楯で受け止めた三度目の穂先のむこう。伸びきった柄に鉾が叩きつけられ、木が砕けた。すぐさま防御の構えに戻す。が、幾人かの兵士が四度目の穂先を防ぎきれず負傷する。後ろの兵士が即座に彼と交代し、戦列の前面に並べられた楯の空きを埋めた。傷つき戦えなくなった兵士は邪魔なだけだ。後ろへ後ろへ無造作に運ばれ、集団の後方に排出された。最後尾の兵士が介抱し、待ち構えていた薬師の手当てを受ける。数は少ないが、彼らも志願してここにやってきた。殺すためではなく生かすために。

長槍胄兵の槍の動きは激しいが、次第に揃わなくなっていく。戦鉾楯兵も隙をみて散発的に鉾を振り上げ槍を叩き折る。次の槍に突かれる危険も顧みず。

彼ら戦鉾楯兵は戦鉾と長楯を持ち、軽い具足に身を包んだ勇敢な戦士であった。戦鉾は肉包丁のような本体とL字型の鉄棘を組み合わせた長柄武器で、柄の長さは約二メートル。鉄棘の長い部分は本体と平行で槍のよう突く事ができ、本体の刃と反対方向に伸びた短い部分は、振り回して叩き付けると鉄板をも貫通させることが出来た。長楯は木製であるが、持ち手と接続する部分には金属の板が使われている。足先から顔面まで十分に防げるほどの高さがあり、上部には完全に楯に隠れた場合に視界を確保する二つの穴があった。楯を並べて密集し、振り上げた戦鉾を叩き付ける。これが彼らの戦い方だった。頭上から渾身の力で振り下ろされる戦鉾の威力は、想像に難くない。

だが、その鉾の刃が敵に届くことはなかった。戦士たちは必死の形相で槍を楯に受け止め、鉾で応戦した。それ以外に彼らに許されているのは、力尽き、斃れる事だけだった。しかし、デロイ軍もまた疲労の限界に達していた。戦列が徐々に後退し、沈黙する。互いの息遣いを聞く兵士たちが束の間の安息を貪ると、やがてデロイ軍の大兵長たちは剣を突き上げ、兵士の兜の中まで絶叫を響かせる。

殺戮機械が再び始動した。

「何だと！ もう一度言え！」副官メイノスが苛立っていた。
「相当の乱戦が行われている模様です！ 味方が退く様子はありません！」

伝令とメイノスのやり取りを聞きながら、イド・ルグスは濛々たる土煙の中に視線を向ける。この夏の乾燥が、予想外の事態を引き起こしていた。左翼の王遼騎兵と敵のディネリア騎兵は正面から激突していたが、その後の様子は狂乱する馬群が巻き上げた砂塵によって完全に遮られていた。

左翼の王遼騎兵へ、後退を命じる伝令が放たれる。

「くそっ！ あいつら、どういうつもりだ……？ なぜ後退しない！」メイノスが喚いた。

「後退するつもりなど無い、そういう事か……」煙幕の向こうに見える隠れる影を見極めんとしながら、イド・ルグスが呆然と呟く。

「何でだよ！ 作戦通り後ろに戻りゃあ、味方の弓の援護が受けられるってのに……！」

「……だが、その味方とは山を住処とし、獣を狩る下賤の獵師たちだ。彼らには、生まれながらの士分としての誇りがある」

「だが、奴らの条件は呑んでやったんだろ！ 違うか？」

「そもそも、私に従おうなどと考えていなかったのかもしれない……。我ら王家の騎兵を受け入れず、領家の騎兵のみでの編制を主張したのは、そのためか」

「そんな馬鹿な」

「敵に一度当たって退くことは容易ではないが、彼らも間違はなく精兵なのだ。戦力も互角に近いこの状況で、考えられるのはただ一つ」

「……つまり、味方に騙されたのかよ。くそっ、歩兵たちは頑張ってるってのに！」

「このままでは、中央の戦列もいずれ押し切られる……」

「ちくしょう！ おれが行って奴らの尻ぶつとばしてやる！」

「ウル、その必要はなさそうだ」

彼らの見つめる土埃の彼方から、槍を持った騎兵が姿を現した。一騎、二騎と戦場の後方へ力なく駆ける彼らは明らかに無秩序で、とにかく敵から遠ざかるうとしてる。彼らがその数を次第に増すのを見ながら、イド・ルグスはこぶしを硬く握りしめ己の失策を悟った。王遼騎兵たちが打ち破られたのだ。あの砂塵の中の大乱戦が、やがてディネリア騎兵の勝利に終わることは明白であった。

イド・ルグスは馬を降り、黙ったまま先王ボルボアンから授かった腰の剣を外す。白い鞆に包まれたこの剣は師士の証でもあった。彼の前に、副官メイノスがすでに跪いていた。

「ウル・メイノス、君に指揮を任せる」

イド・ルグスの差し出した剣を、メイノスは両手で受け取る。

「……おれは、お前を信じてるぜ。必ず戻ってこい」

そう言って、メイノスが自分の剣を差し出す。イド・ルグスはそれを受け取ると同時に馬に乗った。手綱の感触を確かめるように握り締め、馬を進める。

「五十騎隊！ 鉾を置き、抱鉄を持て。急げ！」

イド・ルグスの命令で、本陣の背後に並んだ球形の兵器が騎上の精鋭たちに配られる。その兵器は人の頭ほどの大きさの丸い鉄塊で、持ち手となる麻縄が両極に結ばれていた。下馬した伝令たちが担ぎ上げるその兵器を次々と受け取り、騎兵たちはその肩にずっしりとした麻縄の感触を確かめる。

「これまでさんざん鉾を振ってきて、最後に頼るのは結局これか……」伝令からそれを受け取った従士のガフが、珍しく愚痴を言う。次に抱鉄を受け取ったのはプロコだった。「……でもよ、こいつを生きた人間に使ったらとんでもねえ事になるぜ」

最後に受け取ったイド・ルグスが隊伍の先頭に戻る頃、五十騎隊はすでに戦闘隊形で整列していた。後に残るのは、地面に突きたて

られた五十本と一本の戦鋒。

「目標は敵右翼の騎兵！」イド・ルグスが剣で指し示す先の砂塵からは、すでに味方の騎兵たちが堰を切ったように敗走を始めていた。「私の後を追え、私の合図に従え！」そう言うと同時に、彼は駆け出していた。

総勢五十一騎、先頭にイド・ルグス。自陣左翼に向かって加速してゆく。背に担いだ兵器は重く、慣れない者には持ったまま馬に乗る事すら危険だった。扱いをよく心得ている彼らは、身体の均衡を巧みに保ちながら馬を駆る。次第に左翼が近づいてきた。

その右曲がりの角の先に、ディネリア騎兵がいる。王遼騎兵たちは総崩れとなり自軍のの後方に離脱、背後の森の中へと逃げ込むうとしている。だが敵はそれを追わなかった。自らの前方に進路をとり、メデイトリア軍の歩兵戦列へ最短距離で接近する。

五十一騎の集団が、狩弓獵兵たちの集団を右に曲がる。駆けつけた精鋭たちに、彼らが喝采を上げる。バルバル族譲りの腰高の騎乗姿勢、熟練の騎手たちに操られ、風を切る馬群は大きく旋回した。右手に見えていたディネリア騎兵の大群が正面に捉えられ、徐々に迫ってくる。ここで、ようやく速度が落とされた。腰を落ち着け、敵の勢いと距離を確かめながらイド・ルグスが腕で合図すると、その背後に横一列の横隊が展開された。

迫りくるディネリア騎兵たちは先ほどの激戦によって消耗し、疲労していた。軍勢の数も今は七割程度、傷ついた三割は死ぬか倒れて見捨てられるか、あるいは自力で退却するかその途中で死ぬかして、もういない。だが、それほどの犠牲に見合う戦功が、目の前にあった。敵の歩兵は目の前だ。正面から来た小勢の騎兵どもを蹴散らし、奴らの戦列に横から痛撃を喰らわせる。間違いなく勝利の決定打となるこの攻撃を成功させれば、恩賞は思いのままだろう。

大と小、二つの軍勢が迫る。先頭のイド・ルグスが手綱から手を

離し両手で麻縄を持った。足だけで巧みに操る馬の上で、縄を右手に絡めて叫ぶ。

「構え！」

正面に、先頭の敵戦士が見えていた。すでに距離は近い。獣じみた男の黒塗りの身体に、斃した敵の血糊がおぞましい斑を描いていた。戦斧を頭上に突き上げ、兜から放たれる狂気の視線がこちらを向く。

先頭のふたりの眼が合った。

「点火！」

左手で点火帯が引き抜かれた。帯の抜けた孔から火花が噴き出し、やがて中へ吸い込まれる。敵の戦士が顔に驚きの色を浮かべ、初めて人間らしい表情を見せた、その時。

「放て！」

鉄の塊を右手で振る。弧を描き、投擲された。ふわりと虚空を飛ぶそれは、乾いた大地に愛馬の蹄が食い込んだ瞬間、急速に遠ざかってゆく。そして、五十一騎が完全に馬首を反転させた時、その抱鉄は彼らの背後で二度目の跳躍を終えていた。

見事に動きの調った五十一の鉄塊は勢いをやや失い、三度目の地面への激突を最後に跳躍を止め、不揃いに転がり始める。戸惑い、馬を止めようとするディネリア騎兵の足元を回転する塊が過ぎてゆく。

次の瞬間、閃光が拡がった。衝撃が身体を突き抜ける。二度、三度。腹の底が震えた。爆音、爆音、爆音。数を増す轟きは、もう数え切れない。もう何も聞こえない。限度を知らぬ衝撃が暴れまわった。

耳が鳴っている。地面が静かだった。イド・ルグスはむくりと起き、辺りを見やった。両目を手で塞がれた馬が、隊の従士と共に横たわっていた。味方は自分を含め、全員がその姿勢だった。隊に異状が無いことを確認すると、後方に目を移す。

倒れていた。脚、腕、おそらく胴体。それが人のものか、馬のものかだけは区別できた。飛び散っているのは、臓物あるいは脳漿か肉片。だがそれらの断片が、落ちていない場所があった。えぐられた、五十一の窪みとその周辺。そして、その先には馬から落ち、倒れ、ひざまずき、立ち尽くす大勢の戦士たちがいた。怯えて這いつくばる者、自分の馬を探す者、破片を身体に受け血を流す者、ただ震える者。

戦場の時が止まっていた。全軍の戦列で歩兵たちが、激戦の構えのまま呆然としている。だが、その中で立ち上がり、弓を引くものがいた。メデイトリア軍左翼の狩猟弓兵。そして、ディネリア騎兵へ矢が放たれた。

風切り音が鳴り響き、戦士の体に、馬の横っ腹に次々と突き立った。驚き、動揺する彼らの視線の先で、狩弓兵たちが次の矢をつがえる。近距離の、そして停止している的への狙いすました一斉射撃。激しい弓勢が彼らに降り注ぐ。

次々と倒れる馬が彼らの進路も退路も断ってゆく。馬に飛び乗り、矢を避けようと無秩序に駆け出す彼らは互いに衝突し、さらに混乱に拍車がかかった。完全に動転したディネリア騎兵は死に物狂いの脱出を試みる。もはや、敵も味方もない。邪魔する者は突き倒し、押し倒し、そして自らが撥ね倒される。冷静に猟兵に向かって駆け出す者もいたが、散発的な突撃は正確な狙撃によって阻止される。

この恐慌状態から脱出し、逃れることができたのは半数にも満たなかった。もはや彼らに戦意は無く、たった五十騎の熾烈な追撃を受けて戦場から駆逐されるだろう。

「士長殿！ あれは、あの兵器は、一体何なのですか！」

本陣で、右へ左へ馬首を廻らしながら伝令の一騎がメイノスに叫んだ。どうやっても、馬が落ち着こうとしない。怯えた馬が駆け出さないよう、懸命に捌く。彼以外の伝令たちも、手綱を引いて馬をなだめるのに精一杯だった。

だがメイノスはそれを無視し、鼓を打つのに専念した。浮き足立った味方の戦鋒楯兵に、前進の合図を送り続ける。『兵の家』の従士たちは即座にそれに従ったが、領家の兵たちの反応は鈍い。閃光と轟音で途切れた彼らの注意を、鼓の音で引きつける。規則正しく打ち鳴らされるメイノスの信号が、メデイトリア軍本陣の冷静さを雄弁に伝えていた。

やがて、それぞれの隊の長たちが指揮を再開すると、メデイトリア軍は動揺の収まらぬデロイ軍をじりじりと押し返す。左右から圧迫されていた戦列を五分に戻した所で、再び戦況が拮抗した。

メイノスたちのいる本陣も、ようやく落ち着きを取り戻していた。短棍を鞍に収めたメイノスが言った。

「……あの兵器は、ボルボアン様からお預かりしたものだ」

「王が……！　ということは、まさか、神託が下っておったのですか！」

「ああ、生きておられた時にな……」

メデイトリアの統治者であるボルボアン王は、この会戦の直前に死亡していた。戦場の下見を行っていたところを、デロイ軍の手に射られたとされている。

「しかし……。我々に、何故それは明かされなかったのですか……？」

「おれも、その辺りの事情は知らんのだ。この事について知るのは、ごく限られた者にしか過ぎん……」

「そうなのですか……。気づいた時には、敵の数百騎が消し飛んでおりました」

王より密かに神託を伝えられた王家の学師は、イド・ルグスらと協力して兵器を開発した。しかし、王の不慮の死によって、その存在を公にできる者はいなくなっていた。この混乱を引き継いだのは、領家の当主たちである。だが、彼らは部隊の編制に口を出した後、王家の師士、つまりイド・ルグスに全てを託し、早々に姿を消していた。師士とは、王に代わって国軍を指揮する事を許された者であ

る。結果的に、神託の存在が明かされる前に兵器が使用される形となったが、現状はメディトリア軍の有利に働いている様であった。

「……しかし、このままでは負ける」

メイノスは、激戦を続ける赤い戦士たちを見た。徐々に、押されている。いくら士気が高いといえ、それだけで勝てるような戦力差ではなかった。後方の民兵隊もすでに投入され、本陣から指揮できることはもうない。

（くそっ、どうすりゃいいんだ……）

彼の眼が、イド・ルグスを探していた。

「メイノス様！ 師士殿が森に！」

伝令のひとりが、後方のたった一騎に気づいて叫んだ。

「な……！ 何だと！」

慌てて振り返ったメイノスが、彼の指差す先を見る。確かに、見慣れた一騎がその方向におり、すぐに森へ消えた。その場所と戦場を、メイノスが何度も視線を往復させる。

そして最後に森の方を見た彼が、眼を伏せた。

（ああ、そうだ。イド、お前は正しい）

その身体に、血が逆流するのを感じていた。

「二騎で追え！」下を向いたまま、メイノスが命じた。伝令たち戸惑う。

「しかし、逃げるわけには……」

「てめえら、なに寝ぼけてやがる！ さっさと追えッ！」

その剣幕に、二騎が慌てて手綱を取る。彼らが駆けて行くのを感じながら、メイノスは腰の剣を左手で握っていた。そして、祈った。（頼む、間に合ってくれ……）

やがて、イド・ルグスを追う二騎が森に消えた。

十

十

一騎の騎兵が、森を逃げていた。手綱を持つ左手は肩から震え、

背を丸めて馬を進める。若い兵士だった。痛々しい姿であったが、深手を負ってはいない。その右手は、胸の前で槍と盾を固く握り締めている。

後ろを見た。誰もいなかった。森の中に入ってそれを確認すると、彼はようやく落ち着いた。そして頭の中で、混乱していた記憶を徐々に取り戻す。

最初の突撃。槍は、確かに敵を貫いた。が、敵の反撃で大勢が斃された。土煙が何もかもを飲み込んでゆく中、壮絶な白兵戦が始まった。必死に戦ったが、周りの仲間は次々に死んでいった。この時、彼は思った。このまま全滅する、と。その後のことは、今でも曖昧だった。自分が逃げているのに気づいたのは、森が視界に入っただけだった。

彼の心の中で、罪悪感が徐々に増してくる。今、こうやって馬をとぼとぼ進ませるこの瞬間にも、戦場では味方たちが戦っている。生き残ったとして、一生許されはしまい。だが、自分だけが戻って何になる？ 生き残った仲間は皆、森の向こうに逃げたのだ。目の前の森の奥に。

微かに声が聞こえた。その森から。数を数えている？ いや、これは点呼だ。無意識に馬を急がせる。木々がまばらになり、辺りが段々と広くなる。

森が一気に開けた。そして、大勢の騎兵がそこにいた。手前の何人かが彼に気づき、腕を振って招く。だが、鋭い視線に射すくめられ、彼は馬を停めた。この集団の向こう側で、こちらを向いているたった一騎がいた。

隊伍を組まない味方たちは、その男の前に集まり隊を編制している。二人の従士が、兵士を選び分けていた。元気な者は隊長に、戦える者は隊士に。戦えない者は一箇所に集められ、手当てを受けていた。

若い兵士は、その男を知っていた。この会戦に先立つ戦闘で、共

に戦った。そして勝った。その戦友と共に、もう一度戦える。この点呼に加われれば。痛む背筋を伸ばし、盾と槍をしっかりと構える。まだ、終わってない。彼は、そう自分に言い聞かせると、馬を前に進めた。

十

十

戦場では死闘が続いていた。歩兵たちの戦列では、両軍の兵士が互いを正面に捉えながら、一進一退の攻防が続いていた。メデイトリア軍は劣勢であったが、戦列の両端には精鋭である『兵の家』の従士が配置され、その巧みな進退で敵を翻弄する。彼らの間にいる領家の歩兵、そして民兵隊も勇敢に戦った。

デロイ軍の長槍胄兵が、分厚い戦列の後方から兵士を次々に繰り出す。メデイトリア軍も死戦するが、人数が少ない分不利であった。だが、鉾との競り合いで傷んだ槍が深手を与える事はなく、まさに血肉を削る攻防が繰り広げられた。

メデイトリア軍本陣には、すでにメイノス以下数騎が残るのみだった。だが、彼らにできるのは、ただ戦場を見守る事でしかない。味方の戦列の後方は、悲惨な状態だった。ねっとりとした血糊に塗れた大勢の重傷者が、呻いていた。薬師たちも手持ちの物資をすべて使い果たし、増え続ける彼らに成す術がなかった。弱々しい声で家族の名前を呼ぶ者、仲間が事切れるのを看取る者、這いつくばりながら戦列に戻る者。彼らを救うものは、誰もいない。

ウル・メイノスは、馬上からその惨状を見ていた。そして、泣いていた。彼は本陣の先頭に居ながら、女々しく涙を流すことしか出来なかった。それが、悲しかった。十五の時から技を鍛え、鉾を持てば敵の百や二百は討ってやると誓っていた。だが。

（くそっ……！ くそっ、くそっ！ 何もかも、無駄だったのかよ……）

メイノスの脳裏に、これまでの情景がよぎる。メデイトリアへの

デロイ帝国の侵攻については、先王ボルボアンが即位する以前から予想されていた事だった。気が遠くなるほどの永い時代を、この国は孤立という正義を貫いていた。その眼前で帝国は二百年もの間、武力による膨張を続けていたのである。ボルボアン王に従い、王家も領家も危機に対応するため、約二十年の時を費やしていた。様々な事が試され、それらが整ってきたのはここ数年といった所であろうか。その過程で軋轢もあつたが、故郷のために命を投げ出す覚悟を持つ者が、この戦場に集結したのだ。勝機は、充分にある。そう思っていた。

（このままやられちまうのか、おれたちは……！）

メイノスは、その涙を止められない。彼でなくとも、メディトリアに生まれた者なら必ず涙を流したはずであつた。彼らの正義が、今まさに蹂躪されようとしている。メイノスにとってデロイ帝国とは、あらゆる事が悪行で成り立っているかのような存在であつた。だが、全てを支配するのは目の前の現実であり、彼らの未来は風前の灯といえた。

デロイ帝国は、豊かな国土を背景に覇権を唱え、欲望に従って生きる者たちである。人がどれだけ死のうとも、彼らの問題は勝敗だけだ。だからこそ、勝てる戦を計算できる。死にゆく仲間を見て、涙を流す。武器を手にして、勇を誓う。そんな者たちに、本当に勝算などあつたのか。

（……甘かつた。敵は、おれたちの心の中にもいた。だが、負ける訳がねえ。そんな道理が、あつてたまるかよ。ちくしょう！）

敵軍の動きはすべて予想した通りで、戦況の推移にも問題はなかった。左翼の王遼騎兵が打ち破られるまでは。確かに、あの兵器によりメディトリア軍は危機を逃れていた。敵の騎兵に側面を襲われていれば、すでに潰走していただろう。だが、それも味方の苦しみをいたずらに引き伸ばすだけだった。

「メイノス様……！ 南に何かが見えます！」 傍らの伝令が、右前方を指して告げる。

密かに涙を拭い、そちらを見る。目を凝らす必要もなく、それが敵の貴臣騎兵であると判った。メイノスの背後に居並ぶ伝令たちもそれに気づき、言葉を失った。

「くそ、来やがった……」メイノスが、血を吐くように呟く。

その騎兵たちは、戦場を離れた時より明らかにその数を減らしていた。彼らと戦ったバルバル騎兵が、追いつ追われつの騎馬戦で後れを取るとは思えない。貴臣騎兵たちは、おそらくその兵力の何割かを死兵として残し、戦場に戻ってきたのだ。そして、その判断は正しかった。彼方から聞こえる蹄音が、次第に大きくなる。

降伏。メイノスの頭に、その言葉が浮かんた。だが、従う者はいないだろう。そしてメイノスもまた、彼らを白鞘の剣で斬ることはできなかった。

（こんな事って、ねえぜ……。これで、終わりなのかよ……）

馬群の迫る音が、聞こえていた。だが、何かがおかしい。おかしいのは、音の聞こえる方向だ。それが聞こえてくるのは。

メイノスが、背後の森へ振り向く。木々の葉が震えている。視線の先で、夏に向けて青々と茂ったそれがざわめき、そして森の出口に向かっていた。得体の知れない獣の群れが、囚われの森から出ようとしている。動転した頭が戦慄を覚えた、次の瞬間。

黒い影が森を突き抜けた。馬群の先頭はイド・ルグス。止めどなく湧き出る彼らは千騎をはるかに超え、森を出るとさらに加速する。戦列の後方にいた従士の一人が、その騎兵の集団を目にした。周りにいる者も次々に振り向く。しばしの沈黙の後、弾けるような歓声が上がり始める。

猟兵が、左翼を通過する王遼騎兵たちを指差す。歓声が一段と大きくなった。今まさに敵と鋒を交える戦士たちも、この声と蹄の音が何を意味するのか解らぬ者はいなかった。馬群は、さらに敵陣の背後に廻り込んだ。

「師士殿……！ 師士殿！ 止まって下さい！」

イド・ルグスの傍にいた数騎が叫んでいた。すでに、敵の本陣は後退している。このまま敵の背後に突撃すれば、戦況は逆転するだろう。しかしイド・ルグスの視線だけは、そちらに向けられてはいなかった。止まる気配もない。その数騎は彼の見る方向に目をやるとやがて沈黙した。

イド・ルグスの眼が、先ほどから次第に近くなりつつある軍勢を観察していた。

（数は、千騎以上。やはり貴臣騎兵か。速度はさほどでもない。奴らも随分な遅刻で急いでいるだろうに。バルバル族たちに手を焼き、兵を分けたな。無理もない。千二百、千四百、千六百、いや千五百程度か。相手として、不足はない）

背後の騎兵たちが、イド・ルグスに準備を促される。兵力としては、ほぼ互角。帷子、胸甲、兜。装備の具合を確かめ、槍と盾を構える。もう敵の騎兵は遠くなくなった。王遼騎兵たちが徐々に加速する。

互いの軍勢が、加速しながら横隊に展開した。距離が縮まる。速度は王遼騎兵が勝っていた。そして、互いに全く速度を落とさず、そのまま激突した。

槍が、盾が、胄が、馬が、人が、武器となった。質量と速度のもたらす衝撃と破壊。その凄まじさに大気が歪んだ。馬が倒れ、人が落ちた。何が起きたか理解する前に絶命する。残りの者も己がどう生き残ったか解らぬまま、目前の敵との白兵戦に突入した。

槍で突き、剣で叩き切り、盾で殴る。正面から、横から、背後から。誰かが誰かを殺し、誰かが誰かに殺された。斃した者も、斃された者も、覚えているのは相手が敵であることだけだ。自分が死ぬ以外終わりの無い殺戮。現実感が急速に蝕まれ、失われてゆく。そして、湧き上がる不安と恐怖、あるいは狂気が、空っぽになったその場所を埋めた。

先に限界が来たのは貴臣騎兵だった。自分が逃げていると認識しないまま敵に背を向ける。これまで戦ったことも、いま逃走してい

ることも、すべては生きるためだ。何の矛盾も無い。やがて、そう
考えぬ者は全て死に絶え 彼らは敗走した。

イド・ルグスは、負傷していた。胸甲を突き抜けた槍の穂先が、
包帯の巻かれた肩に残っていた。激戦の後に負傷者の手当てが行わ
れ、師士である彼は先頭に返ろうとする。だが、集合を命じられた
王遼騎兵たちがその行く手を阻む。血の気を失ったイド・ルグスは、
馬に乗るだけで精一杯だった。

彼に従う全ての騎兵たちが、無言で命令を促す。ようやく状況を
悟ったイド・ルグスはしばしの沈黙の後、静かに剣を抜いた。
「全隊に命じる。これが最後の命令だ……」

号令の後、彼らは敵の背後へ壮絶な突撃を開始した。

デロイ軍の戦列は、後方から王遼騎兵の襲撃を受け、次第に混乱
の度合いを増していった。戦列の後方を守る投擲徒兵は騎兵たちの
突撃に次々と斃れ、長槍胄兵の背後に追い詰められる。兵長たちが
徒兵に前進を命じるが、悲鳴と叫び声にかき消された。

そして、戦場を遠く離れていたバルバル騎兵が、ついに戻ってく
る。これが止めとなった。彼らが攻撃に加わった後、デロイ軍は完
全に包囲される。正面は戦鋒楯兵、側面は狩弓獵兵、後方は王遼騎
兵とバルバル騎兵。その合間から、民兵が攻撃を加えていた。

この絶望的状况においても、デロイ軍は勇敢に戦っていた。最後
まで号令は絶えず、包囲網の薄い箇所から逃げ出す事もせず、槍を
全方位に構え針鼠の陣で対抗する。だが、メデイトリア軍の包囲が、
デロイ軍の戦意より兵士の命より先に、ついにその空間において終
末をもたらした。

長槍胄兵たちが天にその存在を示すように立てていた槍が、次々
と倒れる。やってきたのは、空間的死だった。彼らは、戦うために
最低限必要な場所すら奪われた。やがて総崩れとなった彼らは武器
を捨て、蜘蛛の子が逃げ散るように潰走する。大混乱となった戦場

に、悲鳴だけがいつまでも響いていた。

後にカシアスの戦いとよばれる会戦が、ついに終わった。

メデイトリア軍の本陣で、ふたりの男がその光景を目にしていた。だが、そのひとは楯で組まれた担架に横たわる。傍らに跪く男が言った。

「……イド、やっと戻ってきたな。こいつはしばらく預かってるぜ。ゆっくり休め」

メイノスが白鞘の剣を見せた。頷いて目を閉じたイド・ルグスが言った。

「ウル……味方は、どれほど死んだ……？ 負傷者も、早く運んでやらないと……」

「辺りは敵の屍体だらけで、判らん。お前は、そんな心配しないでいいんだ」

「……なぜ、降伏させなかった？」

「あつという間に、敵が崩れちゃった。逃げるんだから、討つしかないだろ？」

「だが、彼らを滅ぼしてはならぬ……。そんな非道をしては、亡き王に申し訳が立たん」

敵を滅ぼす事、それはこのメデイトリアにおいて悪とされていた。彼らが、デロイ帝国を侵略者というだけでなく精神的な面でも憎むのは、こういった倫理観が背景にある。とはいえ、その事は死闘の代償として、彼らからも忘れ去られていた様だった。

「残りの敵は、逃がしてやれ……。輪神が、我らのことを見ておられる」

「もう、誰もいないぜ」

「そうか……」

「味方も、寂しくなっちゃった。お前がいなきゃ、殲滅されてたのは恐らくおれたちだったろうな……」メイノスが戦場を隅々まで見渡し、しみじみと言った。

「俺は、王に与えられた役割を果たしたに過ぎん。敵を退けたのは、王家の聖約だ……」

聖約とは、このメディトリアを統治する王朝の始祖であるマハ・アルダネスが、輪神と取り交わしたとされる誓いであった。メディトリアには、数百を超える聖神、つまり神がいるとされる。これらの神々は様々な関係でつながっており、その全てを称して輪神という。メディトリアの人々はこの聖約を遵守する事により、彼らの加護を得られると考えていたのである。

「イド……。だが、お前のあの働きがなければ、確実にやられてた。そうだろ？」

「しかし、兵器が無ければそれ以前に決着がついていたのだ……。

ウル、お前まさか、聖神を疑っているのか？」

「そうは言ってねえ……。でもよ、だったら何でボルボアン様は死にしまったんだ？ どうして、こんな時にいなくなっちまったんだよ……」彼の頬が、震えていた。

イド・ルグスは雲のない空を見上げ、言った。

「ウル……。神託といえど、楯のように禍を防ぐことは出来ない。それはあくまで、鉾のように働くのだ。禍を打ち砕くのは、我々の役目になる。お前も、あの兵器の凄まじい威力は見ただろう。輪神の力に疑念を抱くなど、愚かな事だ……」

口を閉じ、イド・ルグスは空を仰ぐ。彼は、信じていた。王の死によって味方の誰もが動揺していたが、聖神に運命を預けることで彼らは冷静でいられた。だからこそ、結束を乱すことなく決戦に臨めたのである。その過程で若干の行き違いはあったが、彼らは戦い抜いた。神託そのものとは別に、彼らの信仰もこの勝利に大きく貢献したのである。

「けどよ、こんな崖つぶちはもう勘弁だぜ……。いちどは、魂が抜けちゃったよ」

「責任は、この俺にある。……師士の任が、俺には重すぎた」

「だが、お前は勝ったんだ。それを言ったら、おれたたちの立場がな

い。特に、士隊長の連中はな。スタインは別としても、シユマロたちは面目が立たねえだろうなあ……」

「……まさか、近くにいないだろうな」

「なんだよ、びびってんのか。もっとでかい面したって、いいんだぜ？」

「ウル。あれこれ言われるのは、俺なんだ」

「おい！」言葉をさえぎり、メイノスが二人の従士を呼んだ。

「師士殿を、カシアスまで運んでさしあげる。救国の英雄だ、丁重にな」

持ち上げられ、イド・ルグスが諦めたように顔を横たえた。周囲を見回し、メイノスが彼に声をかける。

「辺りは、おれたちの隊だけだ。当分、負傷者の収容は終わりそうに無いな……」

運ばれる楯を、白鞘の剣を持つ男がいつまでも見送っていた。戦場に、昼下がりの風が流れている。だが、彼に届くそよ風は、早くも死臭を孕み始めていた。

【第二章】 戦役の行方

まばらに茂る低木の先へ、歩廊が続いていた。のどかな前庭を抜けたイド・ルグスは、そこに造られた石造りの玄門をくぐった。門に詰める二人の衛士を見るが、その表情に反応は無い。痛む肩に手をやり、とりあえず足を急がせる。

道が尽きた先に拝殿があった。王家の遼臣の為にあるこの建物は、聖密院への唯一の入り口である大聖門の奥に建てられている。聖密院は王都エスーサにある王の住処であり、城市の内城でもあった。切り出された白い理石が積み上げられ、入り組んだ壁はうつすらと苔むしている。壁は高い勾配の階段様で、その上に尖端を持つ円蓋が載っていた。壁面に目だった飾りはなく、理石の規則正しい目地と四角い窓孔があるだけだった。周囲には壁に寄り添う支塔がいくつも立ち、そこから繋がる飛壁が拝殿を支えている。

正面の柱列から中を窺うと、すでに皆が整列していた。王の間の奥、玉座の前には従者を連れた三領家の当主たち。その後ろには王家に仕える地領主の集団。そして、兵の家の士隊長らは最後尾にいた。イド・ルグスはその四人を指し、柱沿いを静かに進む。

背後まで近づいたとき、四人のうちのひとりが彼に気づいて振り向いた。参番隊の隊長、オフィルだった。その眼つきには、微かな苛立ちが漂っている。

「陛下は……？」ようやくたどり着いたイド・ルグスが、息を弾ませ問いかける。

「……まだ、お目見えになられん。早く並べ」小さく答えたオフィルが、列の左に目をやる。彼がそこに立とうとしたとき、列の右端にいたスタインが声を上げた。

「お、来たか。……間に合ったようだな」

振り返ったスタインが、イド・ルグスの肩を見つめた。礼袍の下のはきは、まだ塞がっていない。カシアスの戦いから、まだ三日し

か経っていなかった。そして今日は、王女ダナ・ブリグンドの即位の儀が行われる日でもあった。戦時であるため、先王の喪は無視されている。しかし、王家も混乱しているのか、新王はなかなか姿を現さない。

儀式は、御所に近い正殿で行われていた。この拝殿から奥は、『王の輩』^{ともがら}とよばれる王家の属臣だけが立ち入れる神聖な領域だった。即位の儀が終われば、ここで新王に対する拝謁が行われるはずである。だが、四人の士隊長と共に拝殿へ赴いたイド・ルグスは、肩に染み出た血の穢れを玄門の衛士に見咎められ、やむなく引き返していた。

「どうやって服を替えた……？」スタインが不思議そうに顎鬚をすごいた。「まあいい。お前は先頭だ」彼の親指が、玉座の方を指した。

「……おいスタイン、どういう事だ？」貳番隊の隊長シユマロがそう言つと、四番隊のリユコスも小声で囁く。「同じ士隊長なら、同列に並ぶべきだろう。なぜ先頭に？」

「こいつは、師士だ。僕たちの横はまずいだろう？」

「しかし……。ボルボアン様はもう、おられないのだぞ……」

先王ボルボアンがイド・ルグスに師士の役目を命じたのは夏の初め、雪解けと共にメディトリアに侵攻したデロイ帝国の先遣隊が、ヒメル死湖の畔で打ち破られた後の事である。勝利に貢献したイド・ルグスは、長らく空位であった師士に任じられた。その務めは、あくまでボルボアン王の在位中に限られるはずであるが、そういった事は全て混乱の中に消え去っていた。

三人の士隊長たちが表情を曇らせる中、スタインが言った。

「だが、領家から改めて国軍の指揮を任され、王家も黙認しているならば、まだ師士という事になるだろう」

「スタイン……。今この場において、それに何の意味があるというのだ？」

「……解らぬか？ こいつが末席の末席では、先頭にいる御仁らが

でかい面をするだけだ。王家の尖兵たる我々が果たした役割を、忘れられては困る」

「しかし、奴の立場を決めるのは、新王ではないのか……！」

高ぶったオフィルの声に、前列の何人かが振り向くが、その眼はわずかに冷たい。兵の家の従士たちは全員が平民出身であり、それは士隊長といえど同じだった。

「だったら、それまでは俺たちの前ってことだ。……違うか？」

スタインに無理やり押し出され、イド・ルグスがその前に立つ。オフィルら三人はそれ以上何も言わなかったが、その厳しい眼つきが変わることはなかった。

王によって招集されるメデイトリアの国軍は、王自身が指揮するのが慣わしであった。だが、師士だけは王に代わり国軍を率いる資格があるとされる。イド・ルグスは『兵の家』に所属する従士だったが、王の命により軍が強化される過程で士隊長へと抜擢されていた。その人選を主張したのが、士隊長ファー・スタインだった。（困った……。スタイン殿の引き立ては有難いが、今のままでよいのに……）

背後の視線を感じ、イド・ルグスの気が重くなる。ようやく三十になったばかりの彼は、役目を果たすことにオフィルたちとの溝を感じていた。彼以外の士隊長は、皆ふた回りは年上である。心配すべき事は、ほかにもあるのだが。彼が、ため息をつく。

デロイ帝国最強といわれる第一軍団を退けたとはいえ、メデイトリア軍の被害も甚大であった。重傷者を差し引き、民兵たちも帰した軍勢の数は、戦う前の五割にも満たない。特に王遼騎兵は悲惨な状況である。勝利の代償は、余りにも大きかった。

だが、この国の人々の暮らしは、次第に平穏を取り戻しつつあった。メデイトリア各地から従士や家士、民兵が総動員され、その後は祈るように過ごしていた彼らであったが、この戦勝によって暗い影は一掃された。また、ボルボアン王が神託を授かっていた事が明らかになると、彼らの信仰はより強まった。

この地に禍ある時、神託が下る。古から信じられてきた伝承の実現を目の当たりにし、彼らは次の王が速やかに即位する事を願っていた。王家においても内外の動揺を避けるため、今日の儀式は異例の迅速さで執り行われたのである。こういった一連の動きは、先王ボルボアンの死によって生じた巨大な空白が、真空のごとく周囲のものを吸い込んでいる様にも思えた。

奥室の扉口を隠す幕が揺れ、二人の男が玉座の左右へ向かう。ひとりは王家の家宰、サンク・タルム。もうひとりは侍従長のジジ・スタコック。共に『王の輩』の重鎮である。

そして、輝く絹の装束をまとった王が幕から出てきた。彼女の小柄な身体は、眼を除いてすべてが喪を示す深い蒼に包まれている。メデイトリアの新たな王、ダナ・ブリグンドであった。侍女を従えて玉座の背後まで歩み、こちらを向いた。皆が静まった時、家宰のタルムが咳払いをした。

「遼臣諸君……！ ここにおわす陛下は、つい今しがたアルダネス朝の王位をご継承なされた！ 我ら『王の輩』はその忠実な僕として、謹んでこれを諸君らにお伝え致す」

そこまで一息に言い、家宰はさらに言葉を続けた。

「今日をもつて、暦は改められるものとする。だが、このたびの即位の儀は特別の事情により繰り上げられたものであり、未だ先王の喪は明けてはいない。よつて、玉座は何人たりとも侵すことはできぬ」

家宰が王の間を見回した。侍従長は神妙な表情を崩さない。

「本来なら、陛下は玉座にて遼臣諸君の祝賀の言葉をお聞きになるが、この儀は後の機会に行う事とする。これより、王のお言葉を文書で与える。謹んで拝領せよ」

侍従長が抱えていた獣皮紙の束を、それぞれ領家の当主、地領主の主席、そしてイド・ルグスに慇懃なしぐさで渡す。侍従長が元の位置に戻ると、家宰が再び言葉を続けた。

「なお、諸君らの役目、序列は変わらぬものとする！ 諸君らが、

引き続き忠勤と重任を果たす事を期待したい。戦時である故、賓殿での歓餐も先の事とする。今後の指図については、追って報せる。儀は、以上である」

家宰が唐突にそう宣言すると、王は侍従長を伴って静かに奥室へ退去した。王の間の壇上から降りた家宰が、領家の当主たちを拝殿の外へ導いてゆく。

「何て書いてあるんだ……？」イド・ルグスが開いた文書を、スタインが覗き込む。

『吾の下僕たる、兵の家の各士に告げる。此度の戦勝の労いは、戦役の完全な終了に伴って行う事とする。現在、吾は敵国との講和を準備するものであるが、士隊長各士においては次の戦の備えを怠らぬよう配慮せよ。また、士隊長イド・ルグスを引き続き師士に任じる。以上をもつて吾の言葉とする』文言を確認した五人が、顔を見合わせる。

「短いな……。はは、だがこれで決まりだな！」スタインが笑いながら皆を見た。

「……ふん。そうだとしても、次の戦などあるのか？」シュマロが言い捨てる。

「第一軍団には、デロイ軍の兵士の半数近くが所属してたのだからな。とはいえ、陛下のご命令通りに備えておくべきだろう」そう言つてリユコスが腕を組む。

「そんな事は、すでにしておる。とにかく、足りんのはあの兵器だと、オフィル。」

「……兵器は全て使いきました。後は、カイン殿の調合次第です」イド・ルグスはそう言い、文書を懷に収める。

「おい、そんな悠長な事は言っておれん。何故、人手を増やして作業できんのだ？」

シュマロが語気を強めて問う。イド・ルグスが答えた。

「焔硝の調合には技術が必要で、彼に任せるしかありません。天候にも左右されます」

「だが、何かやり方があるだろう。どうにかならんのか？」シユマ口が眉を寄せる。

「王の裁決を、まずは仰ぎましょう。我々は、王家の学師へ協力する立場に過ぎません」

「しかし、そうであっても何か方法が」

「……おい、みんな帰っちまったぞ？」スタインが、シユマ口の詰問を遮った。

辺りには誰もいなかった。奥の幕から、侍従長が顔半分でこちらを窺っていた。無表情な彼の眼を見て、五人が一斉に出口へ向かう。外に出て、歩廊を急いだ。

「ルグス。お前はその怪我が治るまで、おとなしくしている。わかったな？」

スタインの指差した肩に、赤い染みが再び滲んでいた。

十

十

兵士たちの頭上に、断崖が切り立っている。峠を下ってきた長い列は、その断崖の狭間にある砦の門を通過していた。ここはノクニイ峠とよばれている。門を抜けると、そこは既にメディトリア領内だった。

オシア州の街カリナソスから西を目指し、曲がりくねった山道を抜けると、この峠がある。砦は陸の孤島といえるメディトリアへの、たった二つしかない関門のひとつであった。断崖の左右には険難な岩山が密に並び、何者もそこを通ることは出来ない。

門の手前の断崖の下に、数騎の騎馬が群れていた。砦を抜け、敵地へ向かう兵卒たちの列の横で、やってきた峠を見上げている。

「……妙な所に砦が造られていますね」

砦との距離を目測しつつ、中兵長のテベス・ラボアが言った。

「確かに、あの峠の上からの攻撃は防げんだろうな……」

答えたのは、峠を通過する第二軍団を率いる軍団司、ブルー・ダ・

プー。実際に、砦は春の攻撃で破壊されていた。そのままメディトリアに侵攻した第一軍団は現在、王都への途上にある都市カシアスの近辺まで進出している。辺りには、その攻撃で使われた投石機からの石弾が、無数に転がっていた。

「彼らは何故ここを選んだのでしょうか。峠への途中に適地はあったと思いますが……」

「その場所には迂回路があるのだろう。ここなら一箇所の防御で足りる、という事か」

「つまり、この砦で守りきる気は無い、と。有事には領内で戦う。賢いすな、彼らは」

少々皮肉めいたラボアの言葉を聞いて、ダ・プーが答える。

「もう、決着がついているだろう。手柄の無い戦役になってしまったな……」

「獲物のいるうちに、と彼らには随分無理をさせましたが、残念です」

兵士たちの列を、ラボアが見た。ダ・プーは、峠に注いでいた視線を頭上に向ける。

「……しかし、高いな」

断崖の片側だけが、塔のように空へ向かって伸びていた。平野ばかりのガルバニアからやってきた彼らにとって、この峠は奇観といえた。第二軍団がここにやってきた目的は、要するに第一軍団との交代である。北方にも敵を持つデロイ帝国にとって、最大の兵力を擁する常勝軍を、この地にいつまでも留め置くことはできない。メディトリア軍が野戦での短期戦と、城市での持久戦のいずれを選択しようとも、第一軍団が確実にガルバニアへ帰還できるよう、支援するのが第二軍団の任務である。だが、名目上はそうであっても、実質的には尻拭いの役目であった。

「先ほどオシア人の馬丁から聞きましたが、メディトリアに害を成す者がここを通るとき、あの岩山が崩れてくるという言い伝えがあるそうです」

「なに、本当か……？」

ラボアの言葉に、ダ・プーは再び見上げて耳を澄ませる。鳥がぴちぴちと鳴いていた。

「……俺がいるのに、崩れてこんじゃないか。ふん、その話は嘘だな」

不満そうに言い捨てる。少しだけ歯を見せたラボアの後ろから、不意に声が上がった。

「ははっ、いいっすね、その考え方！ ははは……」

断崖に笑いが響く。だが、それは周囲の沈黙の中で徐々に小さくなる、やがて止んだ。取り繕うように、声の主が口を開いた。

「いや、閣下の仰る通りっすよ。……昔の人って、馬鹿ですよ」

「ダンテ、お前は黙ってる」ラボアが睨む。「我々は、すでに敵地にいる。あの向こうでは、貴様を殺そうと何者かが待ち構えているのだ」

その時、彼の指差す方向から味方の早馬らしき二騎が駆けてくるのが見えた。ラボアがそれを制止し、報せを聞く。

「カシアスの東の平原で、メデイトリア軍の主力と交戦した第一軍団が敗北致しました！ 軍勢は損害を受け、軍団司のハニアス様は手勢をまとめて後退中です！」

その報告に、ラボアらがざわめいた。だが、ダ・プーが冷静に問い返す。

「では、お前たちが第一報だな。戦闘の状況を説明できるか？」

「敵はメデイトリア軍主力、約三万。イド・ルグスという男が率いていたと聞きます。情報では、寄せ集めの軍勢との事だったので、戦闘が始まると……上手く説明できませんが、我が軍の右翼に落雷の様なものが……。その後、味方は敵に包囲され、その……た、退却を……」

「……要するに、敗走したのか。ハニアスはそれを見て逃げ出した、だな？」

ふたりは、目を伏せて沈黙していた。ダ・プーは何も言わず、彼

らを通してやった。

「閣下、大変な事になったようです……」

帝都を目指して駆け去る二騎を見ながら、ラボアが言う。その言葉に現実感はない。

「……さて、どうするかな？」ダ・プーも、他人事のように呟いた。「味方の兵士が、後退してきます。彼らの為にまず、この砦近辺を固めるべきかと」

「それにも一理あるな。だが、俺たちはカシアスを目指すぞ。急がせる」

視線が交わされ、やがてラボアが騎馬を引きつれて駆け出す。言いたいことは山ほどあった。だが、彼はこの男の決断が覆らぬ事を知っている。そして、自分たちの行動が帝国の命運を左右しかねない事も。

彼が後ろを振り返った。視線の先で、ダ・プーはまだ断崖を見上げ、佇んでいた。

十

十

「やはり、ここに居たな」

ウル・メイノスは、厩舎の先に人影を見つけた。並んで繋がれている馬の一匹に寄り添い、その首に手を廻している。だが、メイノスが彼に近づくにつれ、影と馬の一体感が失われてゆく。ぶる、と馬が鳴いた。

「お邪魔しちまったようだな」

彼の前で足を止めたメイノスが、悪びれずに言った。馬が落ち着きを失い、体を擦っていた。その首を抱き留めたイド・ルグスが、鬣をゆつくりと手でといてやった。

「お……。こいつ、怒ってやがるのか」

何度も地面を蹴る馬を見て、メイノスが下がった。

「この馬は、お前の匂いが嫌いなようだ……」

鬘に絡ませていた手を首から肩に滑らせ、イド・ルグスが呟いた。「おいおい、お前こいつと話せんのかよ……？」呆れたように言う。「……それが出来ればいいんだがな」イド・ルグスが、久々に笑みをこぼす。肩の傷は、明らかに快方へ向かっていた。その表情を見たメイノスが、胸に残していた不安を払拭する。飄々とした態度の裏で安堵を覚える彼に、神々への不信はもうない。

通常、戦場で大きな傷を負った者は、その半数が敗血症で死ぬ。だが、ここメディトリアでは違っていた。過去にこの地を襲った病魔や災害に対し、神託は幾度も下され彼らは救われた。その過程で生み出された多くの知識が、この地を守っていた。王家の薬師が、彼に直々に処方した秘薬もそのひとつだった。

そして、王朝の始祖であるマハ・アルダネスは、その即位にあたって陽神イシンと地神ルフォイを筆頭とする輪神に対し、聖約を取り交わしたとされている。彼らにとって聖約は最も厳格な誓いであり、それを遵守する事によって加護の示現を願うものであった。その文言は、人々にこう伝わっている。

心、義を正し人に和す。命、地に満ちるとも邦を侵さず。
時、久しく流れて永きを知る。我ら、此処に在り。

これが、王家の聖約であった。言葉には、義と和の精神を心の柱とし、メディトリアを彼らの安住の地と定める決意が謳われている。それは、己の運命を知るという事であり、この国における善であった。

彼らは独自の文化と言語を持ち、民族的な善悪感を意識の中に育む。その概念を俯瞰的に見ると、善の原則として『聖神を信じる事』『道徳を守る事』『運命を知る事』の三つが、悪の原則として『敵を滅ぼす事』『無に帰す事』『本質を変える事』の三つがあった。そして、これらの善悪へ聖約に誓われた孤立主義が加わり、彼らの正義は形作られる。

正義とは、道理に基づいた言い分と説明できる。メデイトリアの人々が、さながら遺伝子のように備える善と悪こそが、その道理だった。それは、閉鎖的な環境に生きる彼らの経験が、永い時を経て結晶化したものといえる。この地と関わりを持たぬ者ならば、均衡と安定への深い希求がその根本にある事に気づくかもしれない。

だが、彼らにとつて正義とは即ち正義であり、そういった解釈には無自覚な原理であつた。神託の存在が聖約の正しさを証明する以上、彼らの意識はあくまでその周辺へと帰属しようとする。王家、すなわち聖密院とは、メデイトリアの民にとつて叡智の城砦であると共に、新たな秩序と古き正義が融合する場でもあつた。

「なあ、ユノの事なんだが……おい、口に手えつつこんで大丈夫なのか？」

「歯茎が少し腫れている。馬銜が合つてないな……」

「うおつ、両手かよ。……で、探させてみたがエースーサの辺りにはいないな」

「そうか……。わざわざすまん……」

「さらわれたんじゃないって事は、自分で出てったんだな……」

イド・ルグスは何も答えず、足元の桶で手を洗った。

「……やはり、石女だったのを気にしてたんだろ。後は、お前次第だ」

ユノはイド・ルグスが十年間連れ添った内縁の妻であり、カシアスの戦いの直後から行方が分からなくなっていた。エースーサの外れにあるふたりの棲家に異状はなく、彼女の持ち物が若干無くなっているだけだった。

兵の家の従士に、婚姻は認められていない。一生を王家に捧げ、武錬に明け暮れるためだった。酬いとして生活は保障され、退役後は王家の耕地を死ぬまで借り受けることが出来る。彼らはその土地を小作させ、余生を過ごす。しかし、それは形式の上だけであり、彼らは何らかの形で女性と関わりを持っているのが普通だった。子が儲けられることも当然あり、彼らは父親が退役するとその養子に

なることも出来た。

「……わかった。ウル、すまん」彼は、まだ手を洗っていた。メイノスが、馬の背をしごいてやりながら訊く。

「なあ、こいつは牝馬か？」

「そうだ……」立ち上がり、力なく答えた。

「そっぴや、お前の馬は牝が多いな。何でだ？」

「……牡馬は力強いが、牝には疲れにくい馬が多い。数も揃うし、戦場向きだ」

「なるほどな。……お前の蘊蓄はよく聞くが、その話は初めてだな」馬の交配には、不思議なことが多すぎる……」

「だが、そういうのをバルバル族から学んだんだろ。まだ足りんのか？」

「彼らは迷信深い。だから、物事の深奥まで見極めようとしんない」

「……まさか、お前に迷信深いって言われるとは思ってなかっただろうな、奴らもよ」

口の端を上げたメイノスが、厩舎の壁へ目をやる。彼の皮肉は、もちろん本心からの言葉ではない。この国の信仰には、神託という確固たる証拠があった。それを迷信だとは欠片も思わぬ故に、こんな皮肉を軽々しく言うのである。それを聞いたイド・ルグスは、ゆっくりと息を吐いて言った。

「ウル、知っているだろう。この国には、大規模な外寇が過去にもあった。王祖マ八様が、輪神たちと聖約を交わされて間もない時代のことだ。それを退ける事ができたのは、迷信に頼ったからではないだろう。俺は、抱鉄の原料である焰硝というものを、聖密院で初めて知った。眼で見て手で触れられるものが、まやかしであるはずがない……」

メデイトリアは、数百年前にも今回の戦役のような侵略を受けていた。それは、裏を返せばそういった紛争とこの国は、長らく無縁であったという事でもある。真面目に反論するイド・ルグスを見て、メイノスが少し慌てた。

「別に、疑っちゃいねえつて。……ありや、確かにすげえな」

「王は、それがあある場所と製法を、神々から託されたのだ」

「デロイの連中は、鼻水垂らして怯えてやがったな。奴らですら、それを知らなかった」

「何者かの関与を疑うなら、いったい誰の仕業だというのか？ 答はひとつだ……」

「……答はひとつ、か。確かにそうだな」

厩舎を、風が通り過ぎた。こもった熱気が抜けてゆく。イド・ルグスは、次の馬に取り掛かっていた。柵にもたれかかったメイノスが表情を緩ませ、呟くように訊いた。

「なあ、ブリグンド様の事、どう思うよ？」

「……どう、と言われてもな。それより、今は陛下とお呼びしろ」

「陛下も、大変な時に陛下になっちまったよなあ……」

「確かにそうだが、仕方あるまい」

「お前、心配じゃねえのか……？ まだ、ほんの十五だぜ？」

「俺はその事に、逆に驚かざるを得んな」

また、始まったか……。言葉を聞いたメイノスが、そういう顔をする。彼女の非凡さを、イド・ルグスはよく知っていた。ダナ・ブリグンドは、先王ボルボアンの実子である。神祇官として聖密院の王陵を預かる彼女は、次の王として認められた存在だった。イド・ルグスは先王との謁見の折に、彼女と幾度も言葉を交わしている。その事を聞かされていたメイノスであったが、イド・ルグスのそんな態度に不興を覚える時もあった。無二の友ゆえの嫉れた嫉妬ともいえるが、メイノスのそれはあくまで乾いている。

「ふん、なんか面白くねえぜ……。まあ、父親の資質が豊かなことは、確かだが。何にせよ、ご即位が早すぎるのが良くねえ」

「陛下ご自身の事より、そういつた憂慮こそが問題だな……」

「何だよ、そりゃ。おれも、お前みてえにあれこれ知ってりゃ、心配しねえぜ」

「……やはり、話をするだけでは伝わらんか」

「話じゃなくてよ、直に会えりやあいんだが……」メイノスがいやけた。「陛下は、季節の儀なんかじゃ祭室に籠もって祀式をされるんだよな？ やっぱり、くねくね踊ったりすんのかなあ……。ちようど今頃だと暑さで汗だくになってよ、薄手の装束が透けたりするんだぜ、へへへ……」

兵の家の従士にあるまじき表情で、笑みを浮かべる。イド・ルグスは、彼がひと皮剥けばこんな男であるのを重々承知していた。また、彼らにとって王は生身の人間であり、聖神を畏れるのとは違って親しみもある。だが、メイノスのそれは明らかに不遜であり、言葉を聞き流すイド・ルグスは余りにも心が寒かった。その眼差しを、メイノスは軽く笑って受け流す。

「ははっ、冗談だよ。怖い顔すんな。……だが、お前もよく考えりや出世したよな？」

「俺は、兵の家に騎兵を備えるのに都合のいい存在であっただけだ」イド・ルグスが、真面目くさって答えた。「伝統に逆らって馬術に傾倒していたへそ曲がりだが、運良く先王に重用される事になった。ただ、それだけの事に過ぎん……」

「でもよ、今の陛下もそうされるはずだぜ。そついや、あれからご指図はあつたのか？」

「……何も、お決めになつておられんようだ。デロイの脅威がいつまで続くか、今はそれすら定かではない」

「そうか……。奴ら次第、という事だな。とりあえず、おれは仕事に戻るぜ」

メイノスがそう言い、柵から離れた。そのまま踵を返し、出口に向かう。だが、しばらくすると立ち止まった。

「お、いちおう伝えておくぜ。スタインがよ、おとなしくしてろつて。……それと、ユノの事、あんまり気にするんじゃねえぞ……？」

馬の蹄を見ていたイド・ルグスが、背を向けたまま片手を挙げて応える。その時、厩舎の外から彼らを呼ぶ声が聞こえた。

「何だ……？」そう呟いたメイノスが出口にたどり着く前に、ひと

りの兵士が厩舎に走りこんでくる。兵士は二人を見ると、表情を強張らせながら叫んだ。

「士隊長殿！ 敵が、敵の新たな軍勢が、ノクニイ峠に姿を現しました！」

十

十

大天幕に、五人の士隊長と彼らが従える士長ら全員が集まっていた。彼ら兵の家にはエスーサの街の一角が与えられ、平時はここに営地を置いていた。

「では、伍番隊の状況はどうだ？」シュマロがイド・ルグスを見た。

「楯兵の重傷者は五十三名、死者は三十七名となっています。騎兵の損害はありません」

「騎兵とは五十騎隊と本陣の伝令のことか？」

「ええ」

「ならば、重傷一名だ。言うておくが、師士を任された者が戦闘に加わり、負傷するなど許されんことだ。とにかく、現状の我々の数は……およそ二千五百といった所か……」

「……領家では、楯兵は三分の二、騎兵は二分の一程度の戦力だろう」スタインが言う。

「街の外にいる獵兵らは約二千三百、バルバル騎兵は約千二百が残っている。民兵たちは既に解散しているが、自力で帰った者は七千人だそうだ。カシアスから溢れた重傷者が、ここにも運ばれている」説明したのはオフィルだった。

鉄筆を盛んに動かしていたリユコスが手を止め、眉をしかめながら言った。

「……ということは、民兵抜きで召集すると歩兵は約一万八百、騎兵は約二千七百か。我らの中から騎兵を編制すれば、四百はこれに加わるだろう。その分、歩兵は減るが」

「話にならん……。峠を越えた敵は、少なくとも三万だ。あの兵器、抱鉄も底をついたままか……」オフィルが天孔を見上げる。

「民兵の招集は、おそらく間に合わんぞ。この数で戦うか、それとも……」

そう言つて、スタインが顎鬚をしごいた。天幕の空気が重かった。カシアスの戦いの後、メデイトリアの国軍は敵の追撃を行うことなく解散していた。敵の主力を打ち破り、講和を提案する。これはボルボアン王が国軍を召集した当初からの目論見だった。帝国に送られた使節からの報せを待ちながら、王家と領家は戦力の回復に努め、退却するデロイ軍に対しては偵察だけが行われていた。

「……とにかく、わたくしは院に赴きましょう」イド・ルグスが口を開いた。

「そうだな、行ってくれ。儂たちは兵を集める。他の三人も、それでいいな？」

スタインが彼らを見回す。普段は、軍議となれば理屈を並べ立てる三人だったが、今回はかりは言葉がない。彼らには、王家と領家がそれぞれの城市で守りを固めることが最善と思えた。だがそのような戦い方をするなら、王家の存在する意味も失われる。イド・ルグスと王に結論を委ねることを、認めるしかなかった。

「では」

言葉少なに場を辞すると、イド・ルグスはメイノスを伴って大天幕を出た。

「……おい、この格好でいいのかよ？ おれは入れるのか？」

兵舎を抜け、庭を急ぐ二人は平服だった。

「緊急だ。仕方ない」

「門の前で、また急に脱がされたりしないよな……？」

「大丈夫だ、傷は塞がっている」

「待ってたら、いきなりひん剥かれるのはもう勘弁だぜ……」

「……つべこべ言わずに付いて来い」

「行つて、籠城は避けられんから覚悟を決めろつて言うのか？ 気が進まねえなあ……」

「誰だつて決めかねている。今は、はっきりと言うことが必要だ」

正門の側戸を潜り、通りに出る。午後の食事のため家路を急ぐ人々は、兵の家の慌ただしさにまだ気づいてはいない。こういった何気ない日常こそが、彼らの護るべきものであつた。エースーサに住む人々の暮らしは、ささやかで慎ましい。街の雑踏も、どこか控え目である。まばらな人ごみを抜け、二人は大聖門へと急いだ。

十

十

新王ダナ・ブリグンドが玉座から、跪く二人を見下ろす。先王の喪は完全に明けてはいないが、玉座については継承が済んでいた。蒼の装束に身を包み、傍らには侍従長のジジ・スタコックが侍る。壇の上で、家宰のサンク・タルムが厳しい表情で言つた。

「もう一度言え、イド・ルグス！」

声が響き、彼が答えた。

「再び、国軍を召集すべきです。以前と同じく、カシアスの東に」

「お主、その言葉の意味が判っているのか？ それは何の算段があつての事だ！」

「我々は追い詰められております。ですが、合理的に考えるならこの結論となります」

「敵は三万を超える軍勢なのだぞ？ 如何なる理があるのか説明しろ！」

「峠を越えたのはデロイ第二軍団と聞いています。という事は、軍を率いるのはブルー・ダ・プー。現状で守勢に回るなら王家と三領家の戦力は分断され、城市の包囲に援軍を向かわす事も出来ません。一つひとつ切り崩され、やがてエースーサも陥落しましょう」

「だが、この状態で国軍を集結させ、何ができる？ 敵は第一軍団

を失ったのだ。我々のほかにも外敵を持つ彼らが、いつまでも第二軍団をこの地に留めてはおけまい。それぞれが守りを固め、敵の撤退を待てばよいではないか！」

「院のご情報では、ダ・ブーという将は抜け目のない男だとか。こちらに迎え撃つ構えが無いことを悟れば、なおさらこの地に留まるうとするでしょう。彼らが兵を退いたとしてもメデイトリアの結束が乱れれば、それを足がかりに再び攻めてくる事も考えられます」

「……貴様、何を根拠にその様なことを言うのか？」

「先ほども申し上げた通り、我々が守勢に回ればエスーサの盾といえる三つの領家がまず孤立します。たとえ家都が陥落せずとも被害は甚大、我々には償いようがありません。そうなれば、彼らとの関係に亀裂が生じる可能性もあります」

「しかし、それは仕方あるまい……。何か手立てがあるというのか？」

「国軍を召集するのです。我々の望みは、あくまでこれにしかありません」

「イド・ルグス、貴様……。つまり、敵に破れかぶれの戦を挑むいうことか？」

「タルム殿、我々は追い詰められているのです。どんな行動も苦渋の選択です」

家宰の視線は、刺すようにイド・ルグスへ向けられている。二人の問答が途切れた。背後にいる副官メイノスは、下を向いたまま背中の中の間を感じる。沈黙の中、侍従長が王に近づき耳をそばだてていた。やがて頷いた彼が、唐突に口を開く。

「諸君、陛下のお言葉であるぞ！」

家宰が壇に膝をつく。喪中は侍従が言葉を接ぐのが、王家の作法だった。

「恐れ多くも陛下は、イド・ルグスの言い分を認めておられる。その上で、兵を集める真意を問いたい、と仰せじや。イド・ルグス、答えよ」

意外な成り行きに、メイノスが思わず前を見た。床を見る家宰の眼つきが変わってゆく。再び頭を下げ、メイノスは額を拭いた。

「……お答え致します。我々に、ただ一つだけ利することがあります。先の会戦においてあの兵器が用いられた事を、敵は心に留めているでしょう。もちろん、兵器が尽きているのは周知の通りです」

家宰の頭が上がっていた。言葉が喉まで出かけている、そんな様子だった。

「ですが、彼らはその事を知りません。我々が再びの会戦を望まず、城市で守りを固めるなら、それを悟られてしまいます。しかし、このまま国軍を召集し第二軍団と対峙するなら、敵は兵器の正体もその有無も、掴めぬまま戦うことになります……」

全く動かぬ王の瞳が、彼を見据えていた。メイノスが唾を飲み込んだ。その音すら響いた。ぴんと張った緊張の糸が、目に見えるようだった。

「イド・ルグスよ、その事を利用してデロイとの停戦に持ち込もうというのか？　しかし、それほどの戦力を持つのなら、交渉の意思を持つこと自体を怪しまれよう……」

ダナ・ブリグンドが静かに問いかけた。驚いた家宰が玉座を振り向き、侍従長の目が大きく見開かれる。王の間が静寂に包まれ、イド・ルグスは答えた。

「……現在、陛下は講和の使節をデロイに遣わされ、寛大にも敵国の民を慮って、これ以上の無益な殺戮を避ける構えを明確にしております。例え、我々が如何なる力にしていようと」

淡い空色の光を湛えた王の瞳と、イド・ルグスの灰色の瞳。視線が交わされ、彼女が頷いた。玉座からの目配せを受けた家宰が、慇懃に礼を返す。だが、こちらを向いたその眼には、隠し切れない憤りの色が浮かんでいた。彼が口を開く。

「イド・ルグス……。もし闘うことになれば、どうするつもりか？」
「いざとなれば、敵と刺し違えるほかありません。これまでと同じ

く……」

「……集結の場所は、カシアスの東でよいか？」

「仰せの通り、その場所が妥当です」

イド・ルグスが深々と礼をした。やがて接見は終わり、二人は拝殿を退出した。

十

十

聖密院の中央にある正殿は、慌ただしかった。領家への使いとなる者たちが集まり、そして散ってゆく。すでに決は下され、差配の全ては家宰が負っている。王のいる奥室では、彼の怒声がわずかに聞こえていた。

「陛下。どのような場合でも、王家の作法、しきたりは守って頂かねばなりません」

侍従長スタコックが言った。領家への文書に署名するダナが、手を動かしつつ答えた。

「しきたりも大事だが、メデイトリアの運命が託される決定だったのだ……」

「そんな事は、この私めも承知しております。ですが、王が自らそれを破られる様な事は慎んで頂かねばなりません！」彼の白い口髭が、鼻息で震えた。

「……父上があの方に注目したのは、正しかったようだ。他の士隊長たちも、軍を集める事に消極的だとか。領家の者たちも、今になって我々に見捨てられるのではと心配している？」

「陛下、話を逸らさないで下さいませ……。それには、彼らの行いにも原因があります。先の会戦で、領家の擁する騎兵たちは無様に逃げ出したのですから。負い目があるから、不安になるのです」

「しかし、彼らの期待には応えねばなるまい」
「それは既にしております。充分な戦果を得た我々は、賭けをせずともよいのです」

「……だがこの場合、どちらが賭けであろうか？ デロイの第二軍団は、こちらへ向かっているようだ。我々の出方を窺っているのかもしれない」

「ですが、その正面のカシアスへ出てゆくのは如何なものかと……」
「ジジ。だからこそ、行くのだ。お前は、あの男に国軍を委ねるのが嫌なのか？」

「いえ、そのような事は……。ですが、我ら『王の輩』の意向を汲めぬ場合は、もっと慎重に事を進めていただきたいのです。……家宰であるタルム殿に対しては、特に」

「だが、私にその様な時間はあつたか？」

「陛下、ある無しの問題ではありません！ 例え急ぐとしても、配慮が必要なのです。我々はあなた様の下僕ではなく、分身である事をお忘れになつてはなりません……」

「……ジジ、解っている」

「僭越ながら申し上げますが、ブリグンド様は充分にお役目を果たされております。そして、私めはその事を当然だと思っております。この日の為に、陛下がどれほどの苦難を経られたのか、存じ上げておるのですから……」

ダナは、黙って文書を読んでいた。

「……ただ、王の輩へのご配慮については、ボルボアン様に学んで頂きたいと思います。先王は、この事をよくご存知でした」

「また、説教か……」溜息をつく。そして、自問するように小さく呟いた。「……本当に、そうだろうか？」

「陛下……？」言葉を聞き逃したスタコックが、首を傾げる。

「……いや、何でもない」

獣皮紙の上を、再び筆が走り始めた。

十

十

二騎が、荒れ野を進んでいた。辺りに人の住む様子はなく、第草

の群生の他には獣の気配すらない。彼らの行く先には崖が見え、平屋根の木舎が隠れるようにぽつりとあった。

「だから、お前のやる事がいちばん士隊長連中の神経を逆撫でしてんだよ」

ゆるゆると馬を進ませながら、ウル・メイノスが呆れたように言葉をついた。

「おれにも黙って、国軍を召集しろって急に言い出しやがって……」
イド・ルグスは、前を見つめて黙っている。しばらくして、ようやく口を開いた。

「そういう状況である必要があった……。俺が独断し、暴走したと言える状況が」

「……何だよ？」

「俺がしくじったら、誰も責任を取りきれんからな……」

「まずい事になったら、お前のせいにして事か？　だが、その時は次なんてありやしねえぞ……」

苛々と手綱をさばく。そのままいくらか進むが、我慢しきれずに口を開く。

「それに、何だよあの眼は。あんな冷たい眼でお前を見やがって……」

「ウル、それは誰のことだ。……タルム殿か？」

「あの野郎、今までと態度が違うぜ。お前がいたから勝ったようなもんじゃねえか……」

「それが、師士の役目だ。タルム殿も、そうされているだけである」

「だったら、それなりの態度があるだろ！」

「俺は、普通の事をしたままだ。あの抱鉄だって、用意したのはカイン殿だ」

「だとしても、到底使えない代物だったあの兵器は、お前の協力で完成した。違うか？」

「そうではあるが……。点火帯や衝撃に耐える形状などの解決策は、

あの方が考えた」そう言い、右手の窪地にある抉れた穴を見た。荒地の方々に、そんな痕跡が無数にあった。

「それこそ、奴の役目だろ？ とにかく、お前はボルボアン様に次ぐ働きをした」

「仮にそうだとしても、空しい賞賛だな。我々が束になっても、先王の穴を埋める事は出来ん。言葉に尽くせぬほど、偉大な方だったのだ。倒れられたのが急すぎて、俺たちには悲しむことも、それを理解することも出来ていない……」

「……ふん。ああ、そうかい」諦めたように言い捨てた。

二人は黙って馬を進める。だが視線の先の木舎は、なかなか位置を変えようとしない。

「くそっ……近づきゃしねえ……」

毒づく。荒地には岩や石礫が満ち、馬を駆けさせる事のできる場所は少なかった。街からも遠く離れたこの王領に、近づくものは彼らのほかに誰もいない。

「どうせ、用意できても数発程度だな。話し合いで何とかかなりやいいが」

「……敵が、物分かりのよい事を祈るだけだ」

「神頼みの次は、敵頼みか。言つとくが、無茶なことはすんなよ」

しかし、言葉だけが空しく響いた。二人の前に、荒れ野が続いていた。

「カイン殿。……カイン殿！」

「あ、ああ。これはルグス様。……来られる頃と思ってました」

質素な木綿の貫衣を着た男が、机台に預けていた身体を起こした。声の主を眼で探しながら振り向くと、眩しそうにこちらを見た。

「……カイン殿、眼が真っ赤だぞ。危ないから、無理はしないでくれ」

右手に葦筆、左手に砥石。手元には液炭が滲み、灰色の斑になっている。

「あ、製法を記していたんですよ。さすがに、いま調合なんかしたら死んじゃいますね」

ばさばさの髪をかき上げ、声にならない笑いを漏らす。前歯が一本抜けていた。

「では、陛下は許可されたのか？」

「はい、まずは三人ほど来ます。さっそく焰硝を作らせ……あ、メイノス様？」

「……ようやく気づいたか。お前、本気で無理すんなよ」

メイノスが、カイネの顔を心配そうに覗き込んだ。

「はは、眼がかすんで、おられるのに気づきませんでしたよ……」
声を立てず、くつくつと笑う。カイネの後ろの机台に、びっしりと文字が書き込まれた獣皮紙がうず高く重ねられていた。

「……お前、寝たほうがいいぞ。で、あれは出来てんのか？」

「あ、崖の倉庫に五発ほど用意してあります。ですが、投転試験をしてないので……」

「五発、か……。まあ、無いよりはましだな。検査はこつちでやるぜ。どうせ、岩の上から転がすだけだ」

「ええ、お願いします。では、僕はしばらく……」

そう言い、カイネは目をこすりながら奥の部屋に向かう。

「カイネ殿、ちよっと待ってくれ。空の抱鉄はどこにある？」
唐突に問いかけられ、カイネが振り向く。こちらをじつと見つめた。

「………倉庫にあります。ルグス様、ご武運を」

そう言って奥に消える。彼が最後に見せたのは完全に覚めた眼と、にやりと緩ませた頬だった。

馬が駆けていた。歩兵たちは眼前で見事な方陣となり、その配置を確認する最後の伝令が帰ってくる。左右の騎兵も陣形を完成させ、静かな緊張だけが彼らを支配していた。

正面のなだらかな丘で、赤い軍勢が小ぶりな陣を張っていた。片膝を地に着け、楯を構えて鉾を天に立てる。ずらりと並ぶ彼らの眼が、兜の奥からこちらを見据えていた。

「少ないですな……」ラボアが低い声で呟く。

「……歩兵は一万といったところか。だが、騎馬はたっぷりいるな」「ええ、両翼で二千五百はいるものと思われます」

ダ・プーは戦列の後方、第二軍団の本陣にいた。馬上から、丘をわずかに見上げる。

「くそ、見えんな……」目を凝らす。敵陣のいたる所に積み上げられたそれは、無数の黒い芥子粒の様だった。

「……眼の良い者に確認させましたが、合計で百は超えているそうです」

「そうか……。隠す気は無いようだな、兵たちがびびっちまってる……」

後退する第一軍団の敗残兵から、味方の兵士たちは様々な事を聞いていた。兵器については雷の卵だとか幻術だとか、噂ばかりが駆け巡り、確かな情報は何も無かった。

「……閣下、何騎かこちらに來ます」

見えたのは、たった三騎。あつという間にこちらの戦列の正面までたどり着くと、両腕を挙げて空手である事を示した。ダ・プーが領くと、軍勢の中に彼らの道が作られた。その様子を見ながら、ラボアが耳元で囁く。

「昨晚の早馬の件ですが……」本当に、小さな声だった。

「……解っている。俺を信じろ」ダ・プーが彼らを見ながら、答えた。

辺りの兵士には目もくれず、三騎は静かに馬を進める。本陣の目の前で、彼らが馬を降りた。後ろの二人に目配せすると、先頭のひ

とりがこちらに歩み寄ってくる。

「あの男は、まさか……」ラボアが目を細めた。

ダ・プーが馬から降り、歩み出す。背後にいたラボアと衛兵の四人も下馬し、彼の脇を固めた。六人と一人が歩み寄る。だが、ダ・プーらが足を止めても、その男は無造作に近づいてきた。

「貴殿が軍団司か？」流暢ではないが、慣れたコノス語だった。「ああ、そうだ」ダ・プーがそっけなく答える。そして、この男の急接近に反応した衛兵の肩に手を置き、下がらせる。

「お忙しい様だが、時間を頂けるか？」辺りを見回しながら、男が言う。

「……まずは、名乗ってくれ」ダ・プーが、灰色の瞳を見つめた。

「私は、イド・ルグス。この国を代表して貴殿と話がしたい」ふたりの視線が宙で交わった。静かに答える。

「いいだろう。俺は、第二軍団のブルー・ダ・プーだ」

凍てつき、静まり返った戦場の中央で、二人の会談が始まった。

「簡潔に、こちらの要求を申し上げます」イド・ルグスが穏やかな声で言った。

「我らが王、ダナ・ブリグンド様はこれ以上の殺戮を望んでいません。不戦の約定を結び、速やかに兵を退くことを貴国に望みます」

「……ふむ。たった三人で来るとは、大した命知らずだ。とりあえず、条件を聞いておこうか」少々、呆れたように言う。

「今後、二十年間は互いの領土を不可侵とすること。それだけです」

「領土とは、現状の支配地域という事かな？」ダ・プーの頬が、少し緩む。

「この国では、訳もなく理不尽に踏み荒らした土地を、自らの領土と呼びません」

イド・ルグスの冷たい視線に、彼がわざとらしく驚いた。

「おお、こりゃ済まん。無知を詫びよう。この国ほどの伝統と蘊蓄を持たぬ我らだが、数では君たちを上回ってるようだ。それも詫

びよう」

そう言ってダ・プーは、申し訳なさそうに首をすくめる。イド・ルグスが、答えた。

「……では、閣下はあくまで戦うというお積もりか？」

「確かにここは、君らの国だ。だが、戦には戦のしきたりがある。もしこの戦役を五分の分けとするなら、領土も現状で分けねばならん」

ダ・プーの口元は笑い、その眼には余裕が漂っていた。しかし、イド・ルグスの表情に変化は無い。静かに告げた。

「……なるほど、デロイの正義がどういうものか、よく解りました。私は、閣下を含めて貴国の善良な民を救いに参りました。ですが、無駄足だったようです」

「ほう、それはどういう事かな？」

「そのような条件に、検討の余地はありません。閣下に講和のご意思がないのなら、例え何が起こきようと戦うのみ。では」

イド・ルグスが踵を返す。ダ・プーはそれを見ると、目で合図した。いつの間にか回りこんだラボアが、彼の行く手を遮った。後方で会談を見守っていたプロコとガフが、慌てて鞍に手を伸ばす。だがラボアは、一礼すると笑みを浮かべた。

「お待ちください、イド・ルグス殿。何か、誤解があったようですな？」

さらに、イド・ルグスの後ろから声がかかる。

「おいおい、誰も講和しないなんて言っただけぞ？ エキル人は気が短いな……」

ダ・プーが振り向いたイド・ルグスを手で招きながら、にやりと笑った。

「だが、どうしても呑んで欲しい条件がひとつだけある。お前なら、できる筈だ」

この会談の後、第二軍団から幕僚ら数人がエスーサに送られた。そして、彼らは皇帝の名の記された、正式な国書を携えていた。使者たちは寶殿に通され、家宰はその文書を見るなり、すぐさま王の元に届けた。

「馬鹿な……。早すぎる」抜かりなく用意された同一の二便を前にし、ダナが呟く。

「講和については一時的な停戦の後と想っておりましたが、これは確かに講和の国書。彼らは、準備していたという事です……」

文書には講和の条件と、デロイ帝国皇帝であるルグドネクス三世の名が記されている。あとは署名し、一便を彼らに返すだけだった。条件は二つ。ひとつは、戦役以前の領土に対し、今後二十年間は相互に不可侵であること。もう一つには、こうあった。

『メデイトリアは、友好の証として師士イド・ルグスを帝都デロイに遣わすこと』

コノス語の文面を読む、ダナの表情が変わった。

「これは、つまり人質という事ではないか」

「使者が言うには、昨日の会談にて決まったとの事です」

「……どういうことだ！ イド・ルグスをここに呼べ！」

イド・ルグスはただ一騎、丘に立っていた。やりとげた、という感慨が彼の胸を満たしている。この日を、どれほど長く待ち望んでいただろうか。失われた多くのものを思えば、ためらいは微塵もない。彼が、川の向こうにある王都を見た。

（院の前で、亡き王にこの結末をご報告できなかった事だけが、心残りだ。だが、それは玉座と聖約を継がれる、若き陛下に託そう）

天が、淡い空色に輝いていた。しばらく佇み、イド・ルグスは王都に別れを告げた。

【第三章】 帝国にて

ダ・プーの声が響く。彼がいるのは、石造りの演壇だった。毛織物で出来た円筒帽を被り、金系銀系が施された綾織絹の肩帯で正装している。壇の正面は、石畳の段々が半円状に演壇を取り囲んでいた。その段の上に、同じく着飾った貴族たちとその従者がいた。

「結果的に第二軍団は、ガルバニアの守りに就く事ができた。これは、我ら帝国が非常な僥倖に恵まれていることの証である。以上をもって、諸君らへの報せとする」

咳払いをし、報告を終えた。彼は第二軍団の軍団司として、貴族院にあるこの議廷で戦役についての説明を求められていた。

彼の率いる軍勢が、帝都デロイへ帰還して三日が経っている。そして、カシアスの東で第二軍団がメデイトリア軍と対峙する数日前に、本州ガルバニアとメデイトリアを隔てる属州オシアで民衆の反乱が起きていた。オシアの属治領で起きたその乱に続き、さらに自治領の諸侯らが兵を興すと蜂起は州の全土に拡がった。現在もオシア州は混乱の渦中にあり、この大乱はオシア大蜂起とよばれた。

「ダ・プー殿！ 肝心な事のご説明が足りない様ですが……」

石段の中ほどから、声がかかる。輝くような朱子織の上衣をまとったその男は、コニオ・ネラスといった。

「ふむ……。ネラス殿、それは一体何の事かな？」

解らない、といった風で首を傾げ、ダ・プーが答えた。

「……とぼけるお積もりか。貴方は、あろう事が陛下の名を騙ったのですよ！」

ネラスが叫んだ。彼は、伝統派の貴族だった。デロイには数多くの貴族がいるが、彼ら伝統派は最も古い歴史を持つてゐる。帝国の成立以前、後に皇帝となった僭主ルグドネクスに仕え、都市デロイを起源とする者たちだった。

ダ・プーは、石段の右をちらりと見た。そこにいるのは、議廷の

左翼を占める枢軸貴族たちの集団だった。彼はその無表情な顔に、微かな笑みが見え隠れするのを感じる。そして、正面のネラスに視線を戻すと、不意に怒りがこみあげた。

（この、下衆が。穏健と良識を気取ってはいるが、肝心な所で強きになびく。それが、貴様らのやり方か。伝統派などと、よくぞ名のれたものだ。）

彼ら伝統派の貴族は、ごく少数であり政治力も弱い。主だった官職に就く事もなかった。だが、その発言は威厳を伴い、それゆえ彼らは生き残ってきた。

貴族の中で最も力が強かったのは、枢軸貴族であった。ガルバニアの諸都市を出自とし、僭主ルグドネクスに帰順した彼らは、帝国が成立する過程で貴族として政治に組み込まれた。それ以後デロイの権勢は彼らに集約され、現在も帝国の中枢に君臨している。

「……言っている事の意味が解らん、ネラス殿」

あくまでとぼける。ネラスが叫んだ。

「黙らっしゃい！ 皇帝陛下の認可を待たず、かの国と講和した事は明白ですよ！」

議廷に沈黙がもたらされ、右翼の貴族たちに緊張が走った。緊急時の対応として、今回のように軍団司が外交的判断を独決することは、公に認められている。だが、国書を捏造する行為は許されておらず、ダ・プーがその手順をどう処理したかは想像に難くない。彼にその発行を待つ余裕が無かったとしても、糾弾されるには充分な理由であった。

「ネラス殿に申し上げる！ ダ・プー殿は、英断をもって兵をデロイに戻したのだ。今はその第二軍団が、帝都を守っている。貴殿は、それを忘れたか！」

石段の右翼から声が上がる。ネラスが笑った。

「はは！ だからといって、見逃して良い訳ではありません。この帝国に仕える忠臣ならば、追求して然るべきではないですか？」

「違う！ 真の忠臣なら、あの大蜂起への対応を優先すべきだ

！ この様な事に時間を費やすべきではない、そうではないか？」

別の貴族が同じく右翼から問いかける。辺りを見回す彼に、賛同する声が集まった。右翼を占める彼らは、貴族の中でも平民派とよばれる新興の貴族たちだった。次第に力を増す平民や富民たちと結託する彼らは、劣勢ながらも枢軸貴族と対立していた。第二軍団を率い、兵士たちの支持を受けて軍職の中に確固たる地位を築いたダ・プーは、平民派貴族の実質的な総帥であった。

「……ダ・プー殿！ あの者たちがいくら騒ごうと、白は切り通せませんぞ？」

ネラスの声が朗々と響いた時、演壇の奥で垂幕が不意に開いた。羅紗を捲る二人の近習の奥に、細身の人影があった。議廷がざわめき、空気がうねる。そして、貴族たちが一斉に跪いた。振り向いたダ・プーも膝をつき、にじる様に演壇から降りようとする。

「ダ・プー、其処におれ」

声が響き、その男が幕から出た。年は若く、白い簡素な執務衣を着ていた。

「皇帝陛下……！ 何故、このような所に……」

演台の上で、恐縮するダ・プーが言った。ルグドネクス三世、あるいはネドウホナ神の転生者。それが彼の呼び名だった。

「お前たちが、余の寵臣を虐めていると聞いたのでな……」

そう言つて議廷を見回す。ざわめきが、完全に消えた。

「……お言葉ですが皇帝陛下、この男はデロイ貴族の名誉を汚す者でございます！」

演壇の正面から、ネラスの声が上がる。

「余の名を騙った、その証拠はあるのか？」

無表情な視線を向けた。ネラスは一呼吸だけ返答に窮したが、顔を上げて答えた。

「この者は、講和の国書を持ち帰っているはずです。……皇帝陛下、ご確認ください！」

上ずった声で言う。皇帝が、静かに口を開いた。

「ダ・プーには、ガルバニアを出立する時点で国書を持たせた。ハニアスと同じ様にな」

その言葉に、ネラスが絶句する。それは、これまで第一軍団の事実上の特権であった外交の白紙委任状が、ダ・プーにも託されていた、という事だった。第一軍団の軍職は枢軸貴族たちが独占し、軍団は彼らの私物も同様であった。

居並ぶ貴族たちは押し黙ったまま顔を見合わせ、当惑していた。右翼の平民派ですら動揺の気配が強い。だが、静まり返った議廷で声を上げるものがいた。

「皇帝陛下。そのような事を、我らに何の相談も無くなされた」と仰るのですか？」

左翼の中央で、若い貴族がゆつくりと右手を差し上げた。フォスタル・マクニサス。落ち着いた視線を静かに皇帝へ向ける彼は、枢軸貴族の名門マクニサス家の後継者であった。

「フォスタルか……。答えてやろう。お前を含め、此処の皆が余の寵臣だ。故に余は第一軍団に与えていたものを、第二軍団にも与えた。何か、間違っていたか？」

間違っているとは、言えなかった。皇帝は貴族たちの決定を承認する事が役割であり、実権は無いに等しい。だが、国書の発行は彼の権限で行われていた。もしそれが前例に反しているとしても、結果として第二軍団はオシア大蜂起に巻き込まれる事なく、速やかにガルバニアへ帰還できたのだ。メデイトリアへの侵攻を主導した彼らが、その事を指摘できるはずがなかった。とはいえ、実際にそれが交付されていたかは、推して知るべしといわざるを得ない。

「……フォスタル、今は犠牲を弔うのが先だ。亡くなった将兵に、国葬を施すのだ。大乱への対処は、その後でも遅くはあるまい」

さらにネラスを見遣ると、穏やかに告げた。

「ネラス。お前の祖先は、我が開祖を見出した慧眼の持ち主だ。その目を曇らせるな」

踵を返し、奥に消えてゆく。近習たちが幕を閉じて、議廷は静

まり返っていた。

ダ・プーが不意に立ち上がった。何事も無かったかの様に演壇を降り、涼しげな顔で立ち去る。そして彼は、背後からの視線を断ち切るように議廷から退出した。

十

十

「間抜け共め、あの男一人を追い落とす事も出来んのか……！」
言葉を吐き出した老人の咽喉が、生き物の様に上下する。

「父上、如何致しましょう……？」

フォスタル・マクニサスが、寝台の横で囁いた。老人が、半身を起す。

「皇帝陛下へ意見したのは、お前か？」

「確かに、わたくしが」

握拳だった。膝をつくフォスタルの頬が、みるみる赤くなる。

「愚か者が……！二度と、迂闊な事はするな」

「……申し訳ございません、父上」

老人が、寝台の上で病んだ体を震わせた。彼の名は、ゼノフォス・マクニサス。マクニサス家の現当主で、フォスタルはその養子である。部屋に香の煙がくねっていた。病に蝕まれた身体は、独特の臭いを放つ様になっていた。

「あの若造のやった事は、国令に記された皇帝の権限を逸脱してはおらぬ。この知恵足らずが……」

「……浅はかでした」フォスタルが、床に伏す様に頭を下げる。

「もはや、仲間内で手柄を争っている場合ではない。奴が皇帝と手を組むなら、無視はできぬ。メフメザルとラセルクスの両家へ赴くのだ」

「は、仰せの通りに……」

「儂の生きている内に、奴を必ず潰せ。どんな死より過酷な、恥辱と苦痛を与える。解ったな……？」

言葉を受けたフォスタルは下を向いたまま、口を固く結んでいた。やがて、答えた。

「……………承知、致しました」

ゼノフォスが、頭を下げる息子が無表情に見る。その言葉に含まれる、微かな反発を見逃しはしなかった。拳の鉄槌が振り下ろされた。身体を強張らせる彼に、拳が幾度も打ち込まれる。だが彼は目を閉じ、耐えていた。やがて打ち疲れたゼノフォスが、腕を下ろす。息を荒げる彼の瞼は、吊り上ったままだった。

気が済んだのか、老人が寝台に横たわる。その気配を感じ、フォスタルは両膝を床につけた。そして何も言わず、三脚台の上の濡れ布巾に手を伸ばす。彼は可能な限り、義父の清拭を自らの手で行っていた。

「……………下がれ！」

寝台の上で背を向け、老人が言い放った。フォスタルは再び頭を深く下げ、後ずさる。義父が、なぜ自分を殴打するのか、彼にはよく解っていた。また、彼はなぜ自分が養子なのかもよく解っていた。（あの時、私が代わりに死んでいれば）

これまで幾度も繰り返された思いを胸に、フォスタルは香煙の漂う部屋を後にした。

十

十

ダ・プーは仰向けに長椅子へ倒れこんだまま、足をぶらつかせていた。家具から剥ぎ取った真つ白な覆布を腰に巻きつけ、裸体を露わにしている。既に五十二であったが、脇腹は若々しく締まっていた。壮年になって、ますます鍛えるようになった身体だった。

目の前の脚机に、衣に包まれた若い肢体が横たわっていた。白い尻が淫らにはだけている。ダ・プーが笑みを浮かべた。激しい交合だった。戦役の間に溜まった劣情の泥を吐き出し、全てが軽かった。彼はのそりと起き、その尻をすべて剥くと右手で張った。

ダ・プーが、飛び上がったその姿を見て笑い声を上げる。恥ずかしそうに部屋から出てゆくさまを見て、さらに笑う。余韻に浸りつつ、彼は床に散らばる肌着を身に付けた。

そのまま机に腰を落ち着け、思いにふける。

（……いい。最高だ。誰が何と言おうと、確かだ。世の中には分かってない奴が多すぎる。本当にいいのは、間違いない。男だ）
青空の描かれた天井を見上げた。

（世間の連中は俺を変人扱いするが、そんな事はどうでもいい。所詮、人間は他人を理解できぬ。己に及ぶ事を、ただ記憶しているだけだ。だからこそ、何かを成す意味がある）

右手に柔らかい肌感覚がまだ残っている。だがその手には染みが浮き、皺が刻まれている。溜息をついた。

（もう、若くはないな……。俺に、あとどれほど事が成せるのか……）

ここには彼以外、誰もいない。独りで居ると、自分が老け込むのを感じる。何かに衝き動かされる様に、ダ・プーは足早に部屋を出た。

十

十

大きな窓の外から、街の喧騒が聞こえていた。帝都デロイの下流、港町クテラの一角にある商館の二階。質素な客間に、男が二人通されていた。戸口から、でつぶりとした男が部屋に入ってくる。後ろを向いて手招きをした。

「さあさ、閣下とラボア殿にご挨拶をなさい」

三人の若い女が、部屋の入り口で恥ずかしそうにこちらを見ていた。彼女たちは絹の衣で着飾っていたが、その織りはあまりにも薄かった。不安そうに前で組んだ手の隙間から、隠し切れない体毛が見え隠れしている。

「これは……！ ポマス殿、目立たぬようにと言っておいたはずだ

が……」

慌てて席から立ち上がり、ラボアが言った。

「いえいえ、この者たちは私の娘でございます。口の堅さは保証いたします」

男がでっぷりとした腹を抱えながら、得意げに答える。だがその笑顔は、明らかに別の事を言わんとした。階下から、肉の焼ける匂いが漂ってくる。豪華な食事も用意されている様だった。窓から港を眺めていたダ・プーが、振り向いて言った。

「……ポマス、悪いがあまり時間が無いのだ」

「え、ええ、それは重々承知しております。ですがこの末の娘などは、ようやく月のものを迎えたりしまして……その、ご挨拶も兼ねて閣下とご同席できれば、と……」

「ふむ……。では、後で祝いを届けさせよう。気を遣わせてすまなかつたな」

そう言って手を振った。女たちに一瞥をくれる事もなく、港の船に視線を戻す。

「……あ、いえいえ、とんでもございません。では、ご挨拶につきましては後の機会に」

ポマスが笑顔で娘たちを見た。その瞳に父の勘気を感じた彼女たちが、そそくさと消える。後ろ姿は、全くの裸といってよかった。それを見たラボアが、呆気に取られる。

「あ、食事をせっかく用意致しましたので、下の方たちに召し上がって頂ければ……」

「……それは有り難いな。だが、兵たちは満腹だ。この家の者に食わせてやってくれ」

静かにそう言うと、ダ・プーが首筋を撫でた。苛立ちの仕草だった。

「は、はい。申し訳ございません……」

恐縮しつつ、ポマスが外に控えていた隷民を下がらせると部屋の戸を閉めた。視線を泳がせ、笑顔を作りながらダ・プーの前までく

ると、大きな身体を縮こまらせて揉み手をしだく。ラボアは平静を装いながら、胃がきりきりとするのを感じた。

（こやつ、何も学んでおらん……。下手なへつらいは機嫌を損ねるだけだ）

このポマスは、デロイ商人の典型といえる男だった。恐れられるより慕われる人格で、彼らが組織する商業組合の代表者でもあった。帝国の土地は貴族と富民に支配され、兵役は平民たちがその大部分を担っていた。それに比べ、彼ら商人の地位はあまり高いものではない。帝国の営みに商業の関わる余地は少なく、彼らは治領官が属州から持ち帰る収奪品や、国外からの輸入品をガルバニア州で流通させるのが主な役割だった。また、重要な商路である海は、北方の敵対勢力であるラニスやルムドといった商業都市に支配され、現在には封鎖されている。

その立場の弱さゆえに、枢軸貴族から事あるごとに負担を強いられていた彼らは、現在では平民派の貴族に庇護を求める動きを強めていた。つい数年前にも、軍団が商人に求める糧秣の利ざやを規制する動きがあり、平民派の協力によって阻止されていた。ダ・プーとポマスの関係は、その時からである。

「……商売の具合はどうだ、ポマス？」

ようやくダ・プーから話しかけられ、所在無く手を揉んでいたポマスが笑みを見せた。

「はい、ぼちぼちといった所で。ただ、海路が途絶えておりますので、市場の活気は今ひとつではありませんが……」

窓から見える丸底船の帆は固く括られ、出航の気配はなかった。

ダ・プーが言う。

「麦の値段はどうなっている？」

「北との取引が無くなり品がだぶついてましたが、最近の兵役の需要で低値ながらも安定しております。とはいえ、このまま不作が恒常化するなら相場は上がってゆくでしょう」

「良くない兆候だな……。値が上がり続けるなら、北と取引する意

味が無い。他の産地に対し、価格の優位を保っておく必要がある」

「しかし安値を維持しても、利ざやは北の商人に持ってゆかれてしまいます。取引価格を決めているのは彼らで、底値で買い叩かれるだけです。生産の余剰分を大量に処分する事はできませんが……」

「だが、値段が上がるよりはいい。食料が不足して高値になれば、奴らは法外な値段をふっかけてくる。デロイ全体が干上がってしまうえば、俺たちはまた地獄を見るだろう」

「……確かに、過去にそのような事が何度ありました。ですが、彼ら是对価を求めているだけです。我々はその取引で、生きてゆくことが出来たのです」

「ふん、何が対価だ。海を通じて、この国から富が奪われてゆく。お前たちもその片棒を担いでいる。ポマス、ここらではつきりさせておこう。貴様らは、誰の味方だ？」

その表情とは逆に、彼の目は笑っていない。ポマスは一瞬だけ真顔に戻るが、すぐに白い歯を見せた。

「もちろん、私は閣下のお味方です。我らも北方の商人には、散々痛めつけられてきました。これ以上、帝国の富を彼らに明け渡すような取引をしたくはありません。ですが、商いは私たちの生き方です。今後もそれを行けるなら、どんな協力も惜しみませぬ」

深々と、頭を下げる。頷いたダ・プーを見て、ラボアが窓の覆いを下げた。彼が戸口に立つ薄暗い部屋で、二人の話はいつまでも続いていた。

「まさかお前、あの男に対する認識を改めようなどと、思っていないよな？」

供の兵士を引き連れ、馬で帝都に帰る途上だった。会話の中から出てきた唐突な問いに、ラボアが少し慌てた様子で答える。

「……あ、いえ、そのような事はございません」

「は、お前も解りやすい男だな。あのポマスも用件を聞いて難儀な顔をしつつ、見返りへの期待が透けていた。まったく、ぶくぶく太

りやがって虫唾の走る野郎だ」

首筋をがりがり搔いて、ダ・プーが言い捨てる。

「しかし閣下、彼の言う事が全て建前ではないと思います」

「……ふん、馬鹿らしい。目的の為なら、自分の娘でも裸で差し出すような奴だ。いいか、はっきりと言っておこう。絶対に、あの男を信用するなよ」

「彼が商人だから、ですか……？」

「違う。ああいう男だから商人なのだ。商人にも色々いるが、大抵があの手合いだ」

「……ですが、彼らには彼らの役割があります」

「ああ、確かにある。商人たちは、それを高尚なものだと自負している。だがな、奴らのやる事こそ、最も残酷な暴力なのだ。そして全てを偽り、欺き、のうのうとしてやがる」

ラボアは、黙っていた。確かにそうではあるが、と思う。

「俺たち軍職には誇りがある。敗れた敵に対し、共に生きるに相応しいと認めてやる。それが美德だ。だが、商人にはそれが無い。欠片も無い。それどころか、敗者からどれほど奪ったかを才覚だという。商いの裏でどれほどの血が流されたか、そ知らぬ顔でだ」

この事になると、ダ・プーの弁は熱を帯びる。ガルバニア州にとって唯一の大規模商路は、ノルデア湾を抜けて北の大海へ向かう航路しかなかった。帝国の西は荒れ野と砂漠に、東は海と断崖、南は山脈と溪谷に阻まれていた。だが、湾から北への沿岸にはラニス、ルムド、カールといった海洋都市が居並んでいる。帝国と自らを呼ぶものの、陸の軍を主体とするデロイに海を制する力は無く、この商路は常に彼らの船団の支配を受けていた。

「ルムドやカールの連中をしてみる。領土などには興味は無い、自由に商いがしたいだけだと奴らは言う。だがその圧力に負け、港を開放した国はどうなった？ 流通は独占され、協定を組んだ連中の餌食にされた。あのポマスも、結局はその同類なのだ」

ラボアは、静かに聞いている。言い過ぎている事はダ・プーにも

分かっていたが、それがすぐ口に伝わるほど丸い男でもなかった。
「……だから、せいぜい利用する事だ。手を組んだとしても、信用してはならん」

自分に言い聞かせるように、呟く。だがその瞳には、負い目のような色が微かに滲んでいた。この方も、たまには解りやすい事がある。ラボアはそう思った。

十

十

「プルーは、今日も会堂におけるのじやろうな……」

厨房の机に、食事が用意されていた。昨日の晚餐で出た蟹と川魚の羹の余り汁に、麦の挽き粉を溶かす。平鍋で薄く焼き、同じ鍋で半熟に炒めた鳥卵をそれで包む。焼けた麦粉の香ばしさと濃厚な魚介の味が交じり、舌の上で卵がとろけた。

「じゃが、直に行くのがいいだろうて。お主なら入れてもらえるはずじゃ」

皿を片付けるこの老婆は、エフロ婆という。ダ・プー家の乳母で、れっきとした貴族の一員だった。そうであるにも関わらず、今はこの邸宅に住み居人の世話をしている。

「エフロ様、装いは何がよいでしょうか？」

朝食を終えたイド・ルグスが聞く。ゆったりとした長袖の上衣と足首まである細身の腰履きを身に付け、すっかりデロイ風の平服が馴染んでいた。その風貌に、初々しさはもうない。

だが彼は、心までこの国に沿わせている訳ではなかった。彼が帝国に抱く反感は、控え目にも小さくはない。とはいえ、人質としてデロイに赴く以上、それを捨てる覚悟は出来ていた。老婆が、じつと彼を見る。

「外套を羽織ってゆけ。大丈夫じゃ、堅苦しい所では無いのでない……」

イド・ルグスの誤算は、彼らの態度だった。帝都で彼の身柄を引

き受けたのは、第二軍団である。メデイトリア軍と直接交戦していないせいか、彼の予想に反してその扱いは、あくまで穏やかなものだった。それどころか、メデイトリアの事をさして知りもせず、逆に興味津々という様子すらある。これはイド・ルグスにとって都合の良い事と思えたが、逆の効果もあった。周囲に悪意がない以上、彼もそれを持ち得ないのである。その結果、イド・ルグスは身の周りの者に対し、無意識に気を許し始めていた。それが良いか悪いかは別として、彼の抱く正義は律儀なほど公平であった。

表の戸口に出ると、丁度ダンテが帰ってきた所だった。

「ふう。閣下は、やっぱり大会堂つすね。許しも貰ったんで、早速行きましょうか」

喋りながら編靴の緩みを直し、若々しく笑った。彼は、平民派の富民の子であった。富民たちが貴族との関係を深めるため、その子息を教育や奉公の名目で預けるといふのはよくある事で、エラ二才家の長子である彼もダ・プーの近習として軍団に属していた。

「そうだな。もたもたしてると、また無駄足になってしまう……」

「結構気まぐれですからね、閣下は。今日の大会堂は、賑やかだと思えますよ」

ダンテが門に詰める兵士を一人呼ぶ。三人になった彼らは、丘を下っていった。

この都市の歴史は、帝国成立の以前に遡る。ガルバニア地方に横たわるコロヒス河の流れが三つの丘にぶつかり、大きく迂回する場所ではそれは始まった。これらの丘のうち、流れを直接退ける川上の丘に造られた街が、都市デロイの起源とされる。壁に囲まれた都市は徐々に大きくなり、他の二つの丘を取り込みつつ広がった。また、この丘の周辺がコロヒス河の氾濫を避けられる場所であったため、街の成長はさらに加速した。そして、丘を全て吸収したデロイは防衛力を増すため、城市の北側へ迂回するコロヒス河に放水路を設けた。河が丘にぶつかる箇所から東側へ造られた水路は、再び河に接

続する。この二つの川筋を利用して街は守られ、さらに放水路の水門を使って流量と水位を制御することもできた。これは川下からの荷舟が、安全に航行するための仕組みでもある。

デロイ帝国はこの都市の僭主、ルグドネクス一世によって開かれた。彼はガルバニア地方を統一し、自らを皇帝と称してオシア地方へと侵攻した。帝国の体制は、この事業を通じて完成したといつてよい。彼の死後も、デロイの国土は拡大する一方であった。征服した地域を属州とし、自国への併合を進めると共に、開発を行い資源を収奪する。だが、その過程で皇帝の役割は形骸化し、現在のような社会が帝国に定着する事となった。

そして、このデロイの在り様は、メデイトリアの民が嫌悪するものでもあった。名を帝国と美称し、皇帝の座を新たに設け、国是を覇権主義へと変針する。それは『本質を変える事』であった。支配した地域を併合し、その国の消滅を企む。これは『敵を滅ぼす事』であった。欲に任せて開発を行い、資源の枯渇を恐れない。これは『無に帰す事』であった。この三つは、メデイトリアにおける悪の概念に他ならない。だが、この帝国が持つ温度と熱量の前では、そんな義憤は儚く蒸発してしまうかに思える。

デロイにやってきたイド・ルグスの起居する邸宅は、軍団の丘にあった。帝都デロイにある丘陵は、それぞれ皇帝の丘、貴族の丘、軍団の丘と呼ばれ、その名の通りの使われ方をしている。この三つの丘を結ぶ地区は帝国の谷と呼ばれ、デロイの中枢となる施設が立ち並んでいた。

邸宅は丘の端にあり、下るとすぐに市街へ出た。デロイの街の住人は、東にゆくほど貧しくなる。丘の近くにあるこの区画は旧市街であり、由緒ある富民たちが住んでいた。街を進むと列柱回廊があり、そこを抜けて帝国の谷に入るとすぐに大会堂があった。

この建物はいわば、この国の政を担う貴族と富民たちの集会所である。ここでは常に、さまざまな議論、演説、陳情、接待が繰り広

げられ、買収すら公然と行われている。この帝国の熱気と欲望が渦巻く、実質的な政治の中心だった。

大会堂の中は巨大な広間となっており、天井を支える柱がいたる所にある。それらの柱の巧みな配置が、自然とこの広間をいくつかの空間に隔てていた。それぞれの場所には貴族たちの縄張りがあり、その当主が不在の時も一族の誰かがいるのが普通である。彼らへの面会を求める場合は、まずここを訪ねるのが慣習だった。

「あらら、いないっすね……。どこか、他所に移っちゃったか？」

ダンテに案内されたダ・プーの定位置には、誰もいなかった。辺りを眺めると、柱の向こうに人だかりが出来ているのが僅かに見えた。何事かと近づき、その端に辿り着く。

群集の先に見える壇上に、ダ・プーがいた。彼が声を張り上げた。

「諸君！ 我々は、国の宝といえる多くの人命を失った。弔いは終わったが、残された者の悲しみはこれからだ。我らは帝国の誇りにかけて、挫ける訳にはいかぬ。犠牲を乗り越え、克服してこそ彼らの死は報われるのだ。」

そして今、さらにオシアが失われようとしている。この地を得る為に、如何ほどの苦難と血が必要であったか、我々は思い出さねばならぬ。しかし、どれほど心を燃やそうとも、ひとりの人間の肉体は弱く脆いものだ。だからこそ、我々は団結せねばならぬ。兵を集めねばならぬのだ。今の数では到底足りぬ。兵を集める！ ありつただけだ！

だが、諸君たちも実感しておるだろうが、今どれほど兵を募ろうと平民たちはそれに応じようとせぬ。軍役契約の相場は天井知らずに高騰しておるのに、だ。募兵義務として軍役を請け負った我々には、これ以上兵士となる者がいない。我が一族においても戦えるものは皆、戦場に赴いた。そして多くが死んだ。だが、我々は悲しみを乗り越え、再びこの帝国に属することを誇れるよう立ち上がったのだ。

しかし、彼らは応じようとせぬ！ 何故だ？ 我々は、常に先頭に立って戦ってきた。彼らはそれが自らをも滅ぼすと判っているのに、何故立ち上がらぬ？ 我々と彼らはこれまで共に戦ってきた。そして、それぞれの果たした責任に応じて公平に富を分かち合ってきたのだ。

私は、これが道義に見合うやり方であつたと信じて疑わない。彼らの中からも、賞賛に値する努力を果たした者がこの会堂の仲間入りをした。この場にいる者の多くが、そうして此処にいる。相応しい能力があり、帝国のために働くことを厭わず、充分な責任を全うする者に、我々の門戸は常に開かれているのだ。

だが彼らは応じぬ！ 何故だ？ 我らの暮らしぶりを知らぬのか？ 蔵にたんまりある財宝をすべて奴らに見せてやれ！ どんな頑固者も気を変えるに違いない！」

言葉が終わると共に、さざ波のような笑いが立ちのぼる。だが、会堂を見回すダ・プーの目は全く笑っていないかった。彼の瞳から放たれる視線が、静けさをもたらしした。

しばしの沈黙の後、眼光を細く絞ったダ・プーが澄んだ声で語り始めた。

「残念ながら私の蔵に財宝はないが、最近、彼らをあてにせず傭兵を雇おうという意見をよく聞く。たしかに、それにも一理ある。このまま募兵できぬ状態が続けば、国が滅びるかもしれぬ。手っ取り早く兵を集めるなら、それが最も良い手段だろう。

だが、私に言わせて貰うなら、それこそ国を滅ぼす手段だ。道理をわきまえぬ者の浅慮であり、その様な者はここにいる資格が疑われよう。我々と平民たちは、これまで共に戦ってきた戦友である。そして過去の我々であり、未来の我々でもあるのだ。彼らよりも、ただ金で動く傭兵たちを恃む者は、道義より財を尊ぶ者である。その様な考えを蔓延らせれば、この国の全てが富に支配されるだろう。誰も逃れることは出来ぬ。諸君らは、北のルムドとカーレを知っているはずだ。あの享楽と退廃。奴らの全てが嗜癖し、覆い隠してい

るものを。……そうだ、誰も逃れることなど出来ぬ！」

ダ・プーが呼吸を整える。静寂が支配する空間に、次の言葉が放たれた。

「改めて言っておこう。君たちが所有し、蓄えた財は全く正当なものだ。我々は果たした責任に応じて与えられた治領を拝し、それは将来においても収入をもたらす。また、果たすべき責任に応じて税すらも免除され、私領からの収穫も多い。これらの富が諸君らを養い、さらに平民たちを通じてこの国の兵士を養う。そうして創出された軍が我々を護っているのだ。だからこそ、君らの財は正当である。」

だが、問題がひとつある。我々はこの軍の先頭に立って戦う。その時、たとえ最後の一人になろうとも、我々は死を恐れない。それが一族で国に仕えることを誓い、血脈の絶えぬ限り身分と財産を保証された我々の果たすべき責任だからだ。

しかし、平民たちは違う。彼らは、自分が死ねば妻子や親兄弟が路頭に迷うことを知っている。事実、この度の戦役で一家の柱を喪った多くの家族が、隷民となって生きること余儀なくされた。

つまり、我々が死を恐れず、彼らがそれを恐れるとしても、何を誇ることも恥じることもない。それは、互いの責任を全うするために必要なことなのだ。だが、この当然の違いが今、大きな問題となっているのである。では、この難事を解き明かし対処する、その任を果たすべきは誰か？ 疑う余地は無い。それは我々だ。

はつきりと言おう！ 我々には、これから行われる戦において、彼らの命を保障することは出来ない。ならば、もし彼らがその戦場を危険すぎると確信するなら、私はその場合において彼らの意を汲んでやりたい！ そして、もし我々がそれを約束するのなら、彼らが再び兵士として軍団に所属することを、ためらう事はないと信じる！」

会堂がざわつく。彼の演説を聞いている人々の様子が変わった。こそこそと隣と話す者、辺りの表情を窺う者、腕を組み眉をひそめ

る者、そして何の変化も来たさぬ者。

「ここで私は提案したい。今、我々が担う軍役は、帝国の最終的な決定である民会の投票において、歩兵一人が一票、騎兵一騎が五票として扱われる。だが、この帝国が戦うべき敵を定める決定においてのみ、募兵義務として軍役を担う者でなく、最終的に戦場に赴くものが票を投じることにしてはどうか？」

もし、彼らの判断に不安を覚えるというなら、あの戦役を決定する以前、彼らがそれに賛成してはいなかった事実を思い出して欲しい。そして、あのと票を投じた者の一体誰が、彼らの判断に異論を差し挟むことが出来るというのか、それをよく考えて頂きたいのだ。諸君らの静聴に感謝する。」

唐突にダ・プーが壇上から降りた。だが、この演説の終わりを拍手で迎える者は半数にも満たない。手を叩くのは、平民派の貴族や富民たちだけだった。それ以外の者は、冷やかな表情で自分の縄張りに戻ってゆく。人々に交じった彼は、先ほどまでの聴衆たちとさっそく意見を交換し始める。

イド・ルグスが隣のダンテを見た。兵士としては頼りなさげな彼だったが、政治の事はよく心得ていた。彼の肩が、心なしか震えていた。

「……こ、これ、すげえ政案ですよ……。成立すれば、歴史的な改革になります……」

だがイド・ルグスには、この場の反応がそこまでのものに感じられなかった。

「そうなのか……。しかし、皆はさほどの様子ではないようだ？」

この場に残る者、去る者、それを見るイド・ルグスに、ダンテが答える。

「おれたちも、突然すぎて考えが追いつかないんすよ。枢軸貴族の連中が静かなのは、まずは黙殺する構えだからでしょう。貴族院の票の大半は、奴らが握ってますからね……」

「やはり、彼らには賛成できない案なのか？」

「ええ。軍事に限定されますが、平民の参政権を認めるって事ですから。そして彼らが支持するのは、俺たち平民派です。というか、それ以外の貴族が嫌われてるというか……」

「……なるほど。兵士の募集については、そんなに深刻な状況なのだろうか？」

「うーん……どうですかね。おれたち第二軍団は、損害が無かったんで。最大の犠牲者は、下っ端兵士の平民たちですよ。これまでは勝ってましたが、今は金で釣っても軍役契約する奴は減るでしょう。負けた時に貧乏くじを引くのが誰か、はつきりした訳で……」

「……ダ・プー殿は、自分の一族にも犠牲が出たと言っていたが」「ああ、でも今回の戦役で死んだとは言ってませんでしたよね？

この演説で、自家の犠牲が無かったと思われたくはないですから。貴族はそうでなくても、膨大な死人が出たわけですからね……」

「そうか……。で、ダンテ殿。この政案は、成立の見込みがあるのか？」

「……現状で、奴らが折れるとは思えません。たぶん無理っすね。ですが、閣下は勝ち目の無い勝負はしませんから、何か算段はあるんでしょうかね……。気になりますか？」

イド・ルグスは考え込んだまま、何も言わなかった。

「あー、これってルグス先生にも関係ありますよね？ 平民たちが、先生が率いるメデイトリア軍とまた戦うのに、票を投じるとは思えませんから！」

「先生は止めてくれないか……」ダンテの頭の回転は、見かけより速い。政治以外の事も、よく知っている。軍団よりふさわしい活躍の場があるだろうに、とイド・ルグスは思う。

「……それに、もし戦うなら、私が戻って軍を率いる筈も無い」

「んー、先生は人質じゃないんですよね。これ、まだ信じてもらえませんか？」

「ダンテ殿の言葉は、真意だと思っている。だが、それと私の立場については別の話だ」

「少なくとも、おれは先生の味方ですよ。閣下も悪い様には考えてないと思います」

気づくと、周りには随分と人が増えていた。ダンテがぐるりと見回す。

「……なんか、すげえ人ばかりになってますね。もう、今日は帰りますしょうか」

二人はダ・プーに近づく事を諦め、徐々に密度を増す人の群れから遠ざかった。彼らに課せられていた二十日に一度の報告は、軍団本営で行う事にする。会堂の入り口で待っていた兵士を先に向かわせ、二人は軍団の丘にある第二軍団の営地へ徒歩で向かった。

「ダンテ殿。ルムドとカーレとは、何処の事だ？」

ようやく丘の坂を上り始めた所で、不意にイド・ルグスが聞いた。重い剣を天秤棒のように肩で担ぎ、手をぶらぶらさせながらダンテは答えた。

「ああ、ご存じないですよ。……あのコロヒス河はノルデア湾に流れ込んでるんですが、その北にラニスって都市があります」東の地平へ流れる河を、彼は指差した。

「で、さらにその北にルムドとカーレがありましたね。三つとも独立した商業都市なんですが、湾とその周辺、さらにその北の大海までは奴らが牛耳ってるんですよ」

「それは、国ではないのか……？」

「ええ、国みたいなもんですよ。周辺地域も支配下に収めてます。ですが、彼らの故郷は港と海って事だそうで……。要するに、海洋都市国家って言えばいいですかね」

「……海を見た事が無いから想像するしかないが、とにかくデロイの敵だな？」

「はい、ちよつと前までラニスを包囲してたんですが、あと一歩つて所でルムドとカーレが援軍を送ってきやがって。半年ぐらい戦ってたんですが、結局は停戦になりました」

「そして、第一軍団は次の獲物を求めてメデイトリアへ向かったのか……」

イド・ルグスの表情が重くなる。過去の事とはいえ、憤りは隠せなかった。

「……あの、気を悪くしないで下さい。第二軍団は停戦にも戦役にも反対だったんですが、民会の決定には逆らえませんから」ダンテが、伏し目がちに言う。

「戦役については、枢軸貴族たちが主導しているのか……？」

「そうです……。得られた属州は、まず自治領と属治領で分割統治します。その土地の王侯や諸侯は自治領に封じ、兵役を課します。属治領については、負担している軍役に比例して貴族と富民に分配されます。つまり、治領の大半は枢軸貴族のものになるんです」

「ああ、そうだったな……」この程度の事なら、彼もメデイトリアで既に知っている。

「……これ、前にも説明しましたっけ？ とにかく彼らは、機会があれば領土を奪う事しか考えてません。こうして戦争をしている間に、国内の問題は増える一方で……」

「……ガルバニアの不作や、オシアの荒廃などの事は、私も聞いている」

「ええ、それ以外にも北との物流が途絶えて物価が高騰したり、逆に安値になったりとか……。でも、本州のガルバニアは属州から物が集まりますし、平民たちも兵役に応じたり、農業をすれば一財産稼ぐ事ができます。だから、政治はそれなりに安定していました」

「今までは、か……」

「……これからどうなるか、ちょっとおれには判らないですね」

「ダ・プー殿の改革の可否が、この国の将来を占う事になるな……」

「……そういえば、あの方は妻も子もおられんようだが」

「閣下は、変人って呼ばれてますからね。親族から養子を取ると皆は思ってますが、本人は何とも言いませんし……。それに、第二軍団の要職に一族の者はいないんです」

「まさか、一族以外から後継者を選ぶお積もりなのか。……だが、私がそのような事を詮索するべきではないな」

「……実は、おれの親父とかもそう考えてるみたいで。おれを閣下に預けたのも、そういう計算のようです」

「ふむ……。なるほど」そう答えるイド・ルグスの表情は、少しばかり神妙だった。

「ほんと、馬鹿でしょ？ おれの親父は、偶然に相続した土地で富民になった成り上がり者で……。それで、『お前、頭も回るしダ・ブー様に尻でも見せて、気に入られて来い！』って事です、信じられます……。？」うんざりした顔で言う。

「尻を？ どういう事だ……？」

「あゝ、これは内緒ですよ。遊びの範囲ですけど、閣下は男色の気をお持ちで……」

「遊び……？ そういう事は、よく解らん……」

「メデイトリアに、こういった趣味は無いみたいです。まあ、閣下の事を理解したり期待通りに動かそうなんて事は、無理ですよ。だから、ルグス先生も単純に人質に取られたって、考えない方がいいです」

「……確かに、そうかもしれんな。その辺りをダンテ殿はどう見ている？」

「えゝ……って、そんな事、おれが勝手に言っちゃ駄目ですよ。

先生って、たまに際どいことをさらっと聞きますよね、危ないなあ」

そうこうするうちに、二人は坂の中腹にさしかかっていた。丘の上から聞こえてくる兵士たちの鋭い声が街の喧騒と交じり合い、イド・ルグスは一瞬だけ王都エースサの『兵の家』^{つわもの}に帰ったかのように錯覚する。ゆっくりと振り向いて、そこにある都市を見た。坂から見下ろす街並みは、もはや見慣れぬものとは言えなかった。やがてイド・ルグスは、丘に巻き付くかのような長い坂を再び上り始めた。

十

十

貴族の丘にある邸宅の中庭で、ゼノフォスが怒りに震えていた。今日は体調も良く、食台を庭に出して昼食を取っていたが、帰ってきた息子の言葉が彼の表情を一変させた。

「……両家とも、賛同が得られません。何を言っても態度を保留するだけです」

フォスタルが目を伏せて報告する。ゼノフォスがぬらりと椅子から立ち上がった。

「何故だ……？ 負担軍役の格下げ期限は、もう間近なのだぞ……」

……」

彼ら枢軸貴族は、ある問題を解決する必要があった。貴族も富民も、自らの申告した軍役を果たせぬ場合は、実際に用意できた兵士の数に従って負担軍役が格下げされる。その結果、彼らは持っている票を減らす事になり、さらに非課税の耕作地も狭められる。それは、私領が削られることを意味した。戦役で失った兵士の数を考えると、彼らにとってこの問題の影響は甚大である。

「彼らは、私が提案した格下げ期限を延長する政案によって、支持富民たちが離反するのを恐れています。皇帝が平民派に加担する動きを見せた事も、関係しているようです」

帝国の中心である枢軸貴族は、マクニサス、メフメザル、ラセルクスの各家を頂点とする三つの貴族たちの派閥で構成されていた。だが、貴族は自らを支持する富民を抱き込む事によって権勢を補強するのが常であり、枢軸貴族もその存在を無視できなかった。

しかし、戦役で損害を被ったのは枢軸貴族の兵士が所属する第一軍団であり、彼らの支持富民が兵士を供給していた第三、第四、第五軍団、そして平民派の根城である第二軍団に損害は無い。現状で困っているのは枢軸貴族だけであり、この利己的な政案は支持富民の反感につながる可能性があった。つまり、枢軸貴族が常勝軍である第一軍団を独占し、支持富民を下位の軍団に追いやった事が裏目

に出たのである。もし彼らが雪崩をうって平民派へと転向するなら、
枢軸貴族の権勢も危ういと言えた。

「間抜けどもめ、怖気づいたか！ 儂の言う通りダ・プーを潰しておれば良かったものを……！」ゼノフォスの息が乱れた。歪んだ形相で胸を押さえ、椅子に体を預ける。

「父上……！」座面から落ちる前に、義父の腕を掴んだ。脈を診た後、杯を口へと傾ける。水をひと口飲み、息を吐き出す。ようやく呼吸が整うと、静かに目を開いて言った。

「フォスタル……何としても妥協を引き出せ。急げ、時間が無い」
息子が深く頷く。だが、ゼノフォスの瞳に宿っていた冷静さが、見る見る失せてゆく。

「ダ・プーには、討手を放て。殺すのだ……奴を殺せ……」
懇願するようなその眼を見た。ようやく家人たちが駆けつけてくる。義父を彼らに預けると、彼は憂いを断ち切るように中庭を去った。歩みを止めながら、思う。

（老いている……。確実に、日一日ごとに……）
目を閉じ、頬に手をやる。そこにあった痛みは、すでに消えていた。

十

十

「貴方たちはご存知か？ あの政案を民草に流布したのは、彼なのですぞ！」

大会堂で、ネラスが叫んだ。

「何を言うか！ 枢軸貴族なども、悪辣な根回しをしているではないか？」

富民たちの一人が、反論する。

「はは！ それは彼らに言うことですな！ 私はダ・プー殿のように政を冒涇した事はなく、これが正当な告発であるのは明白です！」
ダ・プーは、自分の縄張りにある寝椅子でうたた寝をしていた。

遠くでもよく響くネラスの声に起こされ、あくびをする。横たわったまま、ラボアを見た。

「まだ、騒いでいるのか……。しつこい奴だ」

「……しばらく向こうへ行ってましたが、また戻ってきたようすな」

ラボアが衝突の向こうの様子を窺う。平民派の一団が、ネラスと議論していた。

「いいですか！ ダ・プー殿こそが、平民たちにご自分の案の事を喧伝し、軍団の募兵を妨げているのです。これは、私には到底看過できません！」

ネラスが、大げさな仕草で声を荒げる。だが、富民たちの視線は冷やかだった。彼は証拠を示すわけでもなく、誰彼なしにそれを語るだけであつた。

「……あ奴、堕ちたな。悲しい事だ。思慮深い伝統派貴族が、また一人減った」

口に入れた葡萄の皮を吐き出して、ダ・プーが呟いた。

「よっぽどの弱みを握られたか、何らかの取引があつたのか……」

様子を確認しながら、ラボアが小さな声で言った。

「ポマスが良い仕事をしてくれたな。もう、募兵に応じようという平民はおらん」

「何処に行つて誰と戦うのか判らない現状では、無理ありませんな。政案が成立するまではこの状況が続くでしょうが、枢軸貴族ではマクニサス家が色々と動いている様です」

「刺客まで使うとは、ゼノフォスも焼きが回つたな。息子が戦死したのを、まだ俺のせいだと思つていらしい。ふん、奴は手柄を焦つて勝手に死んだのだ。俺たちが、命を賭けて助けるなどと思う方が馬鹿だ」

「今のところ、彼らは利害関係の調整に失敗し、分裂しているようです」

「は、下らん。もう勝つた様なものだ」

「皇帝陛下が我々に味方された事も、幸いしたようですね」

「味方……か。やはり、陛下は聡明であらせられる。戦役の結果を見るなり、決断なされた。しかし、その軸足をこちらに移すかどうかは、まだ判らんがな」

低い声で、独り言のようにダ・プーが呟く。ラボアが、神妙な顔で答えた。

「少なくとも、政案については時間の問題かと……」

「……そうだな。だが、念の為に神頼みでもしておくか。イド・ルグスを呼べ。三人で、水門の神殿に参るぞ」

ダ・プーの言葉を聞いて、ラボアが戸惑う。そもそも彼は、イド・ルグスが何故あのように自由な待遇を受けているのか理解できなかった。大した監視もおらず、帝都の大抵の所には出向いてゆける。それより、何故あの男が連れてこられたのだろうか。

だが、ダ・プーという人物を良く知る彼が、それ以上の疑問を抱くことはなかった。護衛の一人に言伝を命じる。彼が振り返ったとき、寝椅子の上のダ・プーは再びうたた寝を始めていた。

「おい、ルグス。お前は、何を願ったんだ？」

不意に、ダ・プーが訊いた。イド・ルグスは、焼かれた供物が河原に運ばれるのを見ていた。余りにも胸襟を開け広げた彼の言葉に対し、イド・ルグスは少々面食った様だった。振り向いて、少し考える。

「申し訳ございません。エキル人に、神々への願いを明らかにする習慣はないのです」

「何だ、吝嗇臭いな。……まあいい。ラボア、お前は何だ？」

楽しげなダ・プーの眼には、まるで仲間とつるむ子供のような輝きがあった。

「私は犠牲となった兵たちの為に、あのカシアスの戦いで死なぬよう願っておきました」

「ふむ……。なるほどな、お前らしい」

感心した様に、ダ・プーが言う。だが、それを聞いたイド・ルグスは難しい表情を作り、やがて遠慮がちに聞いた。

「……あの、ラボア殿。その願いにはどのような意味があるのでしょうか？」

朴訥な質問に、ダ・プーとラボアが顔を見合わせる。ラボアが、眉を寄せて答えた。

「ルグス殿、貴殿はあの戦いの結果をご存知のはず……ですな？」

不思議そうに見つめ合う二人を見て、ダ・プーが笑い出した。

「はは！ そうだな、確かに変だ。戦いは、過去の事なのだからな！」

だが、ダ・プーの言葉を聞いてもラボアは何の事か、掴めていない様子だった。

「ラボア、これは考え方の違いだな。要するに、神の力についての認識だ。俺たちは神が過去すら変えうると考えているが、メデイトリアではそうではない、という事だろう。つまり、神より因果の法則の方が上なのだ。そうだろう？」

「ルグス殿、そうなのですか……？」二人が、イド・ルグスを見た。彼は、黙ってダ・プーの言葉の意味を噛み砕いていた。やがて、

答える。

「過去を変えろという発想そのものが、我々にはありません。聖神は万物を司っておられますが、稀に人界へ手を加えられることもあります。ですが、全ては将来に向けての事となります」

「……ほら、な。詳しい事は知らんが、要するに神でも過去は変えられんらしい」

「ふむ、興味深いですな。ルグス殿、帝都におわすネドウホナ神にとって、信仰の力さえあれば出来ぬことなど無いのです」

イド・ルグスは深く頷いたが、それ以上何も言わなかった。彼らエキル人は、異邦の神などは輪神のいずれかの異名に過ぎない、と考えるのが普通である。だが、彼は二人を不愉快にさせぬよう、あ

くまで理解したように装う。ダ・プーはその下手な芝居を見て取ると、いつもの様に遠慮のない毒を吐いた。

「は、皆で祈ったからといって何が起きる訳でもない。気休め程度だ。そもそも、過去が変わっちまったら俺たちはどうなるんだ？」

「……閣下、余り大きな声で言わないで下さい。飢人たちが居りますので」

「ふん、誰が聞いている。どいつもこいつも、喰うのに必死だぞ」
彼がそう言って笑うと、場に漂うぎこちなさは消えていた。供物が置かれた石台には人々が行列を作り、神官が切り分けた肉片を受け取っていた。飢人たちは、それを口にする前に神殿に祈りを捧げる。こうする事によって、神の力が強まると彼らは考えていた。その様子を見ながら、ダ・プーが言った。

「メデイトリアの自然は、きつと優しいのだな。だが、ガルバナアは違う。昔は平原と河しかなかった。洪水が起きれば河から逃げ、嵐が来れば雷に打たれ、干上がれば飢える。俺たちは集まり、ひとつになって地を耕し、街を造った。だから、神もひとつだ……」

河原に冷たい風がびゅう、と吹いた。濁った空に、冬の入り口が見えていた。額に手をかざし、ダ・プーが河の先を指差す。

「ルグス、見えるか？ 対岸に見えるのが、デロイの水門だ」

視線の先で、巨大な鉄門が半ばまで開いていた。渦巻く河水がその奥へと吸い込まれてゆく。イド・ルグスが、こうして帝都を上流側から見るのは二度目であった。最初の一度は初めてこの街にやって来た時であり、兵士に厳重に取り囲まれた彼がこの門を見ることがなかった。

「あれが……。想像以上に大きい。では、門の向こう側が放水路ですか？」

「そうだ、二百年前に造られた。この河と放水路が、デロイを守っているのだ……」

風に吹かれながら、二人が佇む。

「……ルグス。いずれ、メデイトリアの事を詳しく教えてくれない

か。あの政案が成り立てば、互いの関係は大きく変化する。俺たちは、協力し合えるはずだ」

ダ・プーが目を細めた。さらに言葉を続ける。

「第二軍団は、お前の力を必要としている。我ら平民派貴族と平民たちが、メデイトリアの味方になるだろう。時間はある、ゆっくり考えていい……」

水門に目を向けたダ・プーと、彼を見るイド・ルグス。そして、ラボアの抱いていた疑問がひとつ解けた。だが、それを思う彼の心に、別の疑問が湧いてくる。今回の政案について、いつから思いついていたのか。まさか、ノクニイ峠である早馬を止めた時から。軽い興奮が、彼の背首を抜けた。

身に沁み始めた風が、次第に強さを増す。上衣が翻り、ダ・プーは踵を返した。髪を乱しながらラボアが後に続き、最後まで河を見ていたイド・ルグスも二人を追う。街道に戻ると、ラボアが上機嫌で言った。

「閣下、今日は良い日になりましたな……」

「……そう願おう。時間が、俺たちの味方だ。明日はもっと良い日になる」

街へ帰る彼の歩みは、力に満ちていた。

その後も、軍団の募兵は遅々として進まなかった。ようやく、事態の深刻さが貴族と富民たちに認識され、彼らは焦り始めた。だが、分裂した枢軸貴族に具体的な対抗案は出せず、選択肢は機先を制して出されたダ・プーの案しかなかった。この政案を是認する意見が徐々に大会堂で拡がり、やがて態度を表明していなかった者たちも加わった。そして枢軸貴族の一部が折れると彼らは地滑りのように崩壊し、この議論はあっけなく決着する。

政案は貴族院で国令としての文言を定められ、貴族の投票によって承認を得た。さらに民会で、貴族と富民の投票により最終的に認

可されると、皇帝自らの手で国令が改められるに至った。デロイの人々は、この改革をダ・プーの改革と呼んだ。

十

十

息子の報告に、病床のゼノフォスが小さく頷いた。

「そうか、ついに国令が布告されたか……」

最近は何屋から一歩も出ないが、あの後から状態は少し良くなっていた。黙って息子がもたらす情報を聞き、彼がダ・プーの暗殺に失敗したと報告しても責めはしない。だが、冷静さを取り戻した老人の眼には、常に暗い光が灯っていた。

「……ダ・プーの身边に、イド・ルグスという男がいたな」

ゼノフォスがそう言い、息子を傍に寄らせると耳元でさらに囁く。それを聞く彼の表情が次第に変化し、緊張で身体を強張らせる。その彼を、義父の眼が見下ろしていた。

「フォスタル、その通りに準備を進めろ……」

部屋から出て静かに回廊を進むフォスタルが、血色を取り戻した義父の顔を思い浮かべる。彼には、一時は危篤になりかけた義父の快復が素直に嬉しかった。だが、与えられた命の事を思うと、心がずきりと痛む。権勢を握っていれば、何をしても良いのか。なおさら気分は暗くなる。

彼は、ダ・プーがどれほど自分たちを毛嫌いしているか、知っていた。だが、彼を殺しても何の解決にならない。だから、未熟な刺客を選んで差し向けたのだ。かつては、彼のことを帝国の腐敗に棹差す者だと思っていたが、義父の養子になってから認識は逆転した。そして、唯一の息子を喪う以前の義父は、良識を持ち合わせている数少ない枢軸貴族だった。義父は、それを境に変わってしまった様に思える。もし、お救いできたのなら。あの時、死んだのが私だったなら。罪悪感が、湧き上がってくる。

フォスタルが顔を上げた。感傷を振り切り、いつも身に付けてい

る能面のような表情を取り戻す。その瞳に映っていたのは、義父が宿していたのと同じ光であった。

【第四章】 デロイの夜

棒が、生き物のように動いていた。

馬上のイド・ルグスがそれを振りかぶった次の瞬間、弧が縦に走って兜を叩く。耳を覆いたくなるような音が響き、火花が跳んだ。手元を滑らせ、棒を捌く。再び持ち上がった棒が、今度は横薙ぎに兜を打つ。

「……恐ろしいほど、正確だな」

顎をしごいて、ダ・プーが呟いた。

「確かに。ですが、兜に当てても兵は死にませぬ」

傍にいた大兵長の一人が、耳元で答える。

「馬鹿野郎、あんな風に打たれたら顎が折れるぞ……」

そう囁いたダ・プーが、棒の動きに目を凝らす。長さは約三メートル。先端に鉄が嵌め込まれ、メデイトリアで使われる馬上戦鉾と同じ釣合いに調整されていた。

木杭に固く据え付けられた兜を、馬の側面にとらえて横手に打つ。さらに馬を廻し、背後の兜を叩く。さらに四半転して逆手で、次に正面にとらえて縦に打った。

棒の先端が、生きている様に兜に吸い込まれる。第二軍団の将兵たちがイド・ルグスを遠巻きに取り囲み、声もなく見ていた。彼は両手で棒を捌き、手綱は鞍の上で遊んでいる。それでも、馬は自在に動いた。どういう呼吸か、彼が棒を横へ薙ぐときには馬が首を下げ、危なげ無くそれを避ける。

ひと際強烈な打撃が兜に見舞われた。火花を撒き散らし、一気に潰れる。もはや何の役にも立たなくなったそれを、最後の一撃が吹き飛ばす。下から上への弧が、兜の残骸をはるか彼方に散らした。一回転した棒がイド・ルグスの両手に収まり、ぴたりと静止した。彼が棒を抱えて礼をすると、ダ・プーが真つ先に手を叩き始めた。デロイの常識から掛け離れた芸当を目の当たりにし、取り囲んでい

た兵士たちも剣の柄を打ち鳴らして賞賛する。口々に叫び、兵たちがざわめくと興奮がさらに高まった。

ひとしきり騒いだ後、兵長たちがようやく彼らを静めるとダ・プーが声を響かせた。

「素晴らしい武芸だ。メデイトリアで馬上戦鉾術と呼ぶこの技は、この男が編み出した。そして、我々は思う存分それを学べるのだ。まずは馬術から、我が軍より最高の乗り手を選び、その任を与える。この男の存在により、第二軍団の威光はより高まるであろう！」

ダ・プーの指図でイド・ルグスの前に道が作られた。再び兵士たちがざわめき、騒ぎ始める。彼はその様子に戸惑っていた様だったが、囲みを抜けると馬を駆けさせ、すぐに見えなくなった。

幅はさほどでもないが、長さのある厩舎だった。彼は馬を中へ入れると、馬体の汗を拭いた。鬣に付いた泥を櫛で削りつつ、馬房を見回す。隅々まで清潔に保たれ、悪くない。房に入れて面先を撫で、頭絡を外してやる。

故郷から連れてきたこの馬は、久々の騎乗で昂っているようだった。特に神経の太い馬を選んだつもりだったが、長い間ここに預けたままであったのだ。無理もない、そうイド・ルグスは思った。

馬が静まるのを待つ間、彼の脳裏にこれまでの事が浮かんでは消える。ダ・プーの改革が成し遂げられた後、軍団の再生は早かった。メデイトリア戦役の敗北に対する平民たちの怒りは、改革が貴族たちの楔となって和らいでいる。軍役についての不安も解消され、彼らがこの需要過多の売り手市場を見逃すはずは無かった。さらに、壮年となって半ば引退していた古参兵も、最後の一稼ぎを狙って軍役に応じる。これまで都市で生活していた者や、農民も新兵として加わった。

そして第一軍団への補充兵は増え続け、ついにその定員を回復するに至った。だが、金で釣られた兵士たちの質は当然低く、増え続

ける志願者をさらに受け入れ、軍団を数で強化することによって問題の解決が図られた。その人数はすでに八万人を超え、オシア大蜂起については彼らに掃討の任が与えられる事となった。兵士たちは編制され次第オシア州に送られ、各地の反乱勢力とすでに対峙している。

帝国の熱気を感じながら事態を見守るイド・ルグスは、複雑な感情を抱いていた。すでに彼は、ダ・プーらに協力する事を心に決めている。デロイにおける時の流れは想像以上に速く、いま応じなければ機会を逸するだろう。そうなれば、彼らは二十年後には全てを忘れ、またぞろ故郷へ食指を動かしかねない。だが、この国の事を知るほどに、今の状況が不吉な兆候のように思えた。

彼には、デロイの人々に対し今も馴染めない点があった。帝都は秩序の保たれた場所であり、それは彼の故郷に似ていなくもない。イド・ルグスの違和感は、変化に対する彼らの考え方にあった。帝国では、物事が変わってゆく事を是とする。その可能性が、即ち希望でもあった。いま良い事が最も良い、という思考であり、将来への影響は過小評価される。確かに前向きな姿勢であるが、イド・ルグスの故郷での考え方は逆であった。メデイトリアにおける善行の一つに『古井戸を守る』というものがある。枯れかけた井戸も、埋めなければいずれ水が湧くだろう。さらに『愚か者は、卵を産む鳥を殺す。その次に愚かな者は、卵をまだ産まぬ鳥を殺す。だが、その卵を食べてしまう者こそが最も愚かである』という冗談めいた警句もある。彼らには、過去を捨て、未来から奪う事への警戒感が常にあった。イド・ルグスの不安には、こういった思考が根にある。

そもそも、この国の軍制はどこがおかしいのだ。彼はそう思った。貴族と富民は、所有地の収穫で兵士を賄う事が基本であったが、大抵の場合はそれにより可能な人数を超えて軍役を負担していた。この事を可能にしているのが、属州の治領から毎年得られる税収である。治領は、属州の獲得で生じた属治領を、軍役の負担分に応じて分配したものである。これは、他国の征服に対する報酬であった。

この治領の収入、あるいは借財で可能な限りの軍役を負担すれば、彼らは次の征服でより大きな治領を手に入れるだろう。こうして軍役契約をめぐる市場が成立し、相場は徐々に上昇する。平民はその市場で自らを売ることによって、帝国の富の流れの末端に浴する事ができた。実に良く出来た仕組みだが、これを成立させるために彼らはあることを前提とせざるを得ない。それは、常に新たな征服が供給される事だった。軍団の規模は絶えず人的資源と物的資源の限界に挑み、その増大は次の獲物に対する貪欲な投機を意味する。それは、メデイトリアのいかなる正義からも、遠くかけ離れた思想であつた。

(……この帝国によつて蚕食される大地が、我々の住む世界の正体だというのか)

イド・ルグスが、物思いに沈んだ。

「ルグス殿、閣下と大兵長の方々がお待ちです」

馬の背においていた彼の手が、ぴくりと動く。振り向くとラボアがいた。房を閉じ、二人は厩舎を出る。

「あの棒の具合は、いかがでしたか？」

イド・ルグスが、まだ手に残っている感触を思い出す。

「実物のように、私の手に馴染みました。ラボア殿、無理を言つて申し訳ない……」

木質、長さ、重さ、形、釣合い、全てが事細かく注文されたあの棒を、苦勞して用意したのはラボアであつた。軍団では扱わぬ滑り止めの薬煉を、市場で求めたのも彼である。

「いえいえ、我々が申し出た事ですので……」ラボアが笑顔を見せた。「ですが、小官が思うに、あの棒は先端が少し軽いのではないですか……？」

彼の指摘は、鋭かつた。ラボアは第二軍団で騎兵の中兵長を務め、ダ・プーがその技術を認めて抜擢した男であつた。同じく笑みで彼の言葉を受け、イド・ルグスが言う。

「……ええ、確かに軽く作って頂きました。実物は、もう少し重くなります」

すでにイド・ルグスは、諸々の事柄について明かす事をためらわなかった。一度協力すると決めたからには、彼なりに可能な範囲でそれを貫き通しているのだ。

「ふむ……」ラボアが難しい顔で訊いた。「しかし、何故軽く作ったのですか？」

「軽い方が早く振れます。ただ、それだけの事です」

見せる為の演武だった。返事を聞き、合点したラボアが笑みを取り戻す。だが、その表情はイド・ルグスの次の一言で消え去った。

「……それに、一撃で砕いては演武になりませんから」

さも、当然の事のように言う。共に歩きながら、ラボアは背筋に冷たいものを感じる。イド・ルグスが口をつぐんだ彼の様子に気づき、溶けた鉛のように輝く瞳を向ける。ラボアはこれまでに、灰色という獣じみた色の瞳を見たことは無かった。その煌めきは、荒野に棲む狼の眼そのものであった。また、彼の肌の色はデロイの人々より一段薄く、その事も人の血が通わぬような印象を強めていた。

根の真面目なラボアは、心の奥底で彼を畏れる自分を不甲斐なく感じていた。だが、人間離れたイド・ルグスにも無いと思えるものが、ただ一つあった。欲である。ガルバニア人が様々な徳目で覆い隠しながら、その本性において露わにしているざらざらとした欲望。彼には、それが無かった。メデイトリアの民とは、皆こうなのか。歩きながら、ラボアはあの国で見た景色を思い起こしていた。

二人が丘を登りきると、視界が開ける。林の向こうに天幕がいくつも見えた。

「あそこで、閣下たちがお待ちです。少し遅いですが、昼食を用意しました」

ラボアがその先を指で示すと、イド・ルグスが少し緊張した表情で頷いた。

食台の上は、綺麗に片付いていた。用意された料理は大方が食い尽くされ、ダ・プーと大兵長の六人が談笑していた。立食の後に飲み物と椅子で寛ぐのがデロイ風の食事だった。すでに椅子が出され、イド・ルグスとラボアもその輪に加わっていた。

「つまる所、メデイトリアの戦鉾騎兵に対しては、軽騎兵で戦うのがよいだろう」

大兵長の一人が賛同を求める。他の者たちが額に皺を寄せた。第二軍団に属する彼らはダ・プーの盟友であり、平民派の重鎮とよべる名家の貴族でもあった。

「確かにそうだ。重騎兵でも軽騎兵でも彼らを倒せぬ、となれば、追われれば逃げ、逃げれば追うといった具合に引き回すしかない」

「だが、戦鉾騎兵は我らの軽騎兵より素早いのではないか？ ならば、やられるぞ」

「ふむ……。その場合は、騎兵の装備を外す。槍だけで戦えば、決して劣りはしない」

彼らの議論は、食事の最中から続いていた。イド・ルグスは静かに聞き、彼らの質問に受け答えしていたが、あまり快い話題ではなかった。その内容は、仮にも自国を敵視するものだと思えた。だが、幾多の勢力を味方に引き入れてきた彼らにとって、手強いという事実は喜ばしい事であった。また、この様に脅威を認識することは軍団を強化する口実にもなり、少なくとも彼らの議論には悪意が無い。その意味でイド・ルグスの考えは、誤解といえた。

「では、あの戦鉾騎兵が歩兵と戦うならどうだ？」

彼らの議論は、騎兵同士の戦闘から歩兵に対するものへと飛び火した。イド・ルグスの心配に気づいたラボアは、出来るものなら別の話題へ誘導しようと口を挟むが、ことごとく失敗していた。口数は少ないが、ダ・プーも加わって議論は白熱していた。

「長槍胄兵を出すしかないな。胄兵の槍の長さは八マテロ、戦鉾騎兵は六マテロ。槍ぶすまを作れば、近づけまい」

だが、その意見にダ・プーが割り込んだ。

「待てまで。先ほどの演武で戦鋒は、石突から先端まで六マテロを使いきっておった。だが、胄兵は槍の三分の二を突き出す形だ。つまり、戦鋒の方が長いのではないか？」

意外な指摘に、大兵長たちが沈考する。一人が口を開いた。

「槍を長くするしかないな。あるいは、胄兵も槍の端ぎりぎりを持つか……」

「はは、それでは腕が持つまい。やはり、槍はあと一、二マテロは長い方がよい」

延々とこの調子で議論が続くかと思われたが、不意にイド・ルグスが質問を受ける。

「ルグス殿！ 馬上で遣う戦鋒は、どの程度の長さが限界ですか？」

「……あまり長いと、棒がしなりすぎて振れません。今の六マテロが限度です」

彼も、重要な秘密についてはあくまで隠すつもりであったが、喧々と長引く議論にその気持ちを萎えさせていた。それに、鋒の届く範囲は、馬や自分の姿勢しだいでさらに伸びる。だが、この議論の熱っぽさは、イド・ルグスの見せた芸当がどれほど彼らに衝撃を与えたか、という事を示してもいた。ガルバニアでは、騎兵の持つ槍は歩兵のものより短い。それが常識であり、彼らが重装歩兵を軍の主体とする根拠の一つでもあった。

「やはり、手強いですな……。いや、頼もしいと言うべきですか？」

大兵長たちの笑いと共に、議論の温度が少し下がる。ふと、場が静かになった。

「……そういえば、手強いといえばあの幻術の事も、そうですね」
「おお、一度ルグス殿に聞きたかった。もしよければ、あれについてもお話し頂きたい。今なら、差し障りは御座るまい？」

だが、イド・ルグスは不思議そうな表情で、しばらく考える。

「幻術とは、何の事でしよう……？」

「カシアスの戦いで、不可解な術を使ったであろう」

「あの、黒い首だ。生贄を屠り、首を用意したのではないか？ 我ら第二軍団と対峙した時にも、用意しておっただろう。兵たちが、そう言っておった」

「儼らには見えなんだが、あの時積まれていたのは黒く塗られた首だとか。ガルバニアの南には、そのような風習、文化が多いからな。デイナーリアでは全身を黒く塗って戦い、戦の後は刈り取った首を高く積んだりしておる。それらは、すべて呪^{まじな}いだ」

「そういったものは大抵は虚仮威しだが、実際に効力のある呪いについて、我らは始めて知った。聞かせてくれまいか？」

大兵長たちが、興味深そうにイド・ルグスの顔を見つめた。ようやく彼らが首と呼んでいるものの正体を察し、彼は憤りの色を微かに浮かべる。

（メデイトリアが、彼らにそのように思われているとは……。我らは、蛮族でも呪い師でもない。今後のことを考えれば、事実を理解してもらふ必要があるな……）

出来る限り穏やかに、彼は答えた。

「……あれは、術や呪いではありません。我々は、同胞を生贄に捧げる事もあります。黒く積んであったものは首ではなく、抱鉄という兵器です」

それを聞いて、彼らは顔を見合わせた。すぐに質問が飛ぶ。

「それは、どういう物かな？ 第一軍団の生き残りは、地が裂けて雷が落ちたと言っておったが、それは真か？」

「あの兵器は、騎馬に持たせ敵に投擲するものです。閃光と衝撃を伴って破裂し、周囲のあらゆるものを破壊します。我々は、あれをデイナーリア騎兵に用いました」

「……そんな兵器があるのか……俄かには信じられんが」

場が、静まりかえった。ラボアも含め、皆が半信半疑といった様子である。

「あの時、我らは大量に用意されたそれを見た。何故、我々を滅ぼさなかったのだ？」

真偽を試すような調子で、大兵長が訊く。簡単に信じられる話ではなかった。

「……今となつては隠す必要ありません。兵器は、カシアスの戦いで全て使い切りました。あの時用意したのは、空っぽの鉄の容れ物です。本物の兵器の中には焰硝と呼ばれる薬が詰められ、それは鉱物から作られます」

イド・ルグスの答を聞き、しばらくしてダ・プーが爆笑した。

「ははッ！ 俺たちは、まんまと騙されたわけだ！」

腕組みのまま、破顔する。さらに頭を抱え、正気を失ったかの様にげげらと笑う。だが、そんな彼に慣れているのか、大兵長たちは表情を全く動かさない。その一人が、真剣な眼差しでイド・ルグスに問いかけた。

「その鉱物とは、メデイトリアで採れるのか？ あまり量はない、という事かな？」

「……兵器の数が限られているのは、まだ我々の技術が未熟なためです。また、戦場でこの危険な兵器を扱えるのは、数十騎の訓練された騎兵だけです」

「そういう事だったか……」涙ぐんだダ・プーがそう答え、隣の大兵長が息をついた。

「……ルグス殿は、嘘を言うようなお人ではない。術の謎が、解けたようですな」

彼らは互いに目を合わせ、小さく頷く。その顔は、真剣そのものだった。ラボアが、複雑な表情でこちらを見ている。イド・ルグスが、はっと気づく。

（しまった、言い過ぎたか……。だが、メデイトリアの実情を理解して貰うことは、無駄ではないはずだ。肝心な事を隠してしまえば、彼らも信用すまい。良い機会だった、と思うしかないな……）

その後、大兵長たちがこの件について聞くことはなかった。天幕

の下で、メデイトリアについての彼らの談笑が続いている。イド・ルグスも次第に、それが敵意に基づいたものではない事を理解してゆく。ダ・プーの笑い声が響き、彼もまた、その表情を緩ませた。

十

十

断崖の下で、ゆったりと水が流れていた。メデイトリアの北部を流れるヒメル川の水は、出口の無いヒメル死湖に注ぐと、やがて湖底へ浸みる。その水脈は、カピリノ山系の東端となる峰々の随所から湧き出で、こうしてオシアへと続いていた。

永い時を経て、その流れの一つひとつが谷を地の底まで削り、ギラメラ門の周辺は溪谷と断崖の迷宮となっていた。切り立った崖の側面に、馬と馬がようやくすれ違える程度の道がくり抜かれ、メデイトリアとオシアを繋いでいる。

門は、この崖道が小ぶりな岩山をぐるりと回る所にあつた。岩山は、内部に向けて穴が掘られ、蟻の巣に似た要塞となっている。道は、砦にある石門で二箇所を封じる事ができた。たとえ、百万の軍勢に攻め立てられようと、要塞内部にたつぷりと貯蔵された食料が尽きるまで、この関門が開く事は無いだろう。

男が二人、砦の洞窟の中から崖道を通る従士たちの列を見ていた。普段は輜重で運ぶ荷を背負い、崖を通る彼らに言葉は無かった。兵の家の仲間たちが通り過ぎるのを待つメイノスの手には、汗が握られていた。

「……おい、そんなに緊張するな。お前の様子を見て、兵たちも焦っちゃうぞ」

スタインが、岩壁にもたれて言った。道から顔を背け、メイノスが小さく頷く。

（くそっ、何て行軍だ……。見ているこっちの神経が磨り減っちゃうぜ……）

彼ら王家の従士は、帝国の援軍としてオシアへ向かっていた。こ

の門までは上りが続いており、門の先は緩やかな下りに転じる。このような隘路に行く場合、上りでは先頭付近で兵が詰まり、しばしば事故が起きる。下りでは逆に、遅れまいとする最後尾が危険であった。先頭にいた二人は軍勢の様子を見るため、殿と合流すべく列をやり過ごしてた。

落ち着きの無いメイノスを見て、スタインが笑みを浮かべる。

「まあ、滅多なことは起きりゃしないさ。こうして荷をばらし、担いで運ぶのはいつもやっている。違いは、ここが絶壁で下が川ってことだけだ……」

少し意地悪そうな表情で言う。かつてメイノスが所属していた伍番隊は、士隊長がデロイ帝国の人質になるという異例の事態の後、スタインの指揮する壱番隊に編入されていた。隊の士長であったメイノスは、今はスタインの副官格である。彼が低く呟いた。

「……デロイの連中は、何でおれらを呼んだんですかね？」

「さあな。奴らも、属州の反乱で苦しいって事だろう。確かに、原因の一端はメデイトリアにもある」スタインの口元が笑う。「これで、帝国との関係は軍事同盟に格上げだな。逃す手は無いだろう。儂たちは、オシアで最大限の努力をすりゃあいい。あくまで最大限のな……」

そう言っ、目を閉じる。皮肉めいた口ぶりから、彼にそんな気が微塵もない事は明白だった。彼らが普段は通らぬこの門を経路して選択したのも、反乱軍との鉢合わせを避けるためだった。メイノスが硬い表情で、荒々しい鑿の跡を残した洞窟の天井を見上げる。

「畜生……。この大事な時に、あいつはデロイで何をしてやがるんだ……」

「……そう言うな、メイノス。儂もあの場におれば、同じ事をしただろう」

スタインが目を開き、メイノスを見る。だが、彼は厳しい視線で答えた。

「ですが、人質ならルグス以外でも良かったはずです！ 何も、軍

を指揮したあいつが行く必要なんか無かった。下手したら、殺されちまうんですよ？ いや、奴らはそれが目的かも知れんです！」
とりりとした眼をぐりぐりとこすり、眠気を飛ばしたスタインが言った。

「……儂が思うに、だ。敵の大將は、もつと前向きな理由があつてルグスを選んだのだろう。入門以来つるんでるお前は心配かもしれないが、儂は正直、腹が立つな」

「いや、おれもそう思ってます。まったく、勝手な事をしやがつて……」

「メイノス……。腹が立つというのは、選ばれたのが奴だからだ」
スタインの顔に、静かな苛立ちが見て取れる。メイノスが、それに気づいて口をつぐんだ。イド・ルグスが王に重用される以前から王家の軍を掌握していたのはスタインだった。彼は、士隊長の中では唯一となるイド・ルグスの理解者であつたが、それ故に抱える葛藤もあつた。

「我らがカシアスの戦いで勝てたのは、皆があつさりと奴に命を預ける事ができたからだ。誰の手柄でもない、ルグスはそう思っていただろう。だから奴は、ああした。儂にはもう、どうしてやる事もできん……」

過ぎゆく列へ彼の視線が向けられていた。その眼は、ただ険しいだけではなかった。メイノスの心にも、複雑な感情が鬱積していた。もしかすると、奴はもう帰つてこないのかもしれない。そんな焦燥感の後に、あるいは帝国の熱烈な歓待を受け、鼻の下を伸ばして暮らしているのかもしれない、とも想像してみる。だが、そんな事がありえる筈はない。軍を率い、あれほどのデロイ兵を殺したのだ。いま、彼がどのような境遇であるのかはもちろん、生きているのか死んでいるのか、それすら皆目見当がつかなかった。

メイノスが溜息をついた。押し黙った二人は、列が過ぎるのをただ待つ。溪谷に、従士たちの息づかいと水の音だけが聞こえていた。

「解った。下がれ」

静まりかえった正殿の一室で、炎がゆらゆらと揺れていた。道中の塵に塗れた密使が、王の言葉を受けて退出する。それを見届けると、侍従長ジジ・スタコックが口を開いた。

「陛下、何やら不穏ですな。先日 of 援軍要請と、なにか符号しているのかもしれない」

「……イド・ルグスからの報せは、まだ無いのか？」

「何の音沙汰ありません。デロイ側も、無事の報せを届ける事ぐらいは承知するものと思いますが、彼らの誤解を避けて連絡を絶っているのかもしれない」

「文書のやりとりが、好戦的なデロイ貴族たちの疑いを招かぬようにか……。馬鹿め、無駄な心配をしおって」

「それより陛下、先ほどの報告にはどう返しましょう？」

「あの二人は現状通りだ。情報を集めさせる。どう動くにせよ、確たる証拠が必要だ」

「しかし、なにぶん出所が出所ゆえに……」

「無理なら、我々だけで動くしかないな」

「陛下……。その様な事は、私が断固としてお止め致します」

「……ジジ。厳しい事を言うようだが、お前の反対でどうにかなる問題ではない」

「しかしながら」

「言うな、ジジ。無理は承知している。だが、王家が何の為にあるのか、問われているのだ。我々は、ただ祭祀を執り行っただけの存在ではない」

「ですが……。陛下、どうか王の輩の結束を損なうのはお止めください。そうなれば、出来ることも出来なくなってしまう……」

深々と頭を下げる。そうするしかなかった。侍従長の言葉に、これまでの気概はない。即位の後、彼はこの危機に対応する王を見て少なからず疑問を抱いていた。その行動の端々に、秘められた王の

意思を感じたからである。だが、それが何なのか、そして何故なのか、腑に落ちることは無かった。幼少の頃から彼女に侍従して教え導き、その心に近づけるものと思っていた彼である。だが、解らない。それが迷いとなっていた。

「そうだな……」

呟いたダナは、床机に手を置いて目を閉じる。思案にふける彼女の前で、小さな灯火だけが揺れていた。

十

十

フォスタルが、義父の居間にいた。これまでの首尾と、集めた情報を報告する。それを聞くゼノフォスの顔は、概ね穏やかであった。

「父上、気になる事を聞きました」

フォスタルが、第二軍団の大兵長たちの周辺から手に入れた情報を説明する。それは、メイドトリアが用いた兵器の詳細と、焰硝の存在についてであった。ゼノフォスはそれを聞くと、老人とは思えぬ艶かしい笑みを浮かべる。

「よいぞ、よいぞ。これで、心配事がひとつ消えた。馬鹿めが」

目尻の下がった卑猥な顔で、息子に言う。

「この事を、それぞれの家に伝えよ。誇張する必要は無い。ごく自然に漏らすのだ」

さらに、込み入った指示を二、三ほど息子に伝えたと、彼は満足した様で床についた。それを見て、フォスタルは何か得体の知れない恐怖を感じる。義父は毎日、昼には起きてわずかに食べ、息子の報告があれば指図をして、また寝台に臥せる。敬うべき家長であり、彼はいま自分が行っている事を、真実の孝であると信じて疑わない。だがこれは、あくまでマクニサス家の閉じた世界の正義だった。

改めて義父を見た。骨と皮だけになり、肌は枯れ果て、醜い老斑が全身を覆っている。漂う空気は死臭を孕み始め、典医もすでに快復を見込んではいない。おそらく、彼を支えているのは妄執だけだ

ろう。かつての志は微塵も無いが、その手管だけは老練さに磨きをかけている。この老人が、いま帝国を動かそうとしているのだ。何かに耐えられなくなり、居間を出た。足早に廊下を進みながら、彼は胃の腑が踊るのを感じた。廊下の片隅へ倒れるように這いつくばる。身体を強張らせて何とか耐え、背を丸めて身体を震わせた。その瞬間、先ほどの義父の笑みが脳裏に閃めく。彼の胃の内容物が全て、眼前の床にぶちまけられた。

十

十

「そういえばルグス殿。最近、妙な事を聞きました」
馬場での教練の帰り、ラボアが言う。馬術の伝授は、もちろん彼もその対象となっていた。だが、教わる側も玄人である。イド・ルグスが一通りの技を見せ、その中でも彼らの興味を引いた競馬術が、現在の教題となっていた。

「以前にお伺いしたあの兵器の事が、方々の貴族や富民に広まっている様なのです。我々に緘口令が出されている訳ではないのですが、何か不審なものを感じませんか？」

いくらかやり取りし、イド・ルグスが答えた。

「しかし、私の国の事が誤解なく伝わるなら、それで良いと思います」

彼は、帝国の貴族が二派に分かれて争っている事も、この国がその様な抗争によって形作られた事も知っている。だが、彼はこの対立が、今すぐどうにかなるとは思っていなかった。彼の生まれ育ったメデイトリアでは全てに均衡が成り立ち、常に保たれていた。名も無き民草として兵の家に入門した彼は、いずれ師士の任を解かれ退役し、民草に戻って死ぬのである。それ故に、こういった事にはどうしても反応が薄い。

「ラボア殿、ところであの噂についてですが……」

いま、イド・ルグスが心配しているのは別の事であった。彼はこ

の国の人々に、敵と思われぬよう常々心がけていた。だが最近、年々収穫量を減らす農場で働く隷民や平民たちに『ガルバニアの昨今の不作は、メデイトリアが水に毒を仕込んだ為である』という噂が広まりつつあったのである。

デロイの人々は、南の僻地にあるメデイトリアを漠然と蛮夷の国と置いていたが、実際にどのような国か知る者はいなかった。山脈に囲まれ、鉄資源の豊富なオシア州の上流に位置するため、鉱物資源が豊富にあるだろうと推測する程度である。

しかし、彼らがメデイトリアといえば頭に浮かべる事がひとつあった。薬である。外界との接触が少ないメデイトリアであったが、ほぼ唯一の交易品としてそれは取引されていた。その製法も材料も一切が不明だが、効果は確かであり種類も多かった。王の認可を受けた商人だけが入国を許され、この国が必要とする物品と交換できた。その薬は、似せ物が出回るほど珍重されたが、これについても噂が付いて回っていた。

例えば、『毒として用いれば、何の不審も無く自然死に見せかける事ができる』などといった事がまことしやかに語られ、貴人が夭折した場合はこの薬の存在が陰謀論の火種となる事もあった。だが、そのような用法を知る者が誰もいないのも、事実だった。

街中で話を聞くことは、イド・ルグスにもできる。だが、常に護衛を伴う彼が、正確な情報を得るのは無理だった。状況を聞く彼に対し、ラボアが表情を曇らせながら答えた。

「……確かに、コロヒス河とアクアイアス河の水源地はメデイトリアです。ですが、その様な馬鹿げた噂を信じている者は、わが軍団にはおりません。この事でも気になるのは、やはり情報の出所が不明な点と、時期が最近に限られている点です」

「ふむ……。しかし、これについてはさほど怪しいものではないと思います。貴軍におかれましても、抱鉄については似たような事がありましたので……」

この言葉を聞いたラボアは、内心で舌打ちをした。少なくとも彼

とダ・プーは、あの兵器の正体について、ある程度の事までは正しく推測していたのである。だが、自分たちも少なからずメデイトリアに偏見を持つことは確かであり、彼の勢いも自然と弱まる。

「……あの件につきましては、お恥ずかしい限りです。確かに、ルグス殿の仰る通りなのかもしれませんが、老婆心ながら申し上げました」

あのダ・プーの改革以前、ダ・プー本人が商人と結託して平民に情報を流し、第一軍団の募兵を頓挫させていた。それを知るラボアは、枢軸貴族を中心とする敵対者たちの対抗策を心配していたのである。しかし、それをイド・ルグスに明かす事もできず、控えめにそう言うのが精一杯であった。彼自身、誰が何を企んでいるのか知るわけではない。

「この国の人々に対しては、これから正しい事を知って頂ければと思います。すでに、貴族や富民の方々はメデイトリアに対し興味をお持ちの様ですので、安心しました」

そういう解釈も確かにあるな、とラボアが思う。あの改革に対する枢軸貴族たちの反動が必ずあるものと彼は思っていたが、存外そんな事は起きないのかもしれない。

「ルグス殿、我が国に協力する貴方の名は、今後さらに知られると思います。メデイトリアへの誤解や偏見を一掃する、良い機会となればいいのですが……」

ラボアの言葉に、イド・ルグスが頷いた。そうであって欲しいと思う気持ちは、二人とも同じであった。その真摯な表情を見て、ラボアが思う。

（だが、簡単なことではあるまい。それはルグス殿も承知のはずだが、達成すれば恩賞を得られる訳でもないようだ。この方を支えているのは、一体何なのであろうか……？）

ガルバニアの人々は、常に欲望と恐怖に曝されていた。現在は帝国を号するが、かつては周辺を強敵に囲まれ、自らが耕した沃土を守る事を目的として結束した。今は、才覚さえあれば三代で富民に

なり、百年あれば貴族にのし上げれる。力を得た者はさらに富を求め、限りは無い。それは、すでに彼らの考え方であり、生き方であった。

少し、似ているな……。ラボアはそう思った。自らの仕える主人、ブルー・ダ・プーとイド・ルグス。一見、対称的な二人である。しかし、ダ・プーに嫡子はおらず、それを儲けようもしない。築き上げた彼の名声を、誰が継ぐというのか。イド・ルグスもまた、王の許しを得ぬままこの地へ赴いた。その活躍に、誰が報いるというのか。二人はその能力を振り絞り、そして砂に撒くような事をして、とラボアには思えた。

彼は、しばらく考え込んでいたが、ふと気づいて口を開いた。

「ルグス殿、メデイトリアへ報せを送る許可はすでに得ております。文を認めて頂ければ、いつでもお届けいたしましょう」

「……それは有り難い事です。ですが、今はその必要はありません」帝国全体では、まだメデイトリアに対する偏見や無知に何の変化も無い。この状況で、さらなる憶測を生むような行動は避けるべきだと、彼は考えていた。

用心深く振る舞いながらも、この国に馴染むよう努力するイド・ルグスであったが、最近になつて夢の中でユノを思い出す事がよくあった。何故、あの家を去ったのか。これまで避けていた問いが鎌首をもたげ、答を欲して望郷の念を煽る。だが、彼がここに来たのは故郷を守るためであり、師士としての使命感はその想いをすぐに忘れさせた。

そうこうしている内に、二人は邸宅の前に着く。ラボアは別れを告げ、本営に引き返した。その姿を見ながら、イド・ルグスはいつものように邸宅の門をくぐった。

その後、帝都で編制された第一軍団最後の大隊がオシアに赴き、大蜂起の討伐が始まった。北のキリアでは、ラニスから奪った領土

を第三軍団が守っていたが、停戦中の彼らとの軍事的緊張は高まりつつある。その結果、帝都を守っていた第二軍団と第三軍団の交代が命じられ、キリア戦役はダ・プーが引き継ぐ事になった。

第二軍団の帝都での最後の夜に、壮行会が催された。イド・ルグスも呼ばれ、明け方まで続いていた。これまで、彼らがこの丘に滞在して帝都を守る事は、懐かしい故郷での休息でもあったのだ。しかし、明日はキリアへ向かわねばならない。その任務がどれほど過酷なものになるかは、底が抜けたような彼らの浮かれ騒ぎが、雄弁に物語っていた。

次の日、見送る人々の列は円柱回廊から凱旋門まで続き、彼らそのものが道となっていた。兵士の家族たち、年老いた退役兵たち、デロイの市民たち、ここに居残る仲間たち。丘を下り、帝国の華々しい勝利を記念する柱が並んだ回廊を過ぎる。見送る人々に別れを告げながら凱旋門を出た第二軍団は、長い列となつてそのまま北へ向かった。

イド・ルグスはこの後、帝都で第二軍団の居残り組となつたラボアと数十人の騎兵に騎馬術の伝授を行いつつ、大会堂や市場などへ積極的に足を運んだ。メデイトリアについての偏見を覆すことは簡単ではなかったが、イド・ルグスという男がこのような人と為りである事だけは、デロイの人々に理解されるようになった。

十

十

「じゃあ、こうしたらどうですか？」

邸宅での昼食の後、イド・ルグスはいつもの様にダンテの議論の相手をしていた。椅子の上で茶をすするエフロ婆は、彼の話を全く聞いていないようだった。今日のダンテの題目は、小で大に打ち勝つ方策である。彼は、イド・ルグスの事を勝手に師匠と見込み、こうしてよく議論を挑んでいた。

「この条件だったら、劣勢でも勝てるって事ですよね？」

ダンテの見解を聞き終え、イド・ルグスは息を吐いた。メデイトリアに兵法という概念は無いが、少なくとも彼の経験論とダンテの耳学問は、完全に別の次元にある。イド・ルグスの反駁によってダンテはなす術も無く論破されるが、それでも彼は食い下がった。そういう態度をイド・ルグスは嫌ってないとはいえ、しつこさに辟易する事もある。

「……いいか、戦とは単なる知恵でひっくり返るような高尚なものではない。癪癢を起こし、腕力を振るって暴れるのと同じだ。もしそんな方法があれば、困るのは君たちだろう」

諭すように言う。軍事に関する彼の認識は、全てが素朴である。

だが、それらの内容に誤解は存在しない。その安定した基礎から生み出される応変の思考が、彼の兵法といえた。また、本人にそのつもりは無いものの、イド・ルグスの言葉には帝国への皮肉が含まれ、さすがのダンテも勢いを殺される。ひと呼吸ほど置き、彼が思い切って口を開く。

「でも、カシアスの戦いで先生は、小で大に勝ってますよね？ ダ・ブー閣下も、小で大に挑んでるんです！ それがどういう事なのか、教えてください！ 俺だって、役に立ちたいんです！」

ダンテが、精一杯意気込んだ顔つきでイド・ルグスを見た。だが、まるで締まらない表情だった。口元を緩め、イド・ルグスは成る程そういう事か、と思う。彼が、答えた。

「ふむ……。だが、ダンテ殿なら他にもできる事はあるだろう。軍職にこだわる理由は特にないと思うが、どうか？」

彼らしい、率直な意見だった。それを聞き、ダンテがしゅんとなつて言った。

「……やっぱり、俺は士官に向いてないですかね？」

「それは、私には判らん。だが、軍略や策戦といった小賢しい理屈より重んじるべきものが、きっとあるはずだ。私は、そう信じている……」

「……それって、答になってないっすよ。エフロ様からも、先生がちゃんと教えて下さるように頼んでくださいよ？　これは、第二軍団の為でもあるんですから！」

ダンテには、彼の言葉が単なるはぐらかしにしか聞こえない。だが、イド・ルグスの言葉に嘘はなかった。エフロ婆は、すでに竈の片づけに取り掛かっていた。食台の方をちらと見て、答える。

「ダンテよ。小が大を制したとて、それはたまたまじゃ。その程度、この婆でも解るぞ。そんなものを教わるより、お前はまず神殿に詣でる事から始めるべきであろう」

ダンテが、顔をしかめて頭を掻いた。若者らしく不信心な彼が、普段からエフロ婆にしつこく言われている事だった。昼食の礼を言い、イド・ルグスが席を立つ。厨房を立ち去る彼を、ダンテが追った。その時、扉を叩く音が邸宅に鳴り響いた。

第二軍団本営からの使いだった。ラボアの差し向けた兵士が、手短に言葉を伝えた。

『邸宅で待機せよ。貴殿の安全のために』それだけを言い、使いの兵士は去ろうとする。イド・ルグスが、追いつがって説明を求めた。兵士は、オシア州で何かが起きた、という事を繰り返すだけだった。不穏な様子を感じ、彼が強く問い詰めると意外な答が返ってきた。オシアにメデイトリア軍が駐留中らしい、と。

情報が整理されたら必ず連絡すると約束した兵士は、呆然とする彼の前から去った。ダンテも、兵士と共に本営へ向かう。やがて、邸宅に別の兵士が続報を伝えにきた。

彼が言うには、オシア州にメデイトリア軍がいるのは間違いなく、軍勢は乱の鎮圧の折に第一軍団の要請を受け、援軍としてこの地にやってきたという事である。これについては、故郷と連絡を絶つイド・ルグスはもちろん、第二軍団にも知らされていなかった。

さらに、兵士が告げる。オシアで反乱軍と交戦していた第一軍団から、メデイトリア軍から攻撃を受けた事が報告された、と。イド・

ルグスには、到底信じがたい報せだった。まだ情報を収集している段階ではあるが、メデイトリア軍と交戦した大隊が、確かにそう報告していた。兵士はイド・ルグスに連絡があるまで引き続き待機するよう告げ、最後にこう言った。「何があっても、我々は味方です」

イド・ルグスは言葉を失い、立ち尽くしていた。玄関の広間でエフロ婆と共に、ただ待つしかなかった。だが、彼には確信があった。経緯からみて、オシアにいたメデイトリア軍はおそらく王家の軍だけである。彼らを率いるファー・スタインが、そのように愚かな真似をするはずがない。第一軍団からの報告が、一時的に混乱しているであろう。彼は、そう思っていた。

夕方になり、ダンテが邸宅に戻ってきた。青ざめた顔で、イド・ルグスを見る。

「まずいですよ……。枢軸貴族たちが、先生を審問するって言ってます」

「……ダンテ、その審問とは私も発言できるのか？ オシアからの報告は、おそらく誤報だ。我々にデロイを裏切る理由がない事を、彼らに説明したい」

だが、ダンテは目を閉じ、暗い顔つきで思案していた。そして、厳しい視線をイド・ルグスに向けると、はっきりと言った。

「要するに、これは吊るし上げなんです。枢軸貴族たちはメデイトリアに再び攻め込む好機と見て、待ち構えているでしょう。自分で発言する事はできず、呼ばれた側は圧倒的に不利です。とにかく、審問には行かないで下さい」

「……だが、拒めば余計に疑わしい。私が呼ばれるのは、いつになる？」

「審問には委員の票が三分の二ほど必要で、すぐには無理のはずです。その前に、第二軍団がオシアであった事を調査するので、とにかく先生は待つて下さい」

そう言くと、ダンテは本営へ赴こうとする。その時、ラボア以下

数名が突然邸宅にやって来た。彼らは息を弾ませ、尋常な様子ではない。ラボアが慌ただしく、審問は今夜行われる、という貴族院からの通告を報せる。その場が、しんと静まった。

「……そんな馬鹿な！　じゃあ、準備してたって事じゃないですか！　これは枢軸貴族の罠ですよ！　絶対に、応じては駄目です！」
ダンテが叫んだ。

「だが、すでに審問の期限は今晚に決定されたのだ。応じなければ、明日にも処断される。ルグス殿、今すぐご準備を。万一の場合は、我々がお守りします」

ラボアたちの表情は、これまでになく硬いものだった。第二軍団の留守を預かる彼らに、審問を拒む術は無かった。平民派の貴族たちがイド・ルグスを庇護するとしても、その当主たちの多くがキリア戦役へ赴任しており、今すぐ対応する事は無理であった。もし、第二軍団が彼を匿うなら、平民派の政治的な立場も危くなる。

ダンテとエフロ婆は、最後まで彼が審問へ赴く事に反対していたが、イド・ルグスはラボアの求めに応じた。迷いは無かった。貴族院の建物へ向かう途中、ラボアが言った。

「嫌な予感が当たりました。完全に、我々の力不足です……」

「ラボア殿、これが罠ならオシアでの出来事は虚報だろう」

「ええ、私もそう考えております」

「……我々の事を信じて頂けるとは、有り難い」

「すでに、私の手の者がオシアへ向かっています。事実が明らかになれば、ルグス殿もメデイトリアも我々も、全てがこれまで通りの関係に戻るはず……」

イド・ルグスが、無言で頷く。彼らの頭上で、月が欠けていた。その姿を侵食する影と同じく、闇が帝都を深く呑みこんでいた。

十

十

審問が終わった。イド・ルグスは、邸宅に帰っていた。意外にも

彼に対する質問は、あの兵器についてがその殆どであった。硝煙の原料、製法、産量、運用、その他さまざまな説明が求められ、そして枢軸貴族たちはこう結論づけた。メデイトリアが、その様な兵器を所有する事は極めて危険である、と。

さらに彼らは、現在のメデイトリア軍など恐れるに足らず、と氣勢を上げる。審問はメデイトリアの裏切りへの判断を飛び越え、新たな戦役に対する議論となっていた。イド・ルグスとラボアが、その様子に声を失う。これまでに得られた情報が、彼らの恐怖心を一掃していた。再侵攻の口実を得たからには、先の会戦の報復を行った上で、その兵器を奪う。欲望だけが、枢軸貴族たちを支配していた。

だが、彼らがその様に団結したとしても、ダ・プーの改革がその歯止めとなるはずだった。貴族たちの名誉や欲のためにメデイトリアへ赴き、命知らずの戦士と再び戦うのは平民たちである。審問の後にラボアたちは、オシアで起きた事をまず明らかにし、その後枢軸貴族への巻き返しを行うという方針を確認すると、各地に散っていった。

イド・ルグスは、引き続き邸宅での待機という事になった。皆が寝静まるその夜、異変に気づいたのは彼自身だった。

物音を聞いたイド・ルグスが玄関の扉を開けると、妙な感じがした。水の撥ねる音。滴が落ちている、どこかで。玄関の先に、篝火を灯した見張り台があった。駆け寄った櫓の下で、闇より濃い赤がまだらの渦を巻いている。滴は上からだった。

覗き込んだ見張り台の中では二人の兵士が倒れ、血糊に塗れていた。すでに水分を失って赤黒く変色している。兵士の喉は頸骨までぱっくりと切り裂かれ、傷口の奥に見える白い骨がぬらぬらと輝いていた。

櫓から跳び下り、急いで邸宅の中に向かう。先ほどの妙な感じは、滴の音とは関係ない。この邸宅から、誰の気配も感じられないとい

う、違和感。

踏み込んだ厨場の裏扉は開けられ、その敷居の上にエフロ婆がうずくまっていた。建物の外に出た上半身がどす黒い血糊に沈んでいる。さらにその外には、男が倒れている。ダンテだった。見張りの兵士と同じく、二人とも喉を裂かれていた。

イド・ルグスが、その場に立ち尽くす。瞬きをした。エフロ婆の口元で血泡がぱちんと弾け、黒い飛沫が彼女の頬にへばりついた。彼が目を背けたその時、邸宅の外に音が聞こえた。玄関まで歩いてゆく。開け放たれた扉に辿り着くと、馬車が見えた。すでに近い。四頭立ての馬車が小刻みに跳ねつつ、猛烈な速度でこちらへ向かっている。鼓膜を打つ轟音が彼に迫ってきた。御者台には男が二人。激しい振動に耐え、馬に鞭をくれながら、何度も車体越しに後ろを振り返っている。

馬車が蹄と制動機によつて急停止する。矢が何本も突き立った車体から、一人が跳び下りた。顔を麻布で隠しているが、口からは白い歯が見える。そして、まだ少年のあどけなさが感じられる彼の眼は、笑っていた。

十

十

ダ・プーが野営地の囲みの中で、朱に染まる夕日を見ていた。その方角には、ラニスがある。幕営は露天に設けられ、静けさの中で一日が終わるこの瞬間はダ・プーにとって思索の時間であった。

彼が夕日の先に思いを馳せる。重要なのは、海だ。汲めども尽きぬの富への扉だ。それさえ開けば、帝国の全土がその恩恵に浴するだろう。デロイ帝国が豊かである限り、ガルバニアの繁栄は保障される。領土の獲得に奔走する必要もない。だが、枢軸貴族は属州を拡げて搾り取る事しか頭に無かった。ダ・プーが舌打ちする。あの馬鹿どもが。

彼らは、この考えを認めぬだろう。そんな事をして何になる、領

民や商人どもを勢いづかせるだけではないか。そう言つて、鼻であざ笑うに違いない。だが、この腹立ちも今の彼には快かった。お前たちが愚かである事に、感謝しよう。ダ・プーの頬が緩む。

デロイの行く末が、彼には見えていた。いずれ出会うであろう強敵にその進路は遮られ、膨張を止めた帝国は勢いを失う。自分の足を喰う蛸のように属州を食い潰すが、やがてそれも限界に達する。これまでのやり方だけが、唯一の解決法であるこの国には成す術が無い。すでに、そうなりつつあった。

彼には、野心があつた。この世界の歴史に、自身の名を刻む。大きく、そして深く。帝国の歴史に燦然と輝く、ルグドネクシスの名に負けぬほど。そこまで考えた時、軽い笑いが彼の鼻を抜けた。そりゃ、いくらなんでも無理だな。

だが、ダ・プーは今は好機である事を確信していた。平民派には追い風が吹いている。前回はルムドとカーレの援軍に邪魔をされ、停戦となつた。だが、奴らはもういない。結んだ条約は、どうにもなるだろう。そう思った彼が、ラニスの議員に言われた皮肉を思い出す。民会の議決に従い、ラニスとの停戦交渉を行った場での事だつた。

『盗人猛々しいとは、この事ですな。ダ・プー殿』

デロイ側に有利な条件で、彼らが折れた後の言葉である。なにが、盗人だ。彼の頭に血がのぼる。盗人はお前たちではないか。汗水たらして得た収穫を、ひと山幾らの安値で買われる者の気持ちに貴様らに解るか。飢饉の時は容赦なく値を吊り上げ、市場原理だとほざきやがる。あらゆる手段を使つて流通を独占し、協定を結んで餌食にしやがって。我々は、戦わねばならぬ。さもなくば、いくら開発に力を注ぎ、農場を拡げても奴らの食い物になるだけだ。我らが田舎の農夫以上に豊かになるために、是非とも海が必要なのだ。

のし上がって何が悪い。敵を倒し、豊かになつて何が悪い。お前たちの富も、そうやって築いたのだろう。俺が同じ事をしたとしても、盗人と呼ばれる筋合いなど断じてない。貴様らは、もう終わり

だ。我らの軍門に下るか、滅びるかだけは選ばせてやる。

ダ・プーが、つらつらと乱暴な思索にふける。それは帝国の理論そのものだった。自嘲気味にため息をついた彼の脳裏に、ある言葉が浮かぶ。

『なるほど。デロイの正義がどういうものか、よく解りました』

あれは、誰の言い草だったか。ダ・プーが思い出す。イド・ルグス、あの男だ。彼がぞくりとする。奴は、何としてでも飼っておかねばならん。

「本州よりの使者です、閣下」

幕営に、使いがやって来ていた。農業に詳しい配下の富民を動員し、ガルバニア州全土で行わせていた調査の報告であった。ダ・プーが、彼の言葉を静かに聞く。

現在のガルバニア州においての不作は、土壤に蓄積した塩が原因と考えられる。それが、結論だった。上流となるオシア州の水源はメディトリアにあり、水には鉱物由来の塩類が多く含まれている。その成分は今まで、オシアの森に吸収されていたはずだった。

だが、帝国が必要とする鉄の産出のため、森は破壊されていた。それは治領官たちが領民を酷使し、過剰な生産を行った結果である。すでにオシアの鉄の産出量は下降の一途をたどり、枢軸貴族たちは代替の生産地を探していた。これは、彼らがメディトリアに目を向ける理由の一つでもあった。

その森が無くなった今、雨がオシアの土壤に含まれていた膨大な塩類を洗い流し、ガルバニアに流入しているものと思われた。河水は、彼らがせつせと作った灌漑施設で汲み上げられ、農場に撒かれる。ダ・プーが、その頭をがりがり搔いた。

「くそつ、全く予想していなかった展開だ……。確かに、メディトリアから毒が流れてきているとも言えるな」

彼は、市中で囁かれる噂を皮肉った。だが、全く笑えない事態である。

「何か、対策は無いのか？」

「土地を冠水させ、塩を流し去ることは可能です。ですが、それは河の氾濫が届く低地だけです。ほとんどの農場には適用できません。天水の量が増えれば別ですが……」

かつてのガルバニアでは、河の氾濫を利用した天然の灌漑で農業が成り立っていた。農場の開発は、それ以外の土地を農地として利用するのが目的であったのだ。従って、河の氾濫が農場まで届くはずがない。降水量についても、年々減ってきているのが現状であった。これにはオシアの砂漠化が関係していたが、彼らにその概念はまだ無かった。

「何故、今までこの事に気づかなかったのだ？」

穏やかな声だったが、ダ・プーは苛立ちを隠し切れない。使いの者が答えた。

「私たち一族は、長年農事に携わっています。古い文献に書かれた塩による害の事も研究しておりましたが、私たち以外はそれを信じていなかったのです。ですが、今回の事でそれは証明されました。我々の努力は、ついに報われ」

だが、彼は言葉を止めた。ダ・プーの刺すような視線に気づいたからだった。

「……ふん。例のグルグア人^{グルヴァノス}が遺したという農書か」苦々しげに言う。彼としても、その手の由来不詳な古文書に頼ることは賛成し難い。だが、それが正しいなら話は別である。

「改めて聞くが、グルグア人についてどこまで分かっているのだ？」
「それを語るには、資料が少ないのですが……」そう前置いて、彼が答える。「私は、彼らがこのガルバニアの地から興り、そして我が帝国の領土をこえる広大な地域を支配したと聞いております。高度な技術と文化を持ち、鉄器を初めて兵器に用いたのも彼らだとか。鉄の民とも征服の民ともよばれ、常に集団で暮らしており、定期的に侵略を兼ねた大移動を行っていたそうです。また、我々の住むガルバニアの語源が、彼らの名にあることは間違いありません。つまり、グルグア人こそが我らコノス人の祖先と考えられ、その偉大な

血統を受け継ぐ我々こそが、この地を支配する資格を持った優越民族といえるのです」

「ほう……。興味深いな」だが、高揚の色をふくむ男の声とは対照的に、ダ・プーの眼に熱はなかった。その口元だけが、静かに嗤っている。

「……確かに、閣下もご存知の通り、彼らの事はこの国の史書に記されておりません」男はしゃちほこばった表情のまま、言葉を続けた。「ですが、我ら古学者はグルグア人について、単なる伝説ではなく実在した民族と考え、さらに我々の祖先であるとみなしています。我が家の所有する農書を含め、彼らの手によるものと思われる学術書が無数にあり、その研究は今後さらに進むでしょう。彼らと我々の歴史に断絶があるのは事実ですが、それがいつ頃の事かは定かではありません。また、そういった資料が少ないのは、同時代の記録が残っていないのが原因です。その時期を彼らの活動した年代であると考えると、それはおよそ五百年前に遡るでしょう」

「……つまり、断絶そのものが奴らの仕業という事か。派手に暴れまわって、無茶をしたのかもしれないな。だが、五百年前といえば大昔だ。なぜ、その頃だと分かる？」

「人の言葉は変化します。その進行の度合いを計れば、時間の経過も割り出せます。我々は様々な古文書の年代を測定し、空白の時期を」

「解った、もういい」手を振ってダ・プーが言う。「講釈は、今度にして貰おう。至急、害を取り除く術を探るのだ。この件は、お前たちに任せる」

深々と礼をした使いの者は、足早に立ち去った。額を手のひらで覆うダ・プーが、低く呻いた。今の事態は、帝国の自業自得としかいえない。楽天的な彼も、さすがに堪えたようだった。だが、先ほどの富民のように先見の明を持つ者もいる。良い兆しが、無いわけでもない。そうこう考えている内に、斥候隊を率いる兵長が幕営に姿を見せた。

北方からの報せだった。ルムドとカーレが兵を發し、こちらに向かっている。その数、約三万五千。金で雇われた傭兵の軍団であった。さらに、一万人以上の別部隊も存在していた。この部隊は戦奴を集めた軍勢であり、傭兵軍団の露払いとして合流するものと思われた。合計で、五万近い大軍になるだろう。

ダ・プーは冷静に聞いていたつもりであつたが、その形相を見る兵長は青ざめていた。彼を下がらせ、ダ・プーは再び呻いた。

（なぜだ。なぜ奴らは、俺がいるときに限って出張ってくるのだ……。糞つたれが！）

盾で組まれた衝立を、拳で殴りつける。その一角が、べらべらと崩れた。あまりの怒りに、手の震えが止まらない。彼はここまで自制を失った事に、自分でも驚いていた。腕組みをして、ぐるぐると思考を巡らせる。考え様によつては、手柄の立て所だともいえた。第二軍団は、メデイトリアで敵から逃げて手柄を拾った、と揶揄される事もあつた。そんなことを言う奴らを、見返す好機ではないか。何事も前向きに、だ。彼は自分の頬を叩き、気合を入れた。

さらに、伝令がやって来た。帝都からの報せだった。顔を強張らせた兵士が告げる。

「オシア州にて、第一軍団がメデイトリア軍に攻撃されました。その後、帝都でエフロ様とダンテ・エラニオが何者かに殺害され、イド・ルグスは邸宅より逃亡。目下、行方不明との事です！」

それを聞いたダ・プーは、立ち上がって何かを言おうとする。だが、言葉を出そうとしてもその口をぱくぱくさせるだけだった。する様に椅子に座ると、両手で顔を覆つて動かなくなった。

してやられた。ダ・プーの表情は捻じ曲がつていた。疑う余地は無い。一連の出来事は、枢軸貴族たちの謀略に違いなかった。メデイトリアやイド・ルグスが、その様な事をするはずがない。自分たちの留守を狙つて、この事変を引き起こしたのだ。民衆たちがこれを知り、怒り狂うのが眼に見えるようだった。そうなれば、あの改革も全くの無意味だ。奴らは、易々とメデイトリアに軍団を差し向

ける事ができる。

ガルバニアの不作の件も、そもそもは欲の皮の突っ張った奴らが引き起こした災害ではないか。ルムドとカーレの援軍も、奴らが裏で糸を引いているのかもしれない。まさか、前回の戦役を中断させた援軍も。全身から力が抜ける。

「閣下……！ 閣下！」

椅子から前のめりに倒れた。駆け寄った伝令に助け起こされた彼が、心で呟いた。

（どうしちゃったんだ、この国は……。そして、どうなってしまったのだ、我々は……）

慌てふためく衛兵たちに囲まれながら、彼は呆然と空を見る。赤く燃える夕日が、彼方の山稜に消えようとしてた。

【第五章】 王と孤軍

天幕の外が急に騒がしくなった。早春とはいえ、まだ冷たい空気が吹き込むため入り口には蓋布が張られている。外の衛士の一人が駆け足で戻り、位置に付く気配が感じられた。ダナ・ブリグンドは机の上を手早く片付け、書き仕事で乱れた袖口を調える。そして、外していた指飾りに気づき、素早くそれを指にはめた。

「通せ！」

彼女が、入り口の向こうで仲間の到着を告げる衛士に答えた。従者はすべて出払っている。エースーサで暮らしていた頃、ダナは数多くの王の輩たちに厳重に囲まれ、護られながら暮らしていた。だが、このオシアにある兵の家の営地では、わずかな衛士と数人の従者が従うのみであった。

蓋布を通して符丁を確認する声が、わずかに聞こえる。そして、天幕の入り口に三つの影が落ちた次の瞬間、三人の男が布を割って中に入ってきた。

天幕の中央には、仮の玉座があった。その周りには、高さの違う方机が取り囲むように置かれ、木棚がいくつも載せられている。それぞれの家具には様々な柄の薄織物が掛けられ、王の居場所として最低限の格調を保っていた。辺りには木板冊子や獣皮紙の巻物、鉄筆と葦の筆、液炭壺、蝋、重石と砥石などの文具が乱雑に置かれ、まるで尚書官の砦のような様相を呈している。その正面に、一段低い机を隔てて王と対面できる場所があった。三人は顔を伏せ、そこへ歩み寄る。顔を布で覆った左右の二人が前に出て、片膝をつく。中央の男も膝をついた。

ダナが玉座から立ち上がる。長衣の上にまとう袖なしの旗袍は、華奢な肢体の形を崩す事なく見事に包んでいた。全身に少女のあどけなさを残しながら、眼つきだけは男のように凛々しい。

「陛下、イコフとリユカの両名、任務を終えて帰還致しました」

背の低い男がうやうやしく報告する。

「イコフ、リユカ、よくぞ無事で戻ってくれたな。イコフよ、さぞ困難な役目であつただろうが首尾はどうだ？」

「ご覧の通り、師士殿を連れ戻して参りましたぞ。案の定、枢機貴族たちの良からぬ企みに巻き込まれておつたようですな」

イコフと呼ばれた背の低い男が、面を上げて答えた。

「どうやって、あの邸宅まで辿り着いた？」

「貴族どもの馬車を奪つて軍団の丘へ行つた後、リユカが手綱を握つて邸宅まで突破しましてな。無謀ではありましたが、街には兵士も少なく、運も味方してくれたようで」

「ふむ。今後は、ガルバニアでの任務は厳しくなるであらう……」

「正体を隠して貴族たちの近辺に潜り込むのは、しばらく無理でしょうな。しかし、忍び込む事はできますぞ」

「だが、これ以上の危険は冒せぬ。本日をもつて、お前たち親子の任を解く。二人ともよくやつてくれた。院に戻り、しばらく休め」

イコフは、その言葉を聞くと瞬きもせず王を見返していたが、やがて静かに答えた。

「陛下。いま、自分だけが休む事などできません」

「ブリグンド様、おれもそれは願ひ下げですぞ」リユカも言葉を重ねる。

「デロイのメディトリア討伐は、もはや必定。いま戻るなら、我らは何のために働いてきたのか。それだけは勘弁ですじゃ」二人の表情は真剣だった。

ダナも厳しい目で二人を見つめる。だが、デロイの地で数え切れないほどの危機を共に乗り越えてきた二人は揺るがなかった。やがて、目を閉じたダナが告げた。

「よかるう、当面は私の許で働け。使いつ走りの役目にはなるがな」

「……御意。我ら二人、存分にお使いくだされ」

「使いつ走りだけでなく、何でもこなしますぞ。荒っぽい事なんぞは、特に」

ダナの表情が、やや緩む。「二人ともご苦労だった。下がって安らうがいい」

王に頭を下げたまま、イコフとリュカは音も無く後退する。

「いや、待て。二人は暫くここに居てくれ。イド・ルグス、面を上げる」

ぴたりと止まったイコフとリュカの前で、ひざまずき頭を垂れていたイド・ルグスの体が、ゆっくりと起き上がった。彼は静かに王の顔を拝し、一礼する。わずかの間、ふたりの眼が合った。

「よくぞ戻ってきてくれた、師士イド・ルグスよ。怪我などはしておらぬか？」

「わたくしは無事でございます。陛下、なぜ、ここにおられるのですか……」

低く抑えた、静かな声だった。だが、彼の言葉の隙間には戸惑いが満ちている。

「お前がそう思つのも当然のことだ、事情については私が直に説明しよう。この二人の補足を交えてな……」

ダナが、透き通った声で穏やかに語り始めた。王家に仕える王の輩たちは、聖密院とエスーサの周辺を本拠とする。だが、数は多くないが王領を離れて正体を隠し、見聞きした事を聖密院に知らせる役目の者もいた。彼らは市井に紛れて暮らし、王の命が下ればどんな危険もいとわない。イコフとリュカは先王ムー・ボルボアンに命じられ、ガルバニアへ潜入した。属州から集められた隷民に成りすまして貴族たちへ接近し、荒事をこなす便利屋として使われていたのである。

ダ・プーの改革が成立し、イド・ルグスが帝国との友好に尽力する頃、枢機貴族たちは勢いを失ったかの様に沈黙していた。だが、彼らはマクニサス家を中心に着々と謀略の準備を進めていたのである。イコフらの報告が明らかにしたのは、ダ・プーたち平民派の貴族に対する追い落としと、メデイトリアへの再侵攻の企みであった。しかし、この事はすべて筒抜けという訳ではなく、もたらされた

断片的な情報から推測したものであり、王家は独力で対応するしかなかった。ダナは選抜した王の輩を連れてオシアへ向かうと、駐留していた王家の軍に加わり情報を集めた。

そして冬が過ぎ、やがて春が近づくと、ついにその日がやってきた。第一軍団は、援軍としてオシアに滞在する王家の軍を呼び寄せ、不意打ちをかけて殲滅するはずであった。当然、メデイトリア側から攻撃されたという状況を装うのである。だが、謀略の実行に感づいたダナは軍を返し、彼らの襲撃は失敗する。危うく難を逃れた王家の軍であったが、その裏切りを伝える虚報は帝都に届けられていた。それと同時に、ダナの命がイコフらに下される。イド・ルグスを救出せよ。それが達成されたのは謀略のさなか、あの夜であった。味方であったはずのメデイトリア軍が帝国に叛旗を翻し、審問によって追い詰められたイド・ルグスはデロイ市民を殺害して逃亡する。イコフとリュカは彼を救ったものの、その筋書きが事実として帝国全土に広まるのは、時間の問題であった。

「あの晩は、もう少しで手遅れになるところだったわい」イコフが言った。

これまでの話を、イド・ルグスは静かに聴いていた。

「でも、あの邸宅の奴らは死んでたぜ。貴族の狗どもの仕業だ」リュカの表情が歪む。

「師士殿に事情を説明する手間は省けたが、不憫なことじゃ……」。

邸宅の位置を探るのに手間取っていたら、貴族たちの審問が始まっておつてな。なんとか馬車を奪って丘まで行っただんじゃが……」

「へっ！ あの時、迷ったらイドの旦那はどうなった事か……」
「……おそらく、追われるか捕まるかして無事ではなかったらうな。それは事実じゃ」イコフが言う。「まあ、いろいろあったが、みな生きて帰れてよかったわい……」

言葉には、生々しい感慨がこもっていた。だが、それを聞くイド・ルグスの表情に喜びの色はない。ようやく掴みかけていた祖国の安

泰を突如失い、己に味方する者たちを目の前で殺されたのである。二人に救われ、自身を巻き込んだ事変の正体を知った今も、彼の心は揺れ動いていた。

「イド・ルグスよ、事情について理解できたか」ダナが穏やかに問いかけた。

すでに夕刻になっていた。薄暗い玉座で光が瞬き、燭台に灯が点る。イコフとリュカも、火口を持って天幕内の燭台に灯をつけて廻った。

「イコフ、リュカ。ご苦労だった。下がってよい」話し疲れたダナが玉座に深々と沈みこみ、言った。二人は天幕から出る前に王とイド・ルグスに一礼し、静かに退出した。

香料の混ぜられた蠟燭が燃え、微かに甘い香りが周辺に漂い始めた。

「すぐに夜が来る……。お前も、その木座でくつろぐがいい」

彼の近くに、普段は従者が侍っているであろう腰掛があった。その木目を見つめるイド・ルグスの感情は、すでに起伏を失っていた。重く沈んだ意識の中心にあるのは、乾ききった心象と罪の自覚だけであった。そして、持ち前の冷静さが無慈悲にそれを俯瞰している。イド・ルグスは正面の方机を見据え、居住まいを正すと口を開いた。「陛下。なぜ、御身ひとつも同然の備えでオシアに赴かれましたか。僭越ながら申し上げますが、無茶が過ぎるかと存じます」

「……落ち着いたと思ったら、さっそく諫言か。だが、無茶はお前も同じと思うがな？」

「わたくしの独断については、何の弁明もございません」

そう言って視線を下げた。面構えに、静かな覚悟が見て取れる。

「ふむ……。言っておくが、師士の任は解かぬぞ」そっけなく、ダナが答えた。

言葉を受け、イド・ルグスがぴくりと肩を震わせた。その唇が、固く結ばれる。

「責任を感じるのは、無理もない」空色の瞳が彼を見る。「確かに、

停戦の交渉において勝手な真似をしたな。国事に関わる事について、二度と独断は許さん。だが、お前を処断するなら、王都で安穩としていた私の立場はどうなる？ 本来、外敵と戦うべきは王自身なのだぞ……」

「……陛下。わたくしは、デロイで多くの過ちを犯しました。良かれと思って彼らに協力しましたが、結果的に、それがこの事変の一因となったものと存じます。浅はかにも、彼らのメディトリアへの理解が、やがて誘惑に変ずる事に気づいてなかったのです……」

「奴らに、何を協力した？」

「……彼らには、様々な情報を供しました。わたくしの来歴、メディトリアの輪神について、王家と領家のあらまし、地理や騎兵の能力など。……そして、あの兵器の事です」

「お前がそこまで話したという事は、何か見込みがあつての事だろう？ デロイには、我が国ではなく北方に注目する貴族の一派がいる。あの状況でお前は、帝国内部に味方を作るしかなかった。奴らが再びメディトリアに目を向ける、その日までにな」

この方は、全て見ておられたのか。そう心で呟くイド・ルグスは、驚くと同時に恥ずかしくも思った。故郷に知られる事のない己の働きに、彼は小さな満足を抱いていた。だが、王都からの系は確かに繋がっていたのである。だからこそ、救われたのか。その事を改めて認識する彼は、胸の底に滲んだ感情を言葉に委ねた。

「ですが、わたくしは彼らにもたらしすべき情報を誤つたのです……。結果的に、それが枢軸貴族たちに再度の侵攻を決断させる材料となりました。いま思えば余りにも軽率であり、全てはわたくしの思い上がりか招いた事です。重ね重ねの過失とこの短慮は、正義に照らして断罪されねばなりません……」

「つまり、どうにも処分されねば気が済まぬという事か？」

「この事は、わたくしの気分の問題ではありません。当然の処遇であり、咎を欠けば王家の美善を損ないます。今後、陛下の差配の妨げとなりましょう」

「……望む者へそれを与えても、罰にならぬ。これ以上の訴えは、耳障りだ」

二人の視線が交差し、天幕に冷たい空気が流れる。思わずその眼差しに厳しさを漂わせたイド・ルグスへ、次の言葉が浴びせられた。「我々は、戦場にある。お前が居らぬでは、話にならん」

それを聞いたイド・ルグスが、表情を一変させた。

「陛下……！ まさか、このまま帝国と戦われるというのですか？」
「ほう、まさかとはどういう事だ？ デロイ軍は、すでに我らと対峙しているのだぞ」

「しかし、帝国はわが国への態度を、いまだ明らかにはしておりません！」

それを聞くダナの眼差しが、軽く笑いを含んだ。イド・ルグスは、言葉を続ける。

「ならば、デロイに対し平和裏に関係を修復できる事も、充分に考えられます」

「ふん、それはあり得んな」ダナが、意見を遮った。「この乱を制圧するまで、帝国は表立って我々と敵対はせぬだろう。だが、その後どうなるかは判るはずだ。どうやらお前は、少しばかりデロイに長居しすぎたようだ……」

王の皮肉を聞いて、イド・ルグスが言葉に詰まった。目を閉じ、冷静に考えてみる。

（確かに、そんなのかもしれない。私はこの期に及んで、まだダ・プーたちの言葉にすがっているのではないか。帝国を支配するのは枢軸貴族であり、討伐の口実は充分にあるのだ。だが、戦うとしても今の状況で何ができるのか……）

「……私に考えがある。まずは、それを行う」ダナが、それを読んだかの様に言った。「お前は営地内で謹慎しておれ。今回の件についての処分は、以上だ」

玉座を見上げたイド・ルグスが、硬い顔で頭を下げる。命令とあらば、抗う術は無い。また、そう命じられた以上、今すぐ戦うとい

う事ではなさそうだった。強い不服を感じながらも、いくらか安堵する。ダナが、穏やかに問いかけた。

「ひとつ、聞きたい事がある……」

視線を受け、イド・ルグスは言葉を待った。

「我々は、デロイに勝てるだろうか？」

しばしの静寂の後、彼が答える。

「陛下。わたくしは兵の家のひとりとして、故郷を守る為にわが身を捧げております。いつ何時であろうと、玉座の僕として馬を駆り、鉾を振るう事を厭いはしません。ですが、わたくしがいかに力を尽くせど、たった一人の力に過ぎません。王の権威をもってすれば、我ら兵の家だけでなくメデイトリアの力を結集する事も可能となりましょう。まずは、王家としての決定を下すためエーサに戻り、院の主だった方々にご相談されるべきと存じます。領家へも、その決定によって速やかに兵を呼集できましょう」

彼にとって、精一杯の回答だった。この当然の道理を無視する王の真意は、イド・ルグスの思考の外にある。だが、迷いは無かった。跪く彼を、ダナはじっと見て言う。

「メデイトリアの防衛のためには、この地で敵を食い止めるのが最善だ」

「我々がここで倒れるなら、間違いなく国土は蹂躪されます。避けるべきは、それです」

「だが、仮に戻ったとして、お前の言うとおりに事が進むだろうか……？」

イド・ルグスの声が止んだ。思いもよらぬ王の発言に、その表情へ戸惑いの色加わる。暫しの後、彼は答えた。

「……どうか、ご安心ください。玉座の威光と聖約の尊さは、わたくしも存じております。その事に、疑いは何もありません」

「私も、そう思いたい。しかし、本当に疑いは無いのか」

その言葉が胸の中を通り過ぎ、イド・ルグスの心をざわつかせる。「確かに、王家への理解と信頼は、正義を愛するこの国の者たちに

広まっておる。信仰が、メデイトリアを支えているのだ。だが、その向きは一方に思えて、実はそうではない。川面の流行を見る者は、それが天巡して帰するを見ない。日輪の運行を見る者は、それが地巡して逆するを見ない。見ることに篤き者ほど、それは甚だしい。お前のような者の眼差しは揺るぎないが、盲点もまたあるのだ」

落ち着いた声でそう言い、ダナは彼を見つめた。意味深な言葉であつたが、イド・ルグスの思考はどこまでも空回りする。

「私は、善意からでも悪意からでもなく、それを直視せねばならぬ。いずれ、お前の力を借りる事になるだろう。時が来るまで、ゆつくりと休め」

命ぜられ、イド・ルグスは退出した。イコフに案内され、小さな天幕に入る。寢床の上で毛布に包まると、彼の脳裏によつやく疑問が浮かんできた。

（いつたい、どういう意味なのだ。何者かが、王を裏切るとでもいうのか？）

だが、それ以上の思考を行う力が、残ってはいなかった。今の彼には、デロイでの出来事が、まるで夢のように感じられる。だが、イド・ルグスがそれを思い出す前に、その疲れきった身体は、本物の夢の中へと沈んでいった。

十

十

オシアの乾いた大地に、砂塵が降り注いでいた。雨が降れば洪水、晴れが続けば砂嵐、耕せる場所は限られ、その土地をめぐつて領民たちは争う。あぶれた者は採鉄場か精錬施設で寿命を縮めながら働くが、それすら無理なら街に行くしかない。だが、そこでも生活できなくなつた者に残された道は、奴隷として身売る事だけだった。生きのいい男は闘奴、そうでない男は農奴、若い女は器量しだい、そうでない女にはほとんど価値が無い。商業の盛んな北方の諸都市において、女性手工業の担い手だった。だが、内外流通に乏しい

デロイでは、手工業などというものは産業として成立し得ないのである。そうして手に入れた金で、残された家族はいくらか生き延びる事ができる。だが、残された者もひとり、またひとりと消えてゆく。領民らが逃げ出せぬよう、州境は帝国によって閉じられていた。これが、血の一滴まで搾り取られるといわれるオシアの、厳しい現実だった。

北にパレビア、北東にガルバニア、南西にメディトリア、南にデイナーリア。オシアは、これら全ての州を結ぶ交通の要所であり、コロヒス河とアクアイアス河という二つの大河の水源を擁する、豊かな森林地帯だった。

ガルバニアにはコノス人、メディトリアにはエキル人、といった具合に、州には多数派の民族が存在するのが普通である。だが、オシアという地域は周辺の州からの混交によって成り立つ地域であった。その文化も流入してきた部族ごとに異なり、主流というものが存在しない。

それ故に、この地域は常に内紛を繰り返し、やがて帝国の成立と共に彼らの好餌となった。デロイ初の属州として支配され、その統治は次第に過酷さを増してゆく。オシアの人々は、ようやく団結する事の重要性を悟るが、すでに遅かった。帝国による分割と懐柔により、彼らの故郷は巨大な製鉄場へと改造された。

だが、川底を浚って砂鉄を掘り出し、森の木々を燃料にして精錬し、文字通り身を削って帝国の必要とする鉄資源を生み出してきたこの州は、すでに息切れを起こしていた。森林の荒廃によって大地は丸裸となり、かつて彼らが独立部族として暮らしていた頃の遺跡が、まるで墓標のような姿を晒している。

しかし、これについて鉄の代替生産地を見つけなくてはならないという懸念以外に帝国が困る事など無かった。荒れた土地でも、ガルバニア式の灌漑を施せば農場にする事ができる。開発の限界を迎えているガルバニア州では、多くの農民たちが新たな開拓地を必要としており、供給過剰であった農奴たちのはけ口にもなるだろう。

この問題は、要するに意図的に放置されていたのである。

もちろん、この現状にオシアの人々も満足していた訳ではない。

彼らは帝国の支配する属治領で幾度も蜂起していたが、その度に自治領に封じられたオシア諸侯に討伐の任が与えられ、州民相食む地獄絵図が繰り返されたのである。だが、先のメデイトリア戦役における第一軍団の惨敗が、絶望する彼らの目を覚ました。

そして、あの大蜂起から約半年。オシアでは、反乱軍と第一軍団が激闘を続けていた。メデイトリア軍は枢軸貴族たちによる事変の後、それらの戦闘には加わらず、荒れ果てた丘の上から事態を傍観していた。

増強に増強を重ねた第一軍団の数は、八万をはるかに超えている。彼らは軍を分けて反乱勢力の拠点をそれぞれ包囲するが、峻険な丘の上に築かれた砦は簡単には陥落しない。だが、このまま時が過ぎれば、いずれ耐え切れなくなる事は容易に予想できた。

この頃、北方ではルムドとカーレの軍がキリアに到着していた。双子の巨都とよばれる彼らは、同盟都市ラニスに圧力をかける第二軍団に対し、傭兵を中心とする大軍勢を対峙させた。高まる両者の緊張により、前年に成立した帝国とラニスの停戦は風前の灯であった。主力をオシアに置く帝国軍は劣勢だったが、戦端はまだ開かれてはいない。

そして、いまだ平穏を保つ帝国の属州、パレビア、アドリア、デイネリアの各地に、アルダネス朝からの使者が訪れていた。軍団兵の不足により属州の治安は徐々に悪化し、使者たちの行脚を遮るものは何もなかった。彼らが持つメデイトリア王の親書には『吾、ダナ・ブリグンド・アルダネスは友愛の志と共に、この地の誇り高き勇者へ告ぐ。貴君らは速やかに兵を挙げ、メデイトリア、オシア、ルムド、カーレ、ラニスの次へ名を連ねよ。帝国の命運、既に潰えたり。今こそ、その驕慢を共に討つべし。云々……』といった文書が書かれており、この檄文は彼らを驚かせた。だが、長年の支配に慣れきった人々の反応は鈍く、使者たちの努力も空しく呼応する者

は誰もいなかった。しかし、この親書は彼らへ情勢の変化に対する警戒心を植えつけ、大いに動揺させるものでもあった。

十

十

イド・ルグスの救出から約十日。兵の家の野営地にある王の天幕で、軍議が開かれていた。彼女の滞在により軍勢は待機を強いられ、出席する士隊長たちの表情も険しい。ダナはこの地でデロイ軍と戦うことを説くが、賛同する者はいなかった。さらに、デロイ全土に発した檄文の件が王の口から告げられると、彼らは明らかな動揺をみせる。諸々の理由を挙げて反対する四人と王の意見は折り合わず、結論を先送りとして軍議は終了した。

その後、ダナは派兵を求める使者を三領家へ送るが、彼らも応じる気配はなかった。あくまで数は問わぬという要請に対し、彼らは聖約の文言『邦を侵さず』を根拠に難色を示す。だが、その問題については既に先王が判断を下し、解決されていた。聖約は、正義の軛ならず。それが、王の出した答であった。領外の戦闘が禁忌でない事は、彼らもそのとき了承していた。三領家のこつこつとした態度に対し、ダナは要請を命令に替え、使いを往復させる。だが、従う者はおらず、時間は無情にも過ぎてゆくばかりであった。

さらに、王都からの支援はなく、家宰ら重臣たちの意向も伝わってこない。周囲の諫止を振り切ってこの地に赴き、さらに帰る気配もなく行動する王に、彼らも混乱しているものと思われた。当然、ダナもそういった状況に気づいてる筈ではあるが、それを気にする様子もなく、この地に留まり続けていた。

「よう。どうだ、調子は」

ウル・メイノスがそう言いながら、幕屋の中に入ってきた。イド・ルグスは折り畳んだ底布の上にあぐらをかき、難しい顔をして掃き棒の尻で地面を削っていた。

「……なんだこりゃ？」入り口でたたずむメイノスの足元に、うねうねとした線と細かい図形が見える。見回すと、狭い幕屋の底布が全て引き剥がされ、露出した地面がそれで埋め尽くされていた。

「お前の立っている所がディネリアだ。俺のいる場所が帝都デロイ。オシアはここだ」そう言い、棒で正面の地面をさす。「ここで今、第一軍団と反乱軍が戦っている」

底布の上で、彼があぐらをかいたままくりと回った。

「そして、ここがキリアだ」そこには、河の兩岸で対峙する軍勢が描かれていた。「両軍は、ノルデア河で膠着している。第二軍団は約三万、敵の都市連合軍の数は不明だ。……軍議は、どうなった？」

「……しばらくは、ここに釘付けだな」

「そうか……」地面に視線を落としたまま、イド・ルグスは小さく答える。

「はん、地図かい」メイノスがそう言って、ぽつんと置かれた腰掛に落ち着く。

帝都からの帰還後イド・ルグスは営地の片隅に軟禁され、王から命じられた謹慎に服していた。処分の軽さのためか、彼はしばらく塞ぎ込んでいたようであったが、こうして足繁く通うメイノスから情勢を聞かされ、今ではその事ばかり考えている。メイノスの座った腰掛をちらりと見て、イド・ルグスが言う。

「そこが、俺たちの今いる場所だ。数は、およそ千五百」

メイノスは自分の足元を見る。確かに、デロイ軍の動きを観察するには良い場所だが、乱を鎮圧した第一軍団の行き先が明白である以上、そうする意味は薄い。腰掛に身体を預け、ため息をついたメイノスが訊く。

「帝都の守りは、どの程度なんだ？」

「俺がデロイにいた頃、第三、第四、第五の下位軍団がガルバニアにいた。だが、もし強制動員を行うなら、ほぼ無尽蔵に兵力を召集できる」

デロイにおける軍団とは、元々は遠征を行う場合の編制単位であ

る。彼らは全て職業兵士であり、その数も兵站を考慮して絞られていた。軍団兵の総数は、現在でもデロイ本州から徴集可能な男子の三割程度でしかない。その残りを召集する場合、帝国の機能を大きく損なうため、国家存亡の危機でも迫らぬかぎり強制動員は禁忌とされていた。

「……そりゃ、結構なこった」

メイノスもまた、スタインらと同じく王の方針に賛同できないでいた。だが、かといって王を輿に押し込めて帰ることも出来ない。やり場の無い感情を滲ませ、彼が言った。

「俺たちがここで頑張つて、それで勝てるんないんだが……」

「……陛下は、我々とは違った視点から見ておられるのだ。すでに二方面の敵を抱える帝国は、さらなる反乱の発生を恐れている」

イド・ルグスはそう言うと、パレビア、アドリア、ディネリアのある場所を見た。その場所とオシア、キリアを結べば、ガルバニアは完全に封鎖される。

「だがよ、方々に檄を送つてもそんな事は起きなかったんだぜ？」

「今のところは、だ。厳しい状況にありながら、デロイは属州の自治領から軍を召集しようとしていない。つまり、彼らがどちらにくるか怪しいと疑っている」

「……まあ、そうかもな」メイノスが、腕を組んだ。

「さらにキリアでの膠着は、第二軍団が劣勢であるという事を示している。勝てるなら、どんな口実を使つても叩くはずだ。好機を、みすみす見逃すような彼らではない」

首を傾げ、メイノスは考え込む。その顔には、多少なりとも納得する様子があつた。

「もし、第二軍団がキリアで負ければ帝国は窮地に陥る。周辺の属州も、その情勢になれば態度を変化させるだろう。第一軍団がオシアから撤退すれば、その動きはさらに加速する。だが、我々がここで退くなら、間違いなくそれに水を差す事になるだろう」

それを聞き、メイノスが低く唸る。イド・ルグスは、言葉を続け

た。

「陛下が求めておられるのは、彼らの心理に訴える事なのかもしれぬ。ならば、兵の多寡は関係ないだろう。たとえ小勢であっても、我々の奮戦は無意味ではない」

メイノスがなるほど、という顔をする。だが、その表情は賛成ではなかった。

「……でもよ、気にいらねえな。昨日の今日で、そんなこと決めちまうのはよ。聖約にも『心、義を正し人に和す』ってあるぜ。他人の尻馬に付くようなやり方も、何か違わねえか。確かに賢いかもしれんが、今はボルボアン様のやり方を見習うべきだぜ……」

その問いに、イド・ルグスが沈黙する。彼も、心の底ではそう感じていた。そして、スタインたち、領家の当主たちも、同じ事を考えていたのだろう。王の言っていた事は、これか。イド・ルグスが、気づく。

それは、当然の理屈だった。この国の人々の期待は、将来だけに向かってはいない。それと同じものが、過去へも流れているのである。つまり、今の王に対する意識は、先王ボルボアンへも向けられていた。過ぎし日を重んじる彼らの必然的な思考であり、ダナの行動は先王との比較を免れ得ない。そして今、ボルボアン王そのものが過去となり、彼女の行く手を阻んでいるのだ。

聖神に近い存在とはいえ、王自身は生身の人間である。本人の言葉であるなら、その判断はあくまで人並みに過ぎない。信心深いイド・ルグスも、その事は理解している。だからこそ、先王ボルボアンの改革は二十年にもわたる長い歳月を必要としたのだ。それは周到に関係者の意見を調整し、取り残される者がいないよう粘り強く働きかける時間だった。王とはいえ、過去に縛られたその力は決して強権ではない。もし、これがデロイ帝国で起きた事であれば、数年で解決されただろう。それが、メデイトリアという国だった。

ならば、エスーサに戻ることはその解決になるだろうか。イド・ルグスが、悶々と思う。状況は、前回の戦役から大きく変化してい

た。その事に対し、王はもちろん、臣民それぞれの考え方もすでに違っている。ボルボアン王の轍を踏むというなら、果たしてそれは間に合うのか。万全の態勢で挑んだカシアスの戦いですら、聖神の加護を借りてなお薄氷を踏むような勝利であったのだ。イド・ルグスが、苦い唾を呑む。

黙りこんだままの彼に、メイノスは言いそびれていた近況を報告した。彼らは敵地に滞在しており、伝えることは多かった。イド・ルグスの意識がようやく彼の言葉に戻ってくる頃、幕屋の外が騒がしい事に二人は気づいた。何事かと走り出たメイノスが見たのは、慌ただしく馬から降りる伝令たちであった。

十

十

ルムドとカーレの傭兵軍団は、すでに六万を超えていた。彼らはダ・プー率いる第二軍団と、ノルデア河に隔てられた陣地で対峙していた。傭兵軍団には毎日のように増援が加わり、第二軍団との兵力差は二倍を超えて拡大しつつあった。第二軍団は河岸での防衛に徹し友軍の到着を待つ構えであったが、ガルバニア本州からの救援は無情にも見送られた。帝都でなされたこの決定は、枢機貴族たちの明らかな恣意を感じさせるものであった。

完全な孤立無援となった第二軍団は、ある朝忽然と野営地から消え失せる。この事に気づいた傭兵軍団は、即座に全軍での渡河と追撃を開始した。数の上では優勢の彼らも、デロイ軍団の手強さは理解している。彼らにガルバニアまでの帰還を許せば、友軍と合流して反撃してくるに違いない。陣地を捨てて逃げる第二軍団を、今ここで徹底的に叩いておく必要があった。

だが、彼ら傭兵軍団はあることに気づいていなかった。この第二軍団が、戦わずして受け持ちのキリアを捨てガルバニアへ退却する事など、デロイの軍律からも、彼らの自尊心からも考えられない事であった。傭兵たちがそれに気づいたのは翌日、朝もやの中、崖が

左右から迫る隘路を全軍で通過しようとした時であった。

隘路の出口では、第二軍団が戦列を引いて待ち構えていた。ようやく獲物を発見した傭兵軍団は、戦奴たちに突撃を命じると、追撃の成功を確信した。しかし、傭兵たちの第二波がデロイ軍の戦列を襲う頃、彼らは自分たちが包囲されている事に気づいた。

傭兵軍団の後方から、もやの中を肅々と進む長槍胄兵の列が迫ってくる。しかし、傭兵たちも後列の隊を反転させ命懸けで死戦し、しぶとく頑張った。だが、背後だけでなく前面のデロイ軍からも圧迫され、完全な挟み撃ちにされてしまうと、傭兵たちは次々に降伏し始め、一気に崩れ去った。

この戦闘で、ルムドとカーレの両都市が差し向けた傭兵軍団は三分の一が戦死し、三分の一が逃げ去り、残りの三分の一が捕虜となった。戦死者の多くは戦奴であった。捕虜のうち、負傷者は手当てをされる事もなく見捨てられ、その生き残りの五千人が第二軍団に戦奴として加えられた。

そしてダ・プーはこの大勝利を、帝都で彼の留守を預かるラボアに報告させた。

『敵は、全滅した』

貴族院での彼の報告は、以上であった。この言葉もまた、キリアへの援軍を送る事を拒んだ者たちへの、明らかな当てつけである事を感じさせた。

十

十

キリア州での帝国の勝利が兵の家の営地に知らされると、再度の軍議が催された。この地に留まる理由を失った王は、周囲からの意見を受け入れ、すでに撤退を決定していた。だが、シュマロ、オフイル、リュコスの三人は立ち尽くし、スタインも眉間に固い皺を寄せ、沈黙している。

「……では、改めて聞く」ダナが、言葉を繰り返す。「帰還した後、

もし王と王家、つまり私と家宰たちの意見が異なるなら、どちらに従う気だ？」

彼女が、その視線を鋭く絞った。それを見て、スタインが思う。
(なるほど、そういう事か……)

今のメデイトリアは、抜き差しならぬ危機的状況にある。その事は、すでに誰もが理解するようになっていた。半年前に締結された帝国との不可侵条約により、この国には平穏がもたらされた筈だった。だが、デロイ貴族の謀略はそれを破綻させ、前回をはるかに上回る規模の戦役が催されようとしている。現在における両者の戦力を比べると、劣勢という言葉すら前向きな表現であった。

この理不尽な状況に対し、デロイの暴挙を感情的に非難することは簡単である。だが、それは責任のある人物に求められる態度ではなく、シユマロ以下の士隊長と領家の当主たちも同様だった。とはいえ、冷静さを保つ彼らも現実的な対応を見出せておらず、王の積極案に対し否定的な姿勢を示すだけであった。

メデイトリアにおける玉座の権威とは、結局のところ自発的な信仰や聖約といった曖昧なものに依存している。それが、現状における混乱の元といえた。極論において王は、関係者の同意を促す事しか出来ないのである。これは、王家の外部に対してだけでなく、内部に対しても基本的には同じだった。

(もう、尻に火が付いちまつてる。可能な限り早急に、対応を進めねばならん。しかし、それが難しいであろう事は、これまでの経緯から推察できる。その上で陛下は、まず王家内の足場を固めるお積もりなのだ。確かに、これまでの様にエスーサで協議を重ねる余裕など無いかもしれぬ……)

スタインの記憶するメデイトリアの歴史には、王朝内部の対立という事態は無かった。また、王家の慣習的な掟に照らし合わせても、兵の家が王と王家のどちらに帰属するか、その判断は難しい。王が何者かと対立する事は、そもそも想定されていないのである。

(……陛下に聖神の加護があるとしても、それは結局のところ後押

しでしかない。伝統を改め前に進むために、先王もあくまでご自身の力を頼りとされたのだ。だが、それに加担するとして、我らの武威が王家へと向けられてよいものか。ここで我らが協力を約束すれば、家宰を始めとする重臣たちに、相当の衝撃を与えるに違いない）

動揺していた他の三人も、思考の経路は違えどスタインと同じ結論に達していた。玉座の神秘を深く崇敬する彼らであったが、その認識において王という存在は、聖密院の一部でもあった。全体をひとつの機関とみなすなら、王とは聖神の意思を伝達する部品に過ぎないのである。ムー・ボルボアンという人物の偉大さは、その構造に何ら逆らわず、己一人を全体の動力源たらしめた事であった。この四人にそこまでの理解がないとしても、長年にわたって先王に仕えた彼らは、それを皮膚感覚として記憶している。これは、イド・ルグスと彼らとの、大きな違いでもあった。

互いの様子を窺い、四人が玉座を見上げる。彼女の求めに従うなら、王家の機序は自壊しかねない。彼らを最後まで縛っていたのは、過去だった。シュマロが、口を開く。

「陛下、そのような場合はこれまで通り、家宰以下重臣の方々に諮り頂くのが最善と存じます。また、我ら兵の家だけが陛下にお従いしても、無意味であり……」

この調子でシュマロは長々と語ったが、結局はこれまでに述べた事を繰り返しただけであった。さらにオフィルとリユコスも加わり、同様の見解を付け加える。静かに聴いていた王が、彼らの話を遮って言った。

「もうよい、口を閉じろ」

スタインを含め、四人が気まずい沈黙に沈んでいた。だが、ダナが見ていたのは、彼らではない。その視線の先、天幕の入口でイコフが顔を覗かせ、頷く。

「意見を聞くべき者が、他にもいるな。中に入れる」

王の仕草を合図に、イコフともう一人の男が蓋布を潜る。軍議の末席に連れて来られたのは、イド・ルグスだった。それ見て、スタ

インの表情が変わる。他の三人も彼がこの場に呼ばれるとは思っておらず、互いに顔を見合わせた。これまでの功績を差し引いても、彼の過失は明らかであり、その謹慎が今日や明日に解かれるという道理はなかった。

「最後に、この者の意見を聞いておこう。イド・ルグス、お前はどうかであるか？」

王の問いかけに対し、彼は静かに答えた。無論、この男にも葛藤はある。だが今は、やむを得ぬ選択であると己を納得させるしかなかった。

「……如何なる時も、陛下にお従い申し上げます」

そういう事、だったか。スタインは、内心で舌打ちした。王とは神性を持つ特別な存在であったが、それと人間的成熟度はあくまで別の尺度である。これまでの振る舞いから、そういった面で王はまだ幼くておられる、と思い込んでいた彼の動揺が、不遜にもその表情へ表れていた。

「ふむ……。いつデロイとの戦となるか分からぬ現状において、新たな師士を選ぶ必要があるのは明白である。だが、お前たちの態度をみるに、イド・ルグスを赦免した上で、改めて師士に任命するしかないようだ。また、こうなった以上、今後この者の意見を軽んずる事の無いよう、肝に銘じておけ。何か、異存はあるか？」

四人の士隊長は、無言だった。スタインは黙り込み、シユマ口たち三人が何とかこの決定を覆そうとするものの、王にその口実を与えたのは彼ら自身である。反論の糸口はなく、改めて何を言おうと己の首を絞めるばかりであった。

彼らの意見はやがて途絶え、王の口から軍議の終了が告げられる。声の消えた天幕に、オシアの砂嵐がさざ波のような音を響かせていた。

スタインとイド・ルグスは、オシアを見下ろす崖の上にいた。二人の背後では、重荷を担いだ従士の列がゆるゆると坂を上っている。だが、分解された幕帳の支柱や、折り畳んだ面布、使い古された野営用具などをたっぷりと背に負う彼らの足取りは、決して重くはなかった。意気込みと共に乗り込んだオシアで半年を空費し、何の戦果も得ぬまま帰還する事も、彼らにとっては苦にならない。目の前の山々を越えれば、故郷である。

イド・ルグスは、眼下の丘陵が尽きる先を見ていた。その瞳に色は無く、表情だけが物憂げだった。地平に浮かぶ稜線の彼方に、帝都デロイがある。そして、二人の背後にはノクニイ峠へ向かう山道が見えていた。この崖を最後に、道々の景観は完全に閉ざされる。どちらが言ったわけでもないが、二人は自然とこの場所で足を止めていた。

スタインが、彼方の空を見て言う。

「名残惜しいか？」

「いえ……。既に、終わった事です」イド・ルグスが、答える。

だが、言葉とは逆にあの都の記憶は色濃く、今となっても昨日の事のようにだった。

「すべて、忘れる。……命取りになるぞ」

諭すように、スタインが言う。オシアでは、反乱軍の砦の一つが飢餓に耐えられず、降伏していた。なだれ込んだ帝国軍の兵士により、武器を持つ者は殺され、持たぬ者もその半数が城壁から突き落とされて死んだ。ひとたび叛旗を翻した者に、容赦はしない。帝国にとって当然の処置であるが、それを聞く彼らは、王への認識を少なからず改めていた。

「イド。陛下は、純粹にメデイトリアを守ろうとしている。今に思えば、な」

あの軍議の後に、スタインたちは王に協力してデロイと戦う事を、四人の総意として決定していた。各々に不満がなかったわけではないが、王に対するわだかまりは既に消えようとしていた。さらに、

兵の家の従士たちもそれを支持し、士気を高めつつあった。

確かに、帝国と戦う事には何の異議もない。イド・ルグスはそう思う。だが、結果的に他の士隊長の意見を封殺する形になったのが、心残りであった。また、王と兵の家にもたらされた強い結びつきが、今後にどう影響してゆくか全く予測できない。それらを含め、気分は晴れなかった。

「遅くとも秋までに、帝国軍はこの地にやってくるだろう」

スタインがそう言い、振り返った。王の輩たち従者が担ぐ小ぶりの御輿が、完全武装の従士たちに囲まれながら、今まさに山道の奥へ消えようとしている。

（……王は、帝国を巡る戦況を察して属州の反乱を促し、それが適わぬと知って即座に撤退した。その過程は同時に、兵の家と領家の従順さを確認する事でもあり、結論としてイド・ルグスを師士に据えたのだらう。若さからは想像もつかぬ、鮮やかな対応だ。要するにルグスは、この事態への担保だったのだ。儂たちが服従せぬ状況では、逆にそれは口実となる。こやつが首を縦に振ると判っておれば、実に簡単なことだ）

彼の口元が、綻ぶ。

（我ら古参の士隊長に対しても、きつかけさえあれば態度を変える
と見透かしていたのかもしれん。だが、儂は悪い気がせぬ……。先
王陛下のご苦勞が、見事に実ったのだ）

ダナ・ブリグンドは、先王ボルボアンの第二妃の子であった。第一妃との間に正常な子供が生まれなかった事は、スタインも知っている。選ばれた第二妃もダナを産み落として死んでおり、先王は苦心して後継者を得たのだった。メディトリアでは男系、女系といった概念に伴う慣わしは無く、男女で明確に区別されているのは、男が戦い、女が産むという事だけである。王の本質とは聖約を継承する者であり、世俗のあらゆる穢れから解放された聖密院に生まれ、そして育つ事が重視されていた。

やがて、その御輿が姿を消し、中軍の後半の兵がその後続く。

従士の中に、イド・ルグスの旗下へ復帰した隊士の面子がちらほらと見える。イド・ルグスを師と仰ぐ、選ばれし騎兵たちであった。若い彼らを見るスタインの顔から、表情が消えた。

孤児として生まれ、十五で兵の家に入門した彼は、それ以来この荒くれた男たちの中で鍛えられ、また部下を鍛えながら過ごした。だが、血と汗と涙の味を知り尽くした彼は、イド・ルグスとその弟子たちを理解できない事もある。それは、自分がよく知る世界から超越した存在だった。

鉾を持ち、楯を掲げ、具足をまとい、腕力と胆力をみなぎらせて駆け巡る。それが、彼が覚えた戦いの全てだった。しかし、この十数年で何もかもが様変わりした。先王ボルボアンが全てを改革したのである。歩兵は数を頼りに密集し、騎兵が戦場の主役となり、山から下りた獵師が人を狩る。そして、最後にやってきたのがあの兵器だった。轟きが山々に響き、木々のざわめきが静かになった時、何もかもが消し飛んでいった。

いかなる勇者も、この黒い塊には勝てない。スタインには、そのことが理解できなかった。それは、シュマロ、オフィル、リュコスの三人も同じであつただろう。その時より彼らは、王から一步退いた場所に心を置くようになったのかもしれない。

（だが、天から地に至るまでその全ては、聖神の思し召しで生まれ たのだ。この世界の均衡を保つため、あの兵器は我らにもたらされた。神託とは、例えるなら日照りの季節に降るひと時の雨のようなものだ。決して、それを無駄にしてはならぬ……）

視線を背後に戻したスタインは、イド・ルグスの憂鬱な表情を見る。ごくありふれた、ひとりの人間がそこに居た。スタインは、静かに言う。

「イド、儼たちの事は気にするな。我々は、二人の良い王に恵まれた。」

メディトリアから吹く風が、彼らのいる谷を吹き抜けた。だが、春だというのにそれは冷たく、崖の上に佇む二人を凍えさせた。

【第六章】 陵の下で

メデイトリアは、神々の創った庭園のようであった。

それは、頂に銀雪を抱く高山から始まる。流れ出るせせらぎは所々に美しい湖を形作りながら、青々とした草原を這うように下り小川となった。流れは低木の群がる川筋を経て、緑の濃い山々の狭間を抜けてゆく。次第に広くなる流域は緻密な農地と小集落によって満たされ、支流はやがて大きな川となる。

水辺には街が造られ、そして都があつた。理石のうず高く積み重ねた宮殿の許では多くの民が暮らし、地を耕し、鋤を叩き、物をひさぎ、芸を愉しむ。人々のその様子は都の外にも遍く拡がり、誰の所領であつても秩序が保たれぬ場所はなかつた。彼らの繁栄は水の流れが尽きるまで続き、やがてそれを見届けた川は険難な山脈へと消える。

そのひとつがヒメル川であり、もうひとつはアブネ川とよばれた。ヒメル川の水はヒメル死湖で地下に潜り、アブネ川の水はイガラ瀑布で空に撒かれる。その行方を追うことも、遡ることも出来ない。ここが庭園の終わりだった。

彼らの住むこの世界は、太陽と大地から始まったとされている。その後の事は神話として伝えられ、今では次のように語られている。かつて、太陽は円くもなく熱くもなかつた。また、大地は平らでもなく冷えてもいなかつた。それらはひとつに繋がっていたが、やがて二つに分かれた。その結果、太陽と大地は今の姿になった。この時、陽神イシンと地神ルフォイが現れた。陽神イシンは雲を生み出し、雨と雷で大地を削った。そして地神ルフォイも月を生み出し、夜の闇で太陽を隠した。この時、雲神グリフと月神ピアが現れた。

ある存在から相反する二つが分離し、さらに同類を生じて数を増やす現象を『転』という。生み出されたその一群は『輪』とよばれ、元始の転では四柱の聖神が出現した事になる。さらに、これらの聖

神は次の転における源となり、その延々たる連鎖がすなわち彼らの神話であった。神々とはそういった輪の集合であり、故にそれは輪神とよばれる。

そして、この陽神イシンと地神ルフオイの二柱が『ヨトウィン天地紀』の始まりとなった。紀とは神話における時代であり、その次は『ゼシントア生命紀』、そして『イエトンデ自然紀』と続き、やがて『カトウイジン霊理紀』、すなわち今に至る。この神話において人は自然紀に生まれ、その最初の世代が祖神リギドとなった。

霊理紀の始まりとなった聖神は、霊神プルと理神ダルハである。霊とは形のないものに作用する法則であり、霊神プルは言語、哲学、算術、芸術などを司る聖神の祖となった。理とは形のあるものに作用する法則であり、理神ダルハは工学、軍事、技術、医療などを司る聖神の祖となった。この二柱以降、全ての聖神は文明的な概念の具現として生まれる様になる。霊理紀とは要するに、それを唯一理解する人間のための時代だった。しかし、そういった深遠な理解は神祇官たちの領分であり、大衆における神話は世界の成り立ちを説明する壮大な創世物語として、そして歴史や娯楽と結合した身近な民族伝承として伝えられていた。

一年に四度、王は輪神と向き合い、祭祀を執り行う。それと同時に様々な祭りも催され、メデイトリアの人々の楽しみとなっていた。そういった王家の統治は、史実の上でもすでに五百年を超えている。この平和な時代によって、陸の孤島といえるメデイトリアは確実に繁栄していた。彼らの唯一の悩みは、その繁栄ゆえの現象だった。領内の開墾可能な土地は全て消えうせ、ここ百年は人口の増加が頭打ちの状態となっていた。しかし、それ以外に問題らしきものを抱えることもなく、彼らはこれまで過ごしてきたのである。

この事を可能にしたのが、神託がもたらす知識であった。記録にあるものでは薬理や疾病に関する事柄が多く、特に薬についての知識はメデイトリアの代表的な貿易品となるまで発達した。閉鎖的な環境にあるこの国で、病魔は逃れようのない災厄だった。それが猛

威を振るうたびに人々を苦しめていた悪疫は減つてゆき、やがて神託はこの国の安泰と入れ替わるように姿を消した。

そして数百年の長きにわたる年月が過ぎ去り、神々の沈黙が破られたのは一年前の事であつた。この地に禍ある時、神託が下る。それが彼らにつたわる言葉であり、伝承の起源は、メデイトリアにかつて外寇があつた時代に遡るだろう。その侵略は、前年の戦役と同じくガルバニアからであつたと伝わっているが、これについては余りにも古い出来事であるせいか、記録が残っていない。だが、その時もおそらく聖神の加護に恵まれたであろう事は、多くの人々が信じるところであつた。

十

十

聖密院の正殿に、王がいた。エスーサへの帰還から間もなく、家宰サンク・タルムが開いた諮問の場だつた。玉座の前には、家宰、尚書長、主膳長の三人が並び立ち、王の傍には侍従長ジジ・スタコツクが侍している。分厚い毛織物の上衣を羽織つた尚書長が、軽く咳払いして口を開いた。

「陛下。わたくしが役職を仰せ付かつておるように、陛下にもご責務がありでしょう。ですが、各々の分限を超える事案につきましては、必ず合議で決するのが王家の掟でございます。ましてや、帝国に対し兵を差し向けるというなら、当然我々に……」

尚書長が暗い声で言葉を連ね、オシアでの王の独断を回りくどく諫める。彼は尚書官の長だつた。王家の政務を一手に引き受け、エスーサを含め所領への具体的な施策を全て差配する。所領の大半は家外の官である地領主たちが治めていたが、彼らに対する尚書長の影響力は絶大であつた。

彼がようやく意見を述べ終わると、次に主膳長が口を開いた。尚書長と同じ小言めいた言葉を聞きかされ、ダナが小さく息を吐く。主膳官たちは財務を担当し、王家が得る全てのものは彼らが管理し

ていた。それらを必要に応じて分配、貸与する権限を持つこの部職は、他の王の輩から恐れられる存在でもあった。

「とにかく、陛下におかれましては今後、我らの存在をお忘れにならないよう、胆にお銘じ下さい。よいですな、陛下……？」

主膳長の言葉を継いで、侍従長が玉座の下から念を押す。仕方ない、といった顔で頷くダナを見て、尚書長と主膳長が小さく一礼した。その様子を確認した侍従長が、視線を家宰に向ける。このジグ・スタコックを筆頭とする侍従官は、王と他の王の輩との中間に位置し、両者を取りなす特殊な役職であった。尚書、主膳といった各部職はその長から命令が下るが、侍従官だけは王から直に命を受ける。そのため、彼らには王と深く結びつく者も少なからずいた。

基本的に王の輩の職は、その役の軽重を除けば完全な世襲であった。部職の役は、最高位の長は家宰が、それ以下の役はその長が人事権を持つ。たとえ王であろうと、彼らの同意無しにその任命を行う事はできない。従って王の輩においては、家宰が直接的に、あるいは間接的に大きな力を持っていた。だが、彼の恣意が全く及ばぬ例外として、先に述べた一部の侍従官と神祇官がいた。

神祇官とはつまり王族であり、王自身が神祇長を兼ねる。彼らは各地の祠に配され、王の子孫は必ずこの職を与えられた。現在の王であるダナも、かつては神祇官としてエスーサの王陵を預かっていたのである。

侍従長が、玉座の下から家宰に発言を促した。尚書長と主膳長の二人はこの家宰の命によつて呼ばれており、侍従長も彼へ加担している事は明白であった。彼らを見下ろすダナの表情は、気丈ながらも硬さを隠せない。会合は王からの諮問という名目ではあったが、実際には家宰が全てを主導していた。

段取りどおりに発言の機会を得た家宰サンク・タルムが、王に対し長旅の疲れを慮る。だが、その穏やかな会話の中でも、二人の眼つきは鋭く尖っていた。さらに、家宰はオシアに集結するデロイの大軍のことに言及して、静かに言った。

「あえて、陛下にご提案致したい。現状において、帝国とは慎重に接するべきかと存じます。これについて、我らの意見は一致しております。彼らと対立することは、賢明ではありません。我々の力にも限りがある以上、危険な賭けは慎んで頂く必要があります」

静まり返った王の間の空気が、急速に冷えてゆく。家宰を見るダナの面持ちには、微動だにしない。玉座の下で、侍従長が普段はかかぬ汗を感じる。張り詰めた緊張の糸が、きりきりと鳴るかの様だった。沈黙の中、厳しい顔つきの家宰がさらに言葉を加えた。

「これは、陛下の独断がもたらした結果とお心得頂きたい」凍てついた眼だった。「オシアで無用の檄を発し、領家へ無理な派兵を求めた事が、そもその間違い。帝国から危険視され、領家からも距離を置かれ、すでに我々は孤立しております」

だが、ダナの受け答えはあくまで冷静だった。透き通った声が、王の間に響く。

「その場合、最善をもって穩便に事を済ませたとしても、帝国に対し何らかの譲歩は免れられん。それについては、どうする気だ？」

「……たとえ、多少の所領と引き替えになっても、王家を存続させることは出来ます。これは、領家においても同じこと。それが可能なら、奪われたものもいつかは取り戻せましょう」

「お前も、オシアの惨状は知っておろう。彼らは国中の緑を奪われたのだぞ。メデイトリアも同じ憂き目に遭えば、我らが生きてゆくことは出来まい」

「しかし、同じ属州においてもディネリアなどは、いまだ平穩を保っているのも事実。我らの立ち回り次第、という事でございます」

「それは、奪うものが無いからだ。奴らがあの地に期待するのは、黒塗りの野蛮な戦士ぐらいだろう」

「そうであるなら、なおさら好都合。この地にも、強兵はおりまする」

「……つまり貴様は、それをデロイに売り渡せというのか？」

言葉の穏やかさとは裏腹に、肘掛の上にある小さな拳が震えた。

だが、それを見つめる家宰の表情は、ぴくりとも動かない。彼の右から、声が上がった。

「その原因は、陛下ご自身にもおありではないですか？」尚書長だった。「帝国の思惑が、仮に陛下の仰る通りであるとしましよう。しかし、それと我らの態度とは全く別のこと。国の大事を決める以上、王であつても独断してよい筈がありません。オシアにおいて陛下は、その事を無視された。我々だけならいざ知らず、それを領家に対しても露呈なされたのは、陛下ご自身でございましょう」

さらに、家宰の左から声上がる。「報告では、いずれの領家も陛下のご帰還を知りながら、何の動きも見せてはおりません。エスーサに使いを寄越すでもなく、これは明らかに不穏な兆候でございます。彼らに対し、陛下が今後も強硬な姿勢で挑むなら、何が起きてもおかしくはありません」

主膳長が冷やかに言う。オシアから帰ってきた彼女に、この事はまだ報告されていない。さすがの王も、動揺の色を滲ませる。すぐに元の表情を取り戻したダナであつたが、その仕草は落ち着きを失つていた。

「想像以上に、領家は我らへの信頼を失っております。失策でしたな、陛下……」

追い討ちをかけるように、家宰が言った。それを受ける彼女に、言葉は無かつた。爪先に付けた指飾りを、しばらくの間かちかちと鳴らす。溜め息をつき、口を開いた。

「では、まず領家の意向を確認する事が先だな。それでいいか……？」

精一杯の威厳と共に吐き出した言葉であつたが、妥協の響きは隠せない。無表情を装いつつも、それを聞く家宰は若干の余裕を取り戻していた。

「ひとまずは、それで良いかと存じます」
深々と一礼する。暗がりに隠れた彼の口元は、苦笑を微かに浮かべていた。

王都エスーサから川を下ると、家都カシアスにたどり着く。その街は、ヒメル川流域でカピリノとデファニノの二つの山脈が最も接近する位置にあった。王都と同じく周囲を濠と城壁に囲まれたその姿は、メデイトリアにアルダネス朝が成立する以前の戦乱の世を偲ばせる、数少ない遺物でもある。

カシアスから見える川のほとりは、水気に富んでいた。密集した下草が生え、森のように木々に覆われているが、流域に生える木はあまり高くない。水辺を好んで生える常緑樹は幹を横に伸ばし、その背丈より枝振りの広さを稼ぎ、所々にある隙間ではさまざまな低木がこぼれた光を頼りに茂っている。

だが、夜の明けたばかりの今、川面からの濃い霧がその景色を遮っていた。カシア家当主、バルシオ・カシアは眼を皿のようにして霞の彼方を窺う。衛兵の報告を受け、酔いも醒めぬまま上がった門楼であった。

朝日を受け次第に晴れゆくその先に、軍勢がいた。完全武装の兵士が、びっしりと並んでいる。密集し、完全な矩形を描く四つの方陣を見て、バルシオ・カシアは腰も抜かさんばかりに驚いた。

（あれは、王家の軍ではないか！）

カシアスに王家の使いが訪れたのは、昨日のことであった。デロイ帝国への今後の対処を決するにあたり、まずは領家としての意見を求めたい、という王の親書はすぐさまバルシオ・カシアに届けられ、その日のうちに領内の家士へ緊急の召集が命ぜられた。

夜になるとカシアス近隣の家士たちは集まったが、遠辺を治める者たちは明日の到着になるものと思われた。家都で残りの者を待つ彼らは酒宴を開き、その飲みっぷりを披露する。貴顕の衆としての誇りは高いが、彼らは要するに、そういった消費がその主たる役割であった。その彼らが、自らの分け前を割いてボルボアン王の求め

る騎兵や楯兵をカシアスの戦いまでに擁することが出来たのは、ひとえに王家への信用ゆえであつた。

だが、彼らが内心で孤児たちの集まりと蔑んでいた王家の軍が用兵上の規範と示され、さらに従わざるを得なかった事は、領家の家士たちの反感を少なからず買っていた。そういった様々な障害を見事に乗り越えたボルボアン王が、ようやくたどり着いた戦場に立つ事なく斃れると、彼らの心も次第に冷めてゆく。そして、現在の彼らが新王ダナ・ブリグンドの強引な指図に不満を抱くことは、否定できぬ事実であつた。

朝の光を受け、彼方にある鉾の穂先がきらめく。霧が晴れると、軍勢の一人ひとりの姿を窺うことができた。バルシオ・カシアには、兵士たちの視線が全て自分を捉えている様に思える。さらに、積み上げられた黒い鉄の塊を見ると、彼は背筋を震わせた。先王から、城門すら板切れのごとく吹き飛ばすと聞かされていた兵器だつた。

完全に酔いの醒めた彼が、昨日の親書の事を思い出す。

（馬鹿な……。王家では家宰らが帝国との交渉を主張し、陛下と対立していたはずであらう。親書は、そういった経緯で発せられたのではないのか。だが、あの軍勢は明らかに王家の全兵力……）

冷たい汗が額を流れ落ちる。いかに王家の軍といえど、無断で領家の所領へ踏み入ってよい訳がない。これほどの軍勢が領内の誰にも発見されず、まるで空気ののように自分の喉元まで忍び寄ってきた事が、彼には恐ろしかった。

（……………恫喝、これは明らかに恫喝だ……………！）

バルシオ・カシアはその時、眼下を騎兵が駆け抜けた事によく気づいた。それは数騎の集団で、城壁の周辺を大胆にも探っていた。のけぞるように窓から下がった彼は、青ざめた表情のまま門楼の出口を探す。

（冗談ではないぞ……。まさか王家は、我らを討とうというのか……………）

石壁を掴む彼の手が、震えていた。

自分たちを覆い隠していた濃霧は消え、カシアスの街がその美しい姿を現していた。方陣の正面に、イド・ルグスが立っている。朝には開けられるはずの街の門が、硬く閉じられていた。彼は、楼上で慌ただしく動く門衛を見ていたが、やがて背後へ視線を向ける。

「スタイン殿……」

呼びかけたものの、続ける言葉に迷った。イド・ルグスが困った眼をする。彼には、ファー・スタインが影のように寄り添っていた。

「……何だ？ いや、何でございましょう、だな」

いかにも小者、といった風に肩を縮こまらせた彼が、上目遣いで答える。彼のにやけ面を見て、イド・ルグスは複雑な表情で首を戻す。スタインが言った。

「そうだ、そうやって前を見てろ。僕は、お前の副官なんだからな。兵の家の全員が、これを見ている。どういう事が、解るな……？」

王から直々に師士の座を拝し、士隊長の中でも一番の実力者であるファー・スタインを従える。それは、王家の軍勢を完全に掌握するという事を意味していた。イド・ルグスが身に付ける簡素な胸甲と具足をじろりと見て、スタインが呟く。

「……その胄も、後で改めんとな」

彼の装備は、その多くが革であつた。金属はごく一部に使われ、それ以外の部分は全て柔らかく使い込まれている。長年愛用し、戦鉾を振る上で必要な胄であつたが、士隊長の誰の装備より見劣りすることも事実だった。

（つまり、師士に相応しいものに変えるという事が……）

イド・ルグスは、スタインの考えている事がよく解っていた。五人の士隊長が別個に率いていた兵の家であつたが、この集団には今、団結の核と求心力が必要とされていた。確かにそうではあるが、と思う。

夏の暑さが、徐々に地面から這い上がってくる。イド・ルグスが手を振ると、林に隠れていた騎兵が隊伍を組みながら出てきた。抱

鉄の前まで馬を駆けさせると、そのまま整列する。青草の茂る足元に蹄の震動が微かに伝わり、背後のスタインがぼそりと訊いた。

「おい、あれの中身は空なんだろ……？」

彼の言う通り、用意された抱鉄の中に焰硝は入っていない。この兵器の開発とは要するに、焰硝を爆発寸前の状態に保ちつつ、なおかつ爆発させないという矛盾の解決が目的であった。しかし、何事にも完璧を期待できる筈はなく、本物の抱鉄をこれ見よがしに積むのは正気の行いではない。

イド・ルグスが頷くのを見て、スタインが額に浮き始めた汗を拭った。背後の陣容を眺め、息を大きく吐いて言う。

「長丁場になるかもな。領家の連中が、さっさと腹を括ってくれりゃあいんだが……」

振り向いた彼が拳を振ると、楯兵が動いた。それぞれの士隊長に従い、半数が跪休する。さらに背後の林の中では、下馬した別の騎兵の一隊が、交代のために待機していた。

だが、イド・ルグスは領家の者たちが、何らかの反応を示すまで待つ気はなかった。正午になれば、自らが城市に赴いて談判する。スタインには言わぬが、そう決めていた。

（この様な威圧で、解決すべき問題ではない）

それが、イド・ルグスの率直な意見だった。そして彼は、自分自身と、スタインを含めた自分以外の軍勢との間に、微妙な温度差があるのに気づき始めていた。背後に並ぶ楯兵たちの眼は静かな高揚に彩られ、普段通りの躁を感じさせるスタインも、その表情に底の抜けたような軽薄さがあつた。さらに、馬上で隊伍を保つ騎兵たちにも、同様の昂りを見る事ができる。

兵の家はこれまで、王家が所有する唯一の武力であり、王の所領を警護する重大な役目を負ってきた。しかし、聖約の存在がその権威を担保する現在の王朝において、彼らは必要悪ともいえた。そのため、王に仕えながら王の輩の一員とは見なされず、その一生を武芸に費やすのである。また、彼らは社会から弾き出された下層民の

子供である事が多かった。メデイトリアでは、罪人として裁かれたり重い過失を犯した者は、見せしめとして厳しい罰を受ける。それには、死罪ではなく土地や権利の没収といった処分が適していた。生活の手段を失う事が、彼らの世間では極刑に等しいのである。処分された者の運命は様々であるが、その子供たちが兵の家の門を叩くのは自然な事だった。それでも、従士として選ばれ、ここにいる者たちは運に恵まれている。そういった受け皿からも漏れた場合、居場所を探してさすらいしかない。だが、彼らの将来に明るい展望は用意されておらず、それ故に人々は秩序を好むのである。それは、この国が持つ厳しい一面でもあった。

兵の家における人事は、王が管轄するとされている。だが、平時に使用するのは各部職の長、あるいは家宰だった。彼らが誰に帰属するかは常に曖昧であり、戦時の指揮権を含めて確たる規定はない。数百年を数える王朝の均衡において、それを明らかにすることは逆に危険とされたのである。そのため、士隊長において実行力は必ずしも美德とはならず、シユマロ、オフィル、リュコスの三人はその意味で善良な士隊長だといえた。

だが、このように日陰者の宿命を常に持つ彼らも、今は違っていた。勅命の下に神託の兵器を抱き、王家に次ぐ勢力である領家の本拠を威圧する。それが、現在における彼らの姿であった。戦うことだけを期待され、それ以外に顧みられる事のなかった無名の兵士たちは、もういない。

ごうん、という重々しい音と共にカシアスの正門が開かれた。半開きの扉から三騎が出てくる。先頭の一匹は銀色の葦毛で、鞍を雉の羽で飾っていた。バルシオ・カシアの使者である事は間違いないかった。馬に鞭をくれながら橋を渡り、土埃を残して王都へ続く街道を駆け抜ける。

三騎が姿を消すと、王家の軍はしばし沈黙し、そしてどつと沸いた。スタインの笑い声が空に響く。彼らにこの状況が何を意味するか、解らぬ者はいなかった。自分たちに恐れをなし、狼狽気味に使

者を送り出した領家の者たちに、罵声を浴びせる。興奮して楯を地面に打ち付ける者、脱いだ兜を高らかに掲げる者。彼らを率いる士隊長らも、昂った表情を隠そうとしない。

そしてイド・ルグスは、この光景を見たことがある、と思った。かつて帝都に単身で赴き、軍団の丘に起居していた頃。ブルー・ダブー率いる第二軍団がキリアへの派遣を命じられた時の、欲望と恐怖をない交ぜにした将兵の興奮と高揚。あの時、全くそれに共感を持たなかった彼も、今は違っていた。共に戦い、共に勝ち取る。そこに宿命を甘受する潔さなどなく、生々しい感情だけが脈打っていた。そして心に伝わったその熱が、彼の感じていた温度差を埋めるかに思える。

だが、イド・ルグスはどこか硬い表情で彼らを見ていた。余りにも早い仲間たちの変化が、じりじりとした何かをその心に残している。また、彼が王に協力を誓ったのは、あくまで立場の弱い彼女を助け、政治的均衡を保つ事が目的であった。しかし、王を巡る力関係は予想外の動きを見せており、そういった誤算も彼の感情から熱を奪っていた。

仲間たちと同じく、彼の生い立ちも不遇であった。コノス語の弁通士であった父は、イド・ルグスが幼い頃にその生業を失った。かつては、王家の勅許を与えられた国外の貿易商が定期的にエスーサを訪れていたが、ボルボアン王が彼らの入国を禁じると、民間におけるコノス語の通訳は必要なくなつたのである。身分の固定されたこの社会において、職そのものが消滅することは珍しかった。メデイトリアでは、村々を巡る芸人たちですら彼らの職座組合があり、家長は必ず何らかの権利を所有していた。この国では、土地や権利を持つことが、生活の基盤である。数少ない弁通士としての生業を失った一家は、王の温情により耕地を与えられた。だが、王都を離れた彼ら三人が、村邑に馴染むのは難しい事であった。そのせいか、十年を経ずして父は亡くなり、その翌年に母も世を去った。

だが、イド・ルグスはその事を恨んではいない。彼の父は、農夫

になっても息子にコノス語を教えることをやめなかった。それは、周囲の者にエスーサでの豊かな暮らしに未練があると思わせ、帝国語であるコノス語を捨てない姿勢もまた、デロイに対する危機感を強める邑民の反感につながっていた。幼いころは理不尽に感じていたが、今のイド・ルグスは父の行いが愚かなこだわりであったと、充分に理解している。

突然、何者かに肩を激しく叩かれ、彼が振り向いた。

「何だ、湿気た面しやがって」目尻を下げたスタインが、その首を掴んで引き寄せる。顔を覗きこみ、彼の眼が鋭く光った。「イド……。辺りが落ち着いたら、きっちり兵をまとめる。俺の努力を、無駄にするな」

低い声でそう言うと、スタインは笑いながら離れてゆく。シユマ口らに声をかけ、冗談交じりに言葉を交わす彼を見ながら、イド・ルグスは思った。

（……スタイン殿に、迷いはない。もう、後戻りは出来ぬ）

彼の眼が、王都の方角を見やる。心の中に、しこりがまだ残っていた。

（本当に、これでいいのか。王は、我々をどこへ導こうとしているのだ……）

そこには、雲ひとつ無い空があるだけだった。

十

十

領家からの使者が、次々と王都に到着していた。さらに、それを迎える家宰たちに、王が兵の家を掌握し、領家の所領へ向けて動員した事が報告される。この件について、王からは何の言葉もなく、全てが事後の連絡であった。オシアでの王と士隊長の対立を見て、両者が結託する事はないと考えていた彼らには、全く予想外の展開だった。

開かれた朝議の場で、全ての領家が王家への全面協力を約束する

と、デロイの脅威に武力で対抗することに重臣たちも同意した。だが、家宰らの意見は力によってねじ伏せられたも同然だった。兵の家には、帝国軍の侵攻を退ける策戦の立案が命じられた。それを王と三領家が承認すれば、メディトリアとしての最終的な決定が下される事となる。

この一件により、王と重臣の間には深刻な断絶が生じていた。王家では、家宰におもねる者が王への協力を拒み、彼女も正殿で政務を執ることをやめた。だが、王の行動を制止する事はできず、重臣たちも着々と進められる戦役への備えを見守るだけであつた。

（陛下は、何故　　）

侍従長、ジジ・スタコックは考えていた。正殿の中で、浅い息を吐く。

（　　何故、我らを蔑ろになさるのか）

幾度となく繰り返された問いを、心で呟いた。王がオシアより帰還した直後に開かれた、諮問の場での出来事が脳裏に甦る。

（あの時、陛下はあえて領家の意向を確認する方向に我々を誘導したのだ。ご自身は、その結果を知らながら……。全ては、計算づくで進められた事であつた）

考えながら、歩みを進める。他の重臣たちと比べ、彼には王の行動を理解しようとする心があつた。これまでの事から、彼女が亡き父であるボルボアン王を意識しているのは間違いない。だが、単純に先王の遺志を継ぐという事にも思えなかつた。現状を確認するまでもなく、王は孤立への袋小路に入ろうとしているのである。重い頭を抱え、ふらりと入った広間に家宰サンク・タルムがいた。

「家宰殿、まだおられたのか……」

つい先ほどまで、ここでは重臣による朝議が行われていた。主のいない正殿に集まった彼らは、今後の方針をいくつか決定した。現状で最も懸念されるのが、兵の家への補給である。重臣たちは、その意思表示として王に対し非協力の態度で臨んでおり、王もまた同

じ姿勢であつた。だが、もし王と結託する兵の家への配給物を断てば、彼らとの衝突は免れられない。その結果、従士たちが武力にものをいわせる事態となれば、取り返しの付かぬ混乱が始まることになる。彼らの実行使を阻止する事は、誰にもできない。

それはあるまい、といった常識はすでに消滅していた。王と彼らによる専制の扉はすでに門を外され、領家の当主たちもその軍門に降つたといえる。少なくとも、自らがそれに触れることを避けるため、兵の家へはこれまで通りの割当てが守られる事となつた。

「……侍従長こそ、何をしておられる？」

目を通していた皮紙から視線を逸らさず、家宰が答える。デロイとの戦いにおいて、さしあたって必要なのは食料と物資であつた。何をどれだけ掻き集める事が可能か、その情報を握れば、王に対し幾らかでも優位に立てる。彼は、そう考えている様子だつた。

広間に入つた侍従長が、家宰の持つ目録を眼にした。

「そんな物で、陛下のお心は動きますまい。私にブリグンド様のお考えは解りませぬが、今は我々の事を必要としておられぬのでしよう……」

抜け殻のように呟いた。そもそも、彼ら重臣たちが慎重論を主張したのは、若き王を慮つての事でもあつた。もし開戦となれば、あらゆる責任が彼女に集中する。現状の圧倒的劣勢を鑑みるまでもなく、それは余りにも過酷な試練といえた。彼らの言い分は確かに消極的ではあるが、前回の戦役で帝国に痛手を負わせたことも事実であり、交渉の余地が無い訳でもない。また、そうして時間を稼ぐなら帝国の周辺における状況変化も期待できるだろう。さらに、次の神託を授かる事もあり得ない話ではない。だが、そういった議論を王と交わす機会はなく、彼にできるのはこうして嘆くことだけだつた。

そんな侍従長を一瞥もせず、家宰が口を開く。

「お見苦しいですぞ、ジジ殿。我々は、王家そのものと言ってもよい存在。その力なくして、アルダネス朝は立ち行きません。これか

ら、その事を陛下に学んで頂きましょう」

それを聞き、侍従長の胸にずきりと痛みが走る。それを教育するのが、彼の役目だったはずである。即位の時点では自分を誇らしくも思っていたが、今は痛恨の念がその心を貫いていた。皮紙を丸め、ようやく侍従長へ目を向けた家宰が、穏やかに言った。

「少なくとも、ジジ殿は陛下に知恵を与えられた。ならば、ご理解下さるでしょう」

家宰の冷やかな笑みを見て、侍従長が老いた顔をうつむかせる。

「……私の成した事など、何もありません。思うに、陛下の持つ資質は、今は亡きテヘラ様より授かったものでありましょう。争えませんが、血筋というものは――」

先王ボルボアンの第二妃は、テヘラといった。彼女はサンク・タルムの実姉であり、王家に名高い才女であった。家宰は王と同じく終身職であり、後継者は家宰自身が指名する。サンク・タルムの一代之前の家宰であった彼の父が選んだのは、このテヘラだった。だが、ボルボアン王は彼女を妃に召し取ってしまったのである。全ては優秀な子を得るためであり、すでに何度かそれに失敗していた王が、万全を期して選んだ相手であった。

後継者を失ったサンク・タルムの父は、侍従官となりボルボアン王へ仕えていた息子呼び戻すと、次の家宰に指名した。家宰の子は様々な職を転任し、王家の全容を把握する事がその務めである。だが、サンク・タルム自身は姉を敬愛し、彼女が家宰を継ぐことを望んでいた。彼の運命も、王によって変えられたのである。だが、王妃となったテヘラはダナを産み落とすと、役目を終えたように死んでしまった。やがて、サンク・タルムの父が引退すると、ボルボアン王と家宰サンク・タルムが王家の中心となったのである。

そして、彼らに神託がもたらされたのは、カシアスの戦いの一年前であった。侍従長ジジ・スタコックといえど、その顛末は詳しく知らされていない。ただ、王が夢の中でそれを授かったと聞くのみである。彼は、ボルボアン王がそれ以前から王陵の玄室に長時間こ

もり、家宰と共に過ごしているのに気づいていたが、それが何らかの儀式なのか、あるいは祈祷なのか、知らされる事はなかった。要するに侍従長といえど、王家の深奥にいる訳ではないのである。そして、その何らかの行為は王女ダナに引き継がれたようであり、教育係としての彼の役目は、事実上その時点で終わっていた。

その後、学師たちによって焰硝が調査され、抱鉄という兵器の開発が始まった。原料は硫黄と炭、そしてメデイトリアの西にあるユニオノ山脈の高山地帯から掘り出される薬石だった。それは『石の塩』と呼ばれ、神託が下されるまでこの石の存在を知る者は、誰もいなかったのである。

だが、侍従長の言葉に対し、家宰は表情を見せない。口を開き、乾いた声を放った。

「我らの存在は、王家そのもの。たとえ王であろうと、我々には従って頂く」

その眼にある光を見て、侍従長は思った。この方は、自分たちとは違う。自信を失いつつある王の輩の中で、かつての自負を持ち続けている。その様子に、侍従長は少なからず安堵していた。だが、ふと考える。この方を支えているのは、いったい何なのか。先王の崩御を皆が悲しんでいる時も、この方の瞳の輝きは変わらなかった。この方は、我々とは違っている。しかし、何故この方だけが。

十

十

聖密院の賓殿に、イド・ルグスが呼ばれていた。オシアから彼が帰還して、約二十日が経っている。帝国との戦いを見据え、すでにメデイトリアは慌ただしく動いていた。王家は元より、カシア、ダルキア、アビウスの三領家も国軍の召集に備えて員数と馬匹を検め、兵練に余念が無い。王の迅速な実権掌握によって、備えは着々と進んでいた。だが、前回の戦役からようやく一年を経る彼らに、その兵力の回復は望むべくもなかった。

大聖門を独りでくぐったイド・ルグスの昇殿を迎える者は少なく、彼らもすぐに姿を消した。謁見のしきたりなどは一切無視され、すでに一对一の問答になっている。デロイ軍に対する策戦の立案を命じられた兵の家の代表として、彼は呼ばれていた。

カシアスの戦いを行った一年前より状況は厳しく、軍略を編むことも難儀であろう、と王が慮る。しかし、その様子を深刻さはなかった。確かに軍勢の数については心細いものの、抱鉄の備蓄は着実に増えていた。学師カイネを始めとする者たちが、焰硝の調合法に改良を重ねた結果である。イド・ルグスが開いた兵の家の軍議でも、この事を受けてスタイン以下の土隊長は、事態を樂觀する様子を見せていた。

だが、王に現在の首尾を尋ねられた彼は、意外な答を口にした。「我々がいかに戦うかも重要ではありますが、重臣の方々の協力を得られぬ現状についても、憂慮すべきかと存じます」

下問を無視するかのような返答に、その言葉を滞らせたダナであったが、穏やかに答えた。心苦しくはあるが、緊急時ゆえの措置である。危機が眼前に迫る中、王家内部の意思統一に時間を割く事は致命的な過ちになりかねぬ。それが、彼女の返事だった。

彼は、抱鉄についても尋ねた。カイネ以下の学師は家宰に与していたが、抱鉄はイコフらの王を支持する侍従官が、すでに接收を行っている。だが、その生産が中断されている事も、確かであった。

「兵器の保全には、学師の存在が不可欠です。また、現在の備蓄で充分という根拠はありません。これらの事が、いずれ致命的な過失となる可能性もありますよう」

何事にも、優先順位というものがある。そう答えるダナだったが、さらにこの事を追求するイド・ルグスに、思わず口調を強める。

「ならば、兵器に関わる者たちを帰順させればよい。彼らは、家宰の顔色を窺っておるだけだ。強く圧力をかければ、他愛もなく屈しよう」

さらに、物資糧秣の収集はどうするのか、王都防備の普請はどう

するのか、彼が鋭く問いかける。逐一の指摘に苛立ちを隠せなくなつたダナが、ついに気色ばんで言った。

「イド・ルグス。緊急時ゆえの措置であると、初めに言つたはずだ。力による解決は、全てやむを得ぬ事である。お前は、いったい何を言いたいのだ……？」

大きく息を吸い、目を見据えた彼が口を開いた。

「わたくしのかつて知る玉座とは、このように厳しく、そして孤独なものではありませんでした。王は、あらゆる穢れを廃したこの院で暮らし、慎みを湛えた侍従に護られ、賢明で思慮に富んだ朝臣に支えられ、この国の全ての領民に奉られておりました。その事はつまり、王が王である事の所以でもありました」

ぐい、と顔を上げたイド・ルグスが、王に視線を投げかける。

「ですが今は、院にわたくしのように血腥き者が入り浸り、侍従の大半は仕える事を止め、臣下の者も混乱しておるのが実情です。領民がこの事を知れば、心を痛めるでしょう」

王の静かな眼が、言葉を続ける彼を見ていた。

「確かに、帝国と戦う事に異存はございません。彼らは、欲望と恐怖に支配される人々です。その愚行を思い止まらせようとするなら、いま一度の脅威を感じさせる事が必要でしょう。我ら兵の家に属する者どもは、そのために居るのです」

彼の声が、頭上で弧を描く理石に響いた。

「ですが、それは陛下の行いに過ちがあつてよい理由にはなりません。もし、今のように強権的なやり方を続けるなら、王家の統率だけでなくメデイトリアの統治そのものに、大きな変化を生じさせかねません。ならば、せめて対立を深めるようなご姿勢は避け、彼らが陛下に歩み寄る機会を設けるべきと思います。これにつきまして、何卒ご再考頂きたく存じます」

深々と、イド・ルグスが頭を垂れる。目を閉じて浅い息を吐き、王が答えた。

「だが、そんな事をしては、間に合うものも間に合わなくなる。

問題はあくまで時間であり、私は最も迅速な方法を選択しただけだ。オシアの惨状は、お前も見ているだろう。王家の存続という名分があっても、帝国の支配を受け入れる事はメデイトリアにとって災厄でしかない。塗炭の苦しみを味わってから、失策を挽回することは出来ぬのだ」

ゆつくりと面を上げ、イド・ルグスが口を開いた。

「……陛下、たとえ我らがその災いから逃れたとしても、今のままでは王権の歪みが必ず生じます。僭越ながら申し上げれば、己の分限を超えた力を持つことは、不幸の始まりに過ぎません。現状の王と兵の家の専横は、高く積まれた石の様に不安定なものです。それが今日における最善であると主張し、その害が将来に及ぶのを見過ごすなら、我らはあのデロイ貴族たちと何一つ変わりません。また、彼らはそういった事を皆で議論しますが、今この場で意見を述べる者は、わたくしと陛下の二人しかおりません。ならば、我々の行いは彼らより醜悪であり、それが過ちであることは聖約の文言に照らすまでもなく明らかです。このままでは王家が、ひいてはメデイトリアの民が、神々に見放されかねませぬ。策戦についてはわたくしが準備を進めますゆえ、陛下におかれましては、まずは重臣の方々のご協力を得られますよう、重ねてご再考をお願い申し上げます」

「

その眼差しの中に、イド・ルグスの決意が見て取れた。いま、自分の目の前でメデイトリアという世界を動かす巨大な歯車が狂いつつある。これだけが、彼がその迷いの中で正しいと思う唯一の事だった。長い沈黙があり、やがて王が口を開いた。

「私には、二つの異なった目的がある。メデイトリアを外敵から護ることは当然であるが、為政者である私はこの国の将来も視野に入れねばならん。これは、お前の言わんとする事と意味は似ている。だが、お前がまさに心配している事こそが、私のもう一つの目的であるのだ。今、はつきりと言っておこう。この先、玉座の存在によって守られるものなど、何ひとつ無い。どんな物事にも、必ず

限りというものがある。もし、輪神の存在が絶対であるとしても、彼らが生まれる前には何が神であっただろうか。それは、永遠ではない。今という時代も、その断片にすぎん。我らが守る聖約の前に、聖約はあったか。おそらく、それがあある期間より無い期間の方が、はるかに長いだろう。ならば、我らのすぎる玉座など、実に儚いものである。どこかで誰かが、それに気づかねばならん。その判断を、王以外の何者が下せるだろうか。私は、確信をもってこの事に臨んでいる。故に、改めることは何も無い。残念ではあるが、これが私の結論だ……」

一気に吐き出された王の声色が、微かな余韻となつて漂う。露わになった彼女の思惑が、イド・ルグスの意識にねじ込まれてゆく。どくん、と彼の心が跳ねた。ぞくぞくとした寒気が、足元から這い上がる。彼が、視線を上げた。その瞳は、鈍い光を帯びている。

「……陛下。ならば、これまでの事は苦渋の決断でなく、それが目的であつたと？ アルダネス朝の血を享ける者として、その様な暴挙が許されると思いか……？」

粘ついた声を受け止め、王が答えた。その響きは、あくまで澄んでいる。

「確かに、これまでは許されなかつた事だ。しかし、それを変えた者がいる。全てを転回させる支点となり、状況は一変した。その者とは、つまりお前だ」

それを聞いて、イド・ルグスの鼓動が早まる。胸に絡むその言葉を否定しようとしたが、できなかつた。彼の心の空白を衝いて、王が語りかけた。

「イド・ルグス、我らに残された猶予は少ない。お前も、そろそろ覚悟を決めねばならん。だが、その前に知るべき事がある。付いて来い」

玉座からすつと降りたダナが、ひたひたと歩いてゆく。寶殿を出ても、要所に詰める衛士がこの二人を見咎める事はない。戸惑いながらもその後を追うイド・ルグスが、足を止める。そこには三つの

巨石が地面から生え、その上で分厚い板岩が蓋をしていた。

ここは、王家の陵墓であつた。その空間の中に、地底へと通じる石段が薄暗く見えている。神聖な陵の入口が、まるで氷山の一角のよう、にその姿を露わにしていた。

【第七章】 輪神と鉾

エスーサの空に、人夫たちのかけ声が響いている。デロイ軍の攻囲に備えるため、王都では外壁や門、城市内部に至るまで補修と増築が行われていた。工事に関わる人手は日に日に増えはしていたが、その数はまだ少ない。彼らは、士隊長らが直接に徴募した王都の住民である。予定された賦役を履行しようとしないう王の輩たちに、痺れを切らした結果だった。民衆たちは、王家領家の慌ただしい動きと錯綜する噂に混乱していたが、最近になってようやく正しい情報が伝わり始めており、兵の家の呼びかけに応じる者は今後増えるものと思われた。

目下の作業として、濠に溜まった土砂を掻き出す人夫に交じり、スタインらがいた。壁を造る石積みを行う時などは、口でやかましく指示を出す彼らも、この地道な作業に対しては身体を使って手本を示すしかない。このエスーサという都は、カシアスやダルカスといった街に比べ、その防御力は数段落ちるものと彼らに認識されている。最奥部にある聖密院は鉄壁の備えであるが、都市として発達しすぎたことが外郭部の城砦機能を損なう原因となっていた。この四人の士隊長は、先王の命により王都のそこかしこに見られる築城普請の古法を解析し、会得している。少なくとも、そう思っていることは確かだった。そんな彼らに、己が保有する蘊蓄を死蔵させる気など欠片もなく、小規模ながらも工事は着々と進められていた。

昨日、兵の家の営地では演習が行われていた。だが、王都の一角にあるその場所は今、静けさに包まれている。平素から実戦さながらの訓練を行う彼らに怪我は絶えず、この時期にこそ休養が必要だった。演習も、土気の引き締め程度で終わっている。伍番隊が組織する騎兵だけはそのまま野駆けを行い、山野で馬の仕上がりを試す。翌日の昼、つまり今しがた帰営した彼らも三々五々と解散していた。ウル・メイノスは、営地の裏門に立っていた。休日である今日、

従士たちには外出も許可されている。待つ人のいる者、娑婆の空気を吸いたい者はすでに街へ消えており、人影は薄い。見えるのは、庭場で士長に怒鳴られながら天幕の設置と撤去を行っている新兵たちだった。

（まだ、やらせてやがる。しつこい奴らだぜ……）

メイノスが目を薄める。しごかれていたのは、士長らが行った抜き打ち試験で落第した者たちだった。要するに、営設の訓練を怠っていたのである。戦技ばかりに気を取られる新兵にはよくある事であった。実戦においては迅速な行動が必要となるため、当然の処遇ではある。だが、彼らのしごきには上下関係を叩き込むという意図が常を感じられた。

今は伍番隊の士隊長代理を任されているメイノスだったが、自隊ではこういった厳格さを一切認めていなかった。選り抜かれた従士二百五十名がこの隊に所属し、二百騎が軽騎兵として、残りは精鋭中の精鋭である五十騎隊として編制されている。これらの騎兵は、国軍の眼となり耳となるべく創出された。この隊の設立と時期を同じくして領家も騎兵を擁するようになったが、単純な戦闘要員である彼らとは性質も錬度も完全に異なる。少数で戦場の奥深くまで浸透し、生きて帰ることがその主たる使命だった。それゆえ、規律によって束ねるを良しとする楯兵とは、一線を画している。

彼らの生還に必要なのは、鋭敏さと柔軟性であった。たった数騎で任務に挑む事が当然である彼らには、上下関係などあつて無いようなものである。互いの能力に対する信頼が、彼らの規律といえた。ある者が未熟であるなら熟練者に従えばよいのであり、能力の均一化のためにしごきを行うのは無駄な事だとメイノスは思っている。だが、戦場において逃げ場のある騎兵と、逃げる事が敗北に直結する楯兵では、物事への処方が当然違う。歩と騎は、その戦い方においても考え方においても、相容れない存在であった。メイノスとて、それが解らぬ訳ではない。だからこそ、黙って見ているのである。

馬に関するあらゆる技術と知識を、彼らはバルバル族から学んだ。この蛮族は、メデイトリアのウラトル高原に住む遊牧民だった。エキル人にとって未踏の地であるユニオノ山脈を越えてこの地に来たといわれる彼らは、アルダネス王朝の成立以前からメデイトリアに定着しており、王家との数度の抗争の後に帰順した。現在は、凍てつく山脈を越える能力を失った彼らであるが、その優れた騎馬技術は誰しもが認めている。国軍の召集において彼らの集団はバルバル騎兵とよばれ、欠かさざるべき存在であった。

イド・ルグスの指揮の下、先の戦役に参加した伍番隊は、その能力の優位性を存分に発揮した。先導部隊としてメデイトリアに放たれたデロイ軍の偵騎を狩るように討ち、軍勢をまとめて退く彼らを殲滅したのである。カシアスでの会戦に先立つ両軍騎兵の前哨戦であり、これ以降は帝国軍もその偵察活動を縮小するしかなかった。

（ならば、ボルボアン王はなぜ死んだのか……）

メイノスは、ふと思った。戦場の下見を行っていた王が、カシアスの森でデロイ軍の兵士に射られたのはなぜか。接近しつつあった第一軍団は、確かに大軍であった。その周辺には騎兵が配され、警戒線が敷かれている。だが、伍番隊の餌食となるのを嫌って、彼らはそれよりも遠くに斥候を放つ事はなかった。そうであるはずだった。

時が経ち、彼は夕暮れに包まれていた。新兵たちがいた場所には、綺麗にならされた地面だけが残っている。辺りを見回したメイノスが、門から顔を出す。昨日の演習の後、王に呼ばれたイド・ルグスは今朝早くに昇殿していた。こういった事は密命の形で伝えられるため、それを知るのは士隊長とメイノスだけだった。スタインたちは何事もなかったかの様に工事の指揮に向かい、メイノスだけが彼の帰りを待っている。

（長すぎる……。何かあったのか……？）

謁見がここまで長引く理由とは、何であろうか。あれこれ考えを巡らせながら通りの雑踏を見ていたメイノスは、その先にイド・ル

グスがいることに気づいた。道の端を、目立たぬ様子でゆつくりと歩いている。

（ようやく、戻ってきやがった。……あんなに用心しなくていいのによ）

兵の家の従士には、王朝の保有する兵力として以外にも、多くの役割があつた。そのひとつが、王家の法務官と協力し治安を守ることだった。そして、彼らが法の執行に力を貸す場合、人々の恨みをかうこともしばしばある。武装を解いて街中を歩くときは、なるべく市民を装いながらも、気を抜かない事が鉄則であつた。

痺れを切らし、メイノスが手で招く。だが、反応は無い。ようやくイド・ルグスが門へと入った。一步引いたメイノスの前を、無言で通り過ぎる。その背を見て、メイノスがむっとした表情で口を開く。

「おい！ 無視かよ……？」

イド・ルグスは振り向き、ようやく気づいた、という顔で答えた。

「ああ……。お前か」

全身を見回し、メイノスは違和感を覚える。

「……随分遅かったな、もう夕方だ」

そう言い、彼の姿をもう一度確認した。今朝のままに見えたが、何かが違っている。

「何か、あつたのか……？」

表情を窺うように聞くが、イド・ルグスの言葉は無かつた。

「しばらく、外出する」

ようやく、声が返ってきた。

「今からか？ まず、スタインたちを呼んだ方が……って、おい？」
庭場を横切る道を、イド・ルグスは進んでゆく。厩舎に入ると、手近にいた馬に馬具を載せて出た。追ってきたメイノスも、同じように馬を曳く。

「……おいおい、どこに行くんだ？」

「明日の晩には、戻る」

そう言うと、イド・ルグスはするりと馬に乗って駆け出す。慌ててその後を追うメイノスが叫んだ。

「どういう事なんだよ！」

閉ざされる寸前の門を潜って、二騎は王都を出た。だが、丘を下って街道にさしかかる前に、メイノスとの差を広げる馬影が消えた。強引な操縦を嫌って、彼の馬が脚を鈍らせる。完全に振り切られたことを悟ってなお、手綱を握り続けた。

「……畜生め、どうなってるやがる」

街道をしばらく走って、メイノスはようやく馬を停めた。薄暮の空に、明星がくつきりと光っている。

逃げられた。それは、彼が始めて経験するイド・ルグスの態度だった。さっき見たのは、本当に奴だったのか。そんな気さえして、首筋に寒いものを感じる。

「くそつ、いったい何だつてんだ……！」

すでに、地平は闇に隠されていた。彼の吐いた言葉が、その暗がりの中に消えた。

十

十

岩の上に無数の石が載せられ、その石の上には夥しい礫が積まれていた。さらに蔓草の網で密に包まれたその塊は、根を生やしたように泰然と落ち着いている。

草生した石社の前に、イド・ルグスはいた。道らしい道も通じず、雑木林が開けただけの空間から星々が見下ろしている。この古びた祀り場を知る者は、おそらく彼以外にはいない。イド・ルグスはここに来るたびにそれを再確認し、そして思索に沈む。エスーサの北にある、兵の家に与えられた禁領の片隅に、この祠はあった。

現在、メデイトリア全土の祠を管理しているのは王家の神祇官である。だが、ここにあるような小型の石社は、彼らにも忘れ去られる運命にあった。こうした遺跡は少なくないが、その存在に気を留

める者はいない。それは、長年の王家の統治によって、人々の信仰する対象が変化している事を物語っていた。

イド・ルグス自身は、その事に何の感慨も抱いてはいなかったが、今は違っていた。ここは、士隊長として、そして師士として構想を尖らせ、思考を深めるために使っていた場所だった。今は月明かりだけが照らす、その祠を見つめる。闇に根を張るそれは、完全に林の一部へとけ込んでいた。

メイノスには、悪いことをした。そう思う彼だったが、脳裏には王陵での出来事が鮮明に焼き付いて片時も離れない。イド・ルグスが王と共にあの場所へ入ったのは、太陽が真昼の輝きを放ち始めた頃だったろうか。促されて歩みを進め、闇の中に見える入口へ潜っていた事を思い出す。

「そこで目を慣らせ。下り坂だ、狭いぞ」

先行する王の声が、地の底から響く。ひんやりとした羨道に立ち入ったイド・ルグスは、視界を失って立ち尽くしていた。暗がりについてうつすらと見え始めた左右の壁は、こぶしほどの丸石で埋め尽くされている。

不気味な卵のように思えるそれに手を這わせつつ、進んだ。爪先の彼方に歴代の王が眠っている事を感じ、イド・ルグスの足運びは畏れに満ちている。果たして、自分にこの場所へ踏み入る資格があるのか。それを問うべき王は、はるか先に消えていた。

微かな風に土のおいを感じながら、闇に溶ける天井がいつまでも続く。やがて、左手に光が見えた。そちらからの声に導かれ、入口らしきものを這いつくばって抜けると、ようやく足元が明るくなった。周囲は割石を積んだ通路であり、先ほどまでの羨道とは異質に感じられる。入口の辺りを見回していた彼が、声に呼ばれた。

「何をしている？ 早く来い」

通路を抜けると、光が目射した。そこは、石室だった。四、五人がゆったり過ごせるほどの空間が広がっている。王は、手に持つ

た種火を最後の燭台に移し終えたところだった。吹き消された火口が、紫煙を上げる。

壁際に、方机と座台がいくつかあった。小さな文具棚と共に置かれたそれは、相当に年季が入っている。壁の燭台の上には黒い煤の斑が天井まで続いており、そこには空気穴のようなものがかかるうじて見えた。石室の奥は、間口を隔ててさらに別の空間につながっている。王がそちらに目をやり、イド・ルグスの視線をその先に導いて言った。

「あの玄室に、わが王家に伝わる古文書が保管されている。書かれた年代は定かではないが、本当に古いものだ」

台形の断面を持った空間が、かなりの奥行きまで続いていた。天井は狭く、傾斜のある壁は重厚な積み石である。壁面には数段の溝が横に掘られ、その場所に装丁の朽ちかけた巻物が隙間なく詰められていた。

「私はこれを、父から受け継いだ。その巻は五百を下らぬが、我々は単に伝書とよぶ。数巻から数十巻で大項を成し、それに属する事柄を余さず記している。我らにとって大いに役立つものであるが、人に与えられた公界の百科には遠く及ばぬ」

明確な意図も告げられぬまま、王家の陵墓に立ち入る緊張に身を固くしていたイド・ルグスであったが、今は声を出すことすら完全に忘れていた。

「とはいえ、これらの書がこの国にある知識と明らかに異なることは、疑問の余地がない。父上の授かった神託も、ここにあった。我々は、それを見つけたに過ぎん。まあ、こう言ってもお前には何の事だか、解らぬだろう」

岩の中に納められ、燭火の届かぬ先まで続く文書をイド・ルグスは呆然と見る。ひきつった彼の表情に目をやり、王が言った。

「私も、何から説明すればよいか迷っている。この伝書の存在を知る者は私と家宰だけだが、お前もこの事を知らねばなるまい。まずは、過去の出来事から順をおって話そう」

ゆらゆらとした光に囲まれながら、彼女は声を響かせる。

「……かつて、これらの書は王陵の片隅で朽ちゆく由来不詳の遺物であった。この玄室にこうして納められ、代々の王から父へ、そして私が受け継いだ今も、それは変わっていない。ここに立ち入ることのできる者ならば、興味から必ず一度は文書を紐解くだろう。だが、中を見たとしても、めまいを催すような文字がびっしりと書かれているだけで、読むことは出来ない。父上も当然そうだった。その後、父は即位して帝国への対処法を模索し始めた。その過程で多くの侍従官を国外へ放ち、様々な情報を集めた。デロイに対抗する上で父が最も重視していたのは、新しい知識だった。」

そう言って目を閉じ、王はゆっくりと息を吐き出した。

「ある時の事だ。父は、ガルバニアで手に入れた写本にどこかで見たような文字があるのに気づいた。それは、楔形の紋様を組み合わせた独特の姿をしており、あの古文書に記された文字とよく似ていた。そのとき父が何と思ったか、私は知らない。だが、即座にそれについての情報を集めさせた所を見ると、何か予感のようなものを感じたのかもしれない。やがて父は、文書を解読する糸口を得た。帝国ではその文字についての研究が進んでおり、金さえ積みめば必要なものは手に入る状況だったのだ。無論、父はそうした。そして、家宰にこの事を打ち明け、書の読解を共に進めた。巻物に書かれた記事は、闇夜の中を目隠しで這うがごとき模索を続けるふたりにとって、興味の尽きぬものであった。記されていたのは、天文、地理、植物、鉱物、医術、算術、農学、工芸、建築、軍事、兵器……。ここまで言えば、ふたりが何を探し出したか、見当がつくだろう。そこには焰硝なる薬と、それを用いた種々の兵器について書かれている。記事には、正に切り札といえるその威力が詳らかにされており、父がその兵器に並々ならぬ興味を抱いたことは容易に想像できる。だが、その期待も程なくして失望へと変わった。焰硝を調合するには『石の塩』という薬石が不可欠であるが、それがいったい何なのか、まったく見当がつかなかったのだ。もちろん、その後も文書の

解読は続けられたが、やがてふたりは軍制の改革に取り掛かり、この場所に足を運ぶ機会も少なくなった。父に命じられ、私が王陵を預かる事になったのは、ちょうどその頃だ　　」

壁に向けた視線をイド・ルグスの方へ移し、彼女が言葉を続ける。「それはつまり、王位を継承するのが私であるという事だった。当然、書の内容についてでも聞かされ、私は多忙な父と入れ替わるようにその解読を引き継いだ。およそ半年であらかたの内容を理解できるようにになったが、その物量たるや生半なものではなく、珍しさより退屈さを感じることが多かった。しかし、それらの無味乾燥な記述の中にも、自分の知るものがしばしば現れる。それだけが、私の愉しみだった。……イド・ルグスよ、いつだったか父上に招かれた謁見の席で、バルバル族の咸肉^{ハム}のことを話してくれたな。覚えているか？」

術にかかったように王の声を聞いていたイド・ルグスは、それが自分へ問いかけである事によりやく気づいた。確かに、覚えている。だが、語られた言葉は理解の許容を超えており、彼はただ無言で頷くだけだった。

「……ウラトル高原産の咸肉は、色づきが生肉のように映え味も良い。あの時お前は、石を砕いて肉にまぶすことを教えてくれた。それが、彼らのささやかな秘密なのです、とな。その時、私はふとある記述を思い出した。『塩漬^{ソルト}けた肉を陰干しにして熟成させる場合は、石の塩の粉末を添加すると色が鮮やかになるだろう』。これは、文書にあった塩蔵肉の保存についての処方だ。ならば、バルバル族が咸肉に用いる石とは、ここでいう石の塩と同じものではないか。それが事態を打開する鍵となり、やがて兵器は完成した。その後に行われた抱鉄の開発については、お前の方が詳しいであろう」

「
バルバル族はその薬石を、夏季放牧地であるウティカ湖周辺からさらに登った高山の乾燥地帯で掘り出していた。この部族以外に高原から上の地域へ足を踏み入れる者はおらず、彼ら自身もその場所

へ行くことは少ない。つまり、その石の存在を知っていたのは彼らだけであり、それと焰硝とを結びつけたのは、この何気ない会話だった。石を掘り出す作業については困難が多く、現在も産出量は限られている。採掘については王の輩たちが秘密裏に行っており、その薬石が焰硝の原料であることはイド・ルグスにも知らされてはいなかった。

「要するに父上の授かった神託とは、あの伝書から得られた知識なのだ」

瞬きひとつせぬその瞳の中で、燭火が揺れている。時の流れが止まったかの様に、王陵は静かだった。玄室から漏れる風が、ぬるりとイド・ルグスの肌を撫でる。

「……………もし、それが事実であるなら……………これまでの神託とは、つまり」

じつとりと汗をかき、ようやく彼が口を開く。その声を聞いた王の表情は心なしかと和らいだようであったが、すぐに元の表情を取り戻す。彼女が、やがて答えた。

「私の言葉に、偽りはない。それは確かであるが、残念ながらお前の想像については、否定も肯定もできぬ。それについての証拠は、存在しないのだ。とはいえ、限られた事実から推測するなら、過去の神託で得られた知識は全てあの古文書から得たものだ、と考えるのが自然だろう。当然、私はメデイトリアの王としてそれを容れることはできぬ。しかし、そう理解する以外に、どんな説明がありえるだろうか」

影を帯びた王の声が二人を囲む石壁に沁み、そして消えた。

「……………現実とは、どこまでも非情だ。だからこそ、父上は家宰と結託しそれを聖神からの授かりものと偽った。あのとき父が、ここにこのような文書があり、それにはこう書いてあったと、どうして言えようか。そんな事をすれば、これまで玉座を支えていた柱はすべて針と化して、我らを貫くであろう。だから、あの様にした。実行した父も片棒を担いだ私も、それを弁解するつもりはない。お前に

も、この事は明かすべきではなかった。だが、全ては今のメディトリアに必要なことなのだ。もう一度、はっきりと言おう。この先、玉座の存在によって守られるものなど、何一つ無い。父はそれを噛み締め、生きていた。理不尽な現実に対し、何の不満も口にせず。ならば、我々も懐古の眼差しを明日に向け、生きてゆかねばならぬ。そうは、思わぬか……？」

王の言葉は、穏やかだった。だが、イド・ルグスの身体には、ただ冷たいものが這っていた。石室の片隅にある腰掛に目をやるが、現実感希薄だった。彼女の話、頭で理解することはできても、心では信じられなかった。そして、葛藤するイド・ルグスの意識にある疑問が浮かんでくる。その顔を床に向けたまま、彼が言った。

「これらの文書が、王家にもたらされた経緯とは……。それはいつたい何処から、そして、どのように……？」

彼にとつて、当然の問いかけであつた。イド・ルグスには、ボルボアン王がこの国を真に思つて行動したと、そう信じる事ができる。だが、それが事実なら聖約や輪神の加護といったものは、どこへ行つてしまうのか。書の出所について知ろうとする彼は、その答を求めていたのかもしれない。重苦しい声に、王が答える。

「それについては、手がかりが無いでもない。あの巻物に書かれていた字は、デロイではグルグア文字とよばれている。かの国でそれが研究されていた理由は、古代人が遺したという文書を読むために必要だったからだ。彼らの認識が正しければ、それを記したのはその古代人、つまりグルグア人だという事になるだろう。そして、我々とグルグア人との接点はたった一つしかない。かつて彼らの外寇を退けた、あの戦役だ」

グルグア文字、古代人、文書、戦役。言葉が、イド・ルグスの頭の中で踊った。

「ならば、伝書がこの国に伝わったのはその時であろうか。我々はそれを想像する事しかできん。だが、戦役の結末から見てその品々は、敗北した彼らから得たものだと考えてよいだろう。そして、我

ら王朝はその文物を最大限に活用し、メデイトリアを繁栄の時代に導いたのかもしれぬ……」

イド・ルグスの視線が、玄室の中へと注がれる。そこにあるくたびれた巻物は、埃にまみれつつも飴色の光沢も帯びていた。この書に携わった人々の汗や手脂が、装丁にこびりつく濃い染みとなってその痕跡を留めている。それを見つめるイド・ルグスは、徐々に冷静な思考を取り戻しつつあった。彼女の話は多分に推測を含みつつ、しかし整合性を失ってはいない。聞いたことを鵜呑みにはできぬと思っても、それを嘘だと感じる事ができなかった。考えを巡らせる彼の背に、冷たい汗がにじむ。

「……とはいえ、それも可能性のひとつでしかない」 澱んだ空氣に、王の声が響く。「いつだったか、父上がこう言っておられた。この国は、いちど滅んでおるのかもしれない。とな。記録のない時代の出来事については、全てを推し測るしかない。そして、人の想像とは恐ろしいものだ。もし、伝書が戦利品として王家にもたらされたのなら、私のご祖先はどうやってそれを読んだのであろうか。敵を捕らえ、そう強いる事もできようが、別の状況も考えられる。つまり、そもそもあの戦役で勝利を収めたのはグルグア人たちであり、メデイトリアはそのとき彼らに乗っ取られたのではないか、という事だ。

。 エキル人と称する我らは、目の色も肌の色も周辺の民族とは異なっている。また、部族的な文化を持つ隣国に囲まれながら、我々の風習に泥臭さはない。民衆の意識としても、ディネリアやオシアといった地域の人々やバルバル族たちを、蛮族として見る者は多い。そういったことの根本には、いったい何があるのだろうか」

ふと言葉が途切れ、表情のない瞳がイド・ルグスを見る。

「それは、確かにあり得ることだ。だが、その父の想像に、私は賛同できない。グルグア人とよばれる古代人について謎が多いのは事実としても、この狭隘な地を得て彼らが満足するだろうか。帝国の学士たちの中には、グルグア人が知識の世界的独占を目論んでいたと考える者もいる。彼らは侵略した各地で文書を奪い、自らの

言葉に置き換えた後に元本を焚していたそうだが、その行為が単なる統治の手法であるのか、何らかの呪術的な支配を目的としていたのか、それは定かではない。少なくとも、グルグア人たちはこれらの書を大切に保管していた。やがて、彼らはこの地に攻め入り、そして敗れた。その国力の差を勘案するに、彼らはおそらく疫病にでもやられたのだらう。薬学や医術について、グルグア人は豊富な知識を持っていたはずだが、それが逆に慎重さを失わせる事もある。また、その当時のメデイトリアは悪疫の多い地域でもあった。伝書にも、その事は少なからず散見できる。現在より雨が多く、夏はしばしば酷暑にみまわれたという。まあ、今でもこの夏は暑いが

。また、今は干拓されている沼沢地なども手つかずで、そういった場所から定期的に熱病が発生していたそうだが、もし、グルグア人たちが罹患者を治療できたとしても、蔓延する速さがそれを上回れば、結果は見えている。異邦人である彼らの症状は重く、生き延びる者も少なかったらう。その後、我々は伝書を手に入れ、皮肉にもそれはメデイトリアの繁栄と安定の礎となった。新しい知識がもたらされ、悪疫の予防と治療も始まり、王朝は強固な権威を手に入れた。だが、これにはある前提が必要となる。もし、私がグルグア人の立場だったなら、国の宝ともいえる品々を易々と敵に渡しはせぬ。玄室にある程度の文書であれば、焼くのは簡単だ。しかし、今それは我々の手元にある。ならば、そこで何らかの交渉があったのかもしれない。つまり、取引だ。王家とグルグア人の間で契約が結ばれ、我々はそれを手に入れた。そうは、考えられないだらうか

ここでようやく、王の声が止まった。だが、明らかに思考を飽和させた様子のイド・ルグスに構わず、彼女は言葉を続ける。

「その場合、グルグア人たちの望む条件とは何だらうか。まずは、自分たちの命の保証があるだらう。そのためには、契約を反故にされぬよう正義が守られる必要がある。また、自分やその子孫たちが、この国に受け入れられる事も求めねばなるまい。それを言葉にするなら『心、義を正し人に和す』と表せる。さらに、我ら王家の側に

も条件はあつただろう。グルグア人たちの所有する書がどれほど役立つものだとしても、血塗られた過去があるのは間違いない。それらの文物と引き換えに彼らを救うなら、その行為は悪を助け、加勢する事にはならないか。王朝が善を標榜する以上、彼らの過ちに対し否定の姿勢を示す必要がある。言葉にするなら『命、地に満ちるとも邦を侵さず』という事だ。そして、双方の言い分を形にしたこの契約がいつまでも守られ、両者がメデイトリアでひとつになる事を願った。つまり『時、久しく流れて永きを知る。我ら、此処に在り』となる……」

そんな、馬鹿な。そう思うイド・ルグスの額には、冷たい汗が浮いている。それは雫となって眉を滑り降り、彼の視界をにじませた。

「やがて、文書はこの玄室に収められた。王は死すと王陵に葬られ、祖神となる。つまり、ここは聖神の座所なのだ。この空間に収められるという事には、そういった意味がある。ならば、あの伝書から知識を得て神託とした事も、道理からは外れていない。聖約とは神と交わす契約であり、我らのご祖先は何かを偽っていた訳ではなかった。ならば、父上も。私は、そう思いたい」

穏やかであるが、感情のこもった声だった。ようやく口を閉じて、彼女が疲労感を露わにする。この国において、王が己の声を聞いて話をするのは自然な事であり、彼女もそれに慣れている。とはいえ、その威厳を保つにも限界があつた。普段のイド・ルグスならば、話の途中で王を氣遣つたであろうが、現在の彼にそんな余裕はなかった。

突然、伝書なるものの存在を明かされ、それが神託の源であると伝えられ、その由来についての説を聞かされ、王朝の秘められた過去を仄めかされる。この話が、途中からその論拠を曖昧にしている事は、彼にもよく解っていた。だが、イド・ルグスのその心を、さざ波のような感情が洗っている。それは、己の信じる輪神の力が否定されるという事だけではない。王の語った突拍子もない結論が、

彼の心に何かを訴えていた。確かに、全ての神託がああ伝書から得られたという推測には、反論の余地もある。だが、状況証拠からは、それ以外の説明を求めることも難しいだろう。そういった葛藤の中で、彼は王の示唆する聖約解釈に対し、次第にはあるが惹きつけられていた。そこで語られた王朝のふるまいに、イド・ルグスは少なからず感じるものがある。全く異なった性質を持つ両者が、互いの繁栄のため宥和と共存を果たし、この国を永い平和の時代に導いたのである。それこそが、メデイトリアの正義ではないのか。聖約も神託も、全てはそこから生み出されたのだ。己が住む世界の真実を垣間見て、やや現実感を失った彼の思考へつけ入るように、その理解が甘く響き始める。

ひと息ついて普段の表情を取り戻した王が、イド・ルグスへ語りかけた。

「……かくして、我が王家は神託を手に入れた。伝書がどのように運用されていたかは分からぬが、おそらく神祇官たちがグルグア人の力を借りながら扱っていたのだろう。しかし、そこに記された知識がいかに詳細なものであろうと、生きた知恵ではない。それらを実践し、文化として消化するには長い時間が必要である。やがて、医術や暦、天文、農学といった英知がエスーサに蓄積され、この国は大きく様変わりした。疫病が猛威をふるい、凶作や天候不順が飢饉をまねき、蝕や星の動きが人心を惑わすたびに、彼らは聖神に祈りを捧げていたに違いない。だが、その時代は終わりを告げ、人々は玉座にひれ伏すようになった。この国の抱えていた問題の多くが解決され、我が王朝は安定と繁栄の時を迎えたのだ。その結果、神託の必要性は薄れ、やがて伝書を読む必要もなくなった。神託や聖約についての解釈が、どの時点で今のものに変えられたのかは判らない。だが、事実を伝えるより、理解の容易なものに置き換える方が安全だという理屈は正しいだろう。その結果、玉座の生み出す権威はより強固なものとなった。父上の行った改革において、それがどう影響したか、言うまでもない」

結論として、先王ボルボアンの提唱した国軍の様式はすべて実現され、その動員体制がメデイトリア全土に施行されたのである。師士として軍勢を率いたイド・ルグスはそれをよく知っており、彼もその力にひれ伏す一人であった。

「だからこそ、我々はデロイの侵攻を防ぐ事ができた。これは私の推測であるが、ここ数百年のメデイトリアの気候変化には、彼らコノス人が関わっているのかもしれない。グルグア人たちが姿を消し、現在のガルバニアのもとになる社会が生み出された時代、コロヒス・アクアイアス河の下流では大規模な灌漑事業が始まっている。彼らのそういった活動が、自然に何らかの影響を及ぼしているのはあり得ることだ。多雨や酷暑が穏やかになった事とこの国の幸福は、密接に関わっている。もし、我らの保有する伝書が、かの地からメデイトリアにもたらされたのなら、彼らは全ての種を自分でまいた事になる」

この国における知識の集積については、聖密院、つまり王家がそれを独占している。その是非はさておき、そういった意味で下流に身を置くイド・ルグスと、頂点から俯瞰するダナには決定的な違いがあった。彼は今まさに、王が自分とは全く異なる次元の視界を持っている事に気づき始めている。この国の秩序とは、歴史の狭間に消え去ったグルグア人の統治思想がエキル人の文化と融合し、真に完成したものだといえるかもしれない。

「だが、コノス人どもはそんな事に興味を持たぬだろう。己の挫折における皮肉な因果を知ったとしても、連中は侵略を止めはしない。そんな奴らの思うままに、我々が害されてよい道理があるだろうか。だが、人に与えられた霊理とは何者にも等しく働き、善と悪を区別しないのだ。父上はそれを知っていたが、この国では玉座の高みが王を孤独にする。人々は厳かにひれ伏し、その隔たりこそが秩序だった。彼らにとって聖密院とは、信仰という供物と神託という賜り物を交換する公器だったのかもしれない。かつてはそれが我らを守護していたが、現在は違う。帝国という第三者の闖入によって、その

幻想はついに暴かれたのだ。そして父が死に、数百年にわたるメイトリアの夢物語は、いま終わろうとしている。……師士、イド・ルグスよ。必要なことは、全て語ったつもりだ。お前は、その上で何を信じ、誰に加勢するのか、決めねばならぬ」

澄んだ声が、石壁に響いた。玄室の静寂は、彼の息から音を奪つてなお、万物を沈黙させる。イド・ルグスに聞こえていたのは、その言葉の余韻だけであつた。

王が見ていたのは、神ではなくこの国の過去と未来だつた。ならば、玉座の高みとは誰よりも先を見通すための場所に過ぎないのか。彼が、そう思う。だが、確かにいえるのは、彼女の知りえる情報こそがこの国の限界であり、それ以上は望めないという事である。イド・ルグスは、これら一連の仮説に反論することの無意味さを、すでに察していた。歴代の王、そして先王から受け継いだ知識と、彼女が集めた情報を照らし合わせ、熟慮の末に得たであろう結論である。グルグア人の伝承について、彼もデロイで聞いた事はあつたが、それは漠然とした伝説でしかない。王の説が、帝国の学識すら超えた高度な推論である可能性は、充分にあるといえた。

また、イド・ルグスにとって、その説が己の感情と相容れない部分を持つとしても、彼に求められているのはそういった意味での確認ではない。王は、自らのふるまいに対する理由としてそれを説明したに過ぎず、現在問われているのは従うか否かという選択である。さらに、彼の心情に対し最も摩擦が大きいと思われる神託と伝書の関係についても、王本人の証言という疑いようのない結論が存在していた。そういった事に加え、ここで露わにされた彼女の思惑を考えるなら、イド・ルグスの覚える葛藤などちつぽけなものなのかもしれない。だが、その胸にはどうしても捨てることのできない感情が残っている。やがて意を決したように、その口を開いた。

「……僭越ながら、陛下に申し上げます。仮に、わたくしが陛下のお言葉に従つたとして、その結果、この国はどうなりましようか。我ら兵の家が力による支配を続けるなら、やがてその影響はメデイ

トリア全土に及ぶでしょう。たとえ、帝国の悪行に鉄槌を下す事が出来たとしても、玉座の重みを失った我々がデロイのような存在に近づいてゆくのは、避けようがありません。明日を重んじる陛下が、その混乱に向けてこの国を導くというなら、果たしてそれは正しいのでしょうか」

それは、冷静な問いかけであつた。私情を捨ててなお、彼の心にはその危機感が残っている。帝都に赴いた後から、彼が漠然と感じていた落ちつきの無さとは、この事だったのかもしれない。デロイに勝てるものとは、要するにデロイそのものではないのか。帝国の繁栄する根本の理由がそこにあるなら、彼らと戦うものはいずれデロイになつてしまふのではないか。普段のイド・ルグスであれば、誰かにそういった感傷をぶつけることは無かつたであろう。だが、今の彼はそう問わざるを得なかつた。王はしばし瞑目し、やがて彼を見据えて答えた。

「……我らの抱くメデイトリアの正義とは、この国に住む人々の幸福のためにある。数百年の間、王朝の秩序はそれを守ってきたが、今はどうであろうか。確かに、この国は信仰がもたらす平穩の中で繁栄を続けてきた。だが、その結果として社会の様々なものが飽和しつつあるのも事実である。本来なら、民衆たちに現状へ対する不満があつてもよい筈だが、我々がそれを聞くことは無い。これは、この繁栄を生み出した信仰そのものが、それらの感情を去勢しているからだ。逆にデロイの人々から見れば、我らは欲望の不具者といえるだろう。あくまで利己的な動機からそれを選択したとしても、その自覚を失えば本来の目的を知る者はいなくなる。今の我々は、それに近い。この国の民が、新たな幸福を求めることは、他人の不幸を願うことに等しい。生活の基盤となるあらゆるものについて、誰かがそれを失うのを待つ以外に入手の手段がないからだ。イド・ルグス、貴様ならそれがよく解るだろう。母を亡くした後、お前はどんな目に遭つた？」

唐突な問いだったが、彼の頬がぴくりと動く。母親が死んだとき、

その財産はわずかな借入を口実に全てが差し押さえられ、彼に残されたのは身の周りの物だけであった。耕していた土地も、他の邑民の介入によって相続は認められなかった。小さな農地であっても常に誰かが必要としており、こういった好機を逃す手はない。追われるように村を出たイド・ルグスは農作業の手伝いなどで食いつないでいたが、両親が死んでいることを知られるとすぐに暇が与えられた。家族がいらないということは、継承する財産や土地がないという事であり、信用は無に等しい。孤児とは、夜盗や野荒しとほぼ同義であった。仕方なく血縁を頼って各地を転々としていたイド・ルグスであったが、彼を受け入れる余裕のある家はなく、結局は野盗に近いことをして暮らすようになった。盗賊行為は程度に関わらず重罪であり、没収されるものを持たぬ流民は、死をもって罰せられた。捕まれば、殺される。それが、彼の日常だった。現在でもイド・ルグスは、この国の善悪観を通じて過去の境遇を受け入れることしか出来ない。

「……世間から弾き出された者に、この国の社会は酷薄だ。デロイなどでは、奴隷ですらそれよりもまともな生活をしている。これについて、説明は要るまい」

ガルバニアでは、奴隷や隷民はありふれた存在だった。彼らは帝国の社会に不可欠な存在であり、高度に合理化されたその制度は、ある意味において人道的といえた。役に立たぬ奴隷に対する処罰が過酷である反面、素行の良い者は主の家族と同等の待遇が保証され、さらに能力があれば重要な仕事に就くこともある。デロイにおいて奴隷制とはふるいのようなものであり、心がけや努力や才能といったものに応じ、一度は不要と判断された人材を社会に再配分する機関でもあった。メデイトリアの人々はこういった帝国の制度に嫌悪感を露わにするが、イド・ルグスは帝都での経験から、それが短絡的な先入観でしかない事を知っている。少なくとも、この国にそういった受け皿が不足しているのは事実だった。

「その後、お前は兵の家の門を叩き、隊士候補となった。そこでス

タインに素質を買われ、正式に入門したと聞いている。壱番隊で頭角を現し、やがて土長の席を目前にしたお前は、唐突にバルバル族の監視役を任じられた。左遷に近いその命令に対し、お前がどう思ったか私は知らない。だが、内心では未練を感じなかったのが正直な所ではないか……？」

イド・ルグスが、強張らせた視線を王の足元に向けた。彼に、その問いの意味が解らぬ筈はなく、ぴりぴりとした感情が胸の奥底を這った。秩序の保たれたメディトリアでは、生活の手段を失った流民たちは、邑や街に住むことはできない。かといって、あまり人里から離れた山に近づくと、そこは獵民たちの領域となる。流民たちの生きる場所は、街でも邑でも山でもなく、その所々にある荒れ野や川辺だった。獵民とは、田畑を荒らす獣の駆除、炭焼き、木材の切り出しなどを行う人々である。殺生を生業とする彼らは、被差別民として扱われる事がしばしばあった。だが、山に住むことは獵民の権利でもあり、その生活は決して悪くはない。先王ボルボアンは、武器の扱いに長けた彼らを狩弓獵兵として召集したが、領家の家士たちにその決定が最後までしこりとして残った事は、イド・ルグスの記憶に深く刻まれている。そして、必要のない獣を狩るのが獵民の役目なら、王領において必要のない人間を狩るのは、兵の家に所属する従士たちの役目だった。その日になると、隊の従士は手配書の束に目を通し、武装を整える。夜半に营地から目的地に移動し、集落を包囲する。朝日と共に急襲し、昼には仕事を終える。縄に繋がれた流民たちを連れ、夕暮れにエスーサへ戻る。少人数ならば危険性は少ないが、秩序から遠ざかり群集になった彼らは、急速に人間本来の欲望を取り戻す。それは、治安の維持に必要な行為だと隊士の誰もが思っており、また自ら手を下す訳ではない。だが、結局はそれと同じであった。

「その翌年、お前はバルバル族の馬比べで入賞し、さらに翌年には三番手の腕前となった。お前が何をどう感じていたか、詮索するつもりはない。本人の言葉より、行動の方が雄弁にそれを語るだろう。」

ところで最近、エスーサでは身重の女が増えたと聞く。その理由は、容易に想像できよう。冗談のような話だが、それがメディトリアの現実なのだ」

この国では、家族計画について想像以上の慎重さが必要であった。それら普段の抑圧ゆえに、戦役による多数の死者が刺激となり、結果的に人が増えるのは当然といえる。だが、多くの家で喪が明けぬ今の段階でそれが起きるという事は、そういった欲求の強さを示してもいる。

「また、領家では従士の補充が急速に進んでいる。どんな身分の者でも腕っ節さえ強ければ、士分となつて肩で風を切つて歩けるのだ。家都では、そういった『にわか従士殿』が騒ぎを起こすことが増えたと聞く。あの戦役の後、皮肉にもこの国は活気づいたのだ。災難がそのまま不幸とならぬ所に、そういった飽和の様相が見えはせぬか……？」

これについて、口には出さぬがイド・ルグスも気づいてはいる。兵の家でも、そういった兆しを感じることは多々あり、自分以外の士隊長たちにも同様の気色が見られた。それはひと言でいえば社会の胎動であり、彼がデロイで感じたものとよく似ている。

「この現状に対し、何かできるならそうしたいと思う。だが、王家にはそれを解決する手立てがない。今回のように、不幸がやってくるのを待つしかないのだ。お前のような者なら今のままでよいと言いかもしれぬが、ことの根本はそこではない。問題があつてもそれが見えず、手段がなくともそれが判らない。そんな状態にありながら、王家はメディトリアに君臨し続けてきた。ご祖先たちが良かれと思つて創り上げた秩序ではあるが、その箍が強すぎたのだ。今まではそれが幸いしたが、これからは災いとなる。アルダネス王朝の命脈も、いずれは尽きよう。しかし、この国の民を道連れにはできぬ。今後、お前たちの支持を頼りに、王権はより強まるだろう。危機への対処が、その口実となる。玉座は力に支えられ、さらに高く掲げられるのだ。そして、もし我ら王家が新たな正義を見出せぬな

ら、それはいずれ地に投げ落とされよう。どのように頑丈な器であるうと、砕け散るに違いない。確かに、それは混乱かもしれぬ。だが、いつか誰かが、その幕を引かねばならんのだ」

その表情に、かつてない厳しさが漂う。イド・ルグスを一瞥し、彼女が口を開いた。

「私は、あくまで私の道に行く。従う気が無いのなら、兵の家を去れ。さもなければ、直ちに策戦を用意するのだ。敵は、すでに目前にいる」

彼が聖密院を出た時、すでに日は傾き始めていた。営地へ帰り、門を潜り、厩舎へ行き、馬に乗った。そして、ここに来た。夜の闇が、大地へ浸みている。鞍の下に敷いていた毛皮を身にまとい、イド・ルグスは腰を落ちつけた。見上げた空に、星々が輝いていた。

しかし、視界にある光の明滅も、それを取り囲む闇も、彼の感情に何も訴えかけてこない。心の中は、そこに満ちた水が凍りついたかの様に、何を入れることも出することも出来ない空間だった。この国の人々にとってメディトリアは天賦の地であり、聖神が自分たちに目を向け慈しんでいると信じて疑わない。輪神たちと取り交わした聖約によつてそれは約束され、神託の存在こそがその証明であった。当然イド・ルグスもそうだった考えを持ち、それは決して軽々しいものではない。ゆえに、現在の状況において七転八倒するような苦悩を覚えたとしても、無理のないことである。だが、今の彼にそこまでの感覚はなかった。少年の頃までは、聖約や神託といったものを無垢に信じていたのは確かである。やがて従士となり先王の注目を得たイド・ルグスは、徐々にではあるが責任のある役職を与えられた。もちろん部下には不信心な者もいて、彼らには己の言動で信仰を示してやるしかない。王家においては特に、そのような人間であることが重要な立場へ招かれる条件でもあった。だが、彼がそういった段階を一步步登るたびに、信仰に対する意識は次第に変化してゆく。自身がその姿勢を崩すことは禁忌となり、それを示

す皮相的な態度こそが重要とされる主客の逆転に気づき始めたのである。また必然的に、そういった制約は難題を解決する上で足かせにもなりうる。もし、そのねじれが地位の高い人物ほど強くなるのなら、頂点に位置する者には何が求められるであろうか。それは矛盾であり、逆説であった。彼の信仰とはいつの間にか、その事実から目を背けるための自己欺瞞に侵食されていたのかもしれない。あるいは、そこまで見透かされて自分が選ばれたのか。忸怩たる思いが、イド・ルグスの胸に去来する。

長い間、ただ時が過ぎるばかりであったが、ふと気づく。要するに、これはボルボアン様の思召しなのだ。現在の王、つまりダナ・ブリグンドは、まだ少女といって差し支えない歳である。いくら頭脳明晰といえど、メデイトリア全土を統べる王朝を主宰するには、幼すぎるといつてよい。ましてや、現在の難局において自己の論理をこれほどにまで先鋭化させ、厳しい選択をこの国に課するというのである。それは、単純に彼女だけの意思と動機で行えるものとは考えがたい。つまり、先王が在位であった時期に王家のあるべき姿が方向づけられ、やがては実行に移されるものとして伝えられたのではないか。その強権的な言動に目を奪われがちであるが、聖密院という伝統の中枢にありながら時代の先を見極めんとする彼女のひたむきさは、先王とよく似ている。そして、彼は今ようやくそう思えるようになっていた。

もはやイド・ルグスは、王の主張を奇異なものとは感じていない。そもそも、彼が王に問いたかったのは、この国が延々と守ってきた秩序の重みについてであった。絶対的ともいえる意味を持っていたそれが、現在の彼にはメデイトリアを構成する要素として認識されている。その中においては神託の出所という重大事も、眼前の星ひとつに等しい輝きでしかない。見上げる夜空に、光がきらめいていた。だが、それを取り囲む闇は深く、そして暗かった。

聖神は、確かにいる。天と地がこの世にある限り。だが、その存在は、我らを見てはいない。

イド・ルグスは首筋に粟立つものを感じた。胸中に充満する、その感情を噛み締める。それは、己の理解が及ばぬものへ恐怖によく似ていた。この国の人々は、神話や聖約といった大いなる物語を共有している。たとえ自身が取るに足りない存在であっても、その役割を自覚することで、全体の一部としての己を意識できた。それは、精神的にも物質的にも、手の届く範囲の環境から引き出せる充足に對して、可能な限り依存しないという生き方でもあった。そういったものを精神の核とする彼らにとって、それが不可能になる事態を想像することは、不安を超えて恐れに近いものといえる。

だが、そういった思いに追われるイド・ルグスの心は、ある意味で囚われから解放されつつあった。人間であるなら誰しも、その芯に正義という主観の根本がある。是非を問うためのそれが、客観の視点からは如何に無意味なものであるかと、いやそうであるが故に、それは彼の感情の拠り所だった。信仰を失った訳ではないが、その大半を脱ぎ捨てたといえるイド・ルグスの心には、むき出しの正義が姿を現していた。

やがて、彼の瞳に捉えられた星辰が、その輝きを増し始める。夜は完全に深まり、漆黒の空でそれは、より鮮やかに燃えていた。膨大な光点がゆらゆらと揺れ、天を照らす。降るようなその星空は、やがて地平の境を侵すかに思えた。その混沌とした蠢きを、流星が切り裂いてゆく。夜が更けゆく中、イド・ルグスはいつまでもそれを見ていた。

曙の頃、彼方の山稜から駆逐された闇は、頭上へ向けて徐々に去ってゆく。石社を囲む林の奥から、鳥たちのさえずりが聞こえてくる。そして、木々が穏やかさを取り戻し、静寂が再び辺りを包むころ、古びた遺跡は元通りの孤独な姿を取り戻していた。

天幕の中で、スタイン、シュマロ、オフィル、そしてリユコス
の四人が立ち尽くしていた。ひと通りの説明を終えたイド・ルグス
が、四人の返答を待った。誰も、声を出そうとはしない。二、三度
ほど眼を瞬かせた後、あくまで冷静を装ってスタインが言った。

「お前、正気か？」

だが、彼の頬はまだ、妙な具合に歪んでいた。シュマロたちも、
同じような顔をしている。四人の反応はイド・ルグスの予想通り
であったが、彼らにとってイド・ルグスの策戦は、その見積もりを
はるかに超越した位置にあった。その全容を知った今も、慄然とし
た空気が濃く残っている。彼らの様子を見て、イド・ルグスは先ほ
ど語った策戦の要点について説明した。眉を寄せて聞く四人に、変
化はない。しばらくして、スタインが言った。

「もう一度聞こう。お前はこれが、本当に正しいと思っているのか
？」

彼らも、理屈の上では全てを理解していた。問題は、それ以前に
イド・ルグスの精神状態が正常なのか、という事である。穏やかな
様子で、彼が答えた。

「現状における唯一の選択である以上、私はそう考えています」

イド・ルグスに迷いは無かった。この計画の危険性は、彼も重々
承知している。オシアで帝国との決戦を予感してから、練り続けて
いた策戦のひとつであった。だが、内容の突飛さはスタインら四人
の反応をみても明らかであり、それを実行するなら内外に相当の反
発があることは確実である。王家の内部対立に解決の糸口はなく、
さらに領家との関係の不穏さが加速する現状で、こういった策戦を
推し進めることは火に油を注ぐ行為に等しい。彼にとって、この案
はあくまで思考上の実験であり忌避すべきものであったが、今は違
う。この策戦への自己評価が一変した事と、昨日の王との謁見は、
確かに無関係ではない。だが、それは王の意見に同調した彼がその
分別を弛緩させ、積極策という博打に魅了された訳でもなかった。
この策戦が選択された理由は、これが少なくとも領民にとって最も

安全であり、また事態の最終的解決が可能であると気づいたからである。とはいえ、これまでイド・ルグスはそういった点にあまり目を向けておらず、なぜこの案を着想したのか彼自身も説明することは難しい。しかし、現在の認識において最も優れているのがこの策戦である以上、彼は四人の理解を得られるまでその理を説く覚悟であった。

イド・ルグスが口を開こうとした時、スタインがそれを遮る。

「説明は、もういい。確かに半端なやり方では勝てまいが、それにも限度はある」

四人にとって、この計画は尋常なやり方から飛躍しすぎていた。

そもそも、彼の言うようなことが実際に起きるのか、まったく見当がつかない。イド・ルグスはその成否がすなわち策戦の成否ではないと説くが、スタインたちの認識は全くの逆であった。諤々と議論を交わす両者の視点はどこまでも遠く、その口調からは徐々に冷静さが消えてゆく。

「……イド、何を考えている。貴様は、自分ひとりの力で師士になったつもりか？ これは兵の家に与えられた、絶好の機会でもあるのだぞ。儂たちがこれまで積み上げてきたものを、お前は何だと思っっているんだ？」

その時、シュマロが言葉を挟んだ。

「スタイン殿。……少々、議論の筋が違っているのではないか」

「何だと……。どういう意味だ？」スタインは、徐々にその表情を紅潮させる。

「確かに、ルグス殿の策戦は奇抜だ。はっきり言えば、狂っている。だが、その問題はあくまで実現の可能性にあるというのが、私の正直な意見だ。そう頭ごなしに否定するのは、いかなものか。構想の通りに事が運ぶなら、最も勝利に近いやり方ではある。それは、間違いない」

さらに、オフィルとリュコスも同じ見解を示す。最後に、リュコスが言った。

「現状において、我々が危険を冒さずして助かる道など無いのだ。これが成功すれば、敵は対応できまい。帝国にとってそれは、正に悪夢である。もし我々が彼らの立場なら、この状況を最も恐れるだろう。」

沈黙の後、シュマロら三人は小さく頷く。そして、徐々に議論の風向きが変わってゆく。スタインは反対の立場を変えなかったが、それに対しこの三人は理詰めに対抗する。実際の力関係はともかく、理屈の応酬ではスタインが不利であった。さらに彼らは、自分たちの言葉によって賛成の立場を強めてゆく。完全に孤立したスタインが、各々の意見が覆らぬ事を見て取ると、感情的に叫んだ。

「この、糞つたれどもが！ 手前ら、儂を虚仮にする気か？」

その場が、静まり返った。スタインの形相を、皆が見ていた。彼の表情が、イド・ルグスに向けられる。

「……イド、何故だ？ どうして貴様はそうなのだ？ 肝心な所で、お前は誰にも相談せず怖ろしい事をやる。お前を後押しをする、儂の立場を考えたことはあるのか？ いつまでも儂が、笑って許してやるとも思っているのか……？」

だが、意外にもスタインの態度に反発したのはシュマロたちだった。逆上したスタインの怒声が響く。彼らはイド・ルグスを支持し、議論は激しさを増す。次第にシュマロら三人の言葉からも冷静さが消え、彼らの本音が見え始める。

「お見苦しいですな、スタイン殿！ この期に及んで、貴方の私情を慮る余裕があるとお思いか。我々とて、いつも貴方に従うという訳ではないのですぞ……？」

そういったやり取りの末、スタインがようやく折れた。渋々ではあるが、彼が最後の賛同者となる。だが、最大の問題である実現の可能性について、現時点でその可否を判断する手段はなかった。その後、成功の確率を少しでも高める方策について意見を出し合う。スタインは不興の様子で早々とその場を去っていたが、シュマロらはさっそく準備に取り掛かる次第となった。これまでになく頼もし

い表情を見せる三人にそれを任せ、イド・ルグスは報告のために聖密院へ向かう。

外出を隊士に言付け、彼は営地の裏門へ向かった。その時、不意に声をかけられる。イド・ルグス呼び止めたのは、スタインだった。

「イド、首尾はどうだ。……奴らの協力は、得られそうか？」戸板に寄りかかった彼が、問いかける。「まあ、あの様子なら、結果は聞くまでもないな……」

目をぐりぐりとこすって、スタインが眠気を払った。ここですつと待っていたであろう彼の言葉を聞き、イド・ルグスの瞬きが止まる。だが、すぐに何かを悟ったようだった。

「スタイン殿……。先ほどの振る舞いは芝居、という事ですか……？」

あくびをして、スタインが言う。

「……奴ら三人は、あれでも賢い。理に適ったことはすぐに判るが、良くも悪くもこの儂の顔色を窺っておる。それ故に、優れた知恵がありながらそれを持て余しもする。とはいえ、今回ばかりはそれでは困るのだ。奴らが全力を尽くすよう、あせざるを得なかった。その心の壁を作ったのが儂である以上、言葉だけでそれを促すのは偽善でしかない。……むろん儂も、お前に協力させてもらうぞ」

スタインが、気だるそうに話す。彼に向けられたイド・ルグスの眼差しが、敬服の色を帯びる。それを見て取ったスタインが、自嘲気味に表情を緩ませて言った。

「イド、さっきお前は驚いていたな。という事は、お前もまだまだ青い。が」

彼の笑みが、寒々とした気配を放つ。

「これだけは、言っておく。あの時、儂が言った事の半分は本気だった」

イド・ルグスを見る。沈黙が、門外の喧騒を消し去っていた。

「……早く行け、イド。こうなった以上、何があるうと絶対に迷っ

てはならん」

そう言つて、腕組みをしたまま通りの方を指した。だが、その頬には微笑が漂っている。彼の前を過ぎ、イド・ルグスが門から出た。（シユマロ殿、オフィル殿、リユコス殿、そしてスタイン殿……）続く言葉を胸に留め、彼は営地を後にした。

十

十

「もう、よい。これ以上の説明は、必要ない……」

そう言つて、王が口をつぐんだ。唇が、わずかに震えていた。明らかに動揺している。

「……他の士隊長たちは、何と言っている？」

「四人全員の賛同を、頂きました。すでに、彼らと共に準備を進めております」

「そうか……」

小さく答え、表情に陰をつくる。そして、視線をイド・ルグスに向けると言つた。

「この策戦について、領家の当主たちの了解を得ることは出来るだろう。お前の言いたいことは、充分に解つた。私が、何としても吞ませてみせる。だが――」

沈痛な瞳だった。

「この策戦は、余りにも危険すぎる」

王の姿には、逡巡がありありと浮かんでいた。乾ききつた正殿の空気が、肌を刺す。イド・ルグスが、静かに答える。

「ですが、領民の無事を期すことは出来ます」

「……お前たちとて、この国の民には違いあるまい」

独り言のようにそう言い、彼女がイド・ルグスに問いかけた。

「ひとつ、聞きたい……。最終的な目標については、どう考えている？」

「……端的に申し上げれば、デロイを滅ぼすという事になります」

無言をもつて、王は応える。その苦悩は、さらに深まったようだった。彼の言葉を裏返せば、自らが滅ぶ可能性もあるという事になる。正直な所をいえば、イド・ルグスにとってもこの策戦は、狂気の領域にあるのかもしれない。

だが、これしかないのだ。彼はそう思った。確かに、これを承服することは王にとっても厳しい選択であろう。それをひしひしと感じつつ、イド・ルグスはその感情を微塵も表さなかった。厳しい眼差しを、決断を迫るように彼女へと注ぐ。

唇を噛む王が、玉座の肘掛を指先で弾く。初めて目にするその仕草を、イド・ルグスは無言で待った。彼女が、小さく息を吐く。やがて、静かに言った。

「いいだろう。お前たちがそうであるなら、私も覚悟を決めよう。だが、策戦が始まる前には可能な限り、兵たちへ家族と過ごす時間を与えてやって欲しい。頼んだぞ……」

「……御意にございます」

「王家の持つ統帥権を、お前に与える。今後、この策戦を知る者はお前たち士隊長の五人、領家の当主の三人、そして私になる。戦役が始まるまでは、これを誰にも漏らしてはならぬ。領家の承認を得られた後は、士隊長の誰かを各家に派遣し、指図を行え」

深々と頭を下げ、イド・ルグスが命を受ける。それを見て小さく頷いた王が、視線を鋭く絞った。しばらく見据えて、彼に告げる。

「私は、最後までお前たちに随行する。当然、拒むことは許さん。輪神たちも、この戦役の結末を知らんと欲していよう。そのつもりで、存分に戦え。お前は、メデイトリアの銚になるのだ。この国のいやこの世の歴史に、その刃の跡を永久に刻み付ける」

二人を包む空間に、王の声がしんと響いた。それ以上の言葉は、交わされなかった。メデイトリアに、帝国軍が迫っている。王都エースーサで、戦端は静かに開かれた。

【第八章】 檻

メデイトリアは、すでに夏を迎えていた。山吹色に降りそそぐ日差しが、陽炎となつて大地を溶かしている。海から隔たった内陸部特有のこの暑さも、いずれは峠を過ぎる筈であるが、それが下つてくる気配は今のところ微塵も感じられなかった。

だが、そんな中でも戦役への備えは着実に進んでおり、その規模は総動員体制に近い。領家の当主たちが王に対し拳国一致での国土防衛を誓約すると、民衆の間にくすぶっていたデロイへの敵愾心はふいごで吹かれたように煽られていた。

無論、この国の誰しもが事態の穏便な収束を望んでいたが、それはすでに過去の事である。踏みにじられた彼らの期待は逆流し、怒りとなつて人々を駆り立てた。それは、憤ましさを忍耐や寛容という美德で抑えられていた排他的衝動が、帝国という淫婦によつて誘い導かれていた様でもあった。敵の標的となる事が予想される三つの家都は念入りに防備が固められ、食糧の備蓄にも余念がない。

メデイトリア側の予想では、デロイ軍の到着は遅くとも秋という事だった。オシア大蜂起と呼ばれた反乱は第一軍団によつてほぼ鎮圧され、ノクニイ峠に最も近い街力リナスには、オシアでの任務を終えた諸部隊がすでに集結を始めている。

デロイ本州のガルバニアでは、民会の投票によつてメデイトリア戦役の実行が承認され、彼ら自身も戦意を高揚させつつあった。オシア州におけるメデイトリア軍の裏切り攻撃や、帝都でイド・ルグスを引き起こした事件について、デロイ市民の大部分はそれを事実として受け止めている。そうした認識の影響も当然あるが、それ以上に彼らを後押ししているものは、枢軸貴族たちに誘導された楽観的な世論であった。

確かに、ダ・プーの改革によつて平民たちは発言権を得ていたが、こついった情報操作にはまだ免疫を欠いている。いかに強い力を得

たとしても、使い方を知らなければ役には立たない。他人からそれを与えられた彼らは、なおさら貴族たちの思惑通りに操縦されるばかりであった。

そして、夏の日差しがようやく陰りを見せる頃、集結を終えた第一軍団はついにメデイトリアへ向けて兵を發した。討伐について事前の布告といったものは一切なく、それは以前の戦役においても同様である。こういった倫理に乏しい侵略へ対し、それを野蛮と非難する国際社会というべきものは、この世界のこの時代には存在していなかった。

国境にひしめく第一軍団の将兵は八万人に達し、その総勢では十万を優に超える。先遣の部隊がまずノクニイ峠に到着するが、メデイトリア側の守兵は彼らを見ると、皆をすてて一人残らず逃げ去った。敵地への入口を確保し、易々と険しい峠を越えたデロイ軍は、開けた場所を見つけると橋頭堡となる拠点を築き始める。だが、彼らの主力となる軍勢は、その完成を待たず家都ダルカスへと向かった。

メデイトリアの領土は、ヒメル川流域とアブネ川流域で大まかに二分される。ダルカスはアブネ川流域への入口であり、三領家の一つであるダルキア家の都であった。ノクニイ峠を越え、ヒメル川流域の下端へ侵入したデロイ軍はダルカスを包囲し、交通の要衝であるこの都市の攻略を試みる。だが、街の背後はデファニノ山系から下ってくる急流に守られ、正面には幅広の濠と高い城壁があった。前年の戦役においても、第一軍団はこの都市の堅牢さを見て取り、迂回してカシアスへ向かったのである。そして、様子見の攻撃を数度行っただけで、その防備がさらに強化されているのを知った彼らは、ひとまず情報の収集に専念しつつ橋頭堡の完成を待った。

彼らがこの国に足を踏み入れてから見た、どの村邑にも人影はなく、またどこを探しても食料になりそうなものはなかった。耕地の作物もすべて刈り取られ、間もなく秋が訪れるとは思えぬ荒涼とした様子である。その徹底ぶりは、オシア征伐を終えたばかりの軍団

兵から、今年中には故郷へ帰りたいという望みを完全に奪うものであった。メディトリアの領民は、おそらくその大半が家都に避難するか、山林深くに潜んでいると思われる。

第一軍団はしばらくダルカスを包囲していたが、やがてメディトリア側の軍勢と思われる集団がヒメル川方面へ進出した部隊によって発見された。デロイ軍の軍団司ハニアスは情報が集まるまで慎重に待ち、幕僚を集めて軍議を行った。その規模については二万人程度と見積もられ、カシアス近郊に集結するその集団を、彼らはメディトリア側の主力軍と判断した。ダルカスの攻囲を継続しつつアブネ河流域からの敵を遮断するため、四つの大隊を残して彼らはヒメル川流域へと進軍する。前回の戦役と同じ轍を踏まぬよう、彼らは用心深い行動を心がけていたが、こうしてその方面に主力部隊を差し向ける様子からは、このまま会敵して雪辱を晴らすという意図が透けてもいた。

とはいえ、その彼らにも不安は当然あり、特に『抱鉄』への対策は急務であった。軍団の歩兵たちは兵器に対する防御機動を教え込まれ、行軍の合間にもその訓練は続けられていた。ただ、防御機動とはいっても、兵器を持った敵から狙われた場合には、隊全体を後退させ、それが投擲される瞬間にあわせて駆け足で前進する、という非常に簡単なものである。この方法論に対する心許なさは多分にあるものの、そうした準備は兵士たちの恐怖心を和らげていた。しかし、カシアスの戦いによってこの軍団は人員の大半を失っており、兵器の真の恐ろしさを知る者は少ないといえる。

その相反する感情を内包しながら、帝国社会の縮図ともいえるこの軍団は、徐々に敵へと近づいてゆく。しかし、周囲を警戒しつつ前進する彼らに対し、メディトリア軍もまた緩慢に後退していた。やがて、ヒメル川の南岸をじりじりと西に遡上する両軍はカシアスに接近する。この状況に、デロイ軍の幕僚はメディトリア側がカシアスの森で再びの決戦を挑んでくるのではないかと期待し、兵卒たちは家族への便りを念入りにしたため後退する輜重の荷に託す。だ

が、緊張を高める第一軍団を誘うように後退していたメデイトリア軍は、カシアスの近郊をつりと通過すると、そのまま北のヒメル川に向かう。そして、彼らが家都の目前にある橋を渡ると、第一軍団はその姿を見失った。敵との交戦を避けつつ情報を収集していたデロイ軍の先導部隊も、この状況で橋を通ることは出来ない。家都カシアスとヒメル川の二つを隔て、友軍から孤立することは自殺行為である。

軍団司のハニアスは難しい判断を迫られるが、即座にカシアスへ対し囲郭を築かせ街を封鎖した。その上で部隊を渡河させ敵軍の行方を追わせるも、彼らはすでに消え去っていた。とはいえ、その軍勢の行方は不明ではあるものの、橋を渡れば王都エースーサへは数日で到達できる。軍団の幕僚たちは、メデイトリア軍の意図を王都周辺での決戦と推察し、ハニアスに進言した。戦役を早期に終結させたい帝国側の心理を利用し、各家都の包囲に兵を割かせた上でエースーサまで誘い込み、軍団の本隊を撃滅するというのが敵の目論見と考えられた。確かに、これまでの推移はその筋書き通りである。だが、デロイ軍にとってもこれは望むところだった。

彼らがカシアスまで遡上する間に、後方で動かすことのできる兵はすべてこの主力集団に呼び寄せられており、街の包囲を継続したままエースーサに向かったとしても、軍勢の数は六万人を下らない。およそ三倍の兵力差で、彼らが決戦を避ける理由は何ひとつ無かった。軍団司ハニアスは、眼前の橋を渡ってエースーサへ向かう事を決定した。

そして五日の後、彼らはエースーサを直接見ることのできる丘の上で止営する。周囲に敵の軍勢は発見できず、また警戒していた待ち伏せ攻撃もなかった。メデイトリア側の反撃を数で揉み潰す覚悟でやってきた彼らは、戸惑いを隠せない。さらに、丘の上から見る王都エースーサに人気は微塵もなく、優雅な七つの城塔がただ立っているだけであった。この異常な状況に対し、ハニアスは背後に残した部隊を増強するため、急いで兵を送ろうとする。だが、これ以上軍

勢を分割することに、幕僚たちは強く反対した。その結果、思い直したハニアスは、ひとまずエースーサの攻略を行いつつ、メデイトリア側の出方を試すことを決定する。王都の周辺に何らかの罠がある可能性は、承知の上であつた。

確かにデロイ軍は、数の上では圧倒的な優勢を誇っている。しかし、敵の精鋭騎兵との遭遇を恐れる彼らの索敵範囲は狭く、その利を充分に発揮しているとはいいがたい。また、メデイトリア軍との野戦を警戒して大集団で移動するため、その動きはどうしても鈍くなる。ゆえに、後退する敵に対し積極的な対応ができず、こうして相手の出方を待つ結果となつた。もし、彼らがもつと柔軟な用兵をしたなら別の展開もあり得たであろうが、そういった選択肢は全て自身の慎重さによつて封じられたのである。敵襲に備えて警戒線を張りめぐらせた第一軍団はやがて、果実に群がる蟻のように王都を取り囲んだ。

エースーサの城壁の上に、イド・ルグスはいた。眼下のデロイ兵を覗き見て、彼はその表情を緊張させる。敵は昨日と同じく、遠方の丘に築いた営地から軍勢を繰り出し、隊伍の帯で王都を包囲していた。だが、その距離は明らかに近くなっている。

いよいよ、乗り込んでくるか。彼はそう思うと同時に、己の強運に感謝していた。退去の準備は、すでに完了している。ふり向いたイド・ルグスの見る市街は、廃墟のように静まりかえっていた。このエースーサに留まっている者は彼と王、そして家宰とわずかな王の輩だけである。当然、帝国軍はそういった状況に気づくであろうが、それでもここを完全占領しようとするであろうと、予想済みであつた。都の住人や周辺の領民、大部分の王の輩は、戦役の準備が始まると同時にカシアス、ダルカス、アビウズの各家都へと分散して避難しており、ここは要するに放棄されていたのである。その決断の理由は一つではないが、戦役の早期決着を望むであろう第一軍団が、この王都に攻撃を集中させることを見越しての対処であつた。

エスーサの防備は他の家都に比べ脆弱であり、狙われれば救援が必要となる事は間違いない。その結果、自軍は行動の自由を奪われ、主導権を手放すことになるだろう。だが、そういった事態はこうして回避され、ここまでのイド・ルグスの策戦には、ほぼ狂いが無い。今の彼にとつては、この王都といえど何かとの比較が可能な事象のひとつでしかなかった。

そして、彼がここに居たのはその狂いに対するためだった。この国において帝国側と明確な面識を持つ者は、かつて帝都に滞在したイド・ルグスだけである。第一軍団を確実にここへ誘き寄せるため、彼自身が餌になるつもりであつたが、その必要はすでにないものと思われた。普段は感情の起伏に欠けるイド・ルグスといえど、望みうる最善の展開を得られた今、その心は穏やかではない。

だが、その昂りもこれからやるべき事を思えば、徐々に醒めてくるのを感じる。隧道で城外に脱出した後は、王と供の者を連れて速やかにギラメラ門へ向かわなくてはならない。王はイド・ルグスに対し、自らを随行させるよう命じていたが、彼女がここにいる事には別の理由もある。王都を放棄するなら、聖密院が敵に占拠された場合に備え、宝物その他の品々を運び出すことはもちろん、院の各所を儀式的に封印して還俗せねばならない。その責任者として残つたのは、王と家宰だった。そして、務めを終えた二人は、今もここに留まっている。都から北の森へと伸びる隧道は、彼ら王の輩が以前から使用してたものであり、イド・ルグスも今回の戦役で初めてそれを知った。その出入口は簡単に見つかるものではないが、軍団の将兵がこの都市になだれ込む瞬間に脱出するのが、最も安全と思われた。あとは、その時を待つばかりである。

城壁の外は、凍りついたように静かだった。イド・ルグスが耳をそばだてる。街中から、ごみをあさる鴉たちの鳴き声だけが聞こえていた。

来る。そう確信した時、彼の姿はすでにそこから消えていた。滑るように側壁を降り、大聖門へと急ぐイド・ルグスの背後で、甲

高い号令が響き始めた。

こつこつと足音を響かせ、小さな人影が歩廊を急ぐ。聖密院には、普段から異世界のような趣があるが、いまはその時間が止まっていた。辺りの庭木が尽きると、その先に石造りの玄門が現れる。ダナ・ブリグンドは、衛士のいないその門へ早足で近づいた。だが、柱の影から不意に男が現れ、道の中央に立った。

「これは、陛下。こんな時に、どこへ行かれるのか」

家宰、サンク・タルムだった。すでに先ほど、イド・ルグスによって退去の準備が促されている。特に驚いた様子も見せず、ダナは歩みを緩めつつ言った。

「タルム、聞きたいのは私もだ。お前が、まだここに居る理由をな

」

表情を動かさず、そう言う。この門の先には、王陵の入口があった。

「それについて、ご説明する必要はないでしょう。そもそも、伝書をここに残すことを許可されたのは、陛下ご自身でございます。

わたくしは、せめて退去の瞬間までこの玄門に留まる所存。万に一つの間違いが、起こらないとも限りませぬ」

「その間違いとは、こうして私がやって来ることか？」

間を空けず、王が答える。棘のある言葉だった。王陵にある伝書が存在を知る者は、彼女と家宰、そしてイド・ルグスの三人だけである。エスーサを放棄するにあたって、当然この書についての対応も必要であった。しかし、他の宝物とは違い、運び出すという事は諸々の事情から不可能であり、それは今も王陵にある。羨道から石室への入口、そして石室から玄室への間口に、それぞれ入念な擬装を施した上で石室に匣の棺を置いて、二人は伝書の隠蔽作業を終えていた。様々な制約の中で、それは精一杯の対処といえた。

「陛下は、このエスーサをいとも簡単に敵へお与えになりました。誠に遺憾ではありますが、王陵を守ることに執着しておられ

ません。ならば今は、わたくしが最後までここにいるべきかと存じ上げます」

慇懃な中にもふてぶてしい表情を見せながら、家宰は答える。乾いた視線を交わし、王が言う。

「要するに、信用できないということか。だが、私とて手は十分に尽くした。これ以上、何を望むというのだ？」

彼女の尖った声に、家宰も語気を強める。

「望むも何も、全ては陛下ご自身から始められた事でございましょう。王家の神威をこれ以上損なうお積もりなら、わたくしも黙ってはおれません。我が身を呈しても、あの聖典を護りぬく覚悟でございす」

「ほう、ようやく本音が出てきたな。だが、身を呈すとは何かの間違いではないか。お前なら、もつとうまいやり方を知っておろう。

父上の最後を見れば、それは明らかだ」

王の声が、冷め切った空気に響いた。身じろぎひとつせず、家宰は王へその視線を向ける。氷像のような静けさを漂わせ、そして答えた。

「これは、心外なお言葉を頂きました。輪神の思召しにこそ、わたくしは仕えております。王とはいえ、その声の前ではただそれを聞き、長らうなら生き、さもなくば死すのみ。わたくしに、いったい何ができるというのでしょうか」

「確かに、貴様は何もしなかった。あの日、少数の供を連れて戦場の地形を確認していた父は、偶然その場で遭遇した敵の矢を受けて絶命した。これらの状況については、はつきりしている。だが、当日の明け方に、道を誤ったとおぼしき敵の集団がカシアスの森に接近しつつあるとの報告があったそうだ。そして、その情報は森へ向かう父に伝わる前に、どういう訳か消え失せた。これについて、何か思い当たることはないか？」

「……そのようなことを急に仰られても、返答は致しかねます。お言葉ですが、少なくともわたくしはそういった事実について把握し

ておりません。その根拠となる事柄に関して陛下がご存知であるなら、なぜわたくしにご相談頂けなかったのでしょうか？」

「ふん、白々しいことを。王の命に執着のない貴様を信用するほど、私の心は広くないぞ。今はもう、お前がどこまでできる状況ではない。ここで伝書の番をするより、せいぜい自分の事でも心配している。」

王が、そう言い放つ。だが、挑発的なその言葉に、家宰は何の反応も示さない。互いの視線には、もはや敵意しかなかった。もし、ここで大地が真つ二つに裂けようと、どれほどの影響を彼らに与えるだろうか。そのような空想を、さほど滑稽とは感じぬだけの重みが、この空間を満たしている。

その時、遠くから声が響いた。何と呼んでいるかは判らない。王が、短く息を吐く。緊張の焦点をずらした二人に、声の主が近づいてくる。イド・ルグスであった。

「陛下、家宰殿。今すぐ、ご退去を……！」

大きく息を吸い、そこで言葉を切らす。気づけば、王都の澄んだ空は微かなざわめきを漂わせている。その様子を感じ取り、家宰が口を開いた。

「陛下、この者と先にお行きください。わたくしは、囃として最後に逃げましょう」

そう言いつつ、頭を垂れる。手筈どおりの順番であった。視線を浴びせつつ、王は無言で踵を返す。だが、共にその場を去るイド・ルグスの耳には、家宰のつぶやきがはっきりと聞こえていた。

「……全く、不憫な男だ。愛する者を殺されたことに、気づいておらぬとは。」

イド・ルグスの足が止まった。だが、その言葉が己に向けて発せられたものではないと察し、何事もなかったかの様に歩いた。もし時間の猶予を読み違えたなら、と思うと気が気ではなく、急かすように王を追う。だが、次第にその足が重みを増し始め、一歩が鈍くなる。やがて、彼は気づいた。先ほどの言葉は、私に対するも

のか。

全く、不憫な男だ。愛する者を殺されたことに、気づいておらぬとは。愛する者を、殺されたことに。

イド・ルグスは、悪い予感を覚えた。ぞくぞくとした悪寒が、彼の肌を這う。

ユノ。ユノのことが。

そう思い至り、前を進む王を眼で追った。それは、彼にとってもすでに、過去の記憶となりつつある。家宰の声は、彼女にも間違はなく聞こえた筈だった。しかし、その姿は何の反応も示さない。立ち止まることも、言葉を発することもなかった。次第に、王の歩みは速くなる。足元の歩廊が、いつまでも続いていった。

隧道を抜けたイド・ルグスは、王とその供を連れて東に向かい、そして家宰たちは逆方向へと逃亡する。デロイ軍がその動きに気づく事はなく、彼らの追跡もなかった。王都を占拠し、すぐさま全ての大兵長と幕僚たちを集めた軍団司ハニアスは、敵軍の居場所を彼らに推測させる。その結論を聞き、彼は地団駄を踏まんばかりに感情を昂らせた。

エスーサの周辺にメデイトリア軍を発見できぬ以上、彼らは川下へ向かったものと思われた。その先には、ダルカスを包囲する友軍と橋頭堡に配された諸部隊があり、敵軍の主力集団に襲われれば、数量的には互角の戦いを強いられるだろう。だが、メデイトリア側がそう行動したなら、時間的に考えるとその知らせはもう届いている筈であった。デロイ軍の後方部隊にとってこの状況はあくまで想定内であり、ある意味で彼らは待ち構えていたのである。ならば、敵の目標は別にあると判断するのが妥当であり、彼らが姿を消してから時間経過を勘案すると、その場所はメデイトリアの中にはない。つまり、その外である。敵の軍勢がそこへ行ける経路は、ただひとつ。現在においても彼らが保有している関門、ギラメラ門であった。

難攻不落の要塞であるこの門には、戦役の開始から間もなくオシア側とメデイトリア側にデロイ軍の部隊が配され、両方面から封じ込めが計られていた。だが、これらの部隊は、軍団の本隊がエスーサへ到達する頃には所属元の大隊へと呼び戻され、少数の見張りだけが残されたのである。これは、エスーサに接近する軍団本隊が自らを増強するため、ドミノ式に部隊を前進させた結果でもあった。つまり、メデイトリア軍にその経路を与えたのは彼らであり、王都の周辺に目を向けすぎた事がその原因といえる。しかし、そう述べた幕僚たちの表情は、ハニアスとは対照的に平然としていた。

仮に、後方をメデイトリア軍に遮断されたとしても、味方がノクニイ峠を確保している以上、補給を含めて互いの条件は五分。時間が経てば、敵はデロイ本州からの増援と自軍に挟撃される形となり、持ちこたえることは不可能である。もし、敵が別方面へ進出するなら、後方の部隊に追撃させればよい。それが、幕僚たちの意見であった。その上で、彼らはメデイトリア側の行動を愚策と笑う。その後、ハニアスは軍団の本隊を橋頭堡まで戻すことを決定し、後方の部隊にはオシア州へ行き敵の居場所を探るよう命じた。そして彼らは、すぐさまエスーサを発った。

その頃、ノクニイ峠を守る帝国兵の前に、敵と思われる集団が姿を現していた。峠にある砦からオシアに目を向けると、そこには遮るような丘陵がある。やって来た軍勢は、その丘の上に留まり眼下の砦を俯瞰した。とはいえ、慌てて守備を固める砦のデロイ兵に比べ、その数は少ない。

帝国軍の占拠する砦は、峻険な山の帯を切り通したような場所であり、両翼ぎりぎりまで垂直の岩壁が迫っている。その壁の片側には、塔のような岩山がそそり立っていた。やがて、丘の上から物見らしき五、六名の従士が走り下ってくると、その山の付近に埋まる石塊を盾にして身を隠す。その様子を見て、砦のデロイ兵は丘の上の集団がメデイトリア軍であると、ようやく確信する。だが、帝国

領であるオシア側から敵が来たことに、峠を守る彼らも戸惑いの色
を隠せない。

物見たちの何名かは石の陰から砦を窺い、辺りに生い茂る萐草の
せいでその姿はよく見えない。峠のデロイ兵たちは警戒を続けるが、
彼らは丘の上のメデイトリア軍を単なる斥候と判断していた。敵の
本隊がここに到着するのを見越し、すでにメデイトリア領内の味方
へ救援を要請する伝令を走らせている。彼らは、あくまで待つつも
りであった。

やがて、物見たちが隠れていた岩から小さな呻きが聞こえ、激し
く咳き込む声が響く。その岩陰から、薄墨のような煤煙が漏れてい
るのが見えた。やや間があり、物見たちが弾けるように駆け出した。
砦の方には目もくれず、彼らは滑稽なほどの逃げ足で斜面を上って
ゆく。そして丘の上にいた者たちも、じりじりと後退して稜線の陰
に隠れた。

デロイ兵たちが、丘を駆けあがる男たちを何事かと見る。息を切
らし足を鈍らせた彼らは、やがて腰丈まで生えた草を手で掴みつつ
進むが、夏の青草は抜けるばかりで何の役にも立たない。その様子
に、峠の守兵たちが緊張を緩ませ甲高く笑った、その時。

怒涛のように、砦の側面から土砂が噴出した。膨大な量の礫塵が
飛び散り、宙を舞う。砦とその周辺が、茶褐色の中に消えた。地面
に刺さるように、石と土の雨が降り注ぐ。そして岩山の根元にぽつ
かりと空いた穴が見え、次の瞬間その上の岩盤が崩れおちた。石の
塊はあっけなく消え、山の露出面がさらになだれ落ちる。連鎖的な
崩落は数度続き、そのたびに濃い塵雲が丘をかけ上った。それが止
むと、そびえ立っていた岩山は半ばまで瓦解していた。ばらばらと
転がる石の音が、麻痺した聴覚の中で跳ねている。

砦が、完全に消えていた。その場所には、岩盤の巨大な切片
が無残にも積み重なっている。丘にいるメデイトリアの従士たちが
皆、無表情にそれを見ていた。大地に散らばった石塊の群れは、ま
るで墓標のようだった。視線の先にある光景をしばし見つめ、やが

て彼らはその場を去った。

十

十

カシアスの北でその姿を消したメデイトリア軍は、すでにギラメラ門を通過してオシア州にいた。そして、デロイ側が占拠していたノクニイ峠には、兵の家の従士たちが事前に大量の抱鉄を埋設しており、それは峠にやってきた彼ら自身の手で点火された。その威力は、作業を指揮したシユマロたち士隊長の想像をはるかに上回るものであった。

岩山を構成していた岩盤は波動の良質な伝導体であり、抱鉄の爆轟がその内部に反響することで結合層の劣化が進み、あれほどの崩落が起きたのである。それは、単純な爆発力によって生じた結果ではなく、奇岩自体の不安定さもその一因といえた。

そして、砦の守兵は一人残らずその下敷きとなり、ノクニイ峠は通行不能となっていた。メデイトリア領内の第一軍団は外部との連絡を断たれ、孤立する。当然、オシアからの補給も途絶える事になり、彼らには手持ちの糧秣しか残されていない。第一軍団は十万人を超える人員を擁しており、橋頭堡へ大量に集積された物資も、多く見積もって数十日分しかないものと思われた。

だが、メデイトリア側の意図は、彼らの補給を断つことではなかった。首尾よく峠を遮断できたとしても、第一軍団が全力でその復旧にあたれば時間稼ぎにしかない。そして、それがイド・ルグスの狙いだった。メデイトリア軍の目的地は、帝国の属州である。各隊がそれぞれの州へ進軍し、駐屯するデロイ兵を駆逐する。その後、自治領と属治領に蜂起を呼びかけ、集めた軍勢で第一軍団を迎え討つ。とはいえ、州民たちがそれに応じるかは予測不能であり、最悪の場合は逆に攻撃される事態もあり得た。その危険は承知の上だが、第一軍団の追撃を受ける心配がなくなつた今、時間的な余裕は確保できている。

メデイトリア領内の軍団兵が峠の惨状に気づく頃、イド・ルグスらはカピリノの山すそを東行し、ギラメラ門に近づいていた。山脈から流れ出る夏の雪解け水は、溪流となってヒメル川へと注いでいる。デロイ軍はギラメラ門を再び封鎖するため、すでに部隊を差し向けているだろう。どちらが先に到着するか、それが運命の分かれ目となる。道なき道を進み、凍えるような沢を越え、彼らは先を急いだ。

だが、門まであと少しという地点で、事故が起こった。川を涉っていた数名が、馬もろとも流されたのである。不運にも、その中には王がいた。例年を越す暑さのため、沢は急流となっている。馬から落ち、しばらく流された彼らは、何とか岸に這い上がって事なきをえた。その後、一行は最後の力を振り絞るように進み、やがてギラメラ門に到着した。門の周辺に帝国兵はおらず、それはイド・ルグスの行動がまだデロイ軍の一手先にある証だった。

第一軍団を出し抜きここにたどり着いた彼らは、それだけで小さな勝利を収めたといつてよい。しかし、この事を喜ぶ者はいなかった。沢の一件で体調を崩していた王は、到着から間もなく高熱を発し、すでに一步も動かせない状態となっていた。幸いな事に、門の周辺は薬草の群生地であり、供をしていた薬師が彼女を治療するが、夜になっても熱が下がる気配はなかった。

そして、王を見守るイド・ルグスと侍従官たちには、この状況がよく判っていた。たとえ、彼女の精神が鋼のように強くとも、その少女の体には限界がある。王としての務めと重圧、家宰たちとの対立、エースサでの連日の儀式と作業、脱出後の強行軍。そういった事に、いつまでも耐えられる筈がなかった。その日の深夜、王はふと目を覚ましイド・ルグスを呼んだ。すぐにやってきた彼が、粗末な寝台の前でかしまった。

「……起きていたな」

そうつぶやき、王は人払いを命じた。やつれているという程ではないが、その動作には力が感じられない。

「何から、話せばよいか……」物忘れをした時のように、彼女が眉間へしわを寄せる。

「……確か、前にもそんなことを言ったな。お前には、こういう込みいった事情を聞かせてばかりだ。その全てが、知って愉快的ことではなかったらう」

王が、浅く息をする。彼女の言葉も仕草も、全てが緩慢だった。

「なぜ、こんな事になってしまったのか……。私にできるのは、語ることだけだ。それは、父上がお前を選んだ時から始まった。王家の抱える問題を解決するため、その能力があり正義に篤く私心を持たず、何色にも染まっておらぬ者が必要であつたのだ。だが、父は道の半ばで斃れ、私に与えられた時間はあまりにも短かった。だから、私は――」

声が止まる。閉じた目蓋は、眠そうにも見えた。

「いや、そんなことを言っても仕方がない。お前に伝えたいのは、それじゃない。口は動いても、頭が働いておらぬな……」

ぽつりとそう言い、イド・ルグスに視線を向ける。腰布の下には脚絆がきつく巻かれ、それは皆に滞在するための装備ではなかった。その眼を見た彼は何かを言おうとするが、先に口を開いたのは王だった。

「……お前たちの考えは、解っている。私が眠っている間に、侍従官とも相談したのだらう。それを責めるつもりはないし、足手まといになる気もない。だが、ここに置き去りになる前に、伝えることがある――」

それを聞き、イド・ルグスは硬い表情を寝台に向けた。こうして言葉で先回りされるのは、何度目になるだらうか。この王の物言いは他人を寄せ付けぬものであり、寒々とした感情を抱くこともある。彼女の人格において、歳相応の優しさや甘さといった未成熟な部分は、極限まで圧縮されているといえた。とはいえ、偉大な王の唯一の後継者として教化されることの厳しさを、イド・ルグスはこれまでの経緯の中でひしひしと感じ、それは彼の義心に何かを響かせて

もいる。そして、王を支持する理由にそういった個人的な感傷があることを、彼は否定できなかった。

だが、人間とは成長の過程で大人になりきれない部分を少なからず残すものであり、それが良い方向に働けば個人的な魅力となり、逆に働いたとしても心の逃げ場という救いを提供する。また、人の行動とはしばしばその部分に影響され、それは人生に対し不確定な弾力を与えつつ、結果的に幸運をもたらしたり、逆にその人を破滅させもする。

そして、極論においてはこの予知性に乏しいものがあるからこそ、人間は希望を持って生きてゆけるといえる。イド・ルグスを知る王の言動からは、そういった無用の長ともいえる部分が完全に抜け落ちていた。それは、ある意味において人格的な畸形であり、この国にふりかかった理不尽さの犠牲者には、彼女も含まれているのかもしれない。

声を待つイド・ルグスへ、王はしっかりと口調で告げた。

「あの、ユノという女についてだ」

その言葉を聞いたイド・ルグスが、覚悟を決めたように目を閉じた。ユノは、彼が十年來つれそつた内縁の妻だった。それを知る王の言い方に婉曲な響きがあるのは、結婚していない男女が一つ屋根の下に住むことが、不道德な行いとされていたためだった。兵の家の従士に婚姻は認められておらず、それは彼らの身分の特殊性にも関係していた。しかし、その事はすでに形だけの禁忌であって、こういった場合の王の言い方も曖昧にならざるをえない。

カシアスの戦いの後に、彼女はイド・ルグスの前から姿を消していた。その理由について、彼には思い当たる節がひとつだけある。だが、心のどこかには、何かよからぬことが起きたのではないか、という疑念が少なからずあった。それを現実のものと思えば、彼はいても立ってもおれなくなる。そしてエースーサからの脱出の直前、家宰の放った言葉がその不安を大きく煽っていた。

まさか、王の輩がユノを。だが、なぜ。グラメラ門への途上、

彼は疑念と問いを募らせた。エスーサの周辺は、完全に王家の縄張りである。あの時の家宰の声が、王に聞こえなかった筈はないが、彼女からは何の言葉もなかった。

家宰は私を陥れるために、全く無根拠なことを口走っただけなのか。ならば、陛下はなぜ黙っておられるのだ。そう思うイド・ルグスであったが、彼はスタインに言われた事を思い出していた。こうなった以上、何があるかと絶対に迷ってはならん。

イド・ルグスが師士として構想したこと多くが、すでにその手から離れていた。ユノの身に何が起きていたとしても、それに比べれば一粒の砂に等しい。この国の命運を懸けた策戦が、今ようやく軌道に乗ろうとしているのである。そこに私情を差し挟む余地など、残されてはいない。ならば、今それを王へ問いただす事で、何を得られるというのか。そう思い至り、彼はその砂粒を心の底へ沈めたのである。

「……結論から言えば、あの女は内通者であつた。お前が士隊長となった後、その言動を何者かに知らせ、情報を提供していたのだ」

イド・ルグスの眼が、鈍く瞬いた。ありえぬ、という考えが即座によぎる。

「彼女は、定期的に訪れる密使へ報告を行っていた。留守の多いお前が、それに気づく事は不可能だったろう。やがて父が亡くなり、私はその事実を把握した。家宰も、要らぬことを喋ってくれたものだ」

まさか。イド・ルグスの視線が虚空に向かい、瞳がそう言っていた。ぞくぞくとした悪寒が、彼の肌を這う。無表情にその様子を見ていた王は、言葉を続けた。

「あの男、賢いのか馬鹿なのか……」つぶやく様に言う。「あらかじめ言っておくが、彼女は無事だぞ。……聞いているか？」

表情を硬直させていたイド・ルグスが、はっと王を見る。

「ユノは、お前を裏切った訳ではない。彼女に近づく者が、巧妙なやり口を用いたのだ。王、つまり私の父が、お前の素行や言動を内

密に知りたがっていると信じこませ、彼女を内通者に仕立てあげた。無論、父上はその様なことを命じてはおらぬ。常に正確で明瞭な報告を行う彼女は、あくまでお前の味方だった。父の崩御と共にその役割は終わったかに思えたが、密使はこう告げた。新王陛下も、同様の情報をお求めである、と。だが、彼女はそこで驚くべき行動に出た。イド・ルグスという男がこのような監視を必要とせぬことを私へ直訴しようとしたのだ。即位後の慌ただしさの中、彼女の嘆願は運良く私に直接届けられ、全ては明らかになった。その時点で、密使を差し向けた者の正体は不明だったが、こうして訴え出たことで彼女に危害が加えられるかもしれぬ。だから、私が匿った。ユノは今、アビウズにいる。この件の首謀者は、家宰とみて間違いないだろう。彼女の存在を知りつつ、なおかつ私によって消されたと認識しているのが、明らかな証拠である。その原因を作った者だからこそ、そう誤解するのだ。全てが内密に取り扱われたため、家宰はユノの行方を掴めていなかった。そして、私とお前の関係にひびを入れようとして、ついに尻尾を現した。全く、余計なことを言いおつて

王が、血の気のうすい頬を緩めた。

「これで、彼女も不安な日々から解放されるだろう。機密を守るため、この事はお前にも知らせなかった。だが、王都を出て私が何も言わなかったのには、別の理由もある。冷たいようだが、この場合は二人が互いの存在を忘れてしまうのが最善なのだ。聞けば、あの女は子種を受け付けぬ身体だとか。ならば、なおさら関係が続けるべきではなからう。以前の暮らしを取り戻すことはもちろん、今は会うことすら安全ではない。これを聞いてお前は安心しただろうが、伝えるべきではなかった」

短い沈黙があり、言葉を続ける。

「……家宰の目的は、おそらく単なる情報収集ではない。お前の身辺へ介入する手段を手に入れ、いつでも王との関係にくさびを打ち込めるよう備えたのだ。そのことが発覚したとしても、奴ならどう

にでも言い逃れできよう。今後、家宰がどんな手を打ってくるか予想はできん。ユノには念のため、お前が別の女と住み始めたと伝えた。不測の事態を避けるためだが、今は落ち着いている。思った通り、強い女だ。お前にも未練はあるだろうが、理解してくれ。とにかく、彼女は無事だ。この事を、伝えたかった」

いつもより細いが、芯のしつかりした声だった。それを感じるイド・ルグスの胸で、複雑な感情がゆっくりと渦を巻いている。だが、その一つひとつを意識する前に、彼は自分の体から張り詰めたものが抜けてゆくのに気づいた。

やはり、怖かったのか。何よりも先に、そう思った。何を聞かされても、動じぬ覚悟はできていた。だが、人間にふりかかる災難とは不合理なものである。理屈ではない何かに激しく揺さぶられ、イド・ルグスはその原始的な感情を抑えられなかった。いくら落ち着きはしたが、それは今もまだ肌の上を這っている。

確かに、ユノは強い女だ。イド・ルグスは、当然その事をよく知っている。彼女は、子を生まぬことを理由に、前夫から離縁されるという厳しい過去を持っていた。それは、この国では女としての意義をほぼ失ったに等しい。現在のメデイトリアは生と死が均衡しており、死亡率も低い水準にあるため、人々が膨張的な家系を保つことは難しい。氏族の系統はやせ細って数珠繋ぎとなり、その姿は限りなく核家族へと近づいてゆく。結果的に、彼らの課題は実子の生育へと集約され、ゆえに不妊は家系の最大の敵であった。ユノは生家に帰ることもできたが、両親が亡くなれば生活を保障するものはない。そう思った彼女はエースーサへ行き、イド・ルグスと出会った。王都には多くの従士がおり、養い手を失った不遇な女たちは彼らと連れ添うことで、その余生を全うできるのである。兵の家とは、さまざまな意味で社会の浄化に必要な場所であった。

その後のユノは、イド・ルグスを内から支える杖として暮らした。荒みがちな生活に清潔なゆとりをもたらし、目に見えぬ心のささくれを慰め、ときには領内の賊に対する内偵まで行い、熱心に彼を助

けた。ただ、どんなに非の打ち所のない女であっても、過去からは逃げられない。その頃、ユノの前夫が子を授かったと伝わっており、曖昧さを残していた責任の所在に決着がついたのである。これは、彼女と暮らすイド・ルグスにとってもつらい事であった。とはいえ、可能性がすべて閉ざされた訳ではない。叩き方が悪いために、鼓が鳴らないという事もあるだろう。イド・ルグスは、彼女にあることを提案した。要するに、試すのである。二人はまだ、念のための避妊を怠ってはいなかった。だが、どれほど努力しようとユノに懐妊の兆しはなく、この結果は落胆以上の何かを互いの心に残した。

子が欲しくなかったといえば、嘘になる。己の行動を、イド・ルグスは今でも後悔していた。ならば、彼女の不妊を了承していた事も、初めから嘘だったのか。そう自省するイド・ルグスが彼女をいたわるほど、二人の関係はぎこちなさに沈んでゆく。そして、これがユノにとっても重荷となり、後々の事件へ影響していたのかもしれない。彼にその後ろめたさがある限り、未練を断ち切ることは不可能であった。二人に対する王の思惑は、現実的ではあっても感情には逆らっている。ユノがどんな心境でいるのか想像するだけで、彼は自分の身を切られるようだった。確かに、彼女は王の伶俐な判断に救われたのかもしれない。だが、イド・ルグスはその遠慮のない鋭さが個人へ向けられた場合の痛みを、この件で初めて意識していた。つまり、エースーサで家宰が放った言葉は、ある意味での確な場所を狙ったといえる。

イド・ルグスが仕えた二人の王は、理知的であつたが愚直さも感じさせる人間だった。わかりやすく言えば、個としての用心や臆病さに欠けているのである。彼はそういった危うさを、これまでも感じたことがあつた。生存に関する感覚が人格の基礎であるなら、王とは根のない大木なのか。人物としての知恵や認識力を考えてみても、それは不可思議な偏りであつた。あるいは、その事こそが高貴さというものを支える根源なのかもしれない。だが、もし王がそういった特質をもつのなら、それは良いことだろうか、悪いことだ

ろうか。イド・ルグスが、少なからぬ不安をよぎらせる。だが、彼はそれと同時に奇妙な安堵も覚えていた。それでいいのだ、と心のどこかが言っている。

誰も口に出さぬが、聖なる都エースーサはすでに帝国軍の手によって破壊され、焦土に埋まっているものと思われた。また、村邑や集落の大部分が無防備な姿をさらしており、それを守る術はもうない。今は犠牲を顧みる余裕がなくとも、惨状はいずれ明確な結果として現れる。これまで黙っていた者も、やがては口を開くだろう。この戦役がどんな結末を迎えるにせよ、反動は確実にやってくるのだ。これまでとは次元の異なる批判が浴びせられ、自身の安定に敏感であればあるほど、耐え続けることは難しい。それは、ある種の鈍さのない人間にとって、神経を狂わせる毒であった。これから、徐々にメデイトリアはその中へと浸ってゆくであろう。いや、ユノの一件における状況から考えて、すでにボルボアン王の時代から、それらの予兆は始まっていたのかもしれない。

イド・ルグスの長い沈黙を、王が見守っていた。その胸の内にある感情の渦は、まだ残っている。彼にとって消化できぬことも多かったが、やがて口を開く。ユノの処遇について礼を述べると、気持ち少し落ち着いていた。ふと、彼が思う。

家宰とは、いったい何者なのか。

心の濁りを底に沈め、イド・ルグスは素直な言葉で問いかけた。口の端に笑みを浮かべ、王が答える。

「王家にはびこる亡霊か、あるいはメデイトリアの真の守護者が……」

そう言つと、彼女の表情からほころびが消えた。

「……以前から、私は不思議に思っていた。聖密院の伝統として、王陵には王族だけでなく家宰の一族も立ち入ることが許されている。他の者は、たとえ侍従長といえどその場所を見ることがすらできぬのに、まるでそれが当然だといわんばかりにな。この事について、彼らは王と同等の権利を有しているのだ」

空色の瞳がイド・ルグスをじっと見ていたが、やがてその力が緩んだ。

「まあ、何の確証もない話だが……。状況証拠をいくら示しても意味があるまい。　　グルグア人についての私の説明を、覚えているか。彼らは、どこへ行ったと思う？」

目線を宙に浮かせて、彼女がそう言う。

「……王家と王の輩は、これまで互いにその血縁を交えてきた。お前も知っていようが、聖密院に集う家々の系統は、そうする事によって守られているのだ。外部との混交も無く、今となつては個々の血統など存在してはおらん。つまり、血縁的には誰もが王族であり、そして王の輩なのだ。だが、その中で保たれているものが、ひとつだけある」

澄んだ声の余韻が、イド・ルグスの肌を刺した。

「それは、家統というべきものだ。一族の系譜であり、その記憶でもある。家の主は後継者を選び、必ずこれを伝承させねばならん。当然、その中には家外に秘されるべき事項もある。私にとっては、諸々の祭式や王家代々の口伝などはもちろん、あの伝書の内容を知ることその一つだ。それがある事すら、外部の者には知りえない王といえど、その例外ではないのだ。王陵に収められた伝書がグルグア人に由来するなら、彼らが王の輩として国政に参画したことも容易に想像できよう。もし、それが正しければ、その者たちは我々の血統に溶け込み、今もいるのだ。この、空色の瞳の中に――」

常人より青味を帯びたその淡いきらめきは、メデイトリアにおいては貴人特有のものであった。王族や王の輩たちは、聖密院で生まれ育つゆえにそのような眼彩をもつ。少なくとも、この国の人々はそう認識していた。

「おそらく、グルグア人の家統を継ぐ一族が、聖密院のどこかにいる。父上は、その事に気づいてなかった。そして、王に対する彼らの警戒は、鋭く厳しいものだった。それが、父の唯一の誤算だったかもしれぬ。だが、彼らがこの国を害するのか護るのか、誰にも判

りはしまい。少なくとも我らアルダネス王朝の統治とは、そういった目に見えない衝突と均衡のもとに育まれたのだ。家宰の正体は何者であるかと、彼らがいままで王家を支えてきた事にかわりはないいま、私が説明できるのはそれだけだ……」

王はそう言くと、力尽きたように寝台に身を預ける。

「お前たち鎧をもつ者は、生きて還ることだけを考えればよい。夜が明ける前に、ここを発て。オシアにいる国軍の精鋭たちが、いまや遅しと待っていていよう」

馬をひいてオシアへの道を下るイド・ルグスが、後ろを振りかえる。そこには、暗がりには沈む山々があった。嶺の上には闇があり、雲の群れが月光を浴びている。その方向に目を向ける彼は、横溢した力の塊のような、重たい何かを感じていた。今に至り、イド・ルグスはメデイトリアという存在を、初めて客観視したのかもしれない。籬の外れようとしていたその国は、静けさの中に佇んでいた。その場所に蓄積した数百年の内圧が、今まさに放たれようとしている。背後に意識するその塊は、イド・ルグスにとって己の一部のように思えると同時に、怖ろしくも感じるものだった。

崖道が尽き、灌木が見えてくると、そこはすでにオシアである。ここから先は、死地といえた。イド・ルグスが、鎧に足をかける。王のいるグラメラ門も、デロイの軍勢によっていずれ封鎖されるであろう。心のざわめきを堪え、鞍に乗った。西の嶺を、曙が照らしている。その先に、故郷の空がようやく見えたとき、馬は走りだしていた。

【第九章】 決戦

帝国の北端で、キリア州がついに平定された。これまで帝国の侵略を退けてきた都市ラニスは、街を包囲する第二軍団に対し今はその門を開いている。互いに取り結んだ商業協定を根拠にこの都市を支援してきたルムドとカーレは、帝国に喫した手痛い敗北の後にキリアの紛争へ対する興味を急速に失っていた。それは、彼らが負けを認めたという事ではなく、ラニスとの関係と今後の戦費を天秤にかけた結果であるのは明らかだった。彼らのこの判断は単純な損得勘定から生じており、そこには若干の近視傾向があるといえる。

双子の巨都として知られるこのルムドとカーレは、大海の支配者であり商業国家であった。彼らの社会においては資本こそが権力の源であり、それは国家という枠組みすら内包する原理として働いている。つまり、国そのものが資本によって経営されており、国益というものを厳密なものさしで判断し、最大化することが彼らの正義であった。

そして、そういう場合において高い位置からの視点を失いがちな己の弱点を、彼らもその長い歴史の中でよく理解している。しかし、国家間の闘争において武力という古臭いものではなく、貿易や経済といったものを魔術のように使いこなす彼らは、自分たちの賢良さを疑っておらず、その判断は早かった。

これに対し、デロイ帝国では土地と人との結びつきを政治の根本としており、その構造はなんら進歩的なものではない。当然、他国との関係もそれらの延長線上にあるため、この両者の視線は交わることがなかった。ルムドとカーレの人々は、そういった面で帝国の見識を軽んじており、それはある意味で彼らの迂闊さといえた。

商業都市ラニスの城楼から望む広大な三角地帯は、ここ数年の戦乱とつい数日前まで行われていた包囲戦で荒れ果てていた。とはいえ、キリアはノルデア河の下流地域にあり、流域はガルバニアに劣

らぬ沃野である。ルムドとカーレの出兵を口実に、ラニスを攻撃した第二軍団はおよそ半年にわたって戦闘を続け、今ようやく両者は妥協点を見出していた。自市とその周辺を統治するラニス議会は、すでにデロイ側が実質的に支配している地域をデロイの領土として認め、彼ら自身はラニスとその支配海域の自治、ならびに商業活動の自由が保障される結果となった。

形の上ではデロイ側の勝利といえるが、彼らはそのためにラニス議会の出した様々な条件をやむなく承諾していた。第二軍団にとってこの包囲戦はあくまで受動的なものであり、これ以上の長期化や拡大の動きを見せれば、貴族院でその越権性を追求されるかもしれない。また、オシア大蜂起がようやく平定されたとはいえ、帝国全土に漂う不穏さは払拭されておらず、主力軍である第一軍団もメデイトリアへ遠征中である。この状況下では、いかに野心家のダ・プーといえど自重せざるを得なかった。

ラニス側の条件によって、帝国がキリア州に対して駐屯可能な軍兵は一万人に制限され、ラニス城市に滞在できる人員も五百名までとされた。つまり、帝国のキリア州に対する領有権とは、与えられたものでしかないといえる。対照的に、ラニス側の自治への制約は存在していない。この要求に対しダ・プーは、ラニスの所有する軍船の数を削減するなどの制限を対抗させ彼らの力を削ぐうとしていたが、結局はそれを撤回していた。そして、彼のこの妥協によってラニス議会は態度を軟化させ、講和成立への弾みとなった。

これは、単なる領土獲得が目的ではない彼には譲れないはずの条件であり、この結果はダ・プー個人にとって敗北に近いのかもしれない。だが、文書の調印後にラニスを去る彼の表情から、読み取れるものは少なかった。ともかく、彼らが長年にわたって続けてきたキリア戦役は、これで一応の決着がついたのである。

その後、キリア州に対する戦後処理を行いつつ、第三軍団との交代のため待機してたダ・プーのもとに、帝都からの指令が届いた。それは軍団の丘にある第一軍団本営からのもので、至急デロイに帰

還せよという内容であつた。帝国の軍制では、上位の軍団は下位の軍団へ命令を発することができるとはいえ、それは民会の決定のように絶対ではなく、作戦上の連携のためのものだった。

これを受け、ダ・プーはひとまず待機を続けながらこの指令の意図するところを帝都へ問い合わせた。彼らが今ここを発てば、キリアを守る兵士は誰もいなくなるのである。また、兵を一部残すとしても、そういった判断を下すには情報が不足すぎている。返ってきたのは、第一軍団の留守を預かる軍団司代理、つまり命令を出した本人であつた。

「どうか、内密に」

その言葉に続く彼の話を聞き、ダ・プーは思わず白髪交じりの眉をよじらせる。その内容とは要するに、メディトリアにいる味方との連絡が、おそらく完全に失われたという事であつた。まだ若い容貌の軍団司代理は、ダ・プーのその表情を見ると唇を小さく震わせる。それは、彼の語ったことが彼自身にも信じられぬという仕草に見えた。

やがて、オシア州の糧秣集積地が敵に襲撃されたと聞き、ダ・プーは浮いていた腰を席に落とす。気を抜けば泳ごうとする視線を、正面に定めた。

（　という事は、だ）

頬の強張りを感じつつ、ダ・プーはメディトリアの景観を思い起こしていた。開けた草原と濃緑の森林、そして鋭い峰が縦横に交わるあの地は、まるで巨大な船倉のようだった。入り口は狭く、内部は隔壁によつて仕切られ、そして十分な広さがある。デロイがこれまで侵略した国々と勝手が違うことは、誰の目にも明らかであつた。彼の率いる第二軍団の帷幕には、経験豊富で老練な貴族たちが多数参加している。だが、第一軍団の軍職とは枢軸貴族の若い子弟たちが経歴を磨く場所でもあり、上級兵長や幕僚の顔ぶれには若干の青臭さがあつた。とはいえ、彼らはたいい兵学を修めているため役立たずではないが、その分いくらか理屈倒れの悪癖も持っている。

（峠を抜かれたか、門の押さえが足りなかったか……）

ダ・プーが無意識に髭をしごく。それらの傾向があるとしても、枢軸貴族たちもこの戦役の重要性を知っており、第一軍団の人材面に大きな粗漏があるとは思えなかった。単純に、敵の動きが彼らの予想を超えていたと推測するのが正しいだろう。これを伝えにきた軍団司代理は、最悪に近いことも仄かに想像している様子だったが、状況からその可能性は少ないといえた。オシア州にいるのがメディトリア軍であるなら、おそらく第一軍団とは戦っていない事になる。兵力に乏しい彼らは、たとえ勝ったとしても痛手を負うはずであり、その上で敵地に進出するとは考えにくい。

（……ならば、奴らの目的は防備の手薄な属州ということか）

この場合、メディトリア側は本来であれば故郷の防衛にまわすべき兵力を、帝国領内へ差し向けたといえる。その意図を推し量るなら、彼らは敵地を荒らして主導権を握り、結果的に祖国を守るうとしているものと思われた。また、その場合は帝国側の強力な抵抗が予想されるガルバニア本州を避けるのが利口である。今回の一件についてはそう解釈することが可能であり、またダ・プーもそのように考えていた。

軍団司代理がこれまでの経緯を説明し終わると、ダ・プーは迷いのない口調で第二軍団を事態の対応にあたらせる事を約束した。その言葉を聞き、軍団司代理は安堵しつつも表情に痛々しさを浮かべ、深々と頭を下げる。そして、口早に礼を述べると慌ただしく帝都へと帰っていった。

（さて、どう動くか　　）

理解と驚きを平行させていたダ・プーであったが、ようやくゆつたりと考え込んだ。彼に急ぐ様子はなく、逆に時間を稼いでいるようにも見える。事実、そうだった。

（……間に合うはずが無い。ましてや、あの男の仕業なら）

鈍い光を放つ、鉛色の瞳を思い出す。イド・ルグス。これから起きるであろう混乱が、ダ・プーには想像できた。オシアにいる

敵軍は、すでに属州へ向けて毒蛇のごとく散つていよう。彼は、無数の蛭たちが首筋を這うような、むずむずとした感触を覚える。

（奴ら、本気で狂ってやがる……）

もし、彼らが命知らずの戦士であれば、自身が死ぬことを怖れはしまい。それは、常人の思考から少し遠いとはいえ、異常ではない。だが、メデイトリア軍の行動はそのはるか遠方にあつて、民族あるいは国家の滅亡という事すら、彼らは怖れていないように思えた。帝国という社会の根底へここまでの脅威を与え、倒そうという者は、それを成すか滅びるかの運命しか選択できぬだろう。このことを是として、いかなる危険も顧みないのが彼らの正常であるなら、明らかに常軌を逸している。

だが、これらの事態と正対するダ・プーの胸の内では、むくりとした期待感が育ち始めてもいた。しばらく萎んでいた野心が、秋雨を浴びた茸のように立ち上がる。

（俺も、同じようなものかもしれない）

この危機に対し、欲情に似た反応をみせるダ・プーもまた、位置的には彼らに近いだろう。彼の場合は、デロイへの忠誠と愛における倒錯者といえる。さらに、イド・ルグスが生きているという予想も、ダ・プーの心の琴線を激しく爪弾いていた。脳裏であぶくのように湧き出す発想を止めようとせず、彼は席に沈み続ける。

やがて、先ほどの軍団司代理の来訪を知った大兵長たちが、何事かとばかりに集まり始めた。こういった場合、大抵は自分たちへ厄介事が押し付けられてしまうのを、彼らもよく承知している。彼らを居室へ入れ、少々芝居がかった苦慮顔で事情を説明すると、ダ・プーは皆の動揺を制しつつ、指揮下にある全部隊の出発を命じた。

第二軍団が营地を出たのは、その日の夜であつた。ラニス側に気取られぬよう設営物を残したまま、彼らはキリア州を離れる。先を急ぐような行軍ではなかったが、休息は短く行程にも無駄はない。そして、本州ガルバニアを目前にした時には、第一軍団やオシアの

状況について、事情を知らされていない末端の兵士たちも噂するようになっていた。

それらの情報は帝都からのもので、その半分以上は事実といえた。士官下卒を通じてそういったものが漏洩していることは、皇帝はもちろん枢軸貴族たちまでもが事態を制御できておらず、帝国の中枢が明らかに混乱している証でもあった。もし、この状況で軽率な対応を行って事態の収集に失敗すれば、彼らはようやく取り戻した政治的主導権を失いかねない。貴族院において決定を下すべき枢軸貴族にはその逡巡があり、多数の派閥で構成される彼らに即断は難しいといえた。

そして、ダ・プーはこれを予想しており、こうして善処するふりを見せつつ、己の政治的要求を枢軸貴族たちに捻じ込もうという腹積もりであった。とはいえ、それを公約として求めるのは露骨に過ぎて内外の支持を損なうおそれがあり、密約として求めた場合も危機が去れば反故にされる可能性がある。つまり、ダ・プーもまだ模索の段階であり、貴重な時間を空費しつつその方法と機会を探るのは、彼にとっても危うい賭けだった。

だが、デロイに到着した第二軍団がひとまず城市の外に留まつて情報収集に努めていたところ、貴族院から意外な決定が下された。それは、オシア州で確認されたメデイトリアの軍勢を討伐せよ、との議決であった。こういった緊急時には、制度上の様々な手続きを無視することが許されるため、不本意な命令に対する時間稼ぎといった姑息なことはできない。デロイの防備が手薄であるのを口実に、まずは帝都内に帰還することを目標としていたダ・プーであったが、策を弄する前にオシアへ追い立てられる結果となった。

現段階で、本当にメデイトリア軍がオシア州に進出したのか、そして今どこにいるのかといったことは不明確であり、貴重な戦力である第二軍団を帝都から動かすのはその確証を得てからだ、と、ダ・プーは予想していた。もし、この議決が第二軍団を帝都から遠ざけるための口実であり虚偽に基づいているなら、枢軸貴族たちはその

判断をいずれ追及される事になるだろう。だが、メデイトリア軍がオシアに存在しており、さらに集結していることは事実のようであった。

（……これは、どうしたことだ。奴らは、いったい何をしている）
やがて、自身もそれを確認したダ・プーは状況の理解に苦しむが、彼に選択肢は残されていない。慌ただしく物資の補給や人員の補充が行われ、第二軍団は獲物を与えられた猟犬のようにオシア州へ向かう事となった。

十

十

この時、メデイトリア軍は確かにオシアにいた。

抱鉄を用いてノクニイ峠を封鎖した後、彼らはイド・ルグスと合流してデロイ軍の糧秣集積地を襲撃し、所用の食料を手に入れている。その後、軍勢は各隊ごとに士隊長に率いられ、それぞれが受け持ちの属州へ向かった。

すでに、彼らに帰ることのできる場所は存在しておらず、帝国全土を擾乱して反デロイの旗を高らかに掲げるか、それとも一人残らず無残に殲滅されるか、運命は二つに一つしかない。とはいえ、捨て身の覚悟をもって帝国のはらわたに喰いつかんとするこの集団に、足取りの重さは感じられなかった。

そして、イド・ルグスと伍番隊の一部だけはオシアに潜伏し、帝国側の攪乱と情報の収集を兼ねた動きをしている。彼らは、分散したメデイトリア軍をつなぐ神経のようなものでもあり、イド・ルグスはその中枢であった。

数日が経ち、オシアとガルバニアの州境近くで帝国側の伝使たちが伍番隊に捕捉されていた。彼らはメデイトリアの第一軍団から帝都へ向けられた書簡を持っており、内容はノクニイ峠の閉鎖を報告するものだった。メデイトリア側の偵察においても峠付近の交通は確認されておらず、状況からみてこの連絡は鳥などを用いて空を経

由していると思われた。さらに、書簡がオシア州を出るときには馬で運ばれていた所を見ると、ガルバニアへ直通するほどの長距離は飛べないようであった。この対応をみるに、第一軍団は後方を遮断されたものの、冷静に行動しているといえた。また、こういった書簡は複数の経路で運ばれていたため、その一部を奪取することは難しくない。皮肉にも、このデロイ帝国の高度で堅牢な情報伝達網は、敵であるメデイトリア側へも恩恵を与えていた。

さらに数日後、イド・ルグスは第一軍団よりの続報を入手する。

それがまたもや暗号化されていない平文であるのを見たイド・ルグスは、やや警戒しつつそれを読んだ。だが、その内容を確認した彼は、曖昧ながらも別の不安を覚える。

『ノクニイ峠復旧は、二次崩落により一時中断。目下、迂回路を捜索中』

正確には、それは不安ではなく恐怖だったのかもしれない。不安とは理解している事柄に対して催す感情であり、己の理解できないものへ抱くのは恐怖である。

『迂回路は、依然として発見できず。志願者を募り復旧作業を進めるが、遅々として進まず。犠牲者は、すでに五百余名を数える』

第一軍団から本州への連絡は筒抜けであり、それは連日のように届けられる。この時、ようやくイド・ルグスは己の想定から、何かが抜け落ちている事に気づいた。

『復旧作業中に数度の大崩落あり、将兵約二千五百名を失う。作業続行のため衆議を行うも、士官下卒らの強い反発によりやむなく説得を断念す。軍紀、甚だしく乱れる』

それは、第一軍団を統率する兵長たちの悲鳴に近いものであった。イド・ルグスがどう詮索してみても、それが敵の欺瞞情報だという兆候は発見できない。彼はやがて、決定的といえる書簡を入手する。『その後、峠の状況を詳細に検分した上、復旧の望みは極めて薄少と判断。本日、幕議によってギラメラ門への転針を決定、全軍に通知す。食料の入手に難あり、糧秣は残された輜重に頼るのみ。至急、

本州よりの救援を求む』

これを受けたイド・ルグスに、言葉はなかった。速やかに、属州へ向かう各隊に駿馬をさし向ける。待つこと数日、すでに州境を越えようとしていた彼らは、稲妻に打たれたかの勢いで引き返してきた。指定された合流地へと急行する軍勢に先がけ、スタイン以下の士隊長たちが、イド・ルグスのもとに集合する。

彼らの表情には、各隊の帰着を待つ間にその覚悟を決めたかのようなイド・ルグスとは対照的に、痛恨の念がありありと浮かんでいた。心のどこかで、抱鉄という兵器をいくらか斜に見ていたこの四人は、報せを聞いて驚愕仰天したであろう。ノクニイ峠の封鎖には、抱鉄の備蓄分全てが投入されたが、それでも少ないとされていた。そもそも、この兵器は運用における実績がまだ不足しており、その不安定さを勘案すれば到底メデイトリアの外へ持ち出せるようなものではない。そういつたイド・ルグスの意見もあり、彼ら四人も当然それを最善策として支持したのである。

（必然だったそれが、盲点となったのか）

そう思い、イド・ルグスは湿った息を吐いた。彼自身、足りないのではないかと常々心配してはいたが、多すぎるなどとは一瞬たりとは思わなかったのである。まさか、十万人を超える人員を抱えた軍団が、峠の復旧を断念するような結果になるうとは。

そして、彼の抱いた確信に違ふことなく、第一軍団の兵士たちはギラメラ門の攻略に行き詰まりつつあった。彼らから帝都へ向けての通信は、減りはしたものの途絶えておらず、イド・ルグスは当然それを手に入れている。あの険門を見た者なら、攻め落とすためには空を飛ぶ必要があると一目で理解するだろう。文面には、溪谷の埋め立てを計画する様子も窺えたが、巨石すら押し流す急流に彼らが勝てるとは思えない。奇跡でも起きぬかぎり、彼らはいずれ峠の攻略を諦めざるを得ないのである。

もし、第一軍団がメデイトリアを脱出する迂回路を探したとしても、見つからないであろう。そういつた道が存在しない訳ではなか

つたが、それはスタインたちがすでに遮断してしまっている。デロイ軍には、峠の復旧を再び試みるという選択も残されているが、すでに糧秣の残りが心細くなっている以上、より確実な方策を優先するに違いなかった。メデイトリアの大半の民衆たちが避難している。各々の家都には、領内からかき集めた大量の食料が備蓄されている。第一軍団は犠牲を避けてそれらの拠点を攻略しなかったが、現状においては家都への総攻撃こそが、彼らの視野にある唯一の突破口といえた。

それは、イド・ルグスら五人にとって背筋の凍るような展開であり、全くの悪夢である。彼らは帝国の軍事技術について知悉しており、第一軍団は豊富な森林と手持ちの資材から種々大量の攻城兵器を用意するに違いない。もし、家都が一箇所でも陥落したなら、人数としてはメデイトリアの人口数分の一が虜囚となる。彼らは、当然の事として虐殺される可能性もあるが、あるいは人質として他の拠点を投降させるために用いられるかもしれない。そうなれば、ギラメラ門に残る王も、別の城市に籠る領家の当主も、遅かれ早かれ彼らに従わざるを得ないだろう。

もはや、帝国の属州へはるばる兵を差し向け、その屋台骨を揺らがすという遠大な計画が頓挫していることを、イド・ルグスを含めた士隊長全員が察している。清々しいま地向こう見ずなこの男たちも、思考の温度はまだ平熱を保っていた。だからこそ、彼らは無防備の属州という絶好の標的を眼前にして、こうも鮮やかに引き返せたのである。

だが、こうして集まってどんな手が打てるというのか。ギラメラ門を経てメデイトリアに戻ることは、まず不可能である。その時イド・ルグスが、デロイ本州から接近しつつある第二軍団の存在を明らかにした。偵騎の報告によると、軍団のほぼ全兵力がこちらへ向かっている。それを聞き、スタインたちの顔様はさらに険しくなった。しばらく、四者四様に地面を見つめる。やがて誰からともなく面を上げ、その視線を交差させた。砂埃にまみれた眼窩の中で、ぎ

らついた瞳だけが動いている。

だが、その鋭利な眼つきとは逆に、彼らの口元は嗤っていた。メデイトリア軍は劣勢ではあるが、蜘蛛の巣に似た情報網をこの戦場に張り巡らせ、すでに第二軍団を捕捉している。また、味方は選り抜いた精鋭であり、士気も高い。食料物資においても、メデイトリアへの敵兵站路に残された集積分が、ほぼ無尽蔵に使用できる。五人の合意に、余計な言葉は要らなかった。その後、彼らは夜半まで軍議を続け、各々の隊へと散っていった。

翌日、メデイトリア軍は完全に合流し、目立たぬ場所で野営する。休息もそこそこに、イド・ルグスは兵たちを集めて今後の計画を明らかにした。当然、故郷における抜き差しならぬ状況についても語られたが、従士たちの多くは存外に冷静であった。彼らにとって家都の防備は絶対であり、多少の犠牲はあっても陥落するとは考えていない。むしろ、属州での厄介な任務から解放されたことを歓迎しており、その表情は涼しげでもあった。これらの属州へ直接乗り込んでゆく事には、少なからず脅しの意味があるといえる。従士らの本音としては、そういった善悪の不透明な手段より、自分たちを頼って欲しいのであろう。また、彼らはこの状況を好機とも捉えており、その過剰な自信は篤い信仰心の裏返しでもあった。

そして、イド・ルグスにはそういった兵士たちの心を含め、様々なものを立体的に俯瞰することができた。彼はこれまでの経緯から、ものごとの多面性という屈折を通して対象を見るようになっていたのである。自分たちの将来にあるものを感じて、イド・ルグスの身体が少し震えた。だが、彼の中で渦巻いていたのは恐怖や不安ではなく、ダ・プーが覚えた高揚に近いものなのかもしれない。

高く晴れ、微かに砂塵の舞い散る空に出立の号令が響く。やがて、軍勢は一系乱れぬ縦隊となってオシアの丘陵へと消えていった。

イド・ルグスとその軍勢は、オシア中部の街道を北に進んでいた。大蜂起の鎮圧後、オシア州は帝国によって完全に占領され、その全土がガルバニアから派遣された地領官たちの管理下に置かれていた。だが、高位の官吏らは状況を察してすでに逃げ出しており、残された街や村落は静まりかえってその門扉を閉ざしている。この属州にも、自治領という彼らが征服される以前の社会秩序を保存した場所があったが、乱の制圧と掃討によってそれらの勢力も完全に排除された。この無残な敗北を命からがら生き延びた州民たちは、これからやってくる冬と食糧不足をどうやって乗り切るかという、喫緊の問題に直面している。唯一の援助は帝国の統治から期待するしかなく、この状況においても彼らは従順であった。メデイトリア軍は、道中で鹵獲した数百両もの輜重車を駄獣に牽かせ、それらの集落を縫うように街道を行軍した。

彼らは、まずアクアイアス河上流の船着場へ行き、それらの品々を入手したのであるが、そこには呆れるほど大量の物資、食料、家畜が放棄されていた。この船着場は今回の戦役のためだけに造られ、第一軍団への補給物は必ずここに荷揚げされるのである。水路となるアクアイアス河は、南のディネリア州からの支流を交えてオシアを下り、ガルバニアを通じて大海へと注ぐ。高低差に乏しい流れは緩やかで、帝国物流の大動脈であった。

船着場からは、メデイトリアのある西以外に北へも街道が伸びていた。必要なものを手に入れた彼らは、誰に遮られる事もなくこの道を進んだのである。こうして全軍が合流する以前、彼らは天幕その他のかさばる物を持たず、携行する糧秣も最低限に減らして人目を避けつつ行軍していたが、今の姿はまるで馬運業者の行列であった。飯時には炊煙を盛んに上げ、夜は大きな火を焚いて暖を取る。これまでは少ない食べ物を分け合い、楯の上に横たわって無言の夜を過ごしてきた従士たちであったが、消耗していた彼らの気力と体力は日増しに回復しつつあった。

一方、第二軍団は戦役の準備を終え、本州ガルバニアを離れるとアクアイアス河に沿ってゆつくりと遡上していた。軍団司ダ・プーは、この頃ようやくメディトリア軍が集結した理由について、ある程度正しく想像するようになっていた。だが、彼以外の人々にそこまでの理解はなく、ダ・プーもまたそれを口にはしなかった。

敵は、味方の大軍を魔法のように飛び越え、今にも帝都へ攻め上ろうとしている。デロイの大多数の人々からは、そう見えただろう。とはいえ、その人数は未だ不明であり、霧に包まれたような姿ではない。帝都にいる枢軸貴族にとって、第二軍団を敵に差し向け、経過を見守るしかなかった。彼らは強制動員によって兵士を集める事もできたが、実行するには十分な根拠が必要であり、さらに重大な責任が伴う。彼らの派閥から不和の火種は完全に消えておらず、現時点でそういった決断に至ることは不可能といえた。

やがて第二軍団は、メディトリア軍がオシア中央部の街道を行軍中であるとの情報を入手する。それは近隣の村々からの報告であり、ダ・プーは用心深く騎兵の集団を先行させ敵状を探らせた。彼らの数はおよそ一万人前後と見積もられ、第二軍団は北へと向かうその軍勢を追跡する。この時点における軍団の規模は歩兵約三万五千、騎兵約千五百騎であった。さらに、街道の先はコロヒス河へと向かっており、その周辺に架けられた橋はすでに落とされている。

状況はデロイ側の明らかな優勢であり、軍団の幕営ではこのまま敵を背後から急襲すべきとの意見が多数上がったが、ダ・プーは笑ってそれらを却下した。メディトリア軍の進路はすでに河が阻んでおり、このまま進めば敵は逃げ場を失うのである。背水の陣という言葉はあるものの、死地を目指して意気揚々と突き進むかのようなメディトリア軍の行動に、ダ・プーも苦笑せざるを得ない。眼前を遊泳するこの集団が、どういった意図を持つのかその判断は置くとしても、討ち漏らした残敵の掃討に手間取ってしまえば、それは枢軸貴族の尻拭いに奔走するのと同じである。メディトリア軍が自分にとって理想的な交戦地点へと向かっている以上、ダ・プーがそれ

を妨げる理由は何もなかった。

街道に行くメディトリア軍は、こうして敵が背後に迫るのを知りつつも、急ぐ様子はなかった。それどころか、余った食料を近隣の集落に分け与えながら鈍行している。当然、それらの物資は追跡する第二軍団によって没収され、オシアの人々の口に入ることは無かった。追跡は十数日ほど続けられ、彼らはついにコロヒス河へ到達した。第二軍団がメディトリア軍の状況を確認した時、すでに彼らは河畔への布陣を終えていた。

ダ・プーの幕僚たちは、敵の軍勢が待ち伏せや夜襲を企図しているのではないかと疑って備えを怠らなかったが、それらは全て徒労であった。メディトリア軍は、河の湾曲部の飛び出した岸に陣取っている。背後には河へ落ち込む断崖があり、正面には輜重車が障害物として配置され、唯一開けているのはその車列の中央にある出入り口だけだった。

その構えは皆のようであり、敵はここで徹底抗戦するものと思われた。第二軍団はこの陣に接近せず、行軍一日ほどの距離にある丘へ設営する。そのまま待機が命じられ、三日が過ぎさった。全てはダ・プーの指図であるが、幕営に引きこもったままの彼は、側近にすら何の説明も行っていない。理由もなく敵へ猶予を与える事に、将兵の不満は少なからず蓄積しつつある。だが、彼はこういった秘密主義的な行動で幾度か軍団を救っており、兵士たちは良い意味で緊張を高めていた。このダ・プーの指揮術は単なる自己演出ともいえるものの、それは彼の才能の一つでもあった。

その日の午後、メディトリア側の軍使が第二軍団の陣営へとやってきた。やや騒然とした空気の中で、彼らはダ・プーへの面会を求める。やがて会談の席が用意され、その軍使は挨拶もそこそこに用件を切り出す。それは、要するに停戦の提案であった。ダ・プーの側近たちは、どうやら降伏する気かもしれんな、などとひそひそ耳打ちし合う。しかし、続いて軍使たちが出した停戦の条件を聞くと、その場が静まりかえった。

デロイ側は、メデイトリアから軍勢を完全に撤退させること。さらに、全ての属州を放棄すると同時に、その独立を認めること。彼らの出した条件は、この二つであった。自分たちの耳を疑う幕僚の前で、これらが履行されるなら我々はオシアから兵を撤退させてもよい、と軍使の一人が付け加える。

数度ほどやり取りし、その言葉に間違いがないことを確認した幕僚たちは、さすがに険悪な目つきで軍使らを見た。軍団司であるダ・プーとこの軍使が直接に面会できたのは、メデイトリアに同情的な彼らがそう計らった為であった。矛を交える前に交渉できれば、貴族院で彼らへの寛大な処置を訴えることもできる。だが、救おうとしていた相手からあべこべに降伏せよと迫られたも同然の彼らは、失望して完全に言葉を失っていた。

メデイトリアの軍使はぴくりともせず返事を待っていたが、それに対し幕僚の大半は呆れた表情を彼らに向けている。その一人が、治領を独立させようにも当事者がこの場にいないようだが、と皮肉を言っただけの乾いた笑いを誘う。ならば、彼らを連れてくればいいのか、と軍使が応じるが、もう幕僚たちは何も答えなかった。彼らの気まずい視線がダ・プーに向けられたが、他人事のように暇を持て余していた彼は、この交渉に何の興味も抱いていない様子だった。ダ・プーは、この軍使を丁重に送り帰すよう命じた。

その後、両軍ともに再交渉の動きはなく、彼ら是对峙を続ける。この状況のまま二日が経過したが、夜になるとダ・プーは唐突に軍議を催した。いよいよか、と色めきたつ大兵長たちに対し、明日の攻撃が知らされた。命令を受けた士官は目立たぬよう準備を行い、下卒たちは寢床でその様子を伝え合う。珍しく風が絶えて静かになった天幕の中、彼らは淡々と過ぎる夜陰に眠気を誘われつつも、耳を澄ませば細波のようにざわめいていた。

あくる朝、ダ・プー率いる第二軍団はメデイトリア軍の目前に現れた。河岸に陣取ったメデイトリア兵たちも、彼らの襲来に呼応してすでに戦列を整えている。この日の夜明けには、軍団の騎兵集団

がここにきて敵陣近くの森を占拠していた。軍団の歩兵大隊はその木立の脇を抜け、素早く戦列を展開する。まるで職人に積まれる煉瓦のように、デロイ式の重厚な陣列が組み上げられてゆく。その戦力は、精鋭の長槍胄兵が約二万四千、軽装の投擲徒兵が約六千、そして貴臣騎兵が約千五百騎。さらに、ルムドとカーレの傭兵軍団と戦った際に得たキリア戦奴が加わっており、その数は約五千。直前のキリア戦役で第二軍団の被った損害は軽微であり、戦奴が加わった事で逆に戦力を増していた。

対するメデイトリア軍は、志願してこの地に赴いた精鋭の戦鉾楯兵が約一万。王家に所属する兵の家と領家の従士たちの混成部隊であるが、この死地で共に過ごした日はすでに百日を超えている。いまや、彼らの絆は硬い鉾物のごとく結晶しており、旺盛な士気に支えられた隊伍の一つひとつが凶器といえた。この楯兵の隊列は、敵を迎え撃つように輜重車の前面へ配置されており、さらに左右に分けられていた。中央にはある程度の間隔があり、防壁である後方の輜重車も含めて、その部分は素通しになっている。さらに、第二軍団の接近と同時にメデイトリア側の陣地後方から、騎兵の列が蛇のように次々と現れる。展開を終えつつあるデロイ軍の本陣で、それに気づいた者が指差して叫んだ。

彼らの注視する先を、躍動する馬体が埋めてゆく。その列は、輜重車や兵列の隙間を抜けると左右に分かれ、自軍戦列の両翼で集まり始めた。この騎馬集団の総勢は、先の戦役を生き残った王遼騎兵が約八百騎、バルバル騎兵が約千二百騎、兵の家の騎兵が約四百騎であった。騎馬の数だけでいえば、デロイ軍よりひと回りほど多い。「おいおい、こいつらは一体どこにいたんだ？」

ダ・プーが、少々勘気のこもった声を放った。第二軍団は、敵の騎兵がオシア州にいることを知って警戒していたが、それは数ではなく質に対するものだった。騎兵同士の小競り合いを避けるため、彼らは最小限の偵察だけで情報を収集していたが、メデイトリアに赴いた第一軍団の場合と違って、ここオシア州は敵地ではない。当

然、不審な軍勢の通過や略奪があれば報告されるものと勘定していたが、それは樂觀的に過ぎたようである。とはいえ、第二軍団によって付近の哨戒はある程度行われており、敵が築いた陣地の規模と収容力からみても、この騎兵たちは昨日あるいは昨晚の時点で到着したと思われる。

「不覚ながら申し上げれば、おそらく森の中かと……」

渋い表情ではあるものの、脇に控えるラボアが率直に答えた。水源から遠い丘陵は砂漠化が進んでいるが、このオシアでも特にコロヒス河などの周辺はまだ緑が濃い。その意味で、ここは森に潜伏した騎兵との絶好の合流地点である。メディトリア軍の不可解な行動について、今ようやくその背面が透けて見えたといえた。騎兵を率いるラボアたちも、敵にしてやられたという感は強く、それが彼の言葉にも表れている。

（……奴らも必死だな。とりあえず、悪くない布陣ではある）

戦場を見回し、ダ・プーは心でそう呟いた。彼の心に、動揺はない。敵は兵士の数で圧倒的に劣るが、河へ近づくにつれて狭くなる地形がその差をいくらか埋めている。また、メディトリア側の布陣にある中央の空隙については、一見すると敵をそこに誘い込み、さらに両翼から挟撃せんとする罠のように思えた。とはいえ、帝国軍団のような戦巧者が相手では、多分に稚拙すぎるといった解釈も当然ある。この布陣をどう捉えるか、それそのものが心理の塹壕といえた。さらに、彼らが騎馬を扱うその巧妙さは、魔術的と評しても過言ではないだろう。この軍勢を、イド・ルグスが指揮していると、今はもう確信に近かった。

（だが、ここまで複雑な男だったか　　）

それについて、違和感も同時にある。背負うものの重さか、あるいは別の何かが奴を変えてしまったのか。振り返って、ダ・プーが背後の黒い森を見やる。無理もない、と彼は思った。

（俺だって、こうしているだけで背中が寒い。ましてや奴の立場なら、たつぷりと冷たいものを味わった事だろう。　　だがな、この

先はもつと涼しくなるぜ)

視線を前に戻し、ダ・プーは改めて戦場を見つめた。彼の思考が、じりじりとその温度を上げてゆく。軍団の戦列が完全に整うまでに、わずかな時間があった。兵卒も士官も、視線を前に向けながらも緊張に押し潰されぬよう、己で己を鼓舞しつつづける。自分たちの優勢を疑わぬものの、虚勢の気配を欠いた敵の静けさが、長く激しい戦闘を予感させていた。数刻後には、生き残って戦歌を謡うか、あるいは骸となって沈黙するか。やがて、前進の号令が全軍にかけられ、鮮やかに空へと抜ける。殺人機械の一部となった彼らは、時を刻むように足並みをそろえると、ゆつくりと進み始めた。

デロイ軍は、厚みを持たせた長槍胄兵の戦列を中央へ配置し、投擲徒兵でその両側面を固めていた。貴臣騎兵の集団は二分され、投擲徒兵の後方へと置かれた。全体の陣形としては、両翼を折り畳んだような縦深形である。だが、それでもメデイトリア軍の戦列よりは幅広になっていた。また、通常は徒兵たちが位置する戦列前面にはキリア戦奴がおり、敵と味方に挟まれた彼らは、追いつて立てられるように前へ進んでいる。

「閣下、やはり敵陣に抱鉄はありません！」

慌ただしく報告を取りまとめたラボアが、少し高い声でダ・プーに報告する。本陣の周辺は伝騎の往来が錯綜し、まさに阿吽の呼吸で情報を伝え合っていた。ダ・プー本人はそういった集団に囲まれながら、前進する味方をゆるゆると追っている。その上向きの視線は何も見えないようであり、その薄っぺらな表情は全てを聞き流しているとも思えた。

軍団の前進に対し、メデイトリア軍はまだ動きを見せない。左右に分かれた戦鋒楯兵の方陣と中央の空間、その戦列の両翼に置かれた騎馬の集団、それら全てが静止している。また、後方にある車両の防御線には人が通れるほどの間隔があり、それ以外に壕や壁はない。確かに、メデイトリア側の兵士はそこを通って出入りできるが、

敵を遮断できない不完全な陣地でもあった。そういったものをラボアはつぶさに観察していたが、その全体像をいまだ読み解けずにいた。逆に、ますます彼らが何に勝機を見出しているのか、判らなくなる。彼は、内側へと向かいつつある意識を紛らすように、視線を前方へと投げかける。その時、ふと何かに気づいた。

「閣下、戦奴たちの様子が……」

両軍の最前列は、個々の兵士が見分けられる距離まで近づいている。キリア戦奴の隊伍がわずかに乱れはじめ、敵のいない中央へと集まりつつあった。彼らの役割とは要するに牽制であり、遅かれ早かれ撃退されることは誰もが承知している。だが、この行為は明らかな軍律違反であり、それについては軍団の掟として叩き込まれていた筈だった。皆の視線がダ・プーに集まるが、反応はなかった。そのまま行かせろ、という事である。

確かに、敵の重歩兵とまともにぶつかる隊と、正面に何も無い隊があるのは不公平ではある。とはいえ、それを問題にすれば軍隊という制度が成り立たなくなるのは明白であり、ラボアたちは濁った感情をその眼つきに滲ませた。また、彼らには今回の戦闘が終わればデロイの永住権が与えられるという破格の待遇が約束されており、帰る場所もないこの傭兵たちは、第二軍団に救われたといつてよい。「所詮、あの巨都が吐き出した膿ということか。まあ、たとえば戦車でも突っ込んでくりゃあ、許される事だが……」

戦奴たちは、すでに右の隊が左に動き、左の隊が右に動き、中央では何隊かが押し合いへし合いしている。この世界のこの時代、戦車はすでに時代遅れの兵器であった。いつもの毒舌口調で、ダ・プーがその言葉を吐き捨てる。

その時、戦奴たちの向こうに何かが見えた。彼らのいる場所は、戦場の中でもやや小高くなっており、本陣からはその丘に遮られて先が見通しづらい。目を凝らしていると、地面の稜線を上りきったそれが、はっきりと見えるようになった。四頭の馬に曳かれた車両状の物体が、滑るように近づいている。皆が、あっという顔で表情

を崩す。ダ・プーは頬を緩ませたまま、目だけで驚いていた。気づけば、それはすでに敵陣地から長い距離を疾走していたようであり、戦奴たちの一部がどよめいている。

ラボアには、ひと目でそれがデロイ式の戦車だと判った。幅からみて、二十数両ないし三十両が横列となつて進んでいる。さらに視線を遡上させた彼が、敵の陣地を見た。そこにはオシアの帝国軍から奪った荷馬車や天幕、物資が乱雑に置かれていた。彼の思考が、瞬時にその過去を想像し始める。

今回のメデイトリア戦役は、第一軍団にとって重要な意味を帯びており、彼らは相当に気負つてそれに臨んでいた。戦車はすでに実用性のない兵器であるが、それゆえに希少であり高値で取引されるため、貴族の隠居などが好んで蒐集する品でもある。当然、出征する倅や孫の華々しい戦果を願うあまり、それを持つて行かせようとする者もいるだろう。だが、このかさばる贈り物を受け取った彼らは、水路でそれを運ぶことはできても、結局は船着場に置いてゆくしかない。確かに、馬車などに積める大きさではあるが、兵站上の隘路である陸上輸送に、この骨董品を持つてゆく余裕など無いのである。

それを運んだのは、皮肉にもメデイトリア軍だったか。ラボアがそう思った時、戦奴の集団では混乱が始まっていた。先頭の戦奴たちは立ち止まり、状況に気付かない後ろの者ともみ合いになっている。戦車の方では、役目を終えた御者たちが次々に跳び降りており、背の低い車体からは、敵を倒すための棒が幾重にも突き出している。その一つひとつが刃の華を咲かせている。車輪にも同じようなものが生えており、回転するそれを見ただけで戦意を喪失しかねない。戦奴たちが、ここにきてようやく恐怖の叫びを上げた。

デロイ軍の兵士たちは、その一部始終を目の当たりにしながら、何もできなかった。衝突は一瞬だったが、麻痺した現実感の中ですべてが鮮明だった。背筋の凍るような音が響き、人の腕が、脚が、くるくると四方に吹き飛んでゆく。なぎ倒し、押し潰し、切断して

なおも、戦車の勢いは止まらない。責め具で拷問されるような悲鳴が苦しげに折り重なり、そしてようやく止まった。頭皮をその根につけた頭髮の束、ぼろきれのように削がれた皮膚、巻き取られて絡みつく腸の一部。血の収穫が、どろりと垂れ下がる。肉と刃と車輪と馬が圧縮されたその壁のようなものから、多くの者が目をそむけた。

この事態にダ・プーの周りにいる者たちも声を失い、その視線を曖昧にしていた。だが、戦奴たちの惨状を直視し続けるダ・プーの瞳からは、ぎらぎらとした異常な光が漏れている。傍にいるラボアもまた、その尋常ではない昂りをみせる表情から、目を離せずにした。次の瞬間、戦場の時間が動きだして彼らの注意は別のものに奪われる。メデイトリア軍の左右にいた騎馬隊が、猛然と突進を始めていた。

それに少し遅れて、デロイ軍の騎兵が迎撃するように走り出す。目の前にいる味方の投擲徒兵を外側に迂回しつつ、敵の騎兵の出口を塞ぐように前進する。この貴臣騎兵に対しては、デロイ軍の前進が始まる前に、ダ・プーから次のような指令が下されていた。メデイトリア軍の騎兵が出てきた場合は、軽く交戦したのちに後退して背後の森の前まで奴らを誘導しろ。貴臣騎兵らは、急な事ではあったがその手はずで動いていた。だが、騎兵の数では劣勢である彼らが、その後の展開をどう考えているかは不明瞭でもある。

ダ・プーらにとつて、ここまでの展開は許容内であるらしく、戦奴たちには改めて前進が命じられた。だが、敵の騎兵が向かった先を見て、その表情がやや怪しくなる。メデイトリア軍の両翼にいた騎馬の群れは、戦場の外側ではなく中央へと突進していた。両軍の戦列はまだ衝突しておらず、彼らの行く先にあるのは戦車の残骸と戦奴たちの列であり、さらにその先には胃兵の槍ぶすまが待っている。いかに精強な騎兵といえど、ここを突破することは無謀といえた。

だが、この戦場中央では連鎖的に事態が進行しつつあった。千騎

を超える騎兵の集団が右からも左からも自分たちに迫っているのを見て、すでに浮き足立っている戦奴らの生き残りが動揺している。何人かが走り始めると、次の瞬間には狼に追われる家畜のように全体が動き出した。敵から逃げる戦奴を見て、その後方にいた胄兵たちは槍を下ろして通すまいとするが、彼らは濁流のようにその間隙へと雪崩れこむ。捨て駒であることを完全に自覚した彼らの、逃げ足の速さと突進力には迷いというものがあった。

混乱の中で、仲間に押し出された者が次々に槍の餌食となり、足を滑らせ転倒した者は容赦なく後続に踏み潰される。それでも彼らの勢いは止まらず、ついに胄兵の分厚い戦列を突き抜けた。混乱と無秩序の中から抜け出し、身体一つで逃げる戦奴たちがその突破口から爆ぜるように散ってゆく。

彼らの潰走が余りにも短時間であったため、軍団の誰もがそれを阻止できない。とはいえ、この戦列崩壊よりは次に起きたことの方が、一瞬の出来事であった。メデイトリア軍の騎兵が、戦奴たちを追いかけるようにしてデロイ軍の戦列を突破してしまったのである。この信じがたい光景を見て、胄兵の士官たちは怒鳴ったり走り回ったりしてどうにかしようとしていたが、結局は何もできなかった。その早さと勢いは、まさに酒樽の底が抜けたかのようだった。

ダ・プーたちはそれを見て、決壊した堤防から逃げるように後退する。彼らは窮地に陥ったように思えたが、その視線の先には別の騎兵たちがいた。森から湧き出す馬群には、肌を黒く塗った男たちが乗っている。しがみつくように馬に乗っていたダ・プーが、それを見てようやく手綱を引く。デイナーリア騎兵たちが、轟音と共にその左右を抜けた。背後の森に潜んでいた彼らは、合計で二千騎に達するかという大集団である。眼前のメデイトリア騎兵へと、勇ましく突っ込んでゆく。

この時、メデイトリア騎兵には背後からも敵が迫っていた。デロイ軍の両翼にいた貴臣騎兵たちは、中央を突破する敵騎兵の後を追うように馬を駆けさせ、今まさにその背後へ迫ろうとしている。メ

デイトリア騎兵は、ここに至って数の上で劣勢となったばかりか、このままでは敵に挟撃されることが確実にになったのを察知し、その進路を変えた。大きく二つに分かれ、戦場の右と左へそれぞれ離脱してゆく。貴臣騎兵、ディネリア騎兵も同じく分かれ、彼らを追った。両軍の騎兵たちは、まだたつぷり残っている馬の脚力を使つて、まるで飛ぶように疾駆する。戦場から遠ざかる彼らは、すぐに見えなくなった。

何千という蹄が大地を削る轟きは彼方へ消え去り、残された歩兵たちもそれと前後して会敵していた。衝突する互いの戦列が、粘土のようにぐにやりと変形した。その時、兵士のふりしぼる声と声が飽和して何も聞こえなくなった。敵に対する恐怖心、家族への想い、生き残ったら何をするか、そういった正常な思考があっけなく消えさる。戦場の空気はすでに沸点を超えており、誰しもが発狂したように戦った。

鉾が振り下ろされ、槍が突き込まれ、短剣が肉をえぐり、楯で殴って足蹴にする。放たれた徒兵たちの投げ槍が優雅に空を飛び、死の雨となって降り注ぐ。数で勝るデロイ軍はすぐに半包囲の形になるが、敵の戦鉾楯兵たちの戦列はそれを支え、小刻みな進退と各隊の連携でデロイ軍に対抗していた。軍団の主力である長槍胄兵は隊伍の柔軟性に難点があり、こうした不揃いな戦列に対して圧力をかけるのは苦手だった。帝国軍とは二度目の戦闘になる敵の兵士たちは、その戦術を奏功させつつ軍団兵と互角に渡り合っている。定位置に戻ったダ・プーたちには、そういった状況がよく見えていた。

（ さすがに、踏みとどまるな。たったこれだけの数で、俺たちに齒向かおうとするだけのことはある。それどころか、幸運すら奴らの味方をしておるようだ）

戦場の目まぐるしい推移を心の中で反芻して、彼がそう思った。敵から逃げていたさっきの自分に対し、腹の底からひとつふたと笑いが出てくる。それをこらえると、ダ・プーは体の芯が熱くなるのを感じた。偶発的なものではあったが、敵の精鋭騎兵に戦列の

突破を許したことは、軍団にとってかなり危険だったといえた。下手をすれば、河岸へと向かう狭い地形の中で挟み撃ちとなり、大軍ゆえに併殺されることもあり得たのである。そして、メディトリア側の狙いとはそういった事態へつながる不確定な要素を、可能な限り戦場に充満させることだったのである。その途中までは、彼らの軍略は神がかつているとしか言いようのないものであったが、結局は属州ディネリアから二日前に到着した騎兵たちが、それを阻止したのである。

（だが、時間は俺に力を貸したようだな。何者が奴らの肩を持とうとも、その流れには逆らえまい）

さらに、先ほど両軍の騎兵たちが描いた機動を思い起こして、ダ・プーは愉悦に浸る。この世の中に、あれほど美しい動きが他にあるだろうか。それは、この軍勢を率いているであろうイド・ルグスへの賛美であり、彼の自己陶醉でもあった。冷徹な現実主義者として、高邁な理想主義者として、さらに戦場の芸術家として己を負するその意識こそが、彼の自我における本態といえる。

このダ・プーの性質とは、派閥の利害を通じて関係する人々にとつては単なる個性であるが、側近のラボアたちはその美意識を少なからず共有していた。ダ・プー本人はすでに涼しげな表情を取り戻していたが、彼らの視線はまだ興奮気味に敵と味方の戦列を往復している。抵抗は激しいものの、軍団は少しずつ敵を押しているように見えた。だが、この戦場にはそんな彼らの関心が向けられぬ場所が、一箇所だけあった。戦車と戦奴の残骸、つまりあの壁である。両軍はその障害物を避けて衝突しており、前後にはどちら側の兵士もいない。その時、気まぐれにそちらへ目を向けていた一人が、何かを目撃した。

「……………閣下、一騎が。一騎が、こちらへ向かつて……………」

その不明瞭な報告に気づいたラボアが、彼の視線をなぞった。確かに、壁のこちら側に一騎がいる。遠目にはあるが、その具足や馬装からみて明らかに味方ではなかった。

「イド・ルグスカ、あれは……？」

そう言ったのは、ダ・プーだった。首を突き出し、自分の目でそれを見定めようとしている。騎兵用の平らな兜が鼻までを隠し、その男の容貌は定かではない。ラボアが、周囲へ鋭く問いかけた。

「あの騎兵は、どこから来たのだ？ 見ていた者はいるか！」

もしや、味方の戦列に破れがあったのかと、彼の目線が左右に踊る。やや沈黙があり、先に報告した男がきんきんとした大声で、叫び答えた。

「……気づいた時には、こちら側へ跳び下りておったのです！」

要するに、馬に乗ったままあの残骸を越えた、という事か。

ラボアはその壁に改めて目を向けたが、そういう芸当が可能かという思考をすぐに捨て、周囲の騎兵を集めはじめた。この本陣には、ダ・プーの他には側近と伝騎が約三十騎、貴臣騎兵が戦場から離脱する際にここへ戻された近衛騎兵が二十騎ほどおり、その戦力はおよそ五十騎ほどである。彼ら第二軍団にとって、指揮者の必要に応じて集散する兵士たちの所在地が、すなわち本陣であった。

ラボアは、自分の部下を中心に二十騎を集め、残りをダ・プーの側に残した。ダ・プー本人はそういったことに頓着しない性格であるが、ここの安全を確保するのはラボアの責任であった。たった一騎に精鋭の二十騎をさし向けるその判断と、ダ・プーの諾意を求める彼の陰しい視線が、あれはイド・ルグスだと語っている。少なくとも、帝国側でイド・ルグスにもっとも詳しい人物が、そのように見たということであった。

二十騎を従え、ラボアが集団から飛び出していった。この馬群と一騎は、近づくにつれ次第にその進路を変えてゆく。一騎の側は衝突を避けるように斜行し、もう一方はそれを追っている。敵の接近を阻むように並走しながら、ラボアは本陣を中心にした同心円上を回りはじめた。やがて、三騎ほどが前に出て一騎に迫る。帝都で見たイド・ルグスの馬上戦鋒術から、その程度を見切ったと信じる者たちであったが、あっさりと斬られた。

その銚の軌跡は、演武で披露されたものとはまるで違っており、ラボアたちは少なからず動揺する。だが、その男の特徴的な身のこなしは、彼らがイド・ルグスから馬術を教えられた際に見知ったものとよく似ていた。銚の届く間合いが判らぬまま、さらに二騎が馬の鼻面を斬られ、落馬する。数人が槍を投げて応戦するが、全てかわされた。

苦戦しつつも、ラボアは敵の一騎が本陣へ接近することをかろうじて阻止していたが、時間が経つにつれ焦りの色が見えはじめる。集団の先頭に出ようとする彼を、部下たちの馬が遮った。彼らもまた、ラボアを守っているのである。この状況にラボア本人も熱くなりかけるが、すぐに思い直して頭を働かせた。このままでは、敵を討ち取れる見込みがないのを悟った彼が、ダ・プーへと視線を投げかける。その先にいたダ・プーは躊躇することなく、従えていた二十騎の近衛騎兵を繰り出した。

この集団は、ラボアたちと一騎に接近しつつ、敵を挟みこむ位置へと動いている。だが、そのとき一騎が持っていた銚を投げ捨てて、騎乗姿勢を変えると両手で手綱を握った。そして、進路を変えた彼は二つの馬群の間をすれすれで抜け、さらに加速する。それを見たラボアは、全身が栗立つのを感じた。これまでこの一騎は、敵に阻まれて近づけぬふりをしながら、この時を待っていたのだとようやく気づく。ラボアたちは目を血走らせ一騎を追うが、獵犬のように疾走する敵との距離は縮まらず、非情にもそれは開いてゆく。

その行く先には、ダ・プーがいた。伝騎の十騎ほどが周囲に残っており、主を守ろうと隊伍を組んだ。だが、どういう事かダ・プー本人は剣を片手にこの敵を迎え撃とうとしており、彼らはもみ合いになった。一騎が、矢玉のようにそこへ突っ込む。抜き放たれた刃がきらめいて白い筋を曳き、黄色い火花が散った。二、三人が、馬上から崩れ落ちる。本陣の中央を突っ切って、一騎はそのままの勢いで駆け去ってゆく。次の瞬間には、猛烈に追いすぎるラボアたちが、その両脇を通り過ぎた。

鬼気迫る眼差しを背後に向け、ラボアは人と馬が折り重なる先を凝視する。乗り手を失って棹立ちになる馬たちの下で、将棋倒しに何人かが倒れていた。周りの者たちは全員、馬からとび降りてダ・プーを探している。彼らからやや離れた場所で、血糊に赤く染まったダ・プーらしき男がよろめきつつ立ち上がると、何かを叫び散らした。さらに、その男が駆けつけた兵士を殴ったのを見て、ラボアは視線を前に戻した。

完全に頭へ血を上らせ、彼の表情は歪んでいた。一騎が、ラボアたちに猛烈に追走されながら本陣から離れてゆく。彼らは、やがて森へと走り去った。ダ・プーの側には数騎しか残っていないが、何事もなかったように定位置へと復帰して指揮を再開した。

両軍の死闘は依然として続いており、耐えがたい喧騒が辺りを満たしている。メデイトリア軍は、波状的な包囲に耐えつつじりじりと後退していたが、強い攻勢に出ることもあった。だが、命の危険と引き換えに得た数十歩の前進を、反撃する敵の戦列が無情にも奪う。そのせめぎ合いに終焉の兆しはなかったが、兵士たちの声は確実に荒い呼吸へと変わってゆく。そして、時おり静けさが感じられるようになる、次第に隊伍の進退が滞りはじめた。戦場は、すでに昼を迎えつつあった。

岩壁に掘りぬかれた穴から、青空が見えていた。メデイトリアの王であるダナ・ブリグンドは、その抜けるような空に目を向けている。彼女のいる石室に、たった一つある窓であった。ギラメラ門とよばれるこの砦には、こういった採光のための穴がいくつかあるが、それは必要最小限のものでしかない。

（……なまじ見えるから、かえって恋しいのだな）

この門へデロイ軍が攻め寄せて、すでに二十日が経っている。その間に彼女は、人間というものは一日に一度は日の光を浴びる必要があるのを、当然のことながら再認識していた。ここ数日は敵の寄

せ手もなく静かであるが、彼らは門の攻略を断念した訳ではなさそうだった。砦の眼下にある渓谷の流れは徐々に濁っており、川上のデロイ軍が何らかの工事を行っているものと判断できた。

（逆に、諦められてしまつては困るのだ……）

今回の戦役において、これまで帝国側はこの場所を奪取する動きを見せていなかった。だが、ここに至つて彼らが急に攻略を始めた理由については、砦に居る者も大方把握できている。この門へはすでに、メデイトリアに通じる道だけでなくオシア側への出口にも敵の軍勢が集まつており、完全に包囲されていた。しかし、砦の防備は万全であつて敵の寄りつく隙はない。ともかく、どう攻めようにも足場が無いのである。唯一考えられる攻め手は、砦のはるか下方から穴を掘ることであつたが、それもまた無理難題といえた。岩盤が硬いことは当然として、地中を進むには一度下方向へ掘らねばならないが、その層には地下水が含まれており、掘つた穴はたちまち井戸になるのである。彼女自身も、難攻不落と聞かされていたこの砦がその言葉通りの場所であることを、今まさに体感しつつあつた。

（とはいえ、それも万能ではないな）

こうして防衛している間は、この砦への情報もまた完全に遮断されていた。メデイトリア領内のことは推測できても、オシア州へと出撃した一万余の軍勢がどうしているか、現在はまったく判らなくなっている。祈るしかない、という無責任なことは言いたくないが、事実そうであつた。

（皮肉なものだ……。私の本来の役割は、そうであるというのに）

彼女も、祈るだけで何にも関与し得ない存在は、素直に無意味だと考えている。王族の役目である諸々の祀りについても、それが自身を含めて数多くの人々の心に影響するというただ一点において、意味があるといえた。だからこそ、父と協力して王権というものを拡張してきたのである。ボルボアン王のそういった強い意思が、その切迫した状況で彼女の精神と融合し、現在のダナ・ブリグンドという人格を形成していた。

(……それらの伝統的な王の勤めを、否定するつもりはない。だが、ならばこの国を統治していたのは、いったい何者であったのか)

その答は、彼女にとっても明確ではなかった。そういったことへの考察を曖昧にしたまま、メデイトリアの王として実権を掌握しようとするこの親子の思想には、少なからず矛盾があるともいえる。父であるボルボアン王は、自身をこの国における実質的な王とは思っていないかっただろう。また、家宰であるサンク・タルムはその候補者といえるが、実際はそうでなかった為に、あのような拳に出たと彼女は考えている。

(今になって思えば、この国を支配していたのは均衡という無形の力なのかもしれん。それが、メデイトリアにとって最良の統治であったのだろう。だが、父上の思考はそれら伝統の合理性や蓋然性から遠ざかり、そのまったく逆ともいえる模索をはじめた。まるで、魂の中に眠っていた何かが目覚めたかのように……)

少なくとも、その何かは王家の知識継承に含まれてはいない。数百年ものあいだ踏み固められた径から外れ、自身の足で踏み出すときのその心境は、彼女にも想像できなかった。そういったものを人間に秘められた神性とみるか、あるいはただの偶然とみるか、それとも。ため息をつき、彼女は眉の根にしわを寄せた。

(……どうかしているな、私は。ここでそんなことを考えて、何の意味があるのだ)

再び、頭上に見える小さな空を見上げる。だが、どう思案しても得られるのは無力感だけだった。信じるしかない、そう思い至った彼女が、ふと気づく。これも、祈るということか。

(どのように取り繕って行おうとも、所詮は下品で人間臭いものではない。ものごとの釣合いの上では、好ましきと好ましからざるの区別そのものに意味がないのだ。祈りが純粹であるほど、浅はかで欲深いことの証ではないか。それが気休めでなければ、結局は無いものをねだっているに過ぎん……)

その穴から降る真昼の日差しが、目を射した。それでも彼女は、

じつとそれを見つめていた。

第二軍団の目前で、百輜を超える車両が燃えていた。敵であるメデイトリア軍の兵士たちは、防御線として並べられたそれらの車両の向こうにあり、整然とした戦列を成している。善戦を続けていたメデイトリア軍であるが、敵の圧力にじりじりと追い込まれ昼過ぎの段階には、その障害物の背後へと撤退していた。

デロイ軍はそれを軽装歩兵で攻撃したが、車列の内側へ入り込んだ者は待ち構える敵兵によって叩き出され、彼らの力で突破することとは不可能と思われた。やがて、第二軍団は营地から運ばせた種油を車両にたつぷりとかけ、それを燃やそうとする。メデイトリア側の兵士は、河から運んだ水で消火を試みるものの、無理とみてその場を離れた。彼らは車が燃えるのをしばらく傍観していたが、やがて慌ただしく昼飯をとり始めた。これに対し、軍団の兵士にも食料が配られ、敵の動きを用心深く見守りながら空腹を満たす。

さらに、両軍はこの間を利用して死者と負傷者の収容を行ったが、この時ばかりは矛を交えなかった。やがて時間が経って、ようやく火勢が弱まる。しかし、そこには車列に積まれていた岩や土砂が燃え残っていたため、依然として長槍胄兵らの重装歩兵は進軍できなかった。デロイ軍は軽装歩兵に隊伍を組ませ、背の低くなった障害物を越えて一斉に攻撃する。メデイトリア軍もまた、敵を押し返そうとその戦列を前進させた。

昼下がりになって、そういった攻防に終始していた両軍であったが、第二軍団の戦列最後尾では兵士たちがちよつとした騒ぎを起こしていた。後方の森に馬が見えたという彼らからの報告を受けて、ダ・プーのいる本陣から数騎が搜索に出る。だが、その木立に入つて間もなく、彼らは泡をくつたように引き返してきた。軍団はすぐさま胄兵の一部を反転させ、後方の防備を固めさせた。

その森には、確かに騎馬の集団らしきものが潜んでいたが、それ

は味方でもメデイトリア軍でもなかった。さらにその時、戦場を離脱した貴臣騎兵から数人が戻ってきており、彼らは敵の追撃中にパレビア騎兵と思われる軍勢から攻撃されたと報告していた。パレビアはここオシアの北西に位置するデロイの属州である。その自治領に封じられた諸侯たちは、所領の治安維持のため、そして帝国へ供出するための兵力を蓄えていた。

味方の騎兵たちがその軍装を見間違うとは思えず、彼らは今日の昼になってここへ来着したものと考えられた。要するに、パレビアはデロイに対し叛旗を翻したのである。ダ・プーが援軍を要請した属州はデイナーアだけであり、今日この場に彼らがいるのはメデイトリア側の手引きによるものと考えて間違いない。また、このことは第二軍団にとって衝撃的な事実といえたが、それを感じさせる反応はほとんどなかった。彼らはただ、ものを言うのを忘れたかのよう

に森を見ていたのである。

「増えたな」

ダ・プーが、そう呟く。木々の背は高いが、密度は雑木林程度というその森の奥で、何かの影が窮屈そうに動いている。彼らはもう姿を隠すことができない様子であった。その時、貴臣騎兵からふたび報告があり、彼らを指揮していた兵長から次のような言葉が伝えられた。すでに味方は分断され手勢小数なれど、我々はこれより各自の判断の下で戦闘継続に努めるものとする。以降、彼らからの連絡はなかった。

「キリア、アドリア、パレビア……。見事に揃ったな」

木々の間に、軍旗がまばらな光を浴びつつ見え隠れしている。誰に聞くまでもなく、ダ・プーはその全てを識別していた。帝国の主要な属州から、オシアとデイナーアを除いたものがその三つである。これらの騎兵たちは、どこかで合流はしたもののデロイ軍の攻撃が間近であると知り、急行したものだと思われた。森の向こう側ではときおり土埃が舞い上がっており、遅れていた残りの軍勢たちも到着しつつあるようだった。第二軍団の半数はメデイトリア軍と交戦し

つつも、残りの半数はこの森へと槍の穂先を向けている。

デロイ軍の士官たちはぴりぴりとした空気を張りつめさせていたが、兵卒には眼前で何が起きているのか判っていない者もいるようだった。本陣にはすでに大兵長の全員が集まっており、彼らはひとまずメデイトリア軍の陣地に対する攻撃を中止した方がよい、とその意見を一致させていた。長年の戦友である彼らの、珍しく消極的な意見を聞いてダ・プーは苦笑する。つい先ほど本陣へと戻ってきたラボアが、汗と埃のまだらをその頬に浮かせつつ言った。

「……数が多すぎます。あの三州にこれほどの騎兵がいるとは、聞いておりません」

もはや、眼前の森に納まりきれないその軍勢は、少なくとも二千騎を超えているものとおもわれた。三千騎、あるいは四千騎か、その中にはメデイトリアの騎兵もいるようであったが、とにかくラボアには信じられない数だった。この三州は征服の上で大量の血が流されており、彼らを警戒する帝国によってその所有兵力は制限されていたのである。

「あくまで、報告された数字の上ではそうなる、という事か……」

ダ・プーが、他人事のように軽い口調で納得する。デロイ貴族にとって、属州というのは単なる収奪の対象に過ぎない。自治領に關連する官職は枢軸貴族たちが独占しており、その背後にあるうまみについてはダ・プーもさほど詳しくなかった。つまり、眼前の状況からみるに、自治領の諸侯たちの保有兵力を管理することは相当の利権なのである。それに気づいたラボアが、血の気を失ってくらりとする。枢軸貴族たちの懐にどれほどのものが転がりこんでいたかは、ここにいる軍勢の規模を見れば明らかである。

「……ともかく、問題は数だな」

ねっとりとした視線を森に注ぎつつ、ダ・プーは髭をしごいた。ようやく噴き上がってきた怒りをこらえるラボアは、言葉が言葉にならない。あの森の中にいるのが、まやかしくでなく本当に四千騎もの軍勢なら、敵に背を向けるのはここで戦うより危険と思われた。

また、もしそれが少数であるなら当然、メデイトリア軍への攻撃を継続すべきである。ダ・プーは、どうしたものかと上空をよぎる雲塊に視線を投げかけていたが、唐突に本陣へ伝令が駆け込んできた。森に潜む集団から、自らをパレビア・アドリア・キリア・ディネリア連合軍と称する使者たちが、やって来ていたのである。

ダ・プーのいる本陣は、すでに士官たちの輪の中心となっていた。彼らはそこへ通され、使者の一人が流暢なコノス語で述べ立てた。「我々の下には、すでにデロイ帝国を敵とする五千騎ほどの勇者が集っており、残念ながらあなた方がいかに精強であろうと、すでにその勝機は砂漠の霧の如きものでしょう。我らには、帝国から独立することを条件として講和を受け入れる準備があり、軍団の方々が降伏されるならその安全は保障いたします。少なくとも、我々からの自発的な攻撃は明朝まで控えます故、速やかにこの件につきましてご検討頂きたい。また、これから我らの言っていることが真実である証拠をお見せいたしますので、くれぐれもお見逃しなきよう

ー

彼らが去ると、その森から聞こえていた音が消えた。直後、木々のあらゆる隙間から馬群が飛び出し、そしてデロイ軍の方へ突き進んだ。まるで、蟻の巣を壊したように湧いてくる騎兵たちが、長槍、胃兵の前方を埋め尽くす。彼らはやがて左右に分かれ、朦々とした土煙を残しつつ森へ戻ってゆく。デロイ軍は、即座にメデイトリア軍に対する攻撃を中止すると、全周囲へ防御の構えをとった。

軍団の本陣では、ダ・プーの周辺に集まった大兵長その他の者たちが意見を具申し、さらに彼らの間でも議論が始まっていた。また、敵の集団に先ほどまで味方だったディネリア騎兵がいるのを見て、ラボアラダ・プーの側近たちは怒りに震えている。そういった騒然とした状況にありながら、しかし彼らは諤々と論じ合っていた。

眼前にいる騎兵の大軍は確かに警戒すべき相手であるが、問題はその反対のことであった。要するに、敵がいつまでも攻撃してこないという、逆の状況もあり得るのである。彼らとて正面から戦って

負けるとは思っていないが、前後から挟撃されるのは非常に危険であった。また、騎馬戦力を失った今は、敵の騎兵を攻撃する手段もない。自分たちが相手の立場なら、攻めると見せかけて軍団を充分に疲弊させ、敵が耐え切れなくなるのを待つはずである。その中で優勢だったのが、ひとまず営地に後退する案であった。

この河畔でメディトリア軍と対峙していた間、彼らは敵の奇襲に対抗するため営地を二重の防壁と壕で囲い、要塞化していた。この営地には千人ほどが残って防備しており、物資糧秣もここに集められている。議論はやがて、殿軍を残しつつ段階的に後退するという方向に収束しつつあったが、ダ・プーはそれを遮って言った。

「この現状をみて、有利な場所で敵を迎え撃ちたいという諸君らの考えは、たしかに理解できる。とはいえ、残念ながらそれに賛同することは難しいのだ。我々は、遠路はるばるやって来て、こうしてメディトリア軍をこの河岸へと追い詰めた。だが、それは同時に、我らにもまた安全な場所がない、という事でもある。営地に退いて持久したとしても、敵に後方を遮断されてしまえば、いずれは撤退するしかないのだ。我々は、多数の騎兵に脅かされながら、自力で撤退することになるだろう。帝都からの救援は期待できぬし、我らが馬より速く走ることもできん。オシアの村々は飢饉に瀕しており、糧秣の調達も難しい。この状況で、営地に戻れば事態が好転すると、なぜ言えようか。我々は、何としてもこの場に留まるべきであり、その結果として敵は窮地に陥るだろう。この戦場で、いま最も腹を空かせておるのは、あの森の軍勢である。この地に奴らの兵站線はなく、略奪する食料も見当たらない。だが、我らがここから去れば、あの者どもは河岸のメディトリア軍と合流して、飯にありつける。それこそが、おそらく敵の狙いだ。もし、諸君らが敵に包囲されておと思うなら、それは愚かなことである。ここに留まり、奴らを分断し続けるなら、勝利はおのずと我々の手に転がり込んでこよう。」

異論をとねえる者は、誰もいなかった。それどころか、やや土気

色だった彼らの表情から曇りが消えていた。軍団は、重装歩兵の大隊二つと若干の軽装歩兵を、即座に営地へ向かわせる。ここに陣地を築くための物資や、当面の食料を運ばせるためであった。

彼らが営地に向かう途中、追ってきた敵の騎兵たちが姿を現した。デロイ軍は縦隊となつて行軍していたが、その左右は胃兵の槍によつて守られている。最後尾の隊が縦列の中央を通つて先頭へ移動することで、全体が順繰りに前進していた。騎兵たちは機会を窺うように追跡していたが、デロイ軍に隙はない。進路にはコロヒス河の古い川筋があつたが、彼らがその起伏を難なく越えると、騎兵たちは攻撃を諦めていなくなつた。

輜重を伴つた二個大隊が戻ってくる頃、すでに塹壕が掘り始められていた。そして柵が設けられ、デロイ軍は夜通しの作業で陣地を完成させようとする。対面するメデイトリア軍も同様に防衛線を強化していたが、その速度は明らかに軍団のほうが上回っていた。属州連合の騎兵たちは、その大部分が森から離れて野営しており、デロイ軍からは居場所がわからない。彼らは作業中に攻撃されることを怖れていたが、敵にその動きはなかつた。

そして地平線が白み始める頃、第二軍団の兵士たちは轟くような音を聞いていた。それは徐々に大きくなりつつ、時折なにかが転がるような響きが加わる。音がするのはコロヒス河とは逆の方向であったが、そちらには何も見えない。彼らはまだ暗いうちに騎兵を差し向け、何が起きているのかを探らせる。斥候たちが帰ってきた時、すでに夜は明けていた。

「河が、流れている。確かにそうなのだな？」

ダ・プーが、再度確認した。昨日から、軍団兵はみな一睡もせず働いている。この程度のことは彼らにとって日常茶飯であるが、それでも疲労の色は隠せない。その報告が何を意味するのか、理解できた者のしぐさにも若干の鈍さがあつた。彼らはコロヒス河のほとりにおり、流域には古い川筋が残っていた。氾濫の多かったこの河は、オシアが属州化されたのちに治水工事で整流され、さらに所々

で堤防が築かれている。この川上にはそういった堤防があり、さらに昔の川床が平行していた。それは、ここと营地との間を通り、下流へと続いている。もし、何者かが堤防を決壊させたなら、一変した本陣の空気に、場違いな朝の清々しさが漂っている。

この時点で、昨晚までそこにあつたはずのコロヒス河には一割程度の水量しかなかった。兵士にそれを確認させると、ダ・プーらは周辺の地図を広げる。彼らは、元々オシアの大部分と地続きの南岸にあり、そのまま下流へ向かえば帝都に着くはずであつた。だが、今の位置はパレビアに近い北岸側へと移っており、近くに渡河できる橋はない。また、糧秣を集積した营地とも、河で隔たれている。

その時、調査のため新たな河の下流へ向かつたラボアが、帰つてきた。その流れは、さほど遠くない場所で従来の河へと戻っており、要するに川筋が完全に変わっていることが確認されたのである。それと同時に、メデイトリア軍の居場所は河岸ではなくただの丘になつており、陣地による封鎖はその意味を失つていた。さらに、营地に戻るためには資材を調達して架橋する必要があるが、その作業を進めるにはメデイトリア軍はもちろん、あの厄介な騎兵たちも排除せねばならない。もはや、第二軍団には守勢にまわるだけの食料がなく、それが無理なら渡河をあきらめて川下に撤退するしかなく、た。だが、彼らのいるコロヒス河の北岸はパレビアの間近にあり、すでにその勢力圏内にあると考えてよい。そして、この属州パレビアは今まさに帝国へと叛旗を翻しており、彼らが第二軍団を黙つて通す道理はなかった。必ずや、メデイトリア軍とこの属州連合軍に加勢する者が来援し、生かして帰さじとばかりに攻撃してくるだろう。今は、ほぼ五体満足といえる第二軍団であつたが、その戦略的状況は危険水域にある。どうなるにせよ、彼らが相当の犠牲を支払わなければならない事は確実といえた。

この状況に対し、大兵長を含めた士官らの表情はさまざまであるが、敵がなぜこうも迅速に堤防を破壊できたのか、という疑問を呈する者はいなかった。程度の差はあるものの、堤防工事を施した河

川はいずれ、川底が周辺の土地より高い天井川になる。当然の事として、そういった河は護岸されていても決壊しやすい。帝国においてそれは常識であり、彼らにとつてこの事態は充分に予想可能だったのかもしれない。大兵長たちも、さすがに前向きな言葉が思いつかず、沈黙する。若い士官の中には、脱ぎ捨てた兜を地面に叩きつけ、悔しさに震える者もいた。まるで、真冬のように空気が冷たく感じられ、皆の吐く息がただ白かった。

「奴らと交渉する」

その時、ダ・プーが唐突に言った。

「使いの者を選び、準備しろ」

ラボアへそれを伝え、ゆつくりと辺りを見回す。不意をつかれた大兵長、そして士官たちが顔を見合わせる。さらにダ・プーは、兵士を分けて休息させると命じた上で、今しがた立てられた自分の天幕に入つていった。

この場にいる誰しもが、呆然としていた。二転三転する戦況に、たしかに神経をすり減らしていた彼らであつたが、その戦意はまだ喪失していない。それどころか、どんな苦境にあつてもこの軍団が負けるとは思つておらず、つい先ほどもダ・プーが自分たちを叱咤激励するのを、心の底では待つていたといえる。

彼方から空虚な風がやつて来て、彼らの間を抜けてゆく。ようやく辺りがざわつき始めると、大兵長たちも慌てた様子で集まつており、本陣の目と鼻の先にあるダ・プーの天幕へ躊躇なく押し入った。付き合いの長い戦友であり、政治的にも派閥の盟友である彼らは、自分たちより若干年少ではあるが天才肌のダ・プーを担ぎ上げて、持ちつ持たれつの関係を保つていてもいえる。ダ・プーを軍団司として上に置く彼らも、そういった微妙な力関係からか、批判にまわると途端に手厳しかった。帳幕が揺れるような勢いでダ・プーを難詰し、悪態をつき、考え直せと罵声を浴びせる。その激しい言葉は辺りの全員に聞こえていたが、彼らはそれを見守るしかなかった。当然、その心情は大兵長たちの側に属している。異様な雰囲気がか

の本陣を中心に拡がっており、周囲には士官だけではなく兵士たちも集まり始めていた。

必要な準備を終え、ラボアが天幕の中に入ってきた。そこには、すでにダ・プーしかない。先ほどもここにいた大兵長たちは、外で自隊の主だった者を集めて衆議している。普段から孤独を好むダ・プーではあるが、この状況においてもそれは変わっていないかった。だが、それが彼にとつての限界を示しているのか、それとも彼がこの事態すら手中に収めているという事なのか、側近中の側近といえるラボアにも判らない。彼が、軍使たちの用意が整ったことを報告すると、ダ・プーは静かに頷いた。その手元に今しがた書き上げられたと思われる文書が伏せられているのを見て、ラボアは背中に冷たいものを感じる。

心中ではすでに、この交渉の結果を決めておられるのではないかと。胸の内にあるその勘繰りが、ラボアには真実のように思えた。大兵長たちは、当初の姿勢とは翻って、交渉の推移をまずは見守る方向で皆を説得しており、将士らの混乱は收拾されつつあった。軍団の首脳たちのこうした一連の動きに対し、ラボアが芝居じみたものを感じていないとすれば、それは嘘になる。あれこれと考える前に、彼は口を開いた。

「閣下。本当に、これでよいのですか？」

何気ない顔で、そう問いかけた。顔を上げ、ダ・プーがそちらに目をやる。しかし、彼が見たラボアのその眼差しは、まるで泣いている様だった。ダ・プーは、それをじっと受け止める。さらに、ラボアが言った。

「我々は、まだ充分にその戦力を温存しております。第二軍団には、この苦境の中でも敵を撃滅する能力が必ずあると、我らの誰しもが信じているのです……」

軽く息を溜め、ダ・プーは長々とそれを吐き出す。間を空けて、

彼が答える。

「ならば聞くが、それを成した後はどうなる？ おそらく、メデイトリアに行って第一軍団を救ってくることになるだろう。それを首尾よく終わらせたとしても、今度はメデイトリアを討伐しろ、となる。だが、我々として不死身ではない以上、限界というものが当然ある……」

その声は、表情にある苦々しさとは裏腹に、穏やかだった。

「命をかけて仲間を救おうとする者は、決して責任に怯むことは無い。お前のような者が、そうだ。だが、俺はそういった者を含め、全てを救わねばならん。それが、ブルー・ダ・プーの責任というものだ。このままでは、いずれ敵と情け容赦なく殺しあう羽目になるだろう。それでは、まずい。交渉は、まだ優位にあるうちに始めねばならん。我々はあくまでも、奴らと交渉してやるのだ。それは、多くの者が望んでいる事でもある」

ラボアは、黙って聞いていた。その言葉の結果がどうなるのか、彼には判らない。そういつた事をひとまず心の隅へ押しやって、ラボアは吐き出すように言った。

「……ですが、閣下はなぜ、それを胸に秘めたまま事をお運びになるのですか？ 閣下のご心算に対する意見は当然あるとしても、全てが明らかになった上で納得しない者などおりません。この軍団の誰もが、閣下のお考えを拝聴したいと、そう思っているのです」

「ふむ。貴様の言いたいことは判るが、それはできぬ。お前たちの心を、お前ら自身に折らせる訳にはいかんのだ。今は理解できんとしても、決して悪いようにはならぬと俺が保証する」

ダ・プーがふと心を緩ませ、言った。

「正直なところ、だ。俺ですら、この状況が信じられんのだ。世の中というやつは、意外に悪くないものかもしれん」

視線をラボアに向け、にやりと笑う。だが、暗がりにあるその顔は無表情で、人外の獣のように捉えどころがなかった。

その後、第二軍団は帝都へ帰還するべく行軍を始めた。速やかに橋を架け、対岸の营地にいた人員と必要な糧秣を回収し、人気のない街道を急ぐ。そして、メデイトリア軍の陣地には第二軍団の大兵長全員と、士官たち数百人が残っていた。彼らは、要するに人質であつた。デロイに戻つたダ・プーたちが、メデイトリアと属州連合の提示した条件で帝国議会へ講和を認めさせることが、解放の条件である。この売国行為ともいえる取引を、ダ・プーがどうやって将兵たち、そして平民派の貴族・富民らに承服させたかは、定かではない。もし、残された数百人に何事かあれば、ダ・プーはおろか平民派という貴族連合そのものが瓦解するのは間違いない、これが彼にとつて一世一代の博打である事だけは鮮明であつた。ともかく、こうして彼らは帝都へ向かつたのである。

その頃すでに、デロイにいた他の軍団は属州の不穏な動きに呼応して兵を動かしており、帝都にはその一部が残っている状態であつた。第二軍団はそこへ戻つてくると、武装した兵士を首都防衛の名目で城市の各所に配置した。さらに、貴族院で緊急の招集を行い、ダ・プーは彼らに対し動議を催す。属州ではすでに州民と治領官の衝突が始まつており、同時多発する事態の処理に奔走する枢軸貴族たちは、ダ・プーのこの動きにまったく対応できていなかった。彼の議案とは要するに、帝国属州の解放・独立と引き換えに宗主国としての地位を手に入れ、さらにその実行をもつてメデイトリアとの和議を締結させる、というのがその大筋である。集まつた枢軸貴族たちはそれを聞かされて驚きはしたものの、ついに正体を現したかとはかりにいきり立ち、壇上のダ・プーへ次々に罵声を浴びせた。

ダ・プーがその提案の論拠としたのは、以下の三つだつた。枢軸貴族たちはひた隠しにしているが、メデイトリアの第一軍団はすでに退路を断たれて絶体絶命の窮地に陥っている、という事がひとつ。さらに、それを知つた自治領の諸侯らがデロイに対して挙兵してお

り、いずれ帝国全土を覆う巨大反乱が勃発するであろう、という事がひとつ。そして、現在のデロイにはこの二つを同時に処理する力がなく、このまま何の妥協もなければ近い将来その両方を失うであろう、という事である。

また、第二軍団はどういう事が、オシアの戦いにおける勝利者として帝都に凱旋していた。逆に、彼らに随行するメディトリアと属州連合の使節たちは、連れてこられたという体である。これらの偽装・捏造については、ダ・プーが交渉の折に付け加えたものであり、彼らもそれを承服していた。つまり、第二軍団はメディトリア軍と属州連合軍に対し勝利を収めたが、それと同時に枢軸貴族たちが隠蔽していた第一軍団の危機を知り、彼らを救うために止むなく今回の動議を行った、という筋書きを描いたのである。

当然、枢軸貴族たちはそれらを全てを否定した上で、ダ・プーを裏切り者と呼んで激しく非難した。そして、これを聞いた帝国の市民たちは寝耳に水とばかりに驚き、情報はまたたく間に広まった。この両者に確証はなく、デロイの世論がどう反応するか予断は難しいといえる。とはいえ、彼らの視点からも枢軸貴族対平民派という対立軸がはつきりと見えており、ダ・プーの捏造行為は杜撰だが効果的でもあった。また、第一軍団の件について、枢軸貴族は共犯者に後ろから刺されたも同然であり、彼らの反論も歯切れが悪い。そういった不明瞭さにデロイの民衆は憤懣を募らせ、世論はダ・プーの思惑通り平民派へと傾いていた。しかし、彼ら民衆は今回のメディトリア戦役を支持していた筈であり、それは自覚のない責任転嫁といえる。ダ・プーたちがオシアで勝利したということは、デロイの民衆にとっても都合のよい事実であった。

オシアの交渉において、ダ・プーが付け加えた条件は他にもあった。彼は、全ての属州に対し、独立と引き替えにデロイを中核とする同盟連合に加入する、という事も認めさせていた。だが、議会においてそれは宗主国の地位として説明され、ここでも彼は虚偽を述べている。属州連合の使節らはその場に居合わせていたが、ダ・プ

ーの要請通りそれを指摘しなかった。

さらに彼は、メデイトリアとも密約を交わしていた。それは、互いが口裏を合わせて情報の誘導を行い、第一軍団がすでにメデイトリアで降伏していると、属州の諸侯らにそう思い込ませる事であった。そして、彼らは完全に騙された。メデイトリア側がこの謀議へ応じたのは、ダ・プーの駆け引きが巧みであつたと同時に、彼らにそれを拒絶する余裕がなかったためとも思われた。

コロヒス河畔での交渉に参加した諸勢力は、例外なく何らかの妥協を強いられており、その勝者が誰なのかは明確でなかった。少なくともダ・プーは、自分が勝つたと思つたであろう。とはいえ、彼を含む平民派の全員が、属州に少なからず治領を持つており、枢軸貴族との決着のために涙を吞んでそれらを捨てたのである。この密約により、属州ではデロイ軍団が事実上壊滅したと認識され、それは州民たちに伝わって途方もなく膨張してゆく。やがて、彼らは手のつけられない暴徒となつて、属州は火だるまに燃え上がった。ダ・プーの言葉は現実のものとなり、帝国の領官らとその家族、その他デロイから派遣された者たちが、続々と本州へ逃げ始めた。

そして帝都では、枢軸貴族たちが機能不全に陥つていた。民衆たちへの声明もなく、かといって何かを決定するわけでもなく、ただ私領をこの混乱から守るため奔走している。デロイ帝国の命運は、ここで決まつたのかもしれない。第一軍団からの連絡はすでに途絶えており、彼らはその無事を信じるしかなかった。軍団の自力帰還にしか期待できないのが、帝都の現状といえた。枢機貴族は、その当主たちの多くがメデイトリアの檻に閉じ込められており、彼らの判断力も鈍っている。

ガルバニアの諸都市と集落、そして農場など様々な場所が、属州から逃げ帰る人々で混乱し始めていた。徐々に都へと迫るそれは、彼らにこの帝国の終わりを思わせる暗い陰だった。この状況で、民衆たちはダ・プーをさらに支持するようになり、それは恐怖の裏返しといえる。また、第一軍団の兵士たちの家族の中には、公然と枢

軸貴族を非難する者も現われ始めていた。そういった群集に取り囲まれる危険があるため、枢軸貴族たちは次第に街中を歩くことすら難しくなつてゆく。

彼らは平民派への牽制として、属州へ向かつた第三、第四、第五軍団の一部を呼び戻し、都を占拠する第二軍団の軍兵へ対抗させたが、この措置はガルバニアの混乱をさらに加速させた。ダ・プーはそういった動きに武力で応じることはなく、あくまでデロイの法に従つて帝都を防衛している。とはいえ彼がその気になれば、民衆の人氣に乗じてこの帝都を乗っ取ることも可能と思われた。枢軸貴族たちは、貴族院の議決によつてこの第二軍団を帝都から遠ざけることもできたが、ダ・プーはそれに対し武力蜂起という最後の手段をちらつかせて威嚇していたといえる。そういつた圧力に曝されながら、それでも枢軸貴族たちはダ・プーに対し妥協する様子はなかった。彼らは当然、第一軍団の健在を堅く信じており、連絡が回復すれば状況は一変すると思つていたのである。ダ・プーの優位はあくまで嘘で塗り固められた虚像であり、その意味で確かにそれは正しかった。

だが、吉報を待つ彼らも、徐々に状況の恐ろしさを感じ始めていた。嘘を嘘のまま放置していると、それが少しずつ眞実になつてゆくのである。つまり、枢軸貴族たちはこれまでの自身の所業と対面しており、そして追いつめられていた。第一軍団は、本当に帰つてくるのだろうか。その不安を、誰もが徐々に感じつつあった。事あるごとに、大会堂や議会で平民派と激しい舌戦を繰り広げてきた彼らにも、疲れが見えている。

そして、彼らの崩壊はその構造の下部から起こつた。まずは、その支持富民たちがぼつぼつと、櫛の歯が抜けるように離反し始めた。そもそも、この富民たちが所有する治領は少なく、第一軍団にも参加していない。実際のところ、彼らが枢軸貴族の支持にさほど固執する理由はなかった。さらにそれを見て、下層の貴族たちの心もぐらつかせていた。大貴族たちは、自分たちの政治的優位さえ保つこ

とができれば、大きな出血にも耐えられるだろう。国権の中枢から滲みだす汁とは、それほど甘いのである。しかし、規模の小さな貴族は競争が激しく、簡単に没落してしまう。これから先、メディトリアの討伐を終え、属州全土の反乱を平定するまでに、彼らがどれほど大貴族たちに使役されるであろうか。さらに、それを下支えする富民たちも消え去ろうとしている。やがて彼らは、隠れるように平民派の門を叩き始めた。また、この不安は中流の貴族たちにもあった。大貴族ではなくとも、その規模は平民派の中に入れば、立派な大粒である。派閥の領袖たちに使い古されてたまるか、という自負が彼らにはあった。そして、離反の波がこの層にまで来たとき、山が動き始めた。ダ・プーら平民派が確保した票数が、貴族院の議決が可能な水準に迫ったのである。それはまだ水面下の動きであったため、気づく者はまだ少ない。二百年もの長きにわたって、この帝国を支え続けてきた枢軸貴族であったが、こうして彼らが崩れてゆく様子は淡々としたものでもあった。さらに、ダ・プーは絶対安全圏まで票が集まるのを待った上で、ついに貴族院へ政案の議決を求めた。

彼らのその後の動きは、迅速だった。帝国の谷の周辺を自派の軍兵で固め、ぴりぴりとした空気の中、ダ・プーは自らの政案をその日のうちに国令として成立させた。この瞬間、デロイの帝国体制が事実上崩壊したといえる。枢軸貴族たちは、この様子をただ呆然と見守るしかなかった。

皇帝ルグドネクス三世が、文書として発布されたそれをダ・プーに受け渡す。その胸には言い表しがたい感情があり、彼の身体と腕が小刻みに震えている。故郷であるガルバニアを守り、メディトリアにいる十万人以上の同胞を救うため、帝国の手足を切り落としたに等しい選択であった。だが、本当にその必要があったのかという問いが、彼の心に深々と刺さっている。属州の獲得に酔いしれ、貪るようにそれを餌食とするデロイの感覚は、完全に麻痺していた。その責任を、誰に求めるべきだろうか。貴族院に召集された枢軸貴

族たちは、平民派の集団へまるで汚物を見るような視線を向けている。それは平民派の者たちも同様であり、この場にいる全員の表情が、自分以外の誰かのせいだと言っていた。当然その思いは皇帝自身にもあり、そういつた正体のない曖昧さを彼は呪った。

国令の発布は、直ちにコロヒス河畔のメデイトリア軍と属州連合軍のもとへ知らされた。これをもってデロイ帝国は、全属州の独立ならびにメデイトリアとの講和を、その関係諸国と締結する事となった。帝国の巨大な版図は過去のものとなり、そこにはいまだデロイ帝国を号する小帝国と、彼らを盟主とするパレビア・アドリア・キリア・ディネリア・オシアの五つの同盟国だけが残っていた。

この連合はその後、軍事ではデロイの陸軍力とラニスの海軍力を中核に同盟域を防衛し、経済では商業的団結によって各国の産業を保護する共同体として発展するに至った。彼らの盟約は『デロイ同盟』と呼ばれ、様々な政策の共有による地域の安全保障と経済発展を全体の目標として、今ここにその始点が定められたのである。

また、それはデロイとメデイトリアの紛争に終止符が打たれたという事でもあり、この両者には均衡と平穏がもたらされた。デロイの人々がメデイトリア戦役と呼ぶ一連の戦争は勝者を生み出さなかったが、しかし全く不毛なものでもなかった。彼らにとっての一つの時代が、こうして終わった。

【終章】

曇天に、雪がちらついていた。白い息を吐きつつ、ダ・プーがやや身震いする。すでに真冬であるが、ここオシア州で降雪は稀なことであった。帝都デロイより自分を追ってきた家人から用件を聞き終え、いかにも時間が惜しいといった様子で指示を与える。

「それから、マクニサス家からの使者はすべて門前払いだ。解ったな」

ダ・プーはそう念を押し、急かすように家人を送り出す。道草を食んでいた馬は彼に飛び乗られ、ぼろぼろと馬糞をこぼしつつ駈け去った。自分の馬に戻って、ダ・プーは寒空を見上げた。

（ふん……。どいつもこいつも、手のひらを反すように態度を変えやがって）

彼の率いる平民派貴族は、一時的に帝国の議決権を握ったとはいえ、政局全体ということではまだまだ流動的な状況であった。浮動層を取り戻そうとする枢軸貴族と、派閥に定着させようとする平民派の綱引きは今が佳境であり、ダ・プーがこの国の実質的な指導者になれるかどうか、これからが正念場といえる。とはいえ、枢軸貴族側からダ・プーに歩み寄る動きも少なからずあり、先ほどの指示はそれらの件についてであった。

彼と犬猿の関係であったゼノフォス・マクニサスは、帝国の体制崩壊を見る前に亡くなっていた。マクニサス家の当主は義理の息子フォスタルが継いでいたが、ダ・プーとの関係はさらに悪化しているようにみえる。しかし、実際はその全く逆であった。前回の議決でフォスタルは密かにダ・プーと通じており、結局のところ帰趨決定票はマクニサス家が投じたのである。枢軸貴族たちの中でもこれに気づく者は皆無であり、デロイの今後の機軸はこの二人が共握しているといつてよい。先ほどの指示も、だからこそであった。

（……奴も、心の底ではどう思っている事か。だがな、真の売国奴

とは貴様のことだ)

この両者の新たな関係は、ある意味でデロイにとって爆弾のようなものでもある。ダ・プーとフォスタルの二人には、今の騒乱ですらその嵐の序章にしか過ぎないといえた。彼らから見ればこの政争はすでに終わったも同然であり、いまは互いに手の内を探り合っている状況であつた。それ故に、あれこれと硬軟織り交ぜて仕掛けてくる枢軸貴族の残党に対し、ダ・プーの対応は余裕を含んでいる。しかし、その腹の中は粘ついた泥にまみれており、馬に乗った彼は自嘲気味に頬を緩ませた。

(とはいえ、俺も真正正銘、本物の外道だ。ろくな死に方はせんだらうな……)

彼が煽った属州の騒乱においては、結果的に相当数の犠牲者が生じていた。その多くは帝国側の官民であり、これについての責任をダ・プーは免れ得ない。しかし、そういった人々は帝国の先鋒である軍団兵の列後に隠れ、その威を借りつつ他人の血を吸う寄生者に成り果てたと、彼は考えていた。もちろん、彼自身もその一人であるが、たとえ自分がこういった渦中で死ぬとしても、それを恨みはしないであろう。この帝国は、後戻りできぬ霸道の半ばにしてメデイトリアという伏兵に苦しめられており、最前線の兵士たちは疲弊している。そういった状況で、特定の人々だけが肥え太るのを見過ぎすほどダ・プーは親切的な男ではない。真つ当で、真面目な市民は軍団に所属するか、ガルバニアで農業を中心とする諸産業に従事し、殖産に励んでいる。その生産者の中には技術を研究し、それを広めるため属州に向かう人々もいた。ダ・プーは、彼らのような者に対してはこの混乱に巻き込まれぬよう心を砕いたが、それ以外の人々には全く同情していなかった。それどころか、欲に釣られてその危険を忘れてしまった彼らに対し、いい罪滅ぼしになったではないかと容赦のない目線を向けてもいる。こういった極めて独善的な処断で同胞を死に追いやるのが道から外れているとしても、ダ・プーはその良心に何の痛痒も感じていない。

そうした上で、自身の所業に対する確信を欠いて国家の枢奥へ手を伸ばすのがいかに危険かという事を、彼は感じつつあった。フォスタルも、義父の死に様を見てその覚悟を決めたのだろう。そう思うダ・プーは、彼との決着をおぼろげながらも予感し、そして期待していた。

（はん、中途半端な手打ちなんぞつまらん。せいぜい、度胸のある所だけでも見せてみる。徹底的にぶっ潰して、その存在だけでなく歴史の上からも貴様らの全てを消してやる）

舌なめずりするような表情で、彼が白い息を吐く。それらの感情は、幼児の残虐性と老人の執拗さ、そして歳相応の緻密な計算を倒錯的に同居させつつ、なおかつ無垢で純粋なものでもあった。一行の道先に、騎馬の集団が見えた。その表情をころりと咲かせ、ダ・プーが単騎で駆け寄る。オシアでの任務から帰ってきた、ラボアたちであった。まるで恩人に対するかのような労いに、彼らもいくらか驚きつつ応じる。とはいえ、ラボアらの果たした役目は到底他人には話せないものであり、その心中はやや複雑でもあった。

あれこれと話し込み、彼らもようやく明るい顔つきを見せる。ラボアたちは、今回の任務に伴ってメデイトリア軍へ参加しており、それはメデイトリア騎兵独特の技術である長距離偵察術を習得することが目的でもあった。彼らの頬はそぎ落としたように細っており、氷のように澄んだ瞳がその成果を雄弁に物語っている。オシアでの戦闘の後、こういった技術こそがメデイトリア軍の魔術の源だとラボアたちは痛感しており、この事で彼らの戦役にもようやく区切りがついたといえた。

「ところで、イド・ルグスの遺体についてですが」
「そうラボアが切り出し、ダ・プーが嬉々として答える。

「おお、もうここに来ているのか？」

「……ええ、おそらく。この辺りは、すでに彼らの網の中です」
「ラボアはもう、地形を見ればどこから見張られているか大方判断できるようになっていた。デロイ軍の偵察技術は、兎戯に等しいと

彼が改めて思う。だが、メデイトリア式の偵察術とは、そういった個人技能を超越した部分にその深みがあるといえた。通常、斥候隊とは一枚の底引き網のごときものであるが、彼らはそれを極限まで分割した上で輪環的に運用し、全体を生物の神経とよく似た構造へ変化させる。ラボアにとつても、それはまだ非日常の技であり、息を吸って吐くようにそれをこなすメデイトリア騎兵のことを想像すると、肌に冷たいものを感じざるを得ない。とはいえ、たった数十日ではあるがその過酷な任務をがむしゃらにこなし、彼らからもちっぱしの騎兵と認められたラボアたちもまた、並大抵の人間ではなかった。

デロイ帝国とメデイトリアの講和が成立した後、第一軍団はギラメラ門を通ってガルバニアに帰還していた。この門の攻略に行き詰まった彼らは、徐々に部隊の統制を失ってゆき、それぞれが別個に行動するようになっていた。その結果、イド・ルグスたちが心配していた家都への総攻撃は行われぬまま、彼らは終戦を迎えたのである。外部への唯一の連絡手段であった家鳩は、その混乱の中で飢えた兵卒たちに貪り食われていた。しかし、どうにかして本州との連絡をつけようと志願者を募って、ノクニイ峠周辺の山岳を少人数で登攀する動きもあり、その何割かはそれに成功していた。これについてメデイトリア軍はもちろんダ・プーたちも予想しており、兵の家伍番隊とラボアらがその対処に当たったのである。メデイトリアを脱出した彼らは全てオシア州で捕らえられ、第一軍団からの報告が帝都に届くことはなかった。オシアの荒野で練り広げられたこの搜索戦の結果が、帝都での議決にどれほど影響を与えたか、それは言うまでもない。また、今回の講和は第一軍団の將兵にとって到底受け入れがたい屈辱であり、彼らがその事実を消化するには長い時間が必要であると思われた。この戦役に参加しなかった平民たちには、ようやく危機が去ったという安堵と先行きに対する不安とが混ざり合い、虚脱感のようなものとなって蔓延しつつあった。

そして、ギラメラ門にいたダナ・ブリグンドは、講和の文書へ調

印した後に、ほぼ無傷といえる王都へと帰還していた。第一軍団には、この都を離れる前後からすでに混乱が始まっており、居残りの部隊たちも申し訳程度の放火を行ってすぐに後退したため、エスーサは運良く破壊を免れていたのである。こういった被害はメデイトリア全土でも少なく、そのことは第一軍団にとっても幸運であった。彼らは、これといった報復を受ける事もなく、故郷に帰ることができたのである。だが、軍団の中には講和成立後もその事実を信じない者たちが少なからずおり、彼らも整然と帰還した訳ではなかった。とはいえ、現在はそれらの問題もすでに解決され、今回のメデイトリア戦役は開始から約半年ほどで完全に終結したのである。

「おお、遺体が到着したようだな」

ダ・プーが、その声を楽しげに弾ませた。ラボアが視線を向けていた丘から、馬らしきものが下ってくる。一筋の土煙も立てずに近づいてきた彼らを、ダ・プーとラボアたちが迎えた。やって来たのは伍番隊のプロコとガフ、そしてイド・ルグスであった。

真っ先に下馬したラボアは、淡々と挨拶を交わす。だが、その瞳の芯には熱いものがあつた。このイド・ルグスを、ダ・プーらが遺体と呼ぶのには訳があつた。彼らは以前の動議の折に、軍団の勝利を捏造するだけでなく、イド・ルグスをも死んだことにしてしまったのである。とはいえ、彼の生死に関心があつたのは枢軸貴族たちであり、それはイド・ルグスに対する彼らの恐怖心がそうさせたといえる。メデイトリア軍はまさに正体不明の魔物であり、過去の事変における情報操作も手伝つて、彼らはイド・ルグスが自分たちに復讐しようとしているとは思えなくなっていた。講和どうこのの以前に、あの化け物が生きている限り安心できぬ、というのがその本音であつた。結果的に、ダ・プーの言葉を鵜呑みにして何しか救われたような気分になった彼らは、相当に冷静さを失っていたといえる。恐怖とは、帝国の社会における原動力の一つであるが、それをもてあそぶ彼らは、皮肉にも重度の自家中毒に陥っていた。

メデイトリア側も、そういった事情を考慮してこれについては渋

々了承していたが、自分のことを遺体だの死体だのと呼んではしゃいでいる彼らを見て、イド・ルグスは生ぬるい息をもらす。デロイの人々に死んでいると思われるように、あるいは生きていると思われるように、彼にとって最早どうでもよい事ではある。悪びれるどころか、それを冗談の種にしている彼らに、イド・ルグスは感覚の違いを意識せざるを得ない。だが、ほんの少し前まで殺し合いをしていた両者とは思えぬほど、その関係修復は早かった。ラボアたちコノス人の生死観は、ガルバニアの大地のように乾燥している部分がある。そういったものに加え、互いの目的が完全に一致したこともあって、今では戦友との絆に似た感情すら生まれつつあった。

道中、ダ・プーとイド・ルグスは馬を並べて進んだ。彼ら伍番隊はメデイトリア軍最後の部隊として、これから故郷に帰還するのである。ダ・プーは忙しい政務の最中、それを見送りにわざわざこの僻地へ赴いていた。らしくない慇懃さで、彼がイド・ルグスに礼を言う。普段のダ・プーが好む、男くさいじゃれ合いを行うこともなく、平服ながらも一軍の将という威厳を漂わせる。それを見たイド・ルグスが、今日はとことん私を持ち上げるお積もりかと、ふと思う。そういった予想が可能なほど、付き合いが長くも濃くもない二人であつたが、やはり何か通じ合うものはあつた。

「ところで最近、帝都ではこう噂する者がいるのだが知っているか？」

伍番隊に対する謝辞をそこそこで切り上げ、ダ・プーはそう言う。鞍の上で半身になったイド・ルグスは彼の言葉を受けつつ、若干ほつとする。メデイトリアは、ある意味でダ・プーに救われたともいえ、あまり恩を着せられると困るというのが本音だった。理屈としては自分からも頭を下げればよいのだが、それは今やメデイトリアという国の代表と目されるイド・ルグスにとって、なかなか難しいこともある。ダ・プーの提唱した同盟の存在によってメデイトリアの地位は相対的に矮小化しており、まだ互いの関係は確定していない。公私を織り交ぜる引き出しの多さでダ・プーに勝てない彼は、

せめて翻弄されぬよう身構えるものの、それを煩わしく感じる時もあった。そのイド・ルグスの複雑な心理を知ってか知らずか、ダ・プーはさっそく顔から感情を垂れ流している。

噂とは要するに、イド・ルグスとダ・プーの二人はオシアで戦う前に協定を交わしており、コロヒス河畔での戦闘はすべて両者の予定に基づいて行われたのではないか、というものである。当然、イド・ルグスの死についてもさっそく疑われている訳であるが、ダ・プーの諧謔を孕んだ破顔にはそれとは別に含むものがあり、イド・ルグスもまたその意味をよく理解していた。それは、あの戦場で軍団本陣に斬り込んだ彼の刃がなぜ的を外したのかという事であり、さらにその後ダ・プーがどうして交渉に踏み切れたのか、という事でもあった。正直なところ、イド・ルグス自身にもどの時点から両者の協力関係が成立していたのか、その答は判りかねるとしか言いようがない。ダ・プーが笑っているのも、おそらく全く同じ理由からであろう。それら二つの状況において彼らが感じたものは名状し難く、互いにその理解を持て余すとしても無理のない事である。とはいえ、特にそれを口にするわけでもなく、二人は語り続けていた。「それはそうと」「ダ・プーが、ふと話題を切り替える。「まさかお前が、属州からああも完璧に援軍を集めるとはな。全く、恐れ入ったお手並みだった」

それを聞くイド・ルグスは、最後にギラメラ門で見た王のやつれ顔を思い出す。あのとき属州へは二度目の檄文が送られており、それは彼女が不測の事態に備えて周到に用意したものであった。その成果は、人間の言葉がどれほど巧妙な兵器となりえるのか、イド・ルグスに思い知らせたといつてよい。彼女は、戦場に居ずして誰よりも最前線で戦っていたのだ。それを知るイド・ルグスは、真実を気取られぬよう表情を偽っている。全ては、俊英なる王を護るためであった。

「……だが、本当にたまげたのはあの河の使い方だ。あんな事は、戦史の上でも俺は見たことがない。夜が明けたら、自分の陣地が勝

手に河向こうへ移動していたのだぞ。まさしく、魔の一手だ。これができる人間が、この世にいたい何人いるというのか」

その調子で、ダ・プーの賞賛が続く。これについては確かにイド・ルグスの仕業であり、褒められて嬉しくない訳がなかった。彼といえど、そういった欲を心の奥底では人並みに持ち合わせている。だがそうではあっても、このイド・ルグスという男はどこまでもイド・ルグスであり、そのことに嘘はつけない。気づくと彼は、ダ・プーの声を遮って言っていた。

「しかし、ダ・プー殿。我々はあの時、ただ必死に戦っていたというだけです。あの河も、あの堤防も、あの戦場につながる街道も、それら全てはあなた方が造った。ああして川筋を変えたことも、結局はその真似をしただけに過ぎない。そう、言えるのではないですか」

唐突に言葉を浴びせられ、さすがのダ・プーも少し口ごもった。それはそうかもしれないが、と切りかえす彼は、今度はメデイトリア軍全体の並外れた優秀さを持ち上げ、取り繕う。だが、それを述べ尽くす前にイド・ルグスが言い放った。

「少なくともそれは、我らが望んだことではありません」

その穏やかな声が隠している刺々しさに、ダ・プーが完全に沈黙する。イド・ルグスは己がなぜか腹を立てている事に、その時ようやく気づいた。言葉を受け、ダ・プーの眼は子犬のように寂しげだった。それを見たイド・ルグスは、自分の怒りの不器用さをもどかしく感じる。これまでの両国の対立において、このダ・プーという男には確かに責任がない。とはいえ、自分たちの弱みに付け込んで謀略の片棒を担がせた経緯については、どう批判すればよいのか。彼は、己の心にある子供のような湿っぽさを自覚していた。

逡巡のそぶりすら見せず、ダ・プーが過去の侵略について謝罪する。少々堅苦しいものの真摯さを感じるその言葉を聞いて、イド・ルグスは胸中の毒がいくらか抜けてゆくのを否定できなかった。自分がこの男の術中にあるとしても、そのことを深くは考えまい。彼

が、潔くそう思う。

「しかし、メデイトリアには貧乏くじを引かせてばかりだ。デロイでは、貴様は死んだという事にされ、オシアでやり合った戦闘もお前たちの負けという事になっておる。俺たちの事はどう言われようと自業自得だが、メデイトリアの成し遂げた事跡が隠れてしまふのは、何とも皮肉なことだ」

それを聞き、イド・ルグスは少し考えて次のように答えた。

「ですが、デロイでは歴史というものが人民の下にあります。一部が隠れたとしても、その全体がごまかされるという事ではないと思いますか……」

「……貴様、まさか本当にそう思っているのか？」ダ・プーが、鋭い視線を向ける。「それが部分的にでも書き換えられるなら、やがて全体を別物にするのも不可能ではない。結末だけを変えて、その過去に遡って修正しないという保証がどこにある？ 個々の事象が変えられぬなら、解釈を変更すればいいだけだ。我らの歴史はいずれ、お前たちとの戦争はおるかメデイトリアという国の存在すら、曖昧にになってしまうかもしれん」

そう言うつと、ダ・プーは苦い表情を見せた。

「今日のデロイでは、神話や伝説より歴史が重んじられる。そして、大衆の関心は神々ではなく史実や偉人に向けられ、それを参考としてつつ規範にもして生きるのだ。奴らがそうする理由は、神話なんぞは嘘っぱちだが、歴史は真実に基づくという事に他ならぬ。だが、それは歴史が神に取ってかわっただけで、何かに従っておるのは同じだ。結局のところ、それをどう書くかは未来に対する働きかけに過ぎん。歴史というものの本質は、そこにある」

ダ・プーが、澄んだ眼差しを空に向けた。イド・ルグスには、彼の言うことが意外なほどすなりと理解できる。メデイトリアという国の枢奥に触れたことのある彼は、共通点という以上の核心的な相似を、そこに見出していたのかもしれない。

「イド・ルグス、貴様に言っておく」声色を下げ、ダ・プーが言う。

「俺は、だからこそ未来を創る。そして、いずれおっぱじめるつもりだ。俺が作ったこの同盟を利用して、ルムドとカーレに馬鹿でかい戦をふっかける。まずは、貿易がその発端だ。奴らは、間違いない傘下の植民市と組んで潰しにかかってくるだろう。大海という底なしの蜜つぼを争って、世界規模の戦役が始まるのだ」

笑みを浮かべつつ、ダ・プーがその眼をぎろりと見開いた。

「この事に、メディトリアとて無関係ではおられんぞ。貴様らは俺たちに加勢するか、あるいは持っている焰硝をすべてよこせ。のんびり傍観できるなどと、ゆめゆめ思わぬことだ。お前が帰国したら、メディトリア王にこれを伝える」

二人の間に、ただ蹄の音だけが響いていた。凍えるような風も、今は止まっている。実のところ、イド・ルグスは今日ダ・プーに会う前からこういった要求があるのではと予感していたが、こうして実際に聞くと不思議なものを感じた。ダ・プーの言い分は一見乱暴であるが、今の段階でその意図を明かすということは、イド・ルグスたちを信用しているという事でもある。引き替えに得られるものを考えると、決して悪いもちかけではない。

だが、イド・ルグスのその理解を、じわじわと失望感が追い越してゆく。この人たちは、どうしてこうなのか。デロイで体験した事変のことを、鮮明に思い出す。生々しい怒りと共に、彼が言葉を吐き出した。

「この世界は、いつからあなた方の独占物になったのか？ 仮に、今日は貴方の手中にあっても、明日死ねばそれを手放すのが運命というもの。そうと知りつつ、次にそれを握る人々への目は冷やかで、何一つ残そうとしない。それは、もはや欲望ではなく嫉妬という病です」

それを聞き、ほう、という表情を作ってダ・プーが言った。

「これはこれは、随分と詩的で難解な批判だな。だが、人間ならば誰でも自分が最優先だ。俺たちのやっている事でたとえ他人が迷惑したとしても、それは止める理由にはならん」

「ですが、その他人という人々には、残念ながらあなた方の子孫も含まれています。貴方は、その残された数十年の人生のために、ガルバニアの未来をも害するおつもりか？」

「ふん、何を言うか。我らコノス人は、この事でより栄えてゆくのだ。吹けば飛ぶような落ち目の国より、悪名高くとも大きな国を残すのが、親心というものではないか」

「国は、奪うより維持することの方が、より大変です。貴方はそれを知り尽くしながら、あえて問題を大きくし、それを次世代に託そうとしている」

「……仮にそうだとして、その何が悪い。膨張の勢いとは、そういった困難すら帳消しにする強力なものだ。お前も、それを知っておるだろう」

「つまり、その麻薬のようないかがわしいものに依存して生きるよう、あなた方の子孫は強制されるのです」

「ほう……。ならば、俺たちにメデイトリアを見習って、引きこもって暮らせというのか？ 貴様らには同情するが、そんな事を指図される筋合いなど無い」

「これは、指図ではなく事実の指摘に過ぎません。貴方の言う膨張には必ず限度があり、その時になって世の中を元に戻すことは、今それをするよりはるかに難しいのです」

「……そんな事は、大した問題ではない。だから俺は、貴様らに焰硝を求めた。自分の事だけでなく、子孫の幸福がいつまでも続くよう、常に配慮しておるからだ」

「ですが、あの様な兵器を世界に蔓延させて、自分たちだけ無事でいられる筈がありません。もし、戦場で日常的にあれが使われるような事態になれば、どんな英雄でもそこから生きては帰れぬのです」

「

暗い眼で、イド・ルグスが言う。ボルボアン王が、なぜ抱鉄の使用をためらっていたのか、今の彼には理解できた。それは、王の心配した事がすでに起こっているからであり、イド・ルグスにはその

一端を担った哀しみがある。口を閉じ、ダ・プーは不機嫌そうに話を聞いていた。

「勝者であり続けるために、あなた方の子孫はいずれ命を湯水のごとく消費する羽目になるでしょう。それは、おそらく彼らにとっても地獄の苦しみです。また、それに耐え続けたとしてもこの世界に限りがある以上、膨張の終わりは必ずやって来ます。彼らが、その時になってそれに関する全ての問題を解決するという事は、果たして可能でしょうか？」

その真つ直ぐな視線が、ダ・プーに注がれている。考える様子を見せたのはわずかで、すぐに馬鹿馬鹿しいという風に答えた。

「……ふん。もし、お前のいう事がいくらか正しいとしても、その責任を俺に問うのは無茶というものだ。何がどうなるにせよ、それまでが幸福なら充分に意味はある」

「貴方は、ご自身ですら解決できぬような行き詰まりに、この世界をいち早く導こうとしているのです。私がこう言えば、貴方はきつと次のように答えるでしょう。いま俺がそれをしなくても、次の奴はやるに違いない。だから俺がやって何が悪いのだ、と。あなた方は、結局のところ自分たちの子孫すら信用していません。エキル人の私には、それが人類全体の不幸と思えてならないのです」

「ならば、俺にも言わせてもらおうか」感情を抑え、ダ・プーが太い目線を放つ。「人類というものにも、様々な民族があつて一つではない。それらの中でも強者が弱者を駆逐して、この世の中は今日まで続いてきた。その意味において、世界というものはただ一つしかない。それが、いずれどん詰まりに行き着く運命だとしても、俺たちは最後まで勝者として君臨してやる。これについて、自分の国を守る以上に貴様らが口出しできるとでも思っているのか？」

「……この世界が一つというなら、当然その権利はある筈です。我々の子孫にもまた、こうして先送りした問題が束になって降りかかるでしょう。統治者である貴方には、その責任がある。もし、それがやって来た時には、どのように弁解なさるお積もりか？」

イド・ルグスのその問いに、ダ・プーが口の回転を速めて答える。
「やって来るも来ぬも、その時代に俺はもう居らぬ。乱暴ではあるが、知った事ではないと言うしかない。それが何よりも謙虚な態度であつて、貴様らの方がよっぽど嫉妬深いというものだ。少なくとも俺たちは、何かにびびつて悔いを残す事こそが、人類の不幸にながると考えている」

そこまで言うときダ・プーは気を静め、真顔になった。

「この世界の歴史が、貴様らメデイトリアという存在に興味を示さぬとしても、それは当然の成り行きなのかもしれん。俺が思うに、自分たちについてなるべく都合よく描きたいというのが、この人間というものの正体なのだ。その筆が届かぬ場所とは、我らにとって魔物が巢食う暗闇でしかない。たとえ、貴様のいう事がすべて正しいとしても、メデイトリアの民と同じように生きるのはまっぴらごめんだ。それは、俺たちにとって死んでいるのと何ら変わりはない」

—

その後、彼らがこれについて語り合うことはなかった。たった数十日前まで、殺し合いをしていた両者である。その事で、互いの感情衝突における奥行きが広がっていたのに加え、元々分かりきった意見の対立であつたためか、この話題はあっさりと打ち切られた。ダ・プーの最後の言葉を聞いて、イド・ルグスがどう思ったのか、その辺りはよく分からない。だが、メデイトリアという国は今まさにそういった岐路に立たされており、その問いは彼自身に対するものともいえる。そして、別れの時が来るまで二人は様々なことを話し合つた。彼らの先に、街道の終わりが近づいてくる。

その時になつてダ・プーは、デロイでの貴様の新しい名前を考えねばな、などと口走つてイド・ルグスを苦笑させ、それについての最後の一押しに余念がなかった。いよいよ最後という段になつてもあれこれと話しかけている。無難に受け答えしていたイド・ルグスであるが、ふと真面目な顔になつてこう言つた。

「そついった算段より、閣下はまずお子を儲けられるのが先か

と存じます」

そのひと言に、今度はダ・プーが渋い表情を見せる。だが、彼の眼には名残惜しさが滲んでおり、それは芝居とは思えなかった。やがてメデイトリア側、デロイ側の双方が別れを告げると、イド・ルグスたちは故郷への帰路についた。目にするもの全てが、これまでとは違った風景に感じられ、それはギラメラ門に到着するまで続いている。イド・ルグスが最後に岩扉を潜ると、彼自身の手によって門は閉じられた。

イド・ルグスの師士としての役目は、この道程をもって完了した。彼らが戦っていた期間は、カシアスの会戦から数えて約一年と半年、帝国による侵攻の始まりからでも二年に満たない。そこで起きた事柄の量と比するに、あまりに短い戦役であった。王都へ帰還するイド・ルグスも、今ばかりは馬を急かそうとしない。故郷メデイトリアの風は、すでに春の薫りを運んでいた。

十

十

それから数十年が経ち、デロイにおいて初の史書が編纂された。帝国成立から約二百五十年の節目に著されたこの書は、彼らの国がデロイ同盟の盟主として大いに興ったことの証だった。そして、ガルバニアを中心としたその著述の中に、メデイトリアという国が確かにある。だが、そこにイド・ルグスの名はなかった。あの戦役そのものが、帝国の暗部を可能な限り撤去した、不自然な更地となっていたのである。これは、後にデロイの中心的人物となったブルー・ダ・プーの過去を、きれいに洗濯するためでもあった。

この書を著した男は、ダ・プーの死後その墓に文字を刻んだ。墓の表面は、彼の功績を称える文言でびっしりと埋め尽くされていたが、男は石棺の内側にも文字を彫った。だが、棺は彼の手によって閉じられ、それを知る者はいない。安置された遺体と正対する蓋の裏には、こう書かれている。

『これら数々の偉業を見事に成し遂げた父であるが、その生涯において一度たりとも勝てなかった男がいる。敵としても味方としても、軍を率いる事に関して彼に及ぶ者はいなかった。彼がいなければこの私は生まれてなかったのかもしれないが、父の為に私自身がその名前を消し去ったのである。だが、私はそれをここに永久のものとして刻む。彼の名はイド・ルグス、帝都ではメデイトリアの銚と呼ばれる男だった。このように名を憚り、そして忌むことは、神という存在を除けば魔物に捧げられるべきものである』

彼もやがて死に、その著作は大ガルバニア史と呼ばれた。伝統的な神話や民間伝承の時代は終わり、彼らは我々が古代と呼ぶものの半ばにさしかかっていた。しかしメデイトリアという国がその後どうなったか、この世界の歴史はそれを明らかにしていない。(了)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5737w/>

メディトリアの鉾

2011年9月27日03時19分発行